秋田県文化財調査報告書第276集

泉沢中台遺跡

―県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―

1998・3

秋田県教育委員会

泉沢中台遺跡

―県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―

1998・3

秋田県教育委員会

1　SN91・98・126製鉄遺構（北から）

2　SN98製鉄遺構 炉体部分（北から）

1　SN98製鉄遺構 炉体部分（東から）

2　SN52製鉄遺構 炉壁と底面の木炭層（南東から）

序

秋田県ではこれまでに約4,000箇所の遺跡が発見されており、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、歴史や伝統文化を理解し、未来を展望した秋田らしさのあふれる地域文化を創造するうえで、欠くことのできないものであります。

また、近年の経済環境の変動は本県の農業経営にも大きな影響を及ぼし、農地の大規模化・集団化を軸とする農業基盤整備が急務となっております。本教育委員会では、やすらぎと潤いのある多様な県民生活の実現を目指し、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和に鋭意取り組んでまいりました。各地のほ場整備事業にあたっても、埋蔵文化財保護の一方法として、工事に先立つ発掘調査を実施して遺跡の記録保存に努めてまいりました。

琴丘地区では３遺跡の発掘調査を実施し、そのうち泉沢中台遺跡では平安時代の製鉄炉跡や製鉄関連遺物が多数発見され、製鉄の歴史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書は泉沢中台遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。本書が広く活用され、郷土についての誇りと地域文化愛護の一助となることを願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行に当たり、ご援助、ご協力をいただきました秋田県山本農林事務所、鹿渡土地改良区、琴丘町教育委員会をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成１０年３月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　　清

例　　言

1．本報告書は、県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の３冊目の報告書である。

2．本報告書は、平成６・７年度に実施した秋田県山本郡琴丘町の泉沢中台遺跡（略号：３ＩＳＮＤ）の発掘調査結果を収めたものである。

3．本書の執筆は、谷地　薫が行った。

4．第５章　第１節・第２節はパリノ・サーヴェイ株式会社、第３節は（財）岩手県文化振興事業団岩手県立博物館に業務委託した分析報告書である。

5．本遺跡の調査ならびに報告書刊行にあたり、（財）岩手県文化振興事業団岩手県立博物館主任研究員赤沼英男博士、（財）広島県埋蔵文化財センター調査研究課第３係長松井和幸氏からは、古代製鉄関連遺跡について特に有意義なご教示を頂いた。

6．発掘調査及び遺物整理に当たって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

　井本　昭　　川上貞雄　　能登谷宣康　　安田忠市

凡　　例

1．本報告書に記載した実測図における方位は座標北である。磁北は西偏約７度６分４８秒である。

2．各遺構に付している略記号は以下のとおりである。

　ＳＡ（板塀跡・柱穴列）　ＳＢ（掘建柱建物跡）　ＳＤ（溝跡）　ＳＥ（井戸跡）

　ＳＫ（土坑）　ＳＮ（焼土遺構・製鉄遺構）　ＳＸ（その他の遺構）

3．遺構番号は種別を問わず検出順に連番としたが、精査段階で欠番となったもの、整理作業段階で追加したものもある。

4．挿図中の遺物実測図・拓本・遺物写真は通し番号である。

5．土層断面図の土色や、土器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

6．遺物観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重さがｇである。推定値は（　）で表示した。

7．掲載した実測図及び遺物写真図版の縮尺は、各図ごとにスケールを付けて表示した。

8．本書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の1「鹿渡」、50,000分の1「能代」、「森岳」、秋田県農政部山本農林事務所作製1,000分の１工事計画図である。

9．挿図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のスクリーン・トーン、シンボルマークは各図中に凡例を示した。

目　　次

巻首図版
序
例言
凡例
目次

第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査要項……3
第２章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　遺跡の位置と立地……5
　第２節　歴史的環境……5
第３章　発掘調査の概要……9
　第１節　遺跡の概観……9
　第２節　調査方法……10
第４章　調査の記録……11
　第１節　検出遺構と遺物……11
　　１．掘立柱建物跡……13
　　２．板塀跡……36
　　３．柱列……50
　　４．井戸跡……54
　　５．土坑……55
　　６．焼土遺構……81
　　７．溝跡……96
　　８．製鉄遺構……101
　　９．鉄滓捨場……104
　第２節　遺構外出土遺物……110
　　１．土師器・須恵器……110
　　２．フイゴの羽口……110
　　３．縄文土器……110
　　４．石器……116
　　５．磁器……118
第５章　自然科学分析……122
　第１節　テフラ分析……122
　第２節　炭化材の樹種……123
　第３節　泉沢中台における鉄関連炉の機能……125
第６章　まとめ……133
報告書抄録

表 目 次

第　１表　周辺関係遺跡一覧表…… 7
第　２表　検出遺構一覧表（番号順）…… 11
第　３表　検出遺構一覧表（種類別）…… 11
第　４表　掘立柱建物跡出土遺物観察表　ＳＢ34・55・60・79・105…… 36
第　５表　板塀跡出土遺物観察表　ＳＡ42・63…… 49
第　６表　土坑出土遺物観察表（１）ＳＫ１６・２０・２１・２５…… 60
第　７表　土坑出土遺物観察表（２）ＳＫ３７・３９・４４・１１８①・１２０①…… 65
第　８表　土坑出土遺物観察表（３）ＳＫ１１８②・１１９・１２０②…… 67
第　９表　土坑出土遺物観察表（４）ＳＫ５７・５８…… 74
第１０表　土坑出土遺物観察表（５）ＳＫ６９・７０・７６…… 77
第１１表　土坑出土遺物観察表（５）ＳＫ７６…… 80
第１２表　土坑出土遺物観察表（６）ＳＫ１０３・１０７…… 80
第１３表　焼土遺構出土遺物観察表（１）ＳＮ１４・１５…… 85
第１４表　焼土遺構出土遺物観察表（２）ＳＮ８８…… 93
第１５表　焼土遺構出土遺物観察表（３）ＳＮ１０８・１０９…… 95
第１６表　溝跡出土遺物観察表　ＳＤ１８・１３３…… 100
第１７表　製鉄遺構出土遺物観察表　ＳＮ９８…… 103
第１８表　鉄滓捨場出土遺物観察表　ＳＸ33…… 109
第１９表　遺構外出土遺物観察表（１）土師器・須恵器…… 113
第２０表　遺構外出土遺物観察表（２）羽口、（ＳＸ３３羽口・炉壁）…… 115
第２１表　遺構外出土遺物観察表（３）石器…… 116
第２２表　遺構外出土遺物観察表（４）砥石…… 118
第２３表　遺構外出土遺物観察表（５）磁器…… 121
第２４表　テフラ分析結果表…… 123
第２５表　分析資料一覧表…… 129
第２６表　鉄滓の分析結果一覧表…… 130
第２７表　鉄滓中に見出された鉱物のＥＰＭＡによる定量分析結果一覧表…… 131
第２８表　ＮＯ．１３炉壁部分の化学分析結果表…… 132

挿図目次

第１図　遺跡の位置…… 1
第２図　調査範囲…… 2
第３図　遺跡周辺の地形区分…… 4
第４図　遺跡周辺の表層地質…… 4
第５図　周辺の関係遺跡図…… 6
第６図　工事計画図…… 9
第７図　ＳＢ３２掘立柱建物跡…… 12
第８図　ＳＢ３４掘立柱建物跡…… 13
第９図　ＳＢ３４掘立柱建物跡柱穴断面土層図…… 14
第１０図　ＳＢ４７掘立柱建物跡、ＳＡ１２７・１２８柱列…… 15
第１１図　ＳＢ４７掘立柱建物跡、ＳＡ１２７・１２８柱列柱穴断面土層図…… 16
第１２図　ＳＢ５５掘立柱建物跡…… 17
第１３図　ＳＢ５５掘立柱建物跡柱穴・溝の断面土層図…… 18
第１４図　ＳＢ５６掘立柱建物跡…… 19
第１５図　ＳＢ５６掘立柱建物跡柱穴断面土層図…… 20
第１６図　ＳＢ６０掘立柱建物跡、ＳＡ６２柱列…… 21
第１７図　ＳＢ６０掘立柱建物跡、ＳＡ６２柱列柱穴断面土層図…… 22
第１８図　ＳＢ６７掘立柱建物跡…… 23
第１９図　ＳＢ７５掘立柱建物跡…… 23
第２０図　ＳＢ７７・７８掘立柱建物跡…… 25
第２１図　ＳＢ７８掘立柱建物跡柱穴断面土層図①…… 26
第２２図　ＳＢ７８掘立柱建物跡柱穴断面土層図②、ＳＢ７７掘立柱建物跡、ＳＡ１１０柱列柱穴断面土層図…… 27
第２３図　ＳＢ７９掘立柱建物跡、ＳＡ１１２柱列…… 28
第２４図　ＳＢ７９掘立柱建物跡、ＳＡ１１２柱列柱穴断面土層図…… 29
第２５図　ＳＢ１００掘立柱建物跡…… 31
第２６図　ＳＢ１０５・１０６・１１４掘立柱建物跡、ＳＡ１１１・１１３・１２９・１３０柱列…… 32
第２７図　ＳＢ１０５・１０６掘立柱建物跡柱穴断面土層図…… 33
第２８図　ＳＢ１１４掘立柱建物跡、ＳＡ１１１・１１３・１２９・１３０柱列柱穴断面土層図…… 34
第２９図　掘立柱建物跡出土遺物（ＳＢ３４・４７・５５・６０・７９・１０５）…… 35
第３０図　ＳＡ４２板塀跡…… 37
第３１図　ＳＤ４５板塀跡…… 38
第３２図　ＳＡ４２・４５板塀跡断面土層図…… 39
第３３図　ＳＡ５４・６３・６５板塀跡、ＳＢ６４掘立柱建物跡…… 40
第３４図　ＳＡ５４板塀跡、ＳＡ６３板塀跡①（東側）…… 41
第３５図　ＳＡ５４板塀跡、ＳＡ６３板塀跡①（東側）柱穴断面土層図…… 42
第３６図　ＳＡ６３板塀跡②（中央）、ＳＢ６４建物跡…… 43
第３７図　ＳＡ６３板塀跡③（西側）、ＳＡ６５板塀跡①（東側）…… 44
第３８図　ＳＡ６５板塀跡②（西側）…… 45
第３９図　ＳＡ８９板塀跡…… 46
第４０図　ＳＡ１２４・１２５板塀跡柱穴断面土層図…… 46
第４１図　ＳＡ９０板塀跡…… 47
第４２図　ＳＡ１２４・１２５板塀跡…… 48
第４３図　板塀跡出土遺物（ＳＡ４２・６３）…… 49
第４４図　ＳＡ０６柱列…… 50
第４５図　ＳＡ５９柱列…… 50
第４６図　ＳＡ８４・８５・８６柱列…… 51
第４７図　ＳＡ１２３柱列…… 52
第４８図　ＳＥ１０２井戸跡…… 54

第４９図　ＳＫ０１・１６土坑…… 56
第５０図　ＳＫ１６土坑・遺物出土分布図…… 57
第５１図　ＳＫ２０・２１・２２・２３・
２４・２５土坑…… 58
第５２図　土坑内出土遺物（１）ＳＫ１６・２０・
２１・２５…… 59
第５３図　ＳＫ３１・３５・３６土坑…… 61
第５４図　ＳＫ３９・４１・４４・１３１・
１３２土坑…… 62
第５５図　ＳＫ５３土坑…… 63
第５６図　土坑内出土遺物（２）
ＳＫ３７・３９・４４・５３①…… 66
第５７図　土坑内出土遺物（３）ＳＫ５３②…… 67
第５８図　ＳＫ５７・５８土坑…… 68
第５９図　ＳＫ５８土坑遺物出土位置図、
ＳＫ６９・７０土坑…… 69
第６０図　土坑内出土遺物（４）
ＳＫ５７・５８①…… 70
第６１図　土坑内出土遺物（５）ＳＫ５８②…… 71
第６２図　土坑内出土遺物（６）ＳＫ５８③…… 72
第６３図　土坑内出土遺物（７）ＳＫ５８④…… 73
第６４図　土坑内出土遺物（８）
ＳＫ６９・７０・７６…… 76
第６５図　ＳＫ１０１・１０３・１０７土坑…… 77
第６６図　土坑内出土遺物（９）
ＳＫ９９・１０３①…… 78
第６７図　土坑内出土遺物（１０）
ＳＫ１０３②・ＳＫ１０７…… 79
第６８図　焼土遺構内出土遺物（１）
ＳＮ１４・１５①…… 84
第６９図　焼土遺構内出土遺物（２）ＳＮ１５②…… 85
第７０図　焼土遺構内出土遺物（３）ＳＮ１５③…… 86
第７１図　ＳＮ４３・４９・５０・７１・
７２・７３焼土遺構…… 87
第７２図　ＳＮ８８・１０９焼土遺構…… 88
第７３図　焼土遺構内出土遺物（４）ＳＮ８８①…… 89
第７４図　焼土遺構内出土遺物（５）ＳＮ８８②…… 90
第７５図　焼土遺構内出土遺物（６）ＳＮ８８③…… 91
第７６図　焼土遺構内出土遺物（７）ＳＮ８８④…… 92
第７７図　ＳＮ１０８焼土遺構…… 93
第７８図　焼土遺構内出土遺物（８）
ＳＮ１０８・１０９①…… 94
第７９図　焼土遺構内出土遺物（９）
ＳＮ１０９②…… 95
第８０図　ＳＤ０３・１０・１２・
９７溝跡…… 98
第８１図　ＳＤ１８・２９・１３３溝跡（１）…… 99
第８２図　ＳＤ１８・２９・１３３溝跡（２）……100
第８３図　溝跡内出土遺物ＳＤ１８・１３３……100
第８４図　製鉄遺構出土遺物（１）ＳＮ９８①……103
第８５図　製鉄遺構出土遺物（２）ＳＮ９８②……104
第８６図　鉄滓捨場出土遺物（１）ＳＸ３３①……105
第８７図　鉄滓捨場出土遺物（２）ＳＸ３３②……106
第８８図　鉄滓捨場出土遺物（３）ＳＸ３３③……107
第８９図　鉄滓捨場出土遺物（４）ＳＸ３３④……108
第９０図　遺構外出土遺物（１）
土師器・須恵器①……111
第９１図　遺構外出土遺物（２）
土師器・須恵器②……112
第９２図　遺構外出土遺物（３）
土師器・須恵器③……113
第９３図　遺構外出土遺物（４）フイゴの羽口①…114
第９４図　遺構外出土遺物（５）フイゴの羽口②…115
第９５図　遺構外出土遺物（６）縄文土器……116
第９６図　遺構外出土遺物（７）石器……117
第９７図　遺構外出土遺物（８）砥石……119
第９８図　遺構外出土遺物（９）磁器①……120
第９９図　遺構外出土遺物（１０）磁器②……121
第１００図　推定される古代・中世の鋼製造法……132
第１０１図　遺構面から採取された砂鉄と
鉄滓中のT·FeとＰとの関係……132
第１０２図　椀状滓の外観……132

図版目次

図版１　１　遺跡周辺の地形（1967年撮影空中写真）
　　２　遺跡周辺の地形（1994年撮影空中写真）
図版２　１　遺跡遠景（東から）
　　２　調査区（南東～北西）
　　３　ＳＢ３２掘立柱建物跡（南から）
　　４　ＳＢ３４掘立柱建物跡（南から）
図版３　１　ＳＢ４７・１００掘立柱建物跡（南から）
　　２　ＳＢ６０掘立柱建物跡・ＳＡ６２
　　柱列確認状況（南から）
　　３　ＳＢ５５掘立柱建物跡（南から）
　　４　ＳＢ５６掘立柱建物跡（南から）
図版４　１　ＳＢ７７掘立柱建物跡Ｐ７（南から）
　　２　ＳＢ７８掘立柱建物跡Ｐ７（南から）
　　３　ＳＢ７７掘立柱建物跡（南から）
　　４　ＳＢ７８掘立柱建物跡
　　ＳＮ７１・７２・７３焼土遺構（西から）
図版５　１　ＳＢ１０５・１０６掘立柱建物跡
　　（東から）
　　２　ＳＢ１０５・１０６掘立柱建物跡
　　（南から）
　　３　ＳＢ１１４掘立柱建物跡（南東から）
　　４　ＳＢ１０５Ｐ２（南から）
　　５　ＳＢ１０６Ｐ９（南から）
　　６　ＳＢ１１４Ｐ３（南から）
図版６　１　ＳＤ４２板塀跡（南から）
　　２　ＳＤ６５板塀跡の板塀痕跡（西から）
　　３　ＳＡ４５板塀跡（北から）
　　４　ＳＤ６３・６５板塀跡（西から）
　　５　ＳＡ５４・６３板塀跡（南から）
図版７　１　ＳＡ６３板塀跡とＳＢ６４掘立柱建物跡
　　Ｐ２（南から）
　　２　ＳＤ６３板塀跡－断面土層（西から）
　　３　ＳＡ６５板塀跡の検出状況（東から）
　　４　ＳＡ６５板塀跡の板状柱と板塀の痕跡
　　（東から）
　　５　ＳＡ９０板塀跡（南から）
　　６　ＳＡ９０板塀跡の板塀痕跡断面土層
　　（南から）
図版８　１　ＳＡ１２４・１２５板塀跡（東から）
　　２　ＳＥ１０２井戸跡（南西から）
　　３　ＳＫ０１土坑（南から）
　　４　ＳＫ１６土坑断面土層（東から）
　　５　ＳＫ２０土坑（西から）
　　６　ＳＫ２５土坑（南から）
　　７　ＳＫ３１土坑（南東から）
図版９　１　ＳＫ３５土坑（南から）
　　２　ＳＫ３７土坑（南から）
　　３　ＳＫ４１・１３１・１３２土坑（南から）
　　４　ＳＫ５３・１１８・１１９・１２０土坑
　　（南から）
　　５　ＳＫ５７土坑断面土層（南東から）
　　６　ＳＫ５８土坑（東から）
　　７　ＳＫ７６遺物出土状況（東から）
　　８　ＳＫ９６土坑断面土層（南から）
図版10　１　SK103土坑（東から）
　　２　ＳＮ１４焼土遺構（南から）
　　３　ＳＮ１５焼土遺構（西から）
　　４　ＳＮ１５焼土遺構鉄滓出土状況（南から）
図版11　１　ＳＮ４３焼土遺構（南から）
　　２　ＳＮ５０焼土遺構（北から）
　　３　ＳＮ７１焼土遺構（南から）
　　４　ＳＮ８８焼土遺構（南西から）
　　５　ＳＮ１０８焼土遺構（南から）
　　６　ＳＮ１０９焼土遺構（南から）
　　７　ＳＤ０２溝跡（東から）
　　８　ＳＤ１２溝跡（北から）
図版12　１　ＳＤ１８・１３３溝跡（西から）
　　２　ＳＤ１８・１３３溝跡断面土層（西から）
　　３　ＳＤ１８・１３３溝跡断面土層（東から）
　　４　ＳＤ１８・１３３溝跡、ＳＤ２９溝跡
　　（南西から）
　　５　ＳＤ１８・１３３溝跡、ＳＤ２９溝跡

断面土層（西から）
6　ＳＤ１３３溝跡下駄出土状況（南から）
7　ＳＤ９０溝跡（南から）
図版13　1　ＳＮ５２製鉄遺構（南から）
2　ＳＮ５２製鉄遺構炉体部分（東から）
3　ＳＮ５２製鉄遺構炉壁部分と炉底（南東から）
4　ＳＮ５２製鉄遺構炉壁に付着した鉄滓（南東から）
5　ＳＮ９１製鉄遺構炉体部分（北から）
6　ＳＮ９１製鉄遺構検出状況（北から）
7　ＳＮ９１製鉄遺構排滓坑の断面土層（北東から）
図版14　1　ＳＮ９８製鉄遺構（北から）
2　ＳＮ９８製鉄遺構炉底部断面土層（北東から）
3　ＳＮ９８・１２６製鉄遺構断面土層（東から）
4　ＳＮ１２６製鉄遺構排滓坑の断面土層（北東から）
5　ＳＮ９８・１２６製鉄遺構完掘状況（北から）
6　ＳＮ９８・１２６製鉄遺構炉壁部分（西から）
7　ＳＸ３３排滓場（南西から）
8　ＳＸ３３排滓場の断面土層（北西から）
図版15　遺構内出土遺物（１）
図版16　遺構内出土遺物（２）
図版17　遺構内出土遺物（３）
図版18　遺構内出土遺物（４）
図版19　遺構内出土遺物（５）
図版20　遺構内出土遺物（６）
図版21　遺構内出土遺物（７）
図版22　遺構外出土遺物（１）
図版23　遺構外出土遺物（２）
図版24　遺構内出土遺物（８）
図版25　遺構内出土遺物（９）
図版26　遺構内出土遺物（１０）
図版27　遺構内出土遺物（１１）
図版28　遺構内出土遺物（１２）
図版29　遺構外出土遺物（３）
図版30　遺構外出土遺物（４）
図版31　火山ガラス・炭化材の顕微鏡写真
図版32　ＮＯ．８鉄滓の外観と組織観察結果
図版33　ＮＯ．１２鉄滓の外観と組織観察結果（その１）
図版34　ＮＯ．１２鉄滓の外観と組織観察結果（その２）
図版35　ＮＯ．１３鉄滓の外観と組織観察結果（その１）
図版36　鉄滓の外観と組織観察結果（その１）
図版37　鉄滓の外観と組織観察結果（その２）
図版38　ＮＯ．８鉄滓（図１ａ）のＥＰＭＡによる組成像（ＣＯＭＰ）と含有される元素濃度分布のカラーマップ
図版39　ＮＯ．１３鉄滓（図１ａ）の組成像（ＣＯＭＰ）と含有される元素濃度分布のＥＰＭＡによるカラーマップ

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

県営ほ場整備事業（琴丘地区）は、農業経営の大規模化を目指したもので、農地の大区画整理とともに農道・用排水路網の整備を進め、農地の集団化により農家経済の安定向上をはかるものである。その工事は平成４年から実施されている。

本ほ場整備事業の計画地区内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、県農政部は文化財保護法に基づきこの事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導の依頼をした。秋田県教育委員会は、それを受けて平成４年に計画地区内の遺跡分布調査を行い、事業計画地域内に係る埋蔵文化財包蔵地（家の下遺跡）を１箇所確認した。そして、今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果、記録保存が必要な場合には、発掘調査実施すべきことを回答した。その結果、平成５年度に範囲確認調査を実施し、平成６年度に家の下遺跡の発掘調査を実施した。

第１図　遺跡の位置

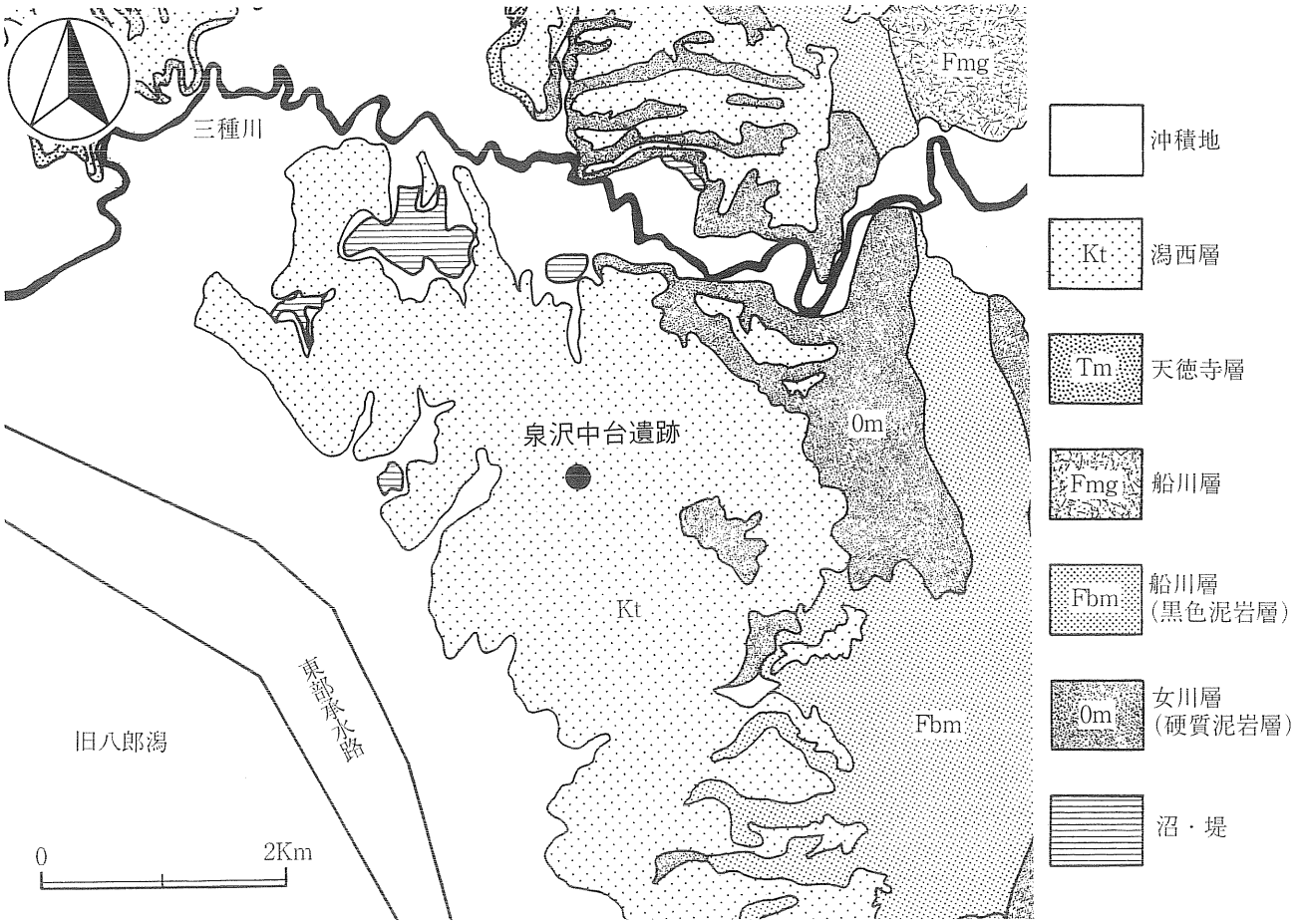
また、家の下遺跡発掘調査と併行して行われていたほ場整備工事（伐根作業）中に、家の下遺跡の西約200ｍの地点で土器や石器が見つかり、その工事区域内の試掘をしたところ、遺物とともに溝跡や焼土などの遺構が検出され、埋蔵文化財の存在が明らかとなった（中の沢遺跡）。この遺跡の保存について、秋田県教育委員会は原因者と協議の結果、記録保存の措置をとることで合意し、平成６年に急遽、発掘調査を実施した。

さらに、家の下遺跡の発掘調査中、周辺の踏査によって、家の下遺跡の南約300ｍの畑地で鉄滓が多量に出土することが判明した。埋蔵文化財包蔵地である可能性が高いため、試掘調査を行ったところ、畑地北側で行われていた農道建設工事区域内で遺構が発見された。（泉沢中台遺跡）。この遺構は工事によって消滅することから、協議の結果、記録保存の措置をとるために平成６年８月に農道部分のみの発掘調査を行った。同年11月に鉄滓出土地を中心に広範囲の遺跡範囲確認調査を行って、工事区域内に遺跡の存在が明らかとなったため、秋田県教育委員会は原因者と協議の結果、工事に伴って掘削される部分については記録保存の措置を取ることとなり、平成７年度に泉沢中台遺跡の発掘調査に至ったのである。

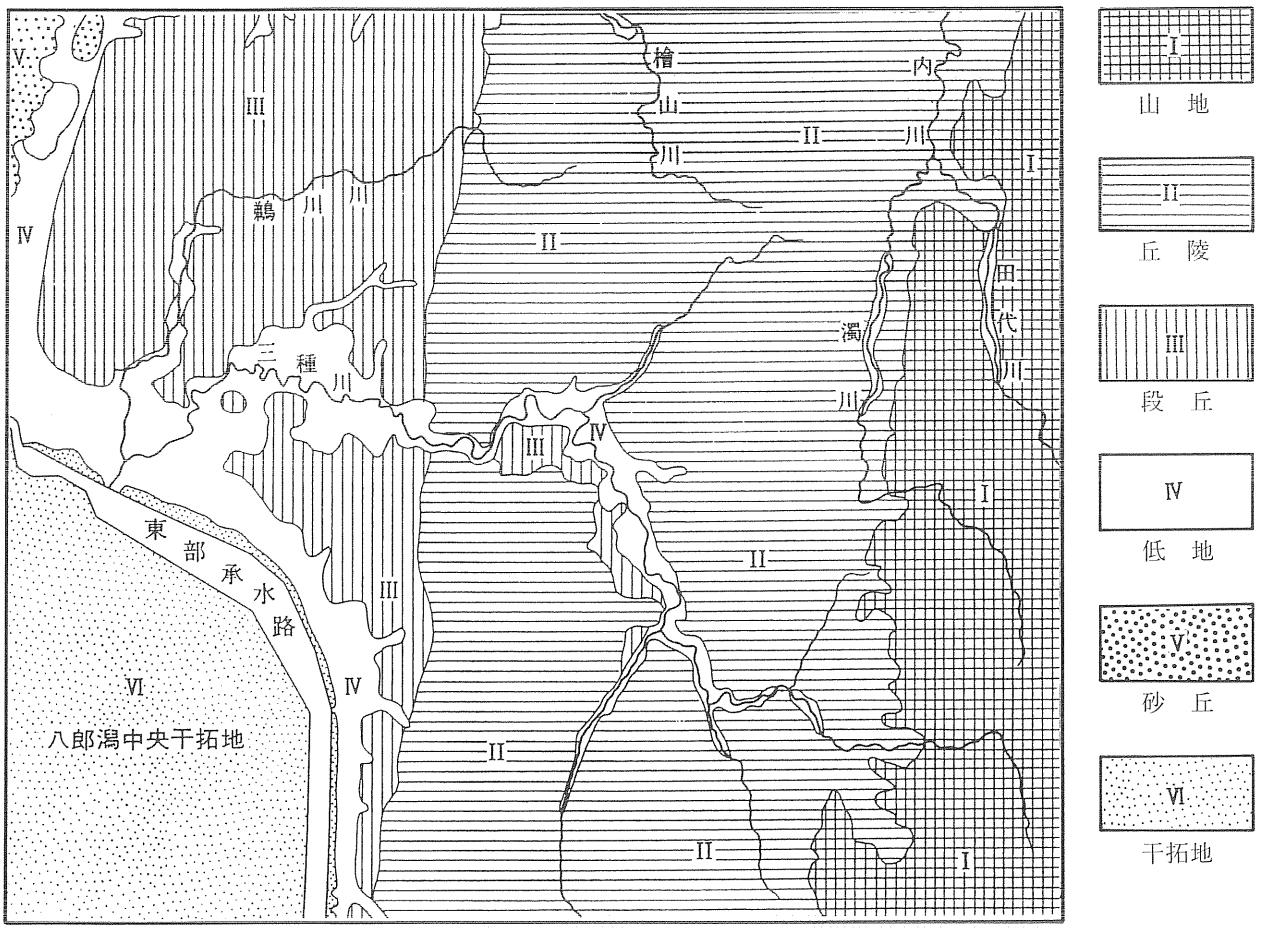
第２図　調査範囲

第２節　調査要項

所在地	秋田県山本郡琴丘町鹿渡字泉沢中台71ほか
調査期間	平成６年８月１日～平成６年８月12日
	平成７年４月20日～平成７年11月２日
調査面積	8,900㎡（平成６年度400㎡、平成７年度8,500㎡）
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	谷地　　薫　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）（平成７年　担当）
	栗澤　光男　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）（平成７年　担当）
	磯村　　亨　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）（平成６年　担当）
	木村　将来　（琴丘町教育委員会主事）（平成６年　担当）
総務担当者	藤肥　良清　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
	佐藤　広文　（秋田県埋蔵文化財センター主任：現 秋田県教育庁高校教育課主任）
	須田　輝樹　（秋田県埋蔵文化財センター主事）
	佐藤　幸嗣　（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	秋田県山本農林事務所　琴丘町教育委員会　鹿渡土地改良区



第３図　遺跡周辺の地形区分



第４図　遺跡周辺の表層地質

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と立地

泉沢中台遺跡の位置はおおよそ北緯40度45分３秒、東経140度５分23秒である。遺跡のある琴丘町は八郎潟残存湖の東部に隣接し、出羽丘陵の北東辺に位置する。平野部は八郎潟残存湖に沿って広がるが、極めて狭小なものであり、そのため旧来の沢すじは水田化され、地形の改変がなされていった。各所に残された堤は谷あいにあたり、それを追っていくと原地形を復元することができる。

遺跡は琴丘町の長信田集落と泉沢集落のほぼ中間の水田中に取り残された低丘陵上に位置する。現在は大規模な区画整理によりその原地形をとどめていないが、集落の人々の話や古地図によると、遺跡の中心部は南北を小さな沢で区切られ、西側に向かって張り出した微高地上にある。周辺の水田部分にも遺物散布範囲は及んでいる。

遺跡は、八郎潟東岸に形成された標高26ｍ前後の海成段丘（森岳Ⅱ面）上に位置する。森岳Ⅱ面は、能代平野で発達している段丘地形のうち、三種川～新屋敷地域で５段の海成面が隣接する中の上位から３段目にあたる。

遺跡周辺の丘陵地を構成する段丘面は、従来から八郎潟西部に広く分布する潟西層に相当するものと考えられていた。しかし最近の研究では八郎潟東岸部における潟西層の分布及び段丘構成の細分化が試みられており、泉沢中台遺跡の立地する段丘面は降下火山灰から約13万年前に形成された下末吉相当面と考えられている。また遺跡東部の石倉山を連ねる丘陵域も古八郎潟縁辺に発達した古砂丘であることが判明している。

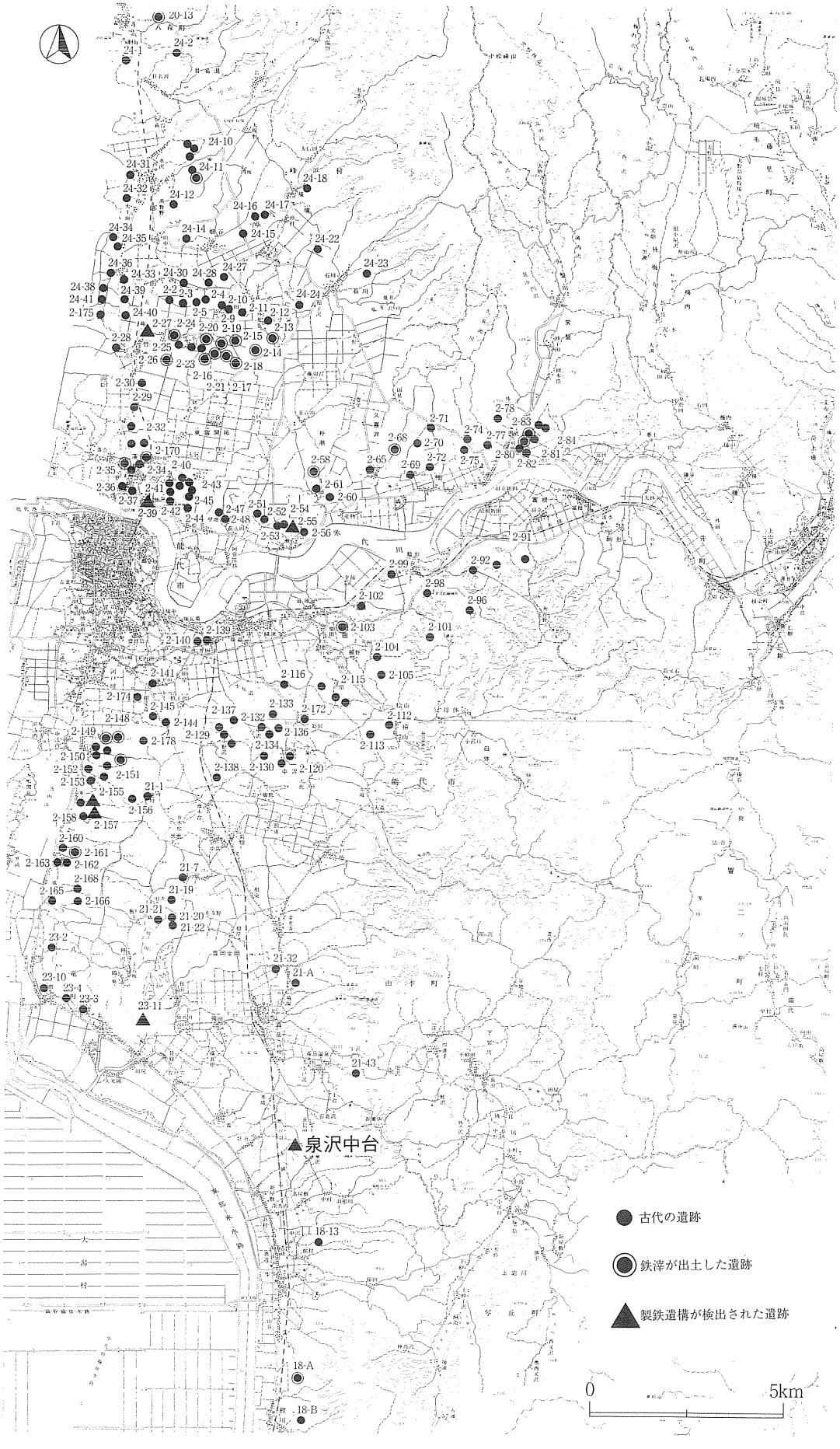
第２節　歴史的環境

泉沢中台遺跡は主に平安時代の集落跡と製鉄遺跡である。能代市と山本郡西部における古代の集落と古代の製鉄遺跡分布図と一覧表を第５図及び第１表に示した。

この地域では古代集落は24遺跡が発掘調査されている。このうち製鉄炉もあわせて発掘され、製鉄を行った集落として明らかなのは、竹生、平影野、中台、寒川Ⅱ、十二林の５遺跡である。また製鉄炉が発見されていなくても、鉄滓は出土している遺跡は33遺跡あり、これらの遺跡でも製鉄に関わる何らかの作業が行われていたことを示唆している。このような状況から、この地方における古代遺跡の在り方として、特定の集落または特定のせまい地域で製鉄が独占され、一般集落には鉄製品のみが流通していたとは言い難く、むしろ未製品段階での流通が一般的で、鉄器の製作または製品の再生は、消費地である集落において行われることが一般的とさえ言える。

鉄滓の出土遺跡が広く分布することから、上述のように、製鉄に関わる作業が広範に行われていたことを推測できたとしても、鉄製品の製作工程の復元と分業体制の解明が進まなければ生産と流通の実態は不明である。製鉄工程の復元に関する研究は、「鋼精錬」をめぐって議論が展開されているところで、一般的な工程復元さえ、定式的なものはない。

このような状況下で泉沢中台遺跡の製鉄炉の構造的特徴と、出土鉄滓量の多さ、とりわけ流動滓の多さは、この遺跡の機能的特徴もしくは鉄生産に関わる分業体制を考える上で特別の意味をもつと思われる。



第５図　周辺の関係遺跡図

遺跡番号	遺跡名	所在地	発掘	集落	製鉄炉	鉄滓	文献
20-13	土井	八森町八森町字土井	◎	○		○	1
24-1	蝦夷倉	峰浜村目名潟字蝦夷倉					A
24-2	蝦夷館	峰浜村目名潟字竹長根					2
24-10	中台	峰浜村水沢字中台					A
24-11	赤坂茶右ェ門台	峰浜村水沢字赤坂茶右ェ門台					A
24-12	高野野	峰浜村高野々字下台					3
24-14	羽立	峰浜村畑谷字根洗沢					A
24-15	城土手	峰浜村塙字大槻野					4
24-16	中館	峰浜村塙字館越					2
24-17	大館	峰浜村塙字館越					2
24-18	狐館	峰浜村塙字狐館・上ノ野					A
24-22	内林	峰浜村石川字内林					A
24-23	古館	峰浜村石川字右京堂					2
24-24	作館	峰浜村内荒巻字作館下					2
24-27	向谷地	峰浜村畑谷字向谷地					A
24-28	中田面	峰浜村坂形字中田面	◎	○			5
24-30	強坂	峰浜村坂形字強坂					A
24-31	カッチキ台	峰浜村水沢字カッチキ台					A
24-32	真山	峰浜村高野々字真山					A
24-33	沼田	峰浜村沼田字明神長根字家の下					A
24-34	十八石	峰浜村沼田字十八石					A
24-35	上釜谷	峰浜村沼田字上釜谷					A
24-36	明神長根	峰浜村沼田字坊塚字明神長根					A
24-38	手前谷地尻	峰浜村沼田字手前谷地尻					A
24-39	ホンコ谷地Ａ	峰浜村沼田字ホンコ谷地					A
24-40	ホンコ谷地Ｂ	峰浜村沼田字ホンコ谷地					A
24-41	ホンコ谷地Ｃ	峰浜村沼田字ホンコ谷地					A
24-A	湯ノ沢岱	峰浜村水沢字湯ノ沢岱	○	○		○	M
2 - 2	向ノ台	能代市坂形字向台					b
2 - 3	蟹ケ台	能代市坂形字蟹ケ台		○			C
2 - 4	重兵衛台Ⅰ	能代市坂形字重兵ェ台	◎	○			5
2 - 5	重兵衛台Ⅱ	能代市坂形字重兵ェ台	◎	○			5
2 - 9	比八田中台Ⅰ	能代市比八田字中台					B
2-10	比八田中台Ⅱ	能代市比八田字中台					B
2-11	比八田館	能代市比八田字五郎左ェ門沢					2
2-12	外荒巻館	能代市外荒巻字北山ノ上					2
2-13	南山ノ上	能代市外荒巻字南山ノ上	◎			○	6
2-14	サシトリ台	能代市外荒巻字サシトリ台	◎	○		○	6
2-15	金ケ沢Ⅰ	能代市比八田字金ケ沢					B
2-16	金ケ沢Ⅱ	能代市比八田字金ケ沢				○	B
2-17	金ケ沢Ⅲ	能代市比八田字金ケ沢				○	B
2-18	金ケ沢Ⅳ	能代市比八田字金ケ沢				○	B
2-19	平泉	能代市比八田字平泉		○		○	B
2-20	平泉館	能代市比八田字平泉				○	a2
2-21	金ケ台	能代市比八田字金ケ台・金ケ沢				○	B
2-22	杉沢野	能代市磐字杉沢野					A
2-23	杉沢台	能代市磐字杉沢台	◎	○		○	7
2-24	上後野Ⅰ	能代市磐字上後野・上ノ沢				○	B
2-25	上後野Ⅱ	能代市磐字上後野・後野・銭ケ台					B
2-26	後野	能代市磐字後野				○	B
2-27	竹生	能代市竹生字竹生	◎	○	○	○	7
2-28	神田	能代市竹生字神田					e
2-29	街道上Ⅰ	能代市須田字街道上					D
2-30	街道上Ⅱ	能代市須田字大沢屋布後					D
2-32	落合上大野Ⅱ(A・B・C)	能代市落合字上大野					b
2-34	中大野Ⅰ	能代市落合字中大野					B
2-35	中大野Ⅱ	能代市落合字中大野				○	B
2-36	下大野Ⅰ	能代市落合字下大野					b
2-37	下大野Ⅱ	能代市落合字下大野					b
2-39	平影野	能代市向能代字平影野	○	○	○	○	B
2-40	トドメキⅠ	能代市向能代字トドメキ					
2-41	トドメキⅡ	能代市向能代字トドメキ					B
2-42	金山館	能代市向能代字平影野	◎	○		○	8・9
2-43	上野(A・B・C・D)	能代市真壁地字トドメキ沢	◎	○			E
2-44	真壁地Ⅰ	能代市真壁地字野畑		○			10
2-45	真壁地Ⅱ	能代市真壁地字野畑田					10
2-47	サト館	能代市真壁地字サト					2
2-48	塞ノ神館	能代市真壁地字サト・荷八田字塞ノ神					2
2-51	宇藤台Ⅰ	能代市荷八田字宇藤台					B
2-52	宇藤台Ⅱ	能代市荷八田字宇藤台					B
2-53	八森坂Ⅰ	能代市朴瀬字八森坂					6
2-54	八森坂Ⅱ	能代市朴瀬字八森坂					6
2-55	中台	能代市朴瀬字社地際中台	◎	○	○	○	11
2-56	二林台	能代市朴瀬字二林台・林台					B
2-58	里館	能代市朴瀬字草刈野				○	C・B
2-60	古館Ⅰ	能代市朴瀬字古舘					2
2-61	古舘Ⅱ	能代市朴瀬字家ノ上				○	2
2-65	久喜沢神社	能代市久喜沢字大林					B
2-68	ユズリ葉	能代市久喜沢字小坂下	◎	○		○	21
2-69	四日市神社	能代市槐字槐台					B
2-70	槐台Ⅰ	能代市槐字槐台					B
2-71	槐台Ⅱ	能代市槐字槐台					B
2-72	槐台Ⅲ	能代市槐字槐台					B

遺跡番号	遺跡名	所在地	発掘	集落	製鉄炉	鉄滓	文献
2-73	槐台Ⅳ	能代市槐字戸板野					B
2-74	中野Ⅰ	能代市常盤字二見沢					7
2-75	中野Ⅱ	能代市常盤字松木岱					7
2-77	下譽野(A・B・C・D)	能代市常盤字下譽野				○	B
2-78	大平岱	能代市常盤字大平岱・大館台					A
2-80	下上野館	能代市常盤字下上野					2
2-81	下上野Ⅰ	能代市常盤字下上野					2
2-82	下上野Ⅱ	能代市常盤字下上野					B
2-83	上寂野館	能代市常盤字上寂野					2
2-84	上寂野Ⅱ (A・B・C)	能代市常盤字上寂野					B
2-91	芹川館	能代市(鶴形)字大台野ほか					2
2-92	鶴形大台野	能代市(鶴形)字大台野					B
2-96	山神社前	能代市(鶴形)字山神社前				○	B
2-98	大館跡	能代市(鶴形)字戸草沢					2
2-99	上ノ山	能代市(鶴形)字上ノ山台					B
2-101	八重堀館	能代市(鶴形)字山神社前					2
2-102	谷地館	能代市(鶴形)字田中谷地					2
2-103	大館	能代市田庄内字大館ほか	◎	○		○	12
2-104	ニタ又	能代市檜山字小沢田・田庄内字ニタ又				○	B
2-105	三岳館	能代市檜山字上館・小木竹沢					2
2-112	多賀谷居館	能代市檜山字霧山下	◎				13
2-113	茶臼館	能代市檜山字茶臼館ほか					2
2-115	四ツ屋台(A・B・C)	能代市扇田字四ツ屋					B
2-116	苗代沢	能代市鍼渕字苗代沢					B
2-120	古舘 (A・B)	能代市中沢字古舘・奥ノ沢					2
2-129	蟻ノ台Ⅸ (A・B・C)	能代市中沢字蟻台					B
2-130	梯ノ台	能代市中沢字梯台					14
2-132	小友Ⅱ	能代市中沢字小友					d
2-133	小友Ⅲ	能代市中沢字小友					d
2-134	小友Ⅳ	能代市中沢字小友					d
2-136	小友Ⅵ	能代市中沢字小友					d
2-137	腹鞍ノ沢	能代市(榊)字腹鞍ノ沢	◎	○			15
2-138	九郎左衛門台	能代市(榊)字九郎左衛門台					B
2-139	仁井田白山	能代市(榊)字仁井田白山					B
2-140	新山前	能代市(榊)字新山前					B
2-141	塩干田	能代市(榊)字戸川向					B
2-144	古屋布	能代市(榊)字古屋布					B
2-145	相染森	能代市河戸川字相染森台・(榊)字柏子所					d
2-146	塞ノ神	能代市(榊)字塞ノ神					d
2-148	赤ハゲ (Ⅰ・Ⅱ)	能代市浅内字赤ハゲ・此掛沢				○	B
2-149	此掛沢Ⅰ	能代市浅内字此掛沢		○			F
2-149	此掛沢Ⅱ	能代市浅内字此掛沢					16
2-150	上ノ山Ⅰ	能代市浅内字上ノ山					F
2-150	上ノ山Ⅱ	能代市浅内字上ノ山	◎	○		○	16・17
2-151	ムサ岱	能代市浅内字ムサ岱	○	○		○	B
2-152	横長根 (A・B)	能代市浅内字横長根		○			G
2-153	清水上	能代市浅内字清水上					G
2-155	寒川Ⅰ	能代市浅内字寒川家上・十二林	◎	○			18
2-155	寒川Ⅱ	能代市浅内字寒川家上	◎	○	○	○	18
2-156	大館南沢	能代市浅内字大館南沢				○	B
2-157	十二林	能代市浅内字十二林	◎	○	○	○	19
2-158	蟹子沢	能代市浅内字蟹子沢					19
2-160	福田上野	能代市浅内字福田上野					B
2-161	福田	能代市浅内字福田上野	◎	○		○	19
2-162	頭無上Ⅰ	能代市浅内字頭無					B
2-163	頭無上Ⅱ	能代市浅内字頭無上					B
2-165	成合Ａ	能代市浅内字沢辺					G
2-166	成合Ｂ	能代市浅内字沢辺					G
2-168	成合Ｄ	能代市浅内字成合・沢辺					G
2-170	中大野Ⅲ	能代市落合字中大野				○	b
2-172	中瀬戸沢	能代市檜山字中瀬戸沢					B
2-173	山崎	能代市(鶴形)字山崎				○	B
2-174	下相染下	能代市河戸川字下相染下					B
2-175	天神谷地 (A・B)	能代市竹生字天神谷地					B
2-177	此掛沢Ⅲ	能代市浅内字此掛沢					H
2-178	船沢	能代市浅内字船沢					H
21-1	逆川	山本町外岡字渡道					A
21-7	外岡	山本町外岡字長者屋敷		○		○	A
21-19	保竜館	山本町豊岡金田字保竜					2
21-20	保竜Ⅰ	山本町豊岡金田字保竜					A
21-21	保竜Ⅱ	山本町豊岡金田字保竜					A
21-22	保竜Ⅲ	山本町豊岡金田字保竜					A
21-32	豊岡	山本町豊岡金田字田倉館					A
21-43	木戸沢館	山本町森岳字木戸沢					2
21-A	東飛塚Ⅱ	山本町森岳字西飛塚					I
23-2	萱刈沢Ⅱ	八竜町鵜川字萱刈沢	◎	○		○	
23-3	館の上館	八竜町鵜川字館の上	◎				20
23-4	館の上	八竜町鵜川字館の上	○	○		○	K・L
23-10	大曲家の上	八竜町鵜川字大曲家の上	◎				J
23-11	扇田谷地	八竜町鵜川字扇田谷地	○	○			M・N
18-13	諏訪長根	琴丘町鹿渡字諏訪長根					A
18-A	中陣場	琴丘町鯉川字中陣場				○	I
18-B	小林	琴丘町鯉川字小林					I

第１表　周辺関係遺跡一覧表

文　献

1．秋田県教育委員会『土井遺跡発掘調査報告書　第111集』1984(昭和59) 年
2．秋田県教育委員会『秋田県の中世城館　第86集』1981(昭和56) 年
3．奈良　修介・大和久　震平『秋田県史　考古編』1960(昭和35)　秋田県
4．秋田県教育委員会『城土手遺跡・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書　第32集』1975(昭和50) 年
5．秋田県教育委員会『中田面・重兵衛台Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡発掘調査報告書　第74集』1980(昭和55) 年
6．秋田県教育委員会『能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書　第37集』1976(昭和51) 年
7．秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書　第83集』1981(昭和56) 年
8．秋田県立鷹巣農林高等学校『能代市金山チャシ発掘報告書　郷土史研究報告第一冊』1957
9．能代市教育委員会『金山館発掘調査報告書』1986(昭和61) 年
10．秋田県教育委員会『真壁地・蟻ノ台遺跡発掘調査報告書　第102集』1983(昭和58) 年
11．秋田県教育委員会『中台遺跡発掘調査報告書　第50集』1978(昭和53) 年
12．能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』1978(昭和53) 年
13．能代市教育委員会『多賀谷居館跡確認緊急調査報告書』1997(平成9) 年
14．能代市教育委員会『梯ノ台遺跡詳細分布調査報告書』1993(平成5) 年
15．秋田県教育委員会『腹鞁の沢遺跡発掘調査報告書　第97集』1982(昭和57) 年
16．秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書　第114集』1984(昭和59) 年
17．秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業埋蔵文化財発掘調査上の山遺跡第２次発掘調査報告書　第137集』1986 (昭和61) 年
18．秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　第167集』1988 (昭和63) 年
19．秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　第178集』1989 (平成元) 年
20．秋田県教育委員会『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』1994(平成6) 年
21．秋田県教育委員会『ユズリ葉遺跡発掘調査報告書』1978(昭和53) 年
A．秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』(中央版) 1990(平成2) 年
B．能代市『能代市史　資料編　考古』1995(平成7) 年
C．秋田県教育委員会『秋田県遺跡分布調査報告書　第60集』1979(昭和53) 年
D．秋田県教育委員会『遺跡分布調査報告書　第70集』1980(昭和55) 年
E．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書　第79集』1981(昭和56) 年
F．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書　第93集』1982(昭和57) 年
G．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書　第103集』1983(昭和58) 年
H．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書　第155集』1987(昭和62) 年
I．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書　第270集』1997(平成9) 年
J．秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報 3 』(昭和59年度)
K．秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報 12 』(平成5年度)
L．秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報 13 』(平成6年度)
M．秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報 14 』(平成7年度)
N．秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報 15 』(平成8年度)
a．村木　悦也「陶水瓶の出土地について」『秋田考古学』14　1960(昭和35) 年　秋田考古学協会
b．冨樫　泰時・大槻　久馬「能代周辺の遺跡について」『秋田考古学』32　1975(昭和55) 年　秋田考古学協会
c．若松　鉄四郎「能代市山本郡の城館跡」『能代山本地方史研究』創刊号　1982(昭和57) 年　能代山本地方史研究会
d．武田　孝義・小林　喜兵「現場からの報告・埋蔵文化財破壊の現状」『能代山本地方史研究』2号　1983(昭和58) 年　能代山本地方史研究会
e．工藤　英美「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』4号　1987(昭和62) 年　能代山本地方史研究会

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

泉沢中台遺跡は、琴丘町の北部、ＪＲ奥羽線鹿渡駅の北方約３kmにある。遺跡のある平坦地帯は、現在水田地帯となっているが、その中には独立残丘状に微高地が点在し、畑地・林地となっているところもある。家の下遺跡・中の沢遺跡・泉沢中台遺跡はいずれも、そのような微高地に立地する。泉沢中台遺跡の立地する微高地は平坦で、西方と南方に穏やかに下がっている。標高は23～25ｍである。本来の地形は、北側と南側に東西方向の小沢が入り込み、これらによって画された東西約350ｍ、南北約200ｍのほぼ三角形を呈する微高地であったと推測される。小沢は開田によって小区画の水田や堤となり、微高地の大半も、水田化したが、南西部は畑地・雑木林として残された。水田化した部分は、遺跡発見以前に工事対象地としてほ場整備事業が進められ、すでに大規模水田が造成されている。新規の農道工事も進み、畑地・雑木林を囲むように北側と東側には農道が建設されている。

遺跡範囲は、微高地全体と周辺の低地の一部に及ぶと推測されるが、遺跡が発見された時点では、すでに工事が進み微高地の南西部約４分の１が残っていたにすぎない。東側には新規の農道が完成し、北側も農道工事で半ば掘削された状態であった。

発掘調査した範囲は、北側農道敷の一部、残存していた微高地全体である。その周辺に広がる一段低い水

第６図　工事計画図

田にも遺物散布域は広がっているが、工事による掘削が及ばないことから発掘調査は行わなかった。発掘調査区の中央部には南東から北西に斜めに農道が通り、その北側は、畑地造成による削平が地山まで及び、耕作土真下で地山面が現れる。農道の南側、調査区の南西部３分の２ほどの範囲では、地山を50～70㎝程度掘り下げて平坦地を造成し、さらに客土を厚く盛っていた。遺構・遺物の残存状態が比較的良好なのは調査区東側一帯である。東側の新規農道に隣接する一部には幅６ｍ、長さ35ｍにわたって地山を１ｍ近く掘削した部分もある。農道は、雑木林や畑地を20～50㎝程切り直して一段低い。この農道の一部では鉄滓が多量に露出していて遺跡発見のきっかけとなった。雑木林内では比較的大きい椀状滓も散布している。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法（第４図）は、中の沢遺跡から300ｍほど離れて発掘調査していた、家の下遺跡の調査区内のＭＧ70グリッド杭を選定し、これより北（磁北）に80ｍ，西に280ｍ移動して調査区内の起点ＭＡ50とした。そして、ＭＡ50から北を求めてグリッドの南北基線とし、この南北基線及びそれと直交する東西基線から、４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、５箇所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すＬＴ･ＭＡ･･･ＭＴ・ＮＡ･･･ＮＴ・ＯＡ･･･ＯＤというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す46・47･･･の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

遺物は、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。基本的に土坑などの小規模な遺構は、長軸に沿って二分割して調査した。性格不明遺構（ＳＸ）などの大規模な遺構は十字に土層観察用のベルトを残し、四分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には１/20の縮尺で作図したが、土器埋設炉は1/10で、遺物出土状況図は1/10もしくは1/20の縮尺で作図した。写真撮影は、35㎜のモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第２原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

検出遺構は、第３表・第４表に一覧で示した。掘立柱建物跡16棟、板塀跡９条、柱列15条、井戸跡１基、土坑31基、焼土８条、製鉄遺構４基、鉄滓捨場１箇所である。

記号	番号	種　類	備考	記号	番号	種　類	備考	記号	番号	種　類	備考	記号	番号	種　類	備考
SK	01	土坑		SK	35	土坑		SK	69	土坑		SK	103	土坑	
SD	02	溝跡		SK	36	土坑		SK	70	土坑			104		欠番
SD	03	溝跡		SK	37	土坑		SN	71	焼土遺構		SB	105	掘立柱建物跡	
	04		欠番		38		欠番	SN	72	焼土遺構		SB	106	掘立柱建物跡	
	05		欠番	SK	39	土坑		SN	73	焼土遺構		SK	107	土坑	
SA	06	柱列			40		欠番		74		欠番	SN	108	焼土遺構	
	07		欠番	SK	41	土坑		SB	75	掘立柱建物跡		SN	109	焼土遺構	
	08		欠番	SA	42	板塀跡		SK	76	土坑		SA	110	柱列	
	09		欠番	SN	43	焼土遺構		SB	77	掘立柱建物跡		SA	111	柱列	
SD	10	溝跡		SK	44	土坑		SB	78	掘立柱建物跡		SA	112	柱列	
	11		欠番	SA	45	板塀跡		SB	79	掘立柱建物跡		SA	113	柱列	
SD	12	溝跡			46		欠番		80		欠番	SB	114	掘立柱建物跡	
	13		欠番	SB	47	掘立柱建物跡			81		欠番		115		欠番
SN	14	焼土遺構			48		欠番		82		欠番		116		欠番
SN	15	焼土遺構		SN	49	焼土遺構			83		欠番		117		欠番
SK	16	土坑		SN	50	焼土遺構		SA	84	柱列		SK	118	土坑	
	17		欠番		51		欠番	SA	85	柱列		SK	119	土坑	
SD	18	溝跡		SN	52	製鉄炉跡		SA	86	柱列		SK	120	土坑	
	19		欠番	SK	53	土坑			87		欠番		121		欠番
SK	20	土坑		SA	54	板塀跡		SN	88	焼土遺構			122		欠番
SK	21	土坑		SB	55	掘立柱建物跡		SA	89	板塀跡		SA	123	柱列	新規
SK	22	土坑		SB	56	掘立柱建物跡		SA	90	板塀跡		SA	124	板塀跡	新規
SK	23	土坑		SK	57	土坑		SN	91	製鉄炉跡		SA	125	板塀跡	新規
SK	24	土坑		SK	58	土坑			92		欠番	SN	126	製鉄炉跡	新規
SK	25	土坑		SA	59	柱列			93		欠番	SA	127	柱列	新規
	26		欠番	SB	60	掘立柱建物跡			94		欠番	SA	128	柱列	新規
	27		欠番		61		欠番		95		欠番	SA	129	柱列	新規
	28		欠番	SA	62	柱列		SK	96	土坑		SA	130	柱列	新規
SD	29	溝跡		SA	63	板塀跡		SD	97	溝跡		SK	131	土坑	新規
	30		欠番	SB	64	掘立柱建物跡		SN	98	製鉄炉跡		SK	132	土坑	新規
SK	31	土坑		SA	65	板塀跡		SK	99	土坑		SD	133	溝跡	新規
SB	32	掘立柱建物跡			66		欠番	SB	100	掘立柱建物跡					
SX	33	鉄滓捨場		SB	67	掘立柱建物跡		SK	101	土坑					
SB	34	掘立柱建物跡			68		欠番	SE	102	井戸跡					

第２表　検出遺構一覧表（番号順）

①掘立柱建物跡(16棟)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SB	32		
SB	34		
SB	47		
SB	55	SN51･SB55	
SB	56		
SB	60	SB60･SA61･SK83	
SB	64		
SB	67		
SB	75		
SB	77		
SB	78		
SB	79		
SB	100		
SB	105		
SB	106		
SB	114	SB105	

②板塀跡(９条)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SA	42	SA42･SD08	
SA	45		
SA	54		
SA	63		
SA	65		
SA	89	SA89･SD05	
SA	90	SA90･SD07	
SA	124		新規（平成6年度検出）
SA	125		新規（平成6年度検出）

③柱列(15条)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SA	06		
SA	59		
SA	62		
SA	84		
SA	85		
SA	86		
SA	110		
SA	111		
SA	112		
SA	113	SB105	
SA	123	SKP13･14･15	新規
SA	127	SB47	新規
SA	128	SB47	新規
SA	129	SB105	新規
SA	130	SB105	新規

④井戸跡(１基)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SE	102		

⑤土坑(31基)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SK	01		
SK	16		
SK	20		
SK	21		
SK	22		
SK	23		
SK	24		
SK	25		
SK	31		
SK	35		
SK	36		
SK	37		
SK	39		
SK	41		
SK	44		
SK	53		
SK	57		
SK	58		
SK	69		
SK	70		
SK	76		
SK	96		
SK	99		
SK	101		
SK	103		
SK	107		
SK	118	SK53	
SK	119	SK53	
SK	120	SK53	
SK	131	SK41	新規
SK	132	SK41	新規

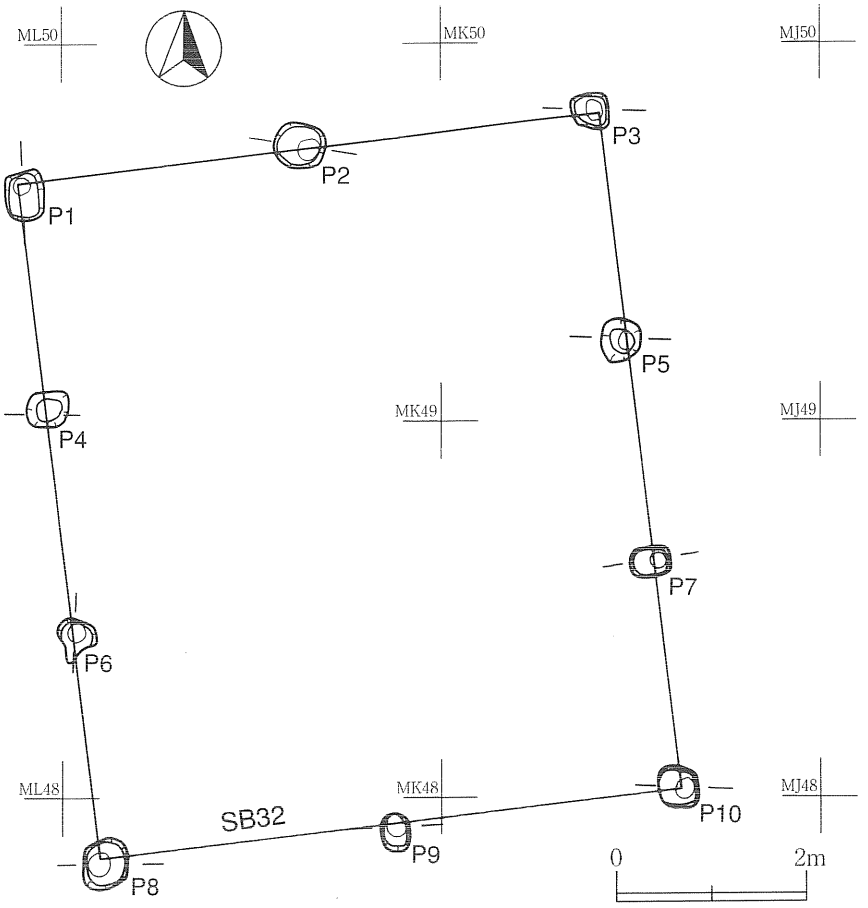
⑥焼土遺構(11基)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SN	14		
SN	15		
SN	43		
SN	49		
SN	50		
SN	71		
SN	72		
SN	73		
SN	88		
SN	108		
SN	109		

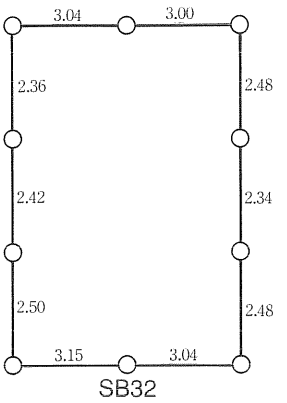
⑦溝跡(８条)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SD	02		
SD	03		
SD	10		
SD	12		
SD	18		
SD	29		
SD	97	SD97･09	
SD	133	SD18	新規

⑧製鉄炉跡(４基)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SN	52		
SN	91		
SN	98	SN98・SX94	
SN	126	SN98・SX94	新規

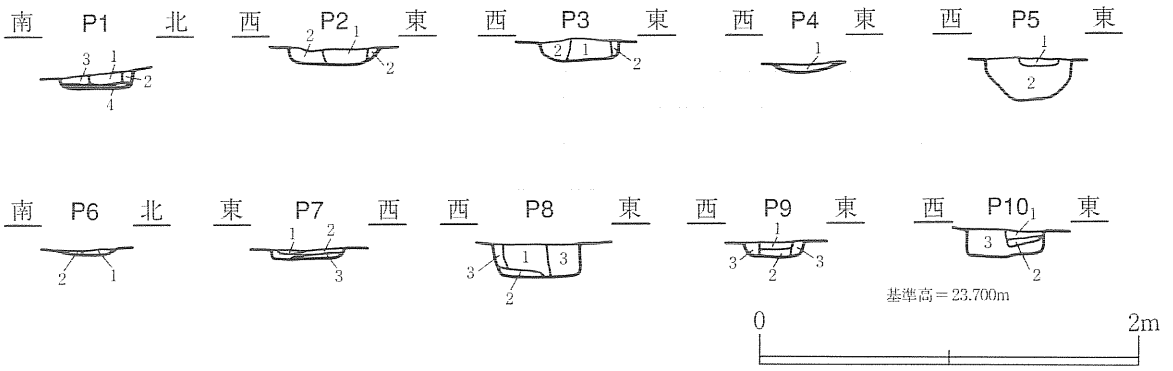
⑨鉄滓捨場(１箇所)			
記号	番号	現場での記号･番号	備　考
SX	33		

第３表　検出遺構一覧表（種類別）





P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	10	23.42
2	13	23.54
3	15	23.56
4	—	23.54
5	23	23.33
6	2	23.55
7	5	23.52
8	18	23.41
9	8	23.52
10	16	23.50



ＳＢ32Ｐ1
1　10ＹＲ3／4　暗褐褐色シルト　ややしまりあり。（柱痕跡）地山中～小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。（柱埋土）　地山土40％混じる。
3　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。（柱埋土）　暗褐色土10％混じる。
4　10ＹＲ7／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　極めてしまりあり。（地山）　柱穴によって灰色系に変色した部分。

ＳＢ32Ｐ2
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。（柱痕跡）　地山小～中粒40％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。（柱穴埋土）　地山土10％混じる。

ＳＢ32Ｐ3
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。（柱痕跡）　地山中～小粒10％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。

ＳＢ32Ｐ4
1　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　極めてしまりあり。（地山）　柱穴によって灰色系に変色した部分。

ＳＢ32Ｐ5
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。（柱痕跡）地山土30％混じる。
2　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。（柱穴埋土）　暗褐色土20％混じる。

ＳＢ32Ｐ6
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　しまりあり。褐色土30％混じる。

ＳＢ32Ｐ7
1　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ5／8　黄褐色シルト　極めてしまりあり。褐色土10％混じる。
3　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。（地山）　柱穴によって灰色に変色した部分。

ＳＢ32Ｐ8
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。（柱痕跡）　地山大粒５％、炭化物中粒５％含む。
2　10ＹＲ5／2　灰黄褐色シルト　極めてしまりあり。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　（柱穴埋土）　粘土がブロック状に崩壊し　暗褐色土が30％混じる。

ＳＢ32Ｐ9
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。（柱痕跡）　地山大粒５％含む。炭化物中粒２％含む。
2　10ＹＲ5／2　灰黄褐色シルト　極めてしまりあり。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色中砂混じりシルト　（柱穴埋土）　褐色土が30％混じる。

ＳＢ32Ｐ10
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。（柱痕跡）　地山大～中粒10％含む。炭化物小粒５％含む。
2　10ＹＲ5／2　灰黄褐色シルト　極めてしまりあり。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色中砂混じりシルトと10ＹＲ4／4　褐色シルトの混土　極めてしまりあり。黄褐色土は地山土の崩壊したもの。

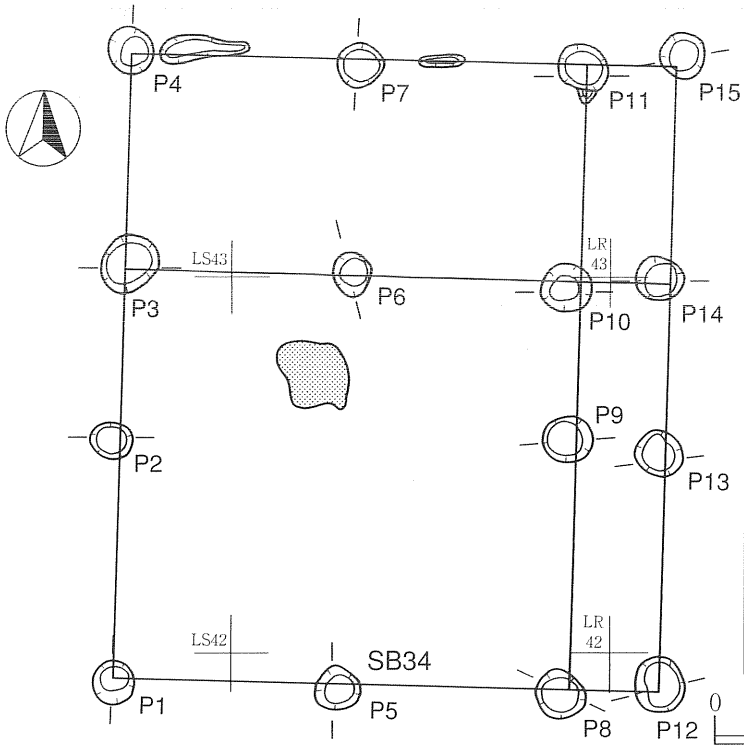
第７図　ＳＢ３２掘立柱建物跡

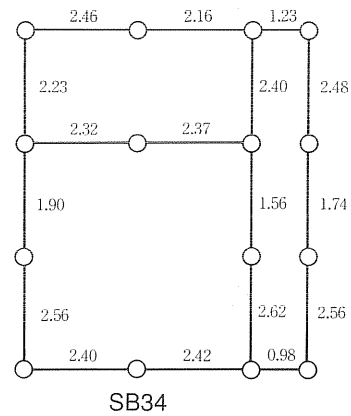
１．掘立柱建物跡

16棟を検出した。廂付建物６棟、間仕切りのある建物10棟、そのうちこれら両方がある建物は５棟である。ＳＢ55とＳＢ78は規模が大きく、中心的機能を有した建物と推測される。

SB32	建物の特徴	南北３間、東西２間南北棟、廂・間仕切りなし				桁行方位	N－7°－W
検出位置	ＭＪ47～49、MK47～49、ML48・49				検出層位	40cm以上削平された地山面	
重複遺構	なし		出土遺物	なし			
全体の規模	３間×２間	7.28～7.30m×6.04～6.19m			廂の出	—	—
計画尺	北から８尺＋８尺＋８尺、西から10尺＋10尺					廂の計画尺	—
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	隅丸方形	42～54cm	２～23cm	23.33～23.56m	18～24cm	２～18cm	23.41～23.54
付属施設	なし			廃絶の状況	放置または切り取り		

SB34	建物の特徴	南北３間、東西２間南北棟、東面廂付、間仕切り、廂あり				桁行方位	N－2°－W
検出位置	LQ41～43、LR41～43、LS41～43				検出層位	第３層上面	
重複遺構	なし		出土遺物	土師器高台付坏（１）、坏、甕（図示なし）			
全体の規模	３間×３間	5.82～5.85m×6.58～6.78m			廂の出	東面１間	0.98～1.23
計画尺	北から8尺＋6尺＋8尺,西から8尺＋8尺＋４尺					廂の計画尺	４尺
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	44～64cm	25～50cm	23.549～23.800	13～23cm	12～48cm	23.549～23.800
廂	円形	48～64cm	23～31cm	23.742～23.886	12～14cm	11～30cm	23.786～23.884
間仕切り	円形	50cm	42cm	23.682	21cm	44cm	23.682
付属施設	72cm×74cmの地床炉．身舎・間仕切りより南にあり．			廃絶の状況	放置または切り取り		

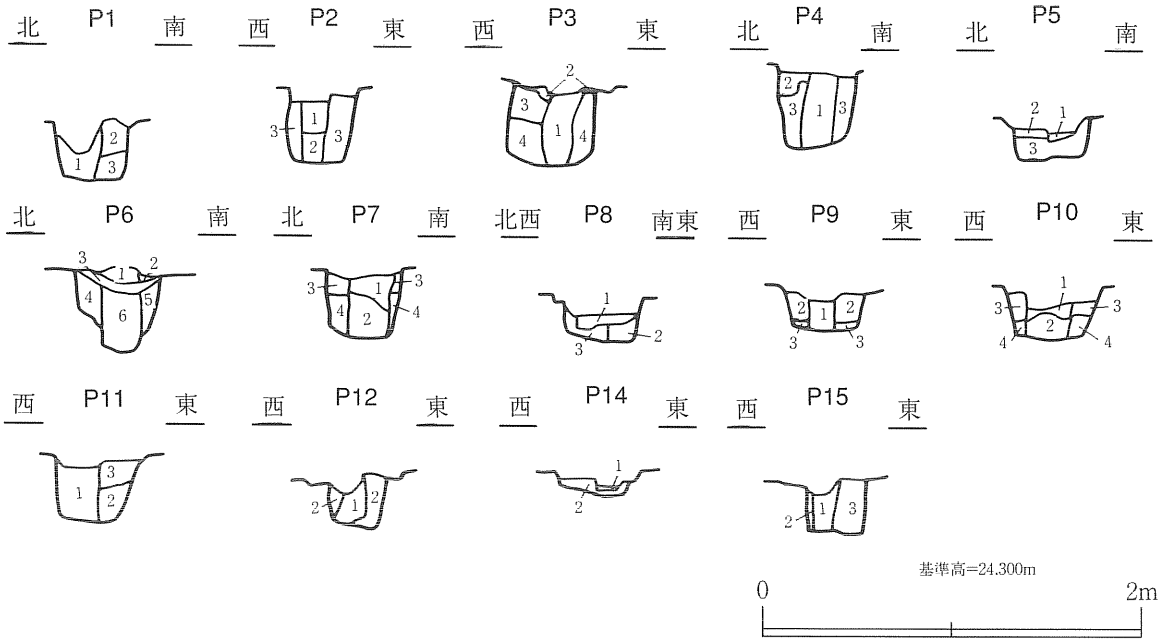




P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	36	23.549
2	42	23.662
3	50	23.645
4	52	23.699
5	34	23.624
6	42	23,.82
7	40	23.752
8	25	23.761

P	深さ（cm）	底面標高（m）
9	25	23.800
10	30	23.770
11	39	23.761
12	31	23.742
13	23	23.839
14	24	23.844
15	29	23.886

第８図　ＳＢ３４掘立柱建物跡



ＳＢ34Ｐ1
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりややあり。地山土20%混じる。鉄滓１個　含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。地山土大塊を10%含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が10%混じる。

ＳＢ34Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15%混じる。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。１層の地山土が10%混じる。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。地山土はブロック状に入る。

ＳＢ34Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりややあり。地山土10％混じる。炭化物中粒１％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色土シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土15%含む。炭化物極小粒１％含む。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。50%ずつ混じる。地山土は大粒状に砕けている。

ＳＢ34Ｐ4
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15%混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は大塊状に崩壊した状態で混じる。

ＳＢ34Ｐ5
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物中粒２％含む。焼土中粒１％含む。地山大～中粒７％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土40%混じる。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ7／6　明黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が10%混じる。

ＳＢ34Ｐ6
1　10ＹＲ6／6　明黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土の再堆積ブロック。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30%混じる。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土15%混じる。
4　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。
5　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に黒褐色土が40%混じる。
6　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。下部はしまりなし。地山土の大塊を10%含む。炭化物大粒１％含む。

ＳＢ34Ｐ7
1　10ＹＲ6／6　明黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土に暗褐色土が30%混じる。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。孔隙多い地山土15%混じる。
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。
4　10ＹＲ7／6　明黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に黒褐色土30%混じる。

ＳＢ34Ｐ8
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。炭化物中粒１％含む。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土と黒褐色土の混土。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色シルト　きわめてしまりあり。
※　この柱穴は柱の抜き取りの可能性あり。

ＳＢ34Ｐ9
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山大～中粒15%含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に黒褐色土が30%混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に黒褐色土が10%混じる。

ＳＢ34Ｐ10
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土40%混じる。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。孔隙多い　地山土大塊20%混じる。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土が15%混じる。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。

ＳＢ34Ｐ11
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土30%混じる。層の下部は孔隙多くしまりなし。地山土は大粒状に砕けた状態で霜降り状に混じる。
2　10ＹＲ7／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　きわめてしまりあり。黒褐色土20%混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30%混じる。炭化物小粒１％含む。

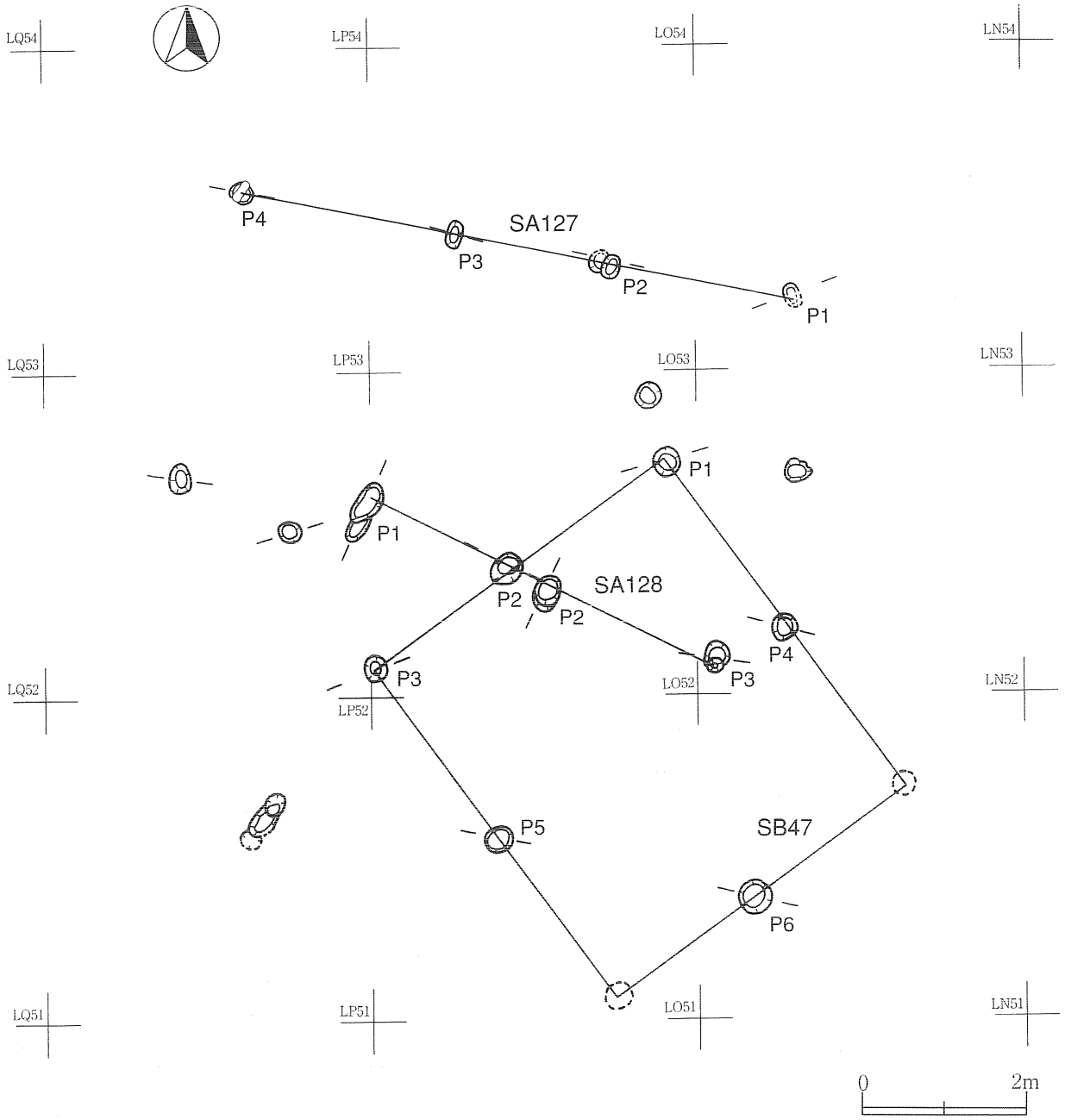
ＳＢ34Ｐ12
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりややなし。地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は中塊～中粒程度が混じる。

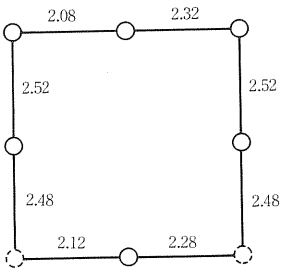
ＳＢ34Ｐ13
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。地山土が小～中粒状に崩壊し、暗褐色土と混じった層である。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土大塊を10%含む。
4　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土10%混じる。

ＳＢ34Ｐ14
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒を10%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土20%混じる。炭化物大粒１％含む。炭化物小粒１％含む。

ＳＢ34Ｐ15
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土極小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土20%混じる。
3　10ＹＲ4／6　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と黒褐色土の混土。地山土は大塊で含まれている。

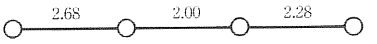
第９図　ＳＢ３４掘立柱建物跡柱穴断面土層図





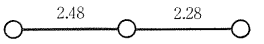
SB47

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	41.5	24.491
2	43.2	24.451
3	31.3	24.571
4	30.2	24.549
5	30.9	24.572
6	33.8	24.459



SA127

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	14.1	24.766
2	17.7	24.694
3	19.8	24.790
4	16.2	24.781



SA128

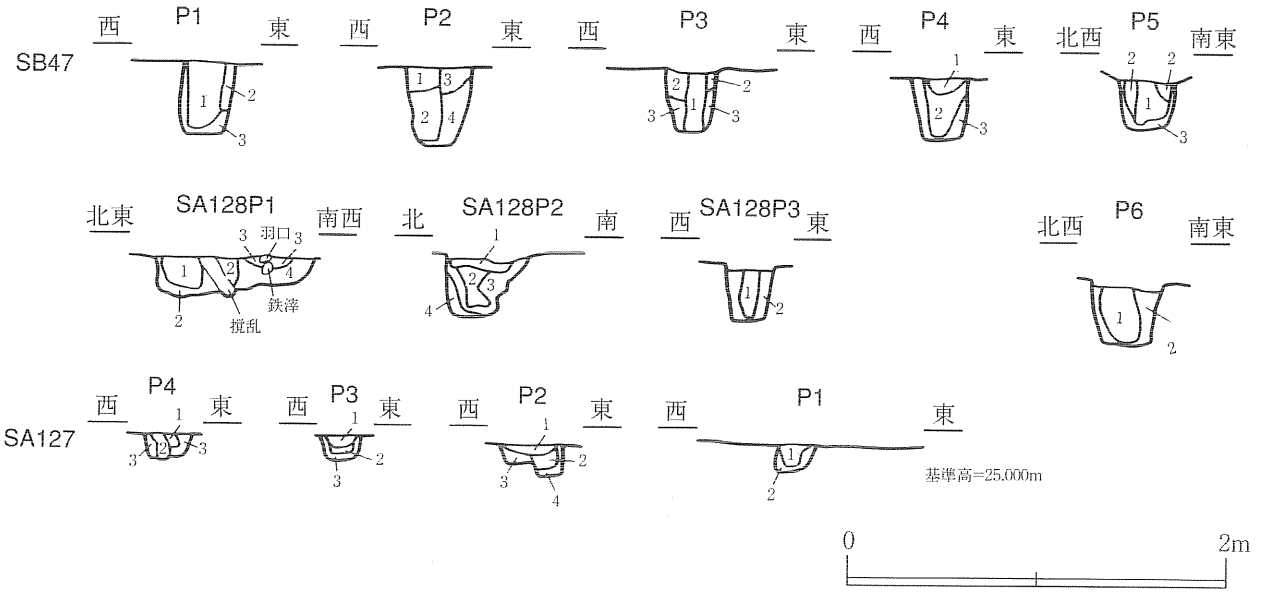
P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	39.3	24.474
2	32.2	24.576
3	29.2	24.564

第１０図　ＳＢ４７掘立柱建物跡、ＳＡ１２７・１２８柱列

SB47	建物の特徴	南北２間、東西２間、北西―南東方向。廂・間仕切りなし			桁行方位	N－44°－W
検出位置	LN51・52、LO51・52、LP52			検出層位	第３層土面	
重複遺構	SA128柱列（新旧不明）		出土遺物	フイゴの羽口（2）、土師器（図示なし）		
全体の規模	２間×２間	5.00m ×4.40m		廂の出	―	―
計画尺	北西から8尺＋8尺、南西から7尺＋7尺				廂の計画尺	―

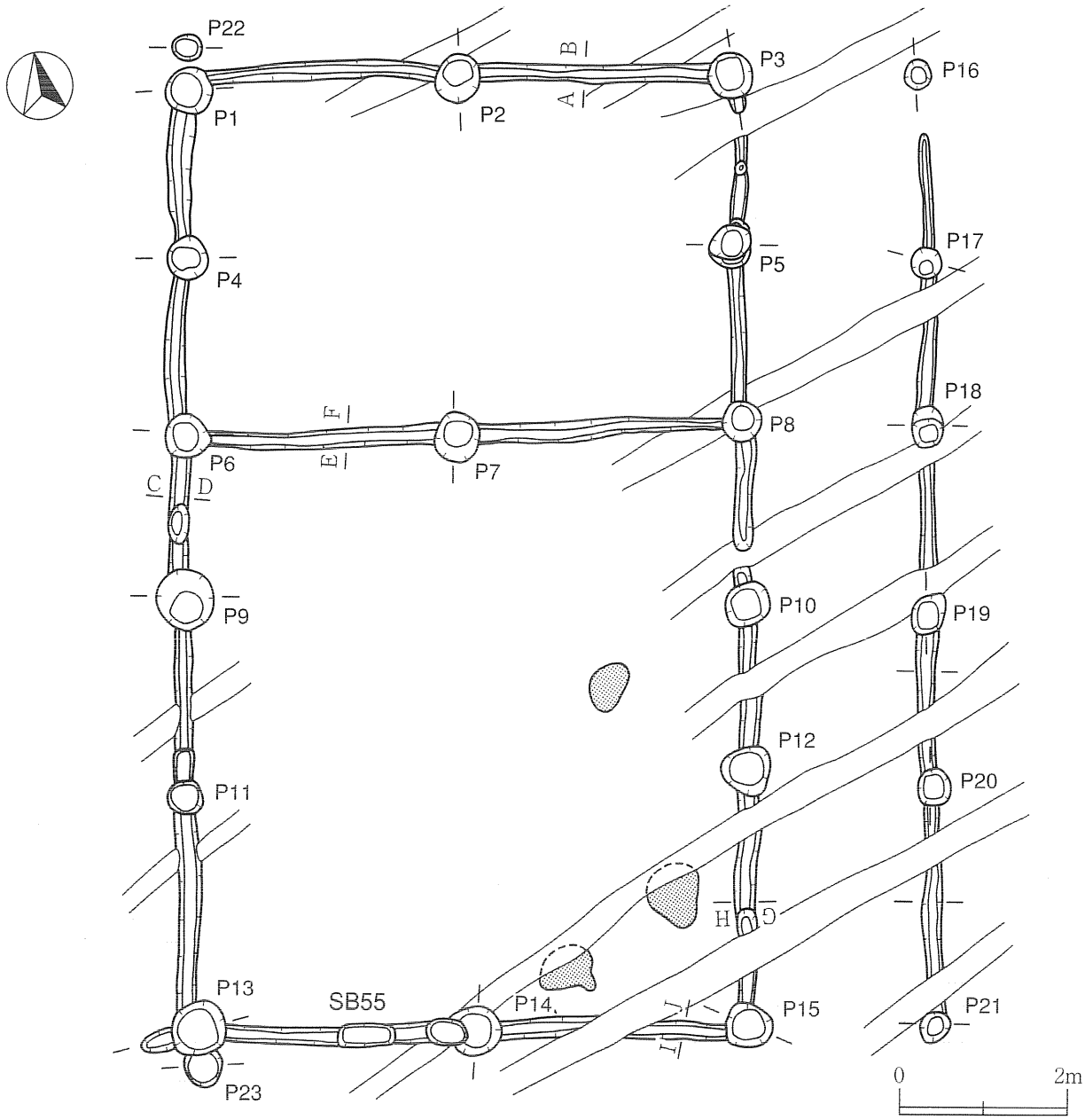
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	32～42cm	30.2～43.2	24.451～24.572	―	―	―

付属施設	なし	廃絶の状況	抜き取り
備考	東隅柱・南隅柱は撹乱により消失。		

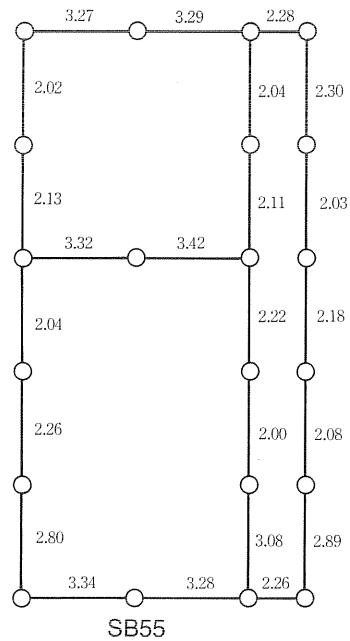


ＳＢ47Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
ＳＢ47Ｐ2
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土15％混じる。炭化物中粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒10％含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる。地山土の再堆積。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒～中塊30％含む。
ＳＢ47Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土２％混じる。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土の再堆積。暗褐色土20％混じる。
ＳＢ47Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりなし。地山土２％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ47Ｐ5
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
2　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山再堆積土に暗褐色土が30％混じる。
ＳＢ47Ｐ6
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。炭化物大粒１％、炭化物小粒１％、地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
ＳＡ128Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40％混じる。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒１％、地山小粒10％含む。
4　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊～中粒10％含む。
5　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。２層と同じ。
6　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる。根による撹乱。
ＳＡ128Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物大～小粒５％、地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
4　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土10％混じる。
ＳＡ128Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。炭化物小粒１％、地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ127Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒５％、地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
ＳＡ127Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。炭化物小粒２％、地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。
4　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色シルト　しまりあり。暗褐色土30％混じる。
ＳＡ127Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒１％、地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物極小粒１％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ127Ｐ4
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40％混じる。

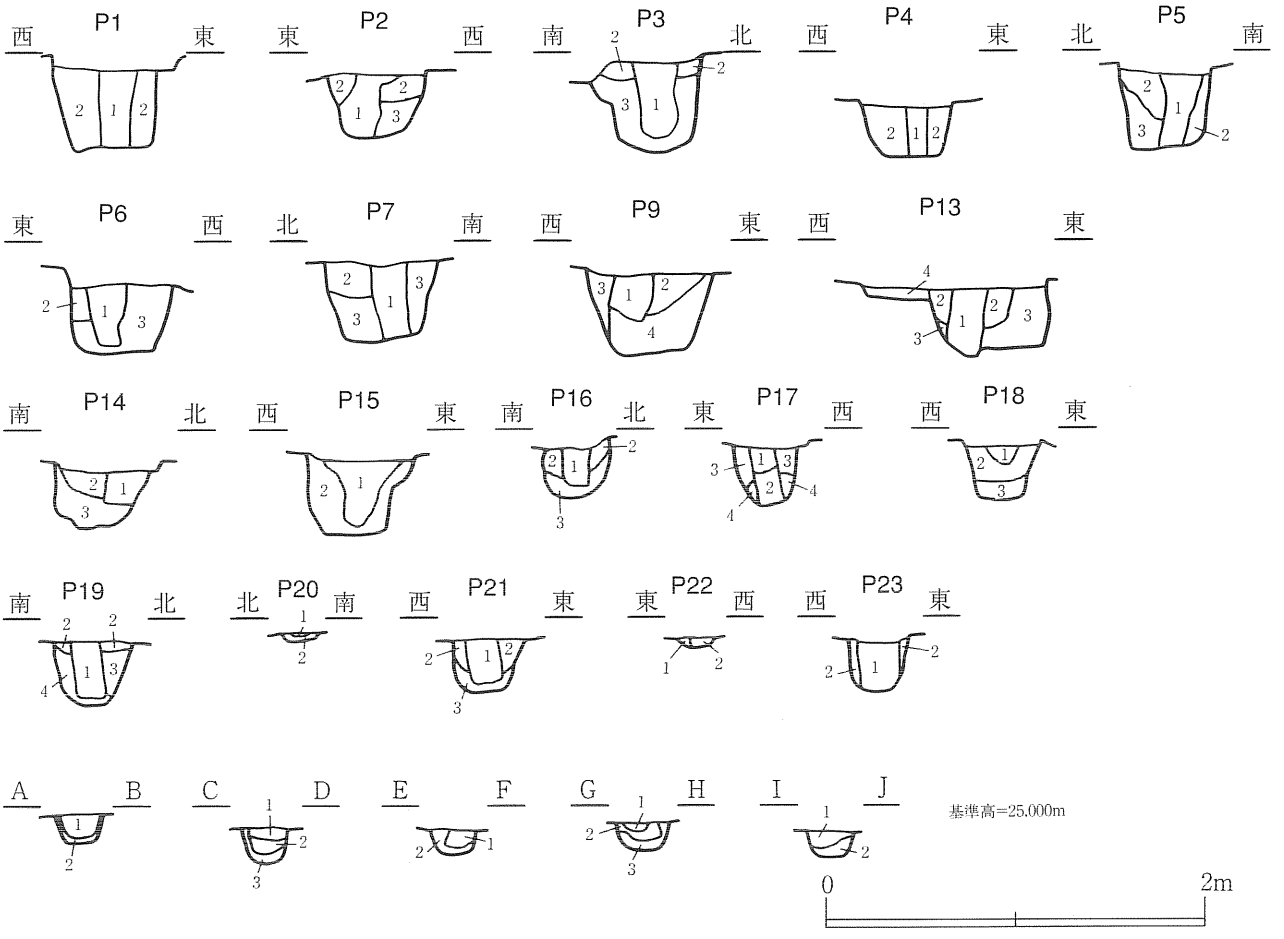
第１１図　ＳＢ４７掘立柱建物跡、ＳＡ１２７・１２８柱列柱穴断面土層図



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	50.0	24.480
2	36.0	24.540
3	52.0	24.470
4	31.0	24.440
5	46.0	24.470
6	46.0	24.400
7	43.0	24.470
8	－	－
9	47.0	24.390
10	－	－
11	－	－
12	－	－
13	41.0	24.380
14	36.0	24.480
15	44.0	24.40
16	33.0	24.,630
17	36.0	24.580
18	32.0	24.620
19	34.0	24.540
20	5.0	24.880
21	29.0	24.600
22	6.0	24.840
23	30.0	24.600



第１２図　ＳＢ５５掘立柱建物跡



ＳＢ55Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。霜降り状に入る。
ＳＢ55Ｐ2
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　地山崩壊土に暗褐色土が30％混じる。
ＳＢ55Ｐ3
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土20％混じる。
ＳＢ55Ｐ4
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２％、地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ5
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。
ＳＢ55Ｐ6
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりなし。地山土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ7
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土70％、暗褐色土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ9
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。焼土小粒１％、炭化物小～中粒２％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土15％混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土40％混じる。
4　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ13
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物中粒２％、地山小粒10％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。炭化物小粒２％含む。
ＳＢ55Ｐ14
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２％、地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　地山と10ＹＲ3／3の混土。
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。
ＳＢ55Ｐ15
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒５％、地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
ＳＢ55Ｐ16
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりなし。地山土40％混じる。
ＳＢ55Ｐ17
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりなし。地山土40％混じる。
ＳＢ55Ｐ18
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　ややしまりあり。地山土60％、暗褐色土40％混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりなし。地山小粒２％含む。
ＳＢ55Ｐ19
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
4　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。暗褐色土20％混じる。
ＳＢ55Ｐ20
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ21
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山大～中粒10％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ55Ｐ22
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
ＳＢ55Ｐ23
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。

第１３図　ＳＢ５５掘立柱建物跡柱穴・溝の断面土層図

SB55	建物の特徴	南北５間、東西２間、南北棟、東面廂付、間仕切りあり			桁行方位	N－10°－E
検出位置	LR52～LT52、LQ53～LT53、LQ54～LT54、LQ55～LT55			検出層位	第３層上面	
重複遺構	なし		出土遺物	土師器坏（２・５・６）、甕（４）		
全体の規模	５間×３間	11.25～11.48m ×8.84～8.88m		廂の出	東面１間	2.26～2.28
計画尺	北から７尺＋７尺＋７尺＋７尺＋10尺、西から11尺＋11尺＋7.5尺				廂の計画尺	7.5尺

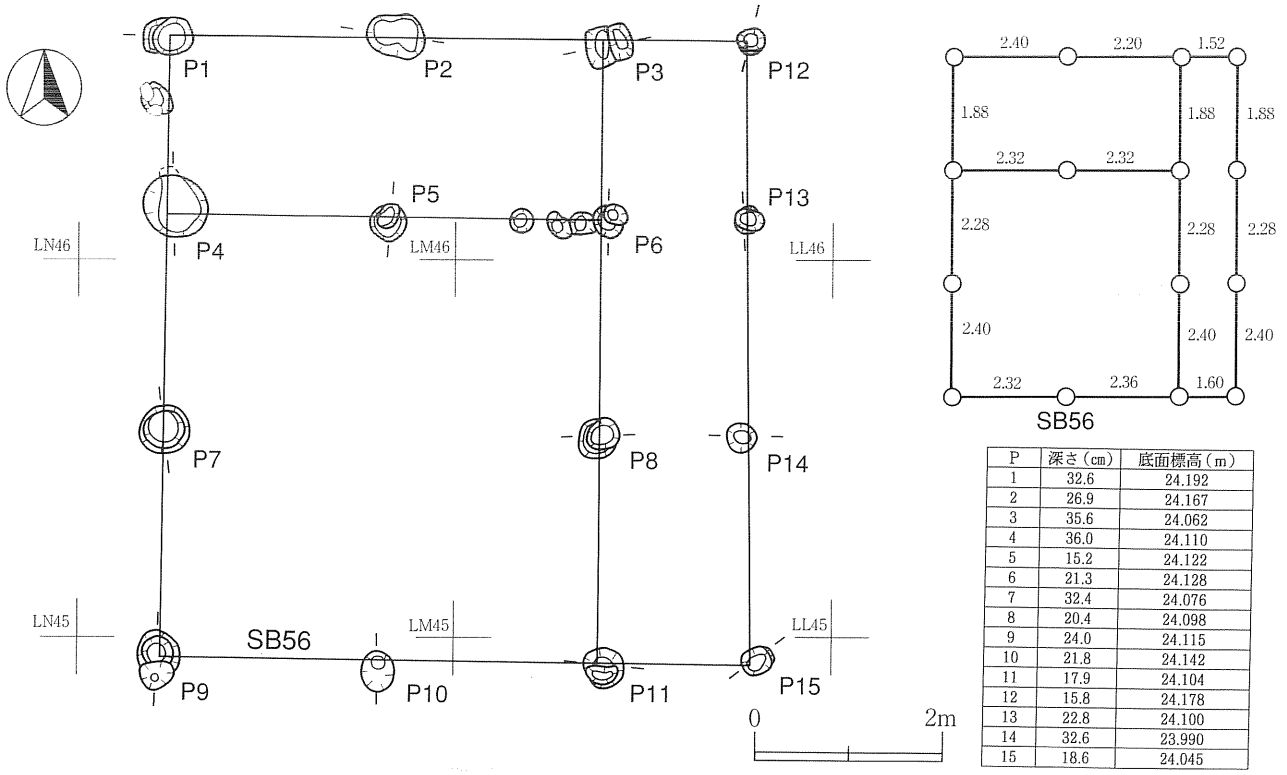
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	50～76cm	31.0～52.0cm	24.380～24.5410m	19～23cm	22～50cm	24.480～24.540m
廂	隅丸方形	36～46cm	5.0～29.0cm	24.540～24.880m	—	—	—
間仕切り	円形	60cm	43.0cm	24.470m	20cm	43.0cm	24.470m

付属施設	地床炉３箇所。身舎の南東部にあり。	廃絶の状況	切り取りまたは放置
備考	外壁・間仕切り・廂をつなぐ溝あり。廂と身舎を連結する溝はない。		

SB56	建物の特徴	南北３間、東西２間、南北棟、東面廂付			桁行方位	N－1°E
検出位置	LL44～46、LM44～46			検出層位	地山面	
重複遺構	なし		出土遺物	土師器（図示なし）		
全体の規模	３間×３間	6.56m ×6.12～6.28m		廂の出	東面１間	1.52～1.60m
計画尺	北から6尺＋7.5尺＋8尺、西から7.5尺＋7.5尺				廂の計画尺	５尺

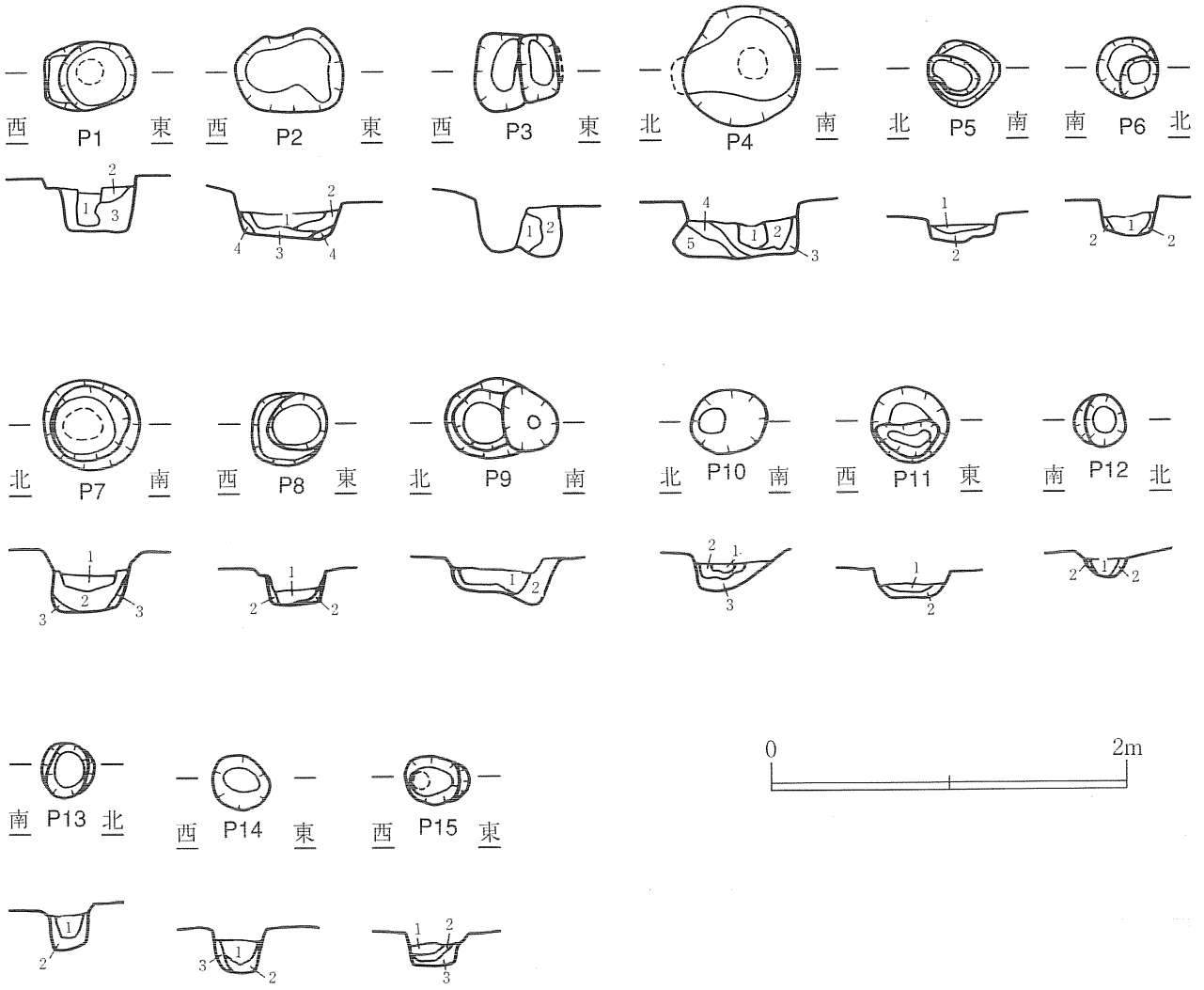
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	38～70cm	17.9～36.0cm	24.062～24.192m	—	—	—
廂	円形	32～36cm	15.8～32.6cm	23.990～24.178m	—	—	—
間仕切り	円形	38cm	15.2cm	24.122m	—	—	—

付属施設	なし	廃絶の状況	柱はすべて抜き取り
備考	間仕切り部分の一部に小ピットが並ぶ		



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	32.6	24.192
2	26.9	24.167
3	35.6	24.062
4	36.0	24.110
5	15.2	24.122
6	21.3	24.128
7	32.4	24.076
8	20.4	24.098
9	24.0	24.115
10	21.8	24.142
11	17.9	24.104
12	15.8	24.178
13	22.8	24.100
14	32.6	23.990
15	18.6	24.045

第１４図　ＳＢ５６掘立柱建物跡



ＳＢ56Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山大塊50％含む。地山土と暗褐色土の混土。

ＳＢ56Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２％含む。地山中～小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山中塊10％含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。暗褐色土30％混じる。
4　10ＹＲ6／3　にぶい黄橙色シルト　極めてしまりあり。地山に暗褐色～にぶい黄褐色土が10％混じる。

ＳＢ56Ｐ3
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　極めてしまりあり。地山土40％混じる。

ＳＢ56Ｐ4
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒7％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土30％混じる。
5　10ＹＲ5／4　黄褐色シルト　しまりあり。暗褐色土５％混じる。

ＳＢ56Ｐ5
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる。

ＳＢ56Ｐ6
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。

ＳＢ56Ｐ7
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山極小粒１％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　極めてしまりあり。地山大塊～大粒30％含む。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色シルト　しまりあり。暗褐色土10％混じる。

ＳＢ56Ｐ8
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山中塊～小粒30％含む。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄橙色シルト　極めてしまりあり。暗褐色土10％混じる。

ＳＢ56Ｐ9
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ56Ｐ10
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山極小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山大粒～中粒20％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる　地山土は大塊～中塊状。

ＳＢ56Ｐ11
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。炭化物極小粒２％含む。
2　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。炭化物小粒２％含む。

ＳＢ56Ｐ12
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物極小粒５％含む。地山極小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　極めてしまりあり。地山土20％混じる。

ＳＢ56Ｐ13
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物中～小粒２％含む。地山極小粒５％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ56Ｐ14
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山極小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。暗褐色土10％混じる。

ＳＢ56Ｐ15
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ2／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山中粒20％含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる。

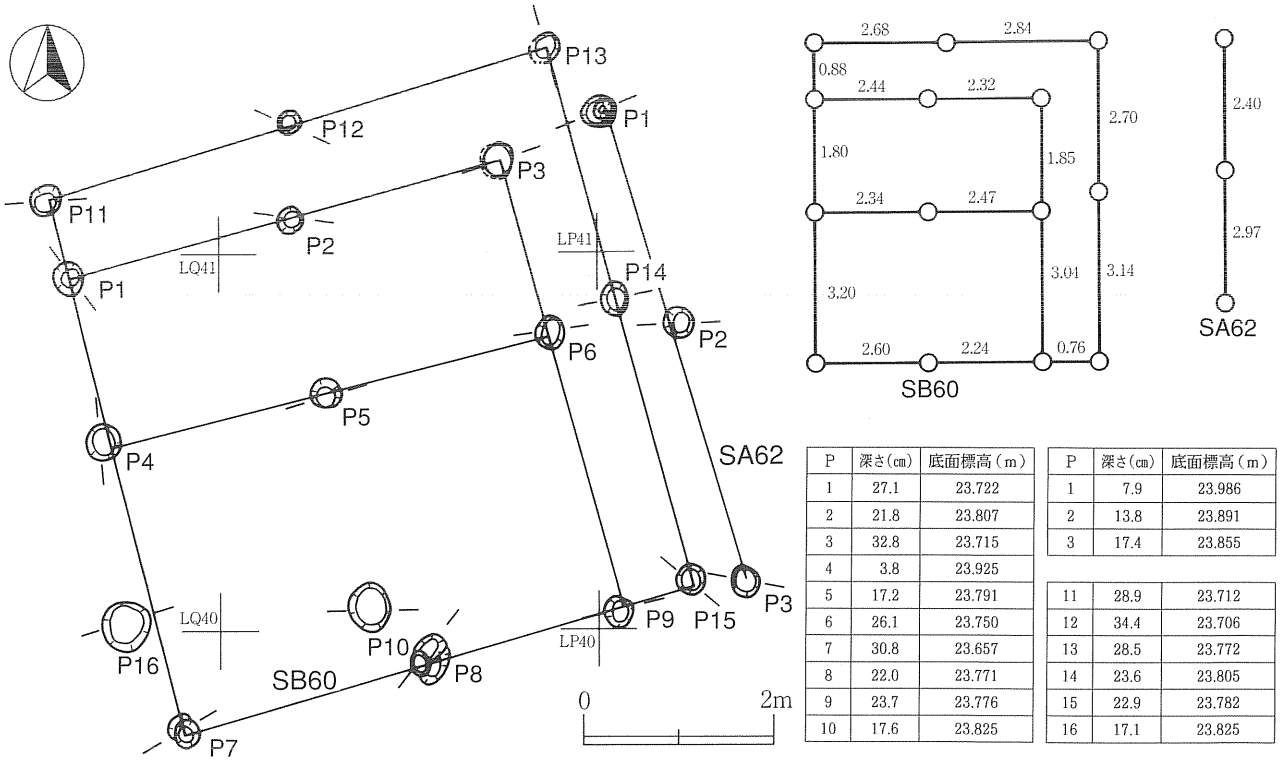
第１５図　ＳＢ５６掘立柱建物跡柱穴断面土層図

SB60	建物の特徴	南北２間、東西２間、南北棟、北面と東面に廂付、間仕切りあり。			桁行方位	N－14°－W
検出位置	LO40・41、LP39～41、LQ39～41			検出層位	第３層上面	
重複遺構	SK16→SB60		出土遺物	土師器麓（7・8）、廂（図示なし）		
全体の規模	３間×３間	5.84～5.88×5.52～5.60m		廂の出	北面１間 東面１間	0.88m 0.76m
計画尺	西から８尺＋８尺＋2.5尺、北から3尺＋6尺＋10.5尺				廂の計画尺	３尺、2.5尺

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	28～58cm	21.8～32.8cm	23.657～23.807m	—	—	—
廂	円形	26～36cm	22.9～34.4cm	23.706～23.805	—	—	—
間仕切り	円形	34cm	17.2cm	23.791m	—	—	—
付属施設	東側に並行してSA62			廃絶の状況	抜き取り、Ｐ９は抜き取り後に焼土を投入		
備考	P10・P16は付属するかどうか不明。単独の掘立柱建物跡（柱列）の可能性もある。						

SB64	建物の特徴	東西１間、南北１間、東西棟、廂・間仕切りなし			桁行方位	N－88°－E
検出位置	LT45			検出層位	30cm以上削平された地山面	
重複遺構	SA63→SB64		出土遺物	なし		
全体の規模	１間×１間	2.78～2.98×2.42～2.46		廂の出	—	—
計画尺	西から10尺、北から８尺				廂の計画尺	—

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	隅丸長方形	長軸25～31cm 短軸15～21cm	７～14cm	2.86～23.98cm	—	—	—
付属施設	なし			廃絶の状況	抜き取り		
備考							



P	深さ(cm)	底面標高(m)
1	27.1	23.722
2	21.8	23.807
3	32.8	23.715
4	3.8	23.925
5	17.2	23.791
6	26.1	23.750
7	30.8	23.657
8	22.0	23.771
9	23.7	23.776
10	17.6	23.825

P	深さ(cm)	底面標高(m)
1	7.9	23.986
2	13.8	23.891
3	17.4	23.855

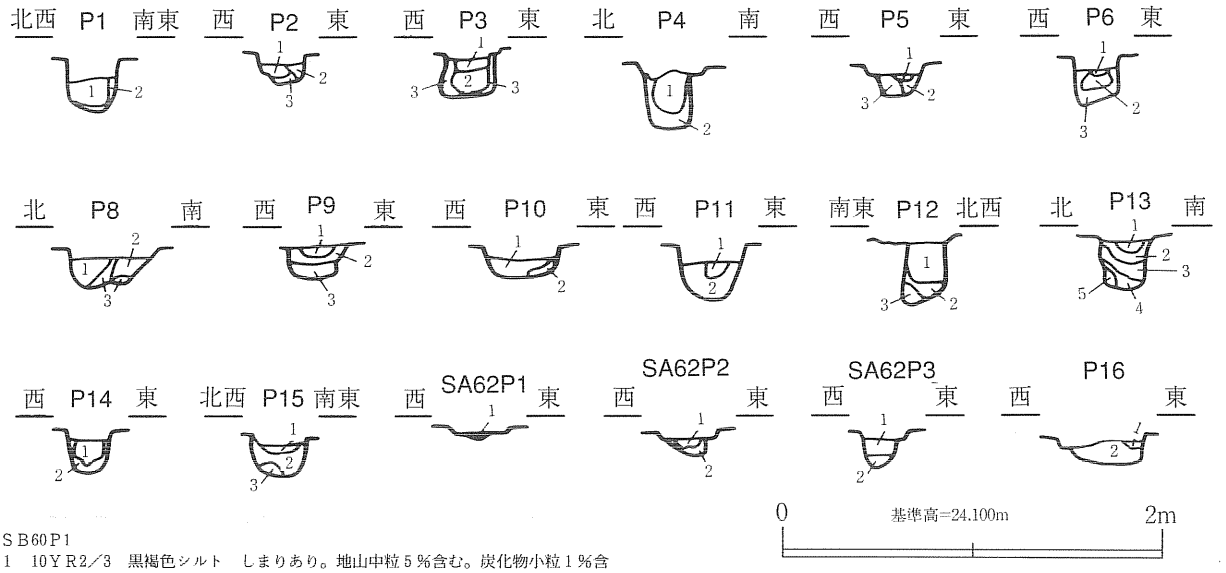
11	28.9	23.712
12	34.4	23.706
13	28.5	23.772
14	23.6	23.805
15	22.9	23.782
16	17.1	23.825

第１６図　ＳＢ６０掘立柱建物跡、ＳＡ６２柱列

SB67	建物の特徴	南北２間以上、東西１間以上、南北棟、廂・間仕切り不明			桁行方位	N－6°－E
検出位置	MB46、MC45・46			検出層位	30cm 以上削平された地山面	
重複遺構	SB67→SA63		出土遺物	なし		
全体の規模	不明	(2.80) × (4.36)		廂の出	—	—
計画尺	西から９尺＋、北から７尺＋7.5尺＋				廂の計画尺	—

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形～隅丸方形	51～52cm	10.0～17.0cm	22.820～22.890m	—	—	—

付属施設	なし	廃絶の状況	抜き取り
備考	Ｐ１～Ｐ４のみ検出。他は削平され消滅。		



ＳＢ60Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒５％含む。炭化物小粒１％含む。焼土中粒１％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％含む。

ＳＢ60Ｐ2
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％含む。炭化物極小粒１％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色粘土　極めてしまりあり。地山の大ブロック。

ＳＢ60Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土40％混じる。

ＳＢ60Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物小～中５％含む。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山中粒40％含む。

ＳＢ60Ｐ5
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。黒褐色土30％混じる。
3　10ＹＲ2／1　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％含む。地山土20％混じる。

ＳＢ60Ｐ6
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ60Ｐ8
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物中粒２％含む。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物中粒２％含む。地山土15％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山大塊40％含む。

ＳＢ60Ｐ9
1　7.5ＹＲ5／8　明褐色焼土　極めてしまりあり。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％含む。焼土の崩壊した暗褐色土（7.5ＹＲ3／4）が15％混じる。
3　7.5ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。焼土の崩壊した暗褐色土が５％混じる。

ＳＢ60Ｐ10
1　10ＹＲ2／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％含む。焼土小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ60Ｐ11
1　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山ブロック。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。炭化物小粒５％含む。

ＳＢ60Ｐ12
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物中粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　地山土30％混じる。
3　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　しまりあり。地山土が30％混じる。

ＳＢ60Ｐ13
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物極小粒１％含む。地山極小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　しまりあり。細かく崩壊した地山土と暗褐色土の混土。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土のブロックに暗褐色土20％混じる。
4　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒10％含む。
5　10ＹＲ6／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。暗褐色土20％混じる。

ＳＢ60Ｐ14
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　極めてしまりあり。地山土40％混じる。

ＳＢ60Ｐ15
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒５％含む。焼土中粒１％含む。

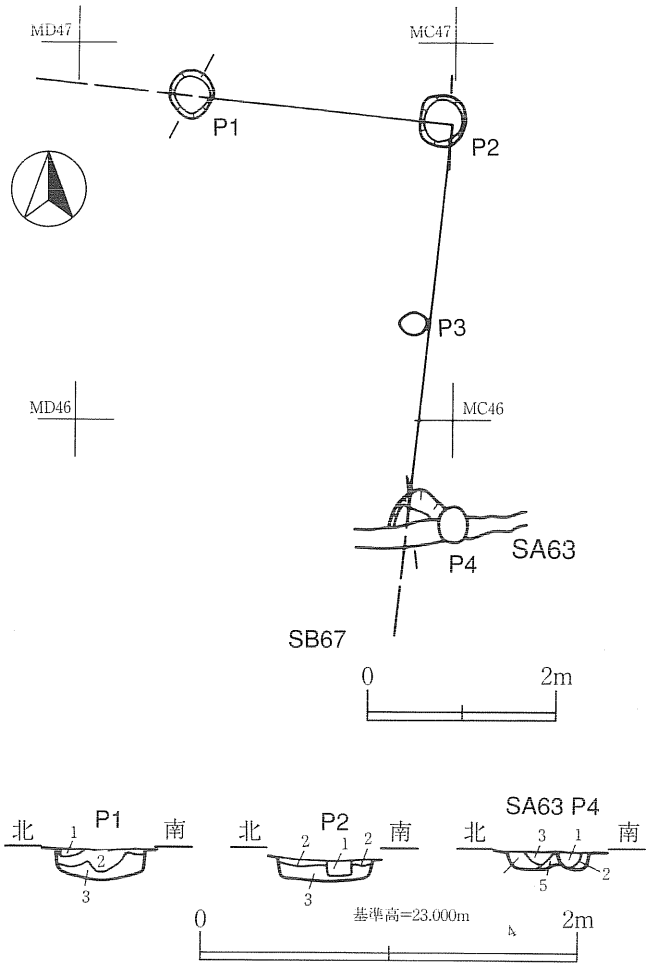
ＳＢ60Ｐ16
1　7.5ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物極小粒５％含む。焼土中～大粒２％含む。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒５％含む。地山土30％混じる。焼土極小粒１％含む。

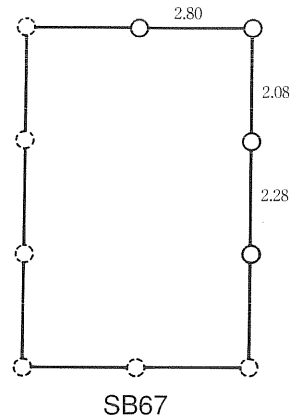
ＳＡ62Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。

ＳＡ62Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒５％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土の大ブロック（径30mm 以下）を40％含む。

ＳＡ62Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。暗褐色土10％混じる。

第１７図　ＳＢ６０掘立柱建物跡、ＳＡ６２柱列柱穴断面土層図





P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	17.0	22.820
2	14.0	22.820
3	—	—
4	10.0	22.890

ＳＢ67Ｐ１
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土中粒20％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。粘性ややあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　しまりあり。粘性ややあり。暗褐色土20％混じる。

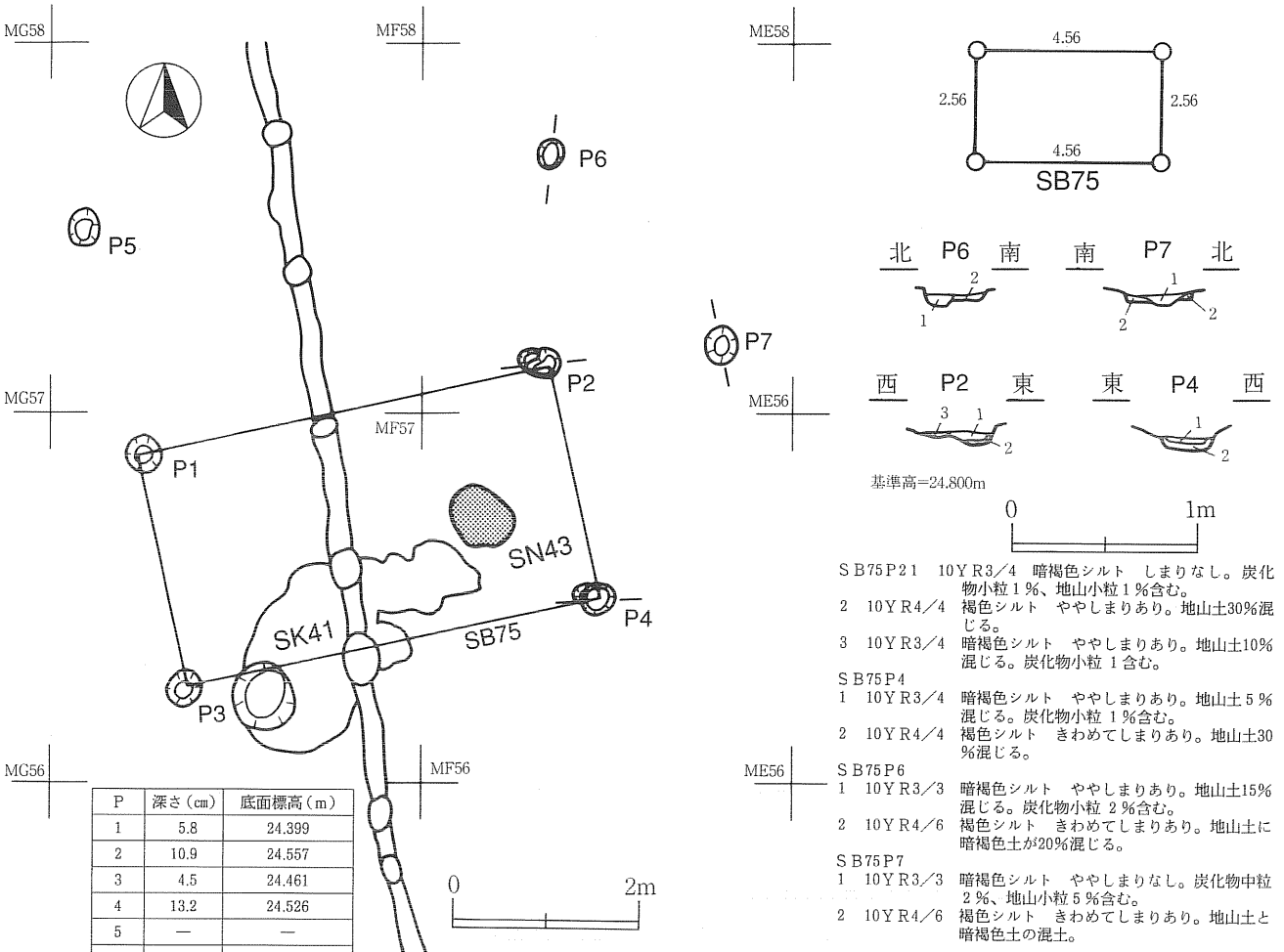
ＳＢ67Ｐ２
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ3／2　褐色シルト　しまりあり。粘性ややあり。地山土20％混じる。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　しまりあり。粘性ややあり。暗褐色土30％混じる。

ＳＢ67Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物小粒２％含む。（ＳＡ63板塀痕跡か？）
2　10ＹＲ2／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊30％含む。炭化物極小粒１％含む。（ＳＡ63掘方の埋土）
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒５％含む。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
5　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

第１８図　ＳＢ６７掘立柱建物跡

SB75	建物の特徴	東西１間、南北1間、東西棟、廂・間仕切りなし				桁行方位	N－12°－W
検出位置	ME56・57、 MF56・57				検出層位	地山面	
重複遺構	SN43、SA42、SK41・131・132いずれとも新旧不明		出土遺物	なし			
全体の規模	１間×１間	4.56m ×2.56m			廂の出	—	—
計画尺	15尺×8.5尺					廂の計画尺	—
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	40～46cm	4.5～13.2cm	24.399～24.557m	—	—	—
付属施設	なし.（SN43を囲むプランの可能性もあり）			廃絶の状況	抜き取り		
備考	削平が著しく、柱穴底部のみ残存。						

SB77	建物の特徴	南北２間、東西２間、南北棟、廂なし、総柱				桁行方位	N－7°－E
検出位置	MF53～55、 MG53～55、 MH53・54				検出層位	地山面	
重複遺構	SB78、 SN73いずれも新旧不明		出土遺物	土師器（図示なし）			
全体の規模	２間×２間	6.96～7.00×5.04～5.20m			廂の出	—	—
計画尺	北から9.5尺＋13.5尺、西から8.5尺＋8.5尺					廂の計画尺	—
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	38～58cm	10.3～28.4	24.261～24.483m	—	—	—
間仕切り	円形	38cm	8.0cm	24.427m	—	—	—
付属施設	SN73が付属する地床炉の可能性が若干ある			廃絶の状況	抜き取り		
備考							



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	5.8	24.399
2	10.9	24.557
3	4.5	24.461
4	13.2	24.526
5	—	—
6	17.0	24.521
7	15.7	24.539

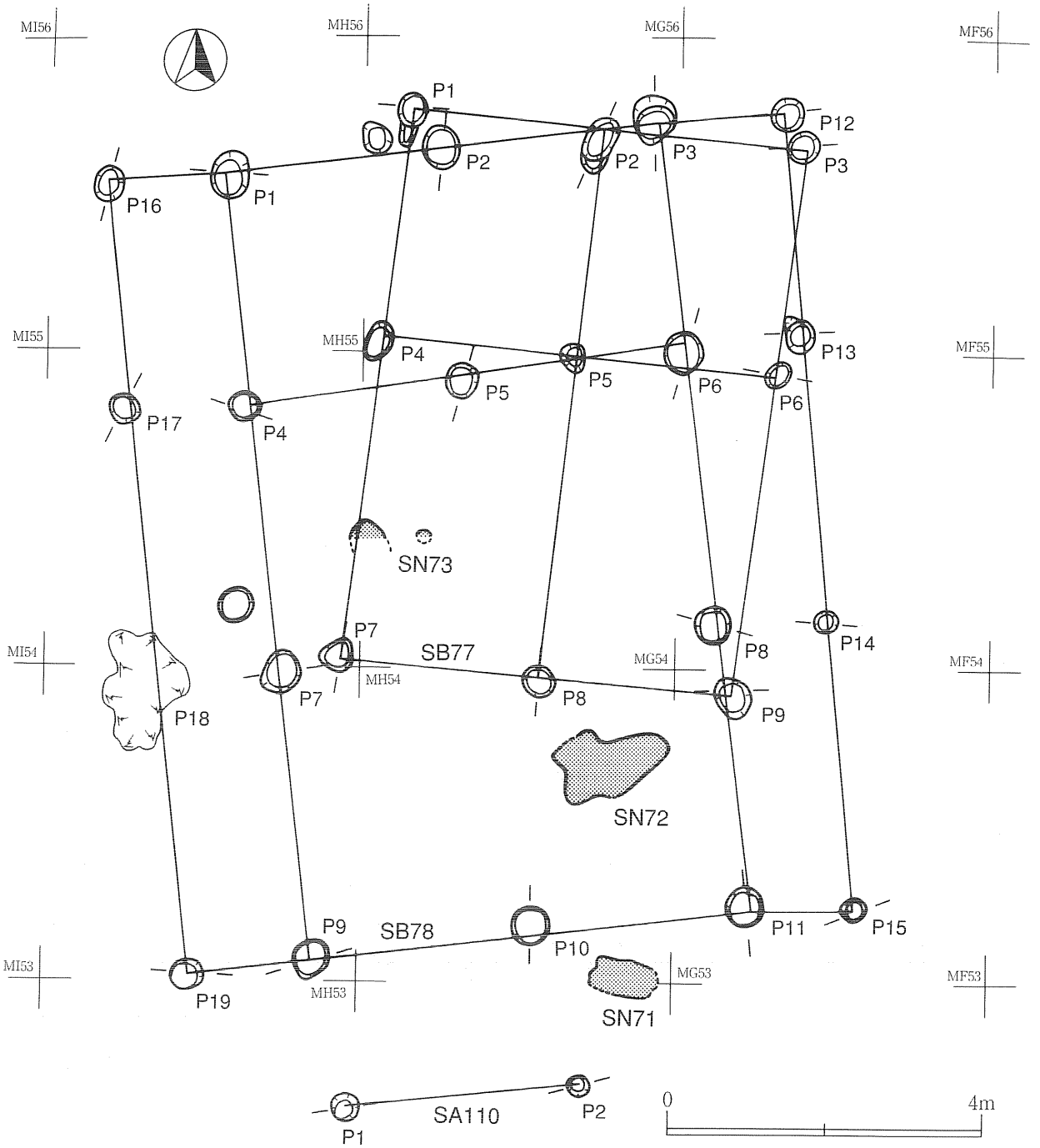
ＳＢ75Ｐ21　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりなし。炭化物小粒１％、地山小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒１含む。
ＳＢ75Ｐ4
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＢ75Ｐ6
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。
ＳＢ75Ｐ7
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。炭化物中粒２％、地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

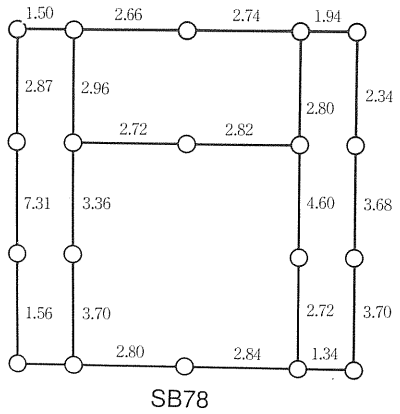
第１９図　ＳＢ７５掘立柱建物跡

SB78	建物の特徴	南北３間、東西２間、南北棟、東西両面廂付、間仕切りあり			桁行方位	N－7°－W
検出位置	MF53～55、MG53～55、MH52～55			検出層位	地山面	
重複遺構	SB77、SN72、SN73いずれも新旧不明		出土遺物	土師器（図示なし）		
全体の規模	３間×４間	9.70～10.18×8.54～8.84m		廂の出	西面１間 東面１間	1.50～1.56m 1.34～1.94m
計画尺	北から10尺＋12尺＋12尺、西から5尺＋9尺＋9尺＋5尺				廂の計画尺	西面5尺 東面5尺

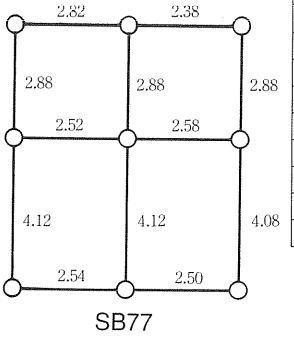
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	42～62cm	31.5～45.1cm	23.923～24.149m	12～18cm	12～40cm	24.05～24.30m
廂	円形	西面 38～46cm 東面 32～44cm	西面 28.6～42.1cm 東面 5.9～23.2cm	西面 24.282～24.373m 東面 24.361～24.502m	西面 11cm 東面 11cm	西面 3～6 cm 東面 14cm	西面 24.32m 東面 24.44～24.52m
間仕切り	円形	44cm	26.9cm	24.180m	17cm	9 cm	24.40m

付属施設	身舎・間仕切りより南側にSN72・73あり。付属の地床炉か。	廃絶の状況	切り取り、一部抜き取り（P12・16・17）
備考	SN72・73はSN71と一連の焼土でSB78とは重複遺構となる可能性あり。南側にSA111柱列があり、付属する板塀または柵か。		

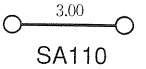




P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	43.0	24.323
2	42.2	24.086
3	45.1	24.078
4	31.5	24.062
5	26.9	24.180
6	43.4	24.149
7	33.0	24.369
8	44.4	24.067
9	32.7	24.031
10	37.7	24.091
11	36.9	24.128
12	23.2	24.361
13	10.5	24.502
14	5.9	24.381
15	12.4	24.419
16	42.1	24.282
17	35.8	24.373
18	38.2	24.322
19	28.6	24.327

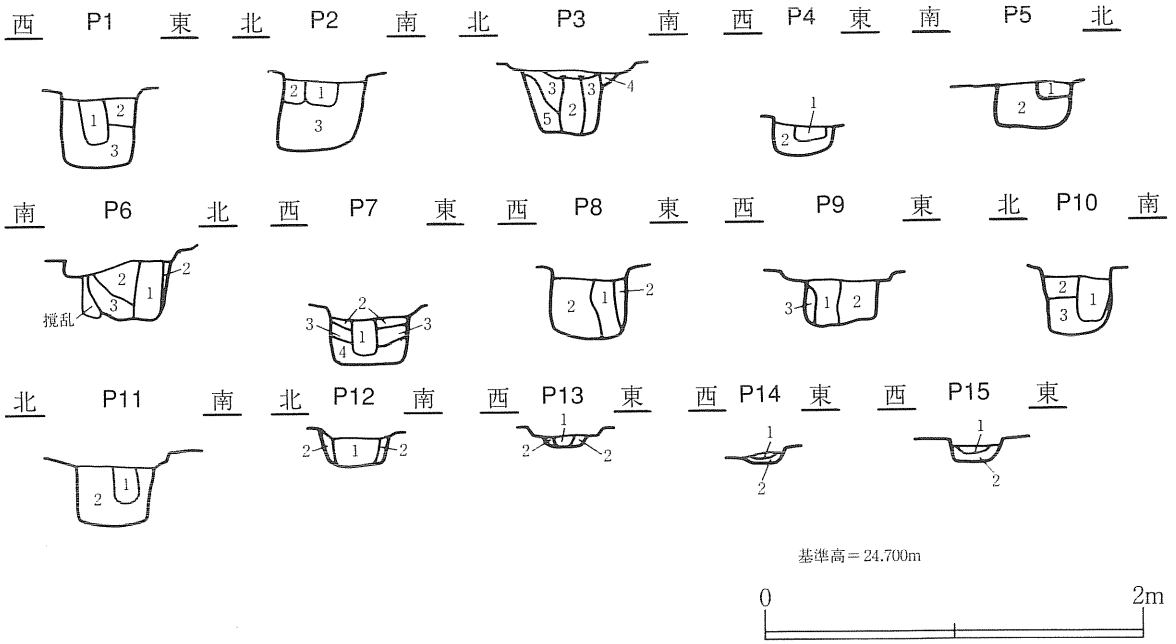


P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	15.8	24.340
2	16.2	24.363
3	11.0	24.483
4	18.7	24.261
5	8.0	24.427
6	28.3	24.328
7	28.4	24.467
8	10.3	24.433
9	20.0	24.341



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	21.1	24.161
2	23.9	24.180

第２０図　ＳＢ７７・７８掘立柱建物跡



ＳＢ78Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒１％含む。焼土小粒１％含む。地山土10％混じる。（柱痕跡）。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。（地山土は大塊状）
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。（地山土は中塊以下）

ＳＢ78Ｐ2
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。炭化物極小粒２％含む。地山土５％混じる。（柱痕跡）
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒10％含む。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山大～中塊40％含む。

ＳＢ78Ｐ3
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。炭化物小粒２％含む。（柱痕跡）
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。炭化物小粒５％含む。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山小粒15％含む。炭化物小粒２％含む。
5　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山と暗褐色土の混土。

ＳＢ78Ｐ4
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒１％含む。地山中粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ78Ｐ5
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。炭化物中粒２％含む。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　極めてしまりあり。地山土中塊～中粒30％混じる。炭化物中粒１％、焼土中粒１％含む。

ＳＢ78Ｐ6
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山土小粒５％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。（地山土は大塊状）

ＳＢ78Ｐ7
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。炭化物中～小粒５％含む。地山土7％混じる。焼土極小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。焼土大～小粒１％含む。炭化物極小粒１％含む　地山土20％混じる。
3　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。地山土の再堆積層。
4　10ＹＲ5／8　黄褐色シルト　極めてしまりあり。炭化物中粒５％含む。地山土30％混じる。

ＳＢ78Ｐ8
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山中～小粒５％含む。焼土大粒１％、小粒１％含む。炭化物中～小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。焼土小粒１％含む。炭化物小粒２％含む。地山土は大塊～中粒の再堆積。

ＳＢ78Ｐ9
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。

ＳＢ7810
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。焼土小～中粒５％含む。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊～中粒20％含む。炭化物小粒２％含む。

ＳＢ78Ｐ11
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。（柱痕跡）
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中塊～中粒40％含む。１層は柱痕跡　２層は掘方埋め土

ＳＢ78Ｐ12
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物中粒２％含む。地山土極小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。

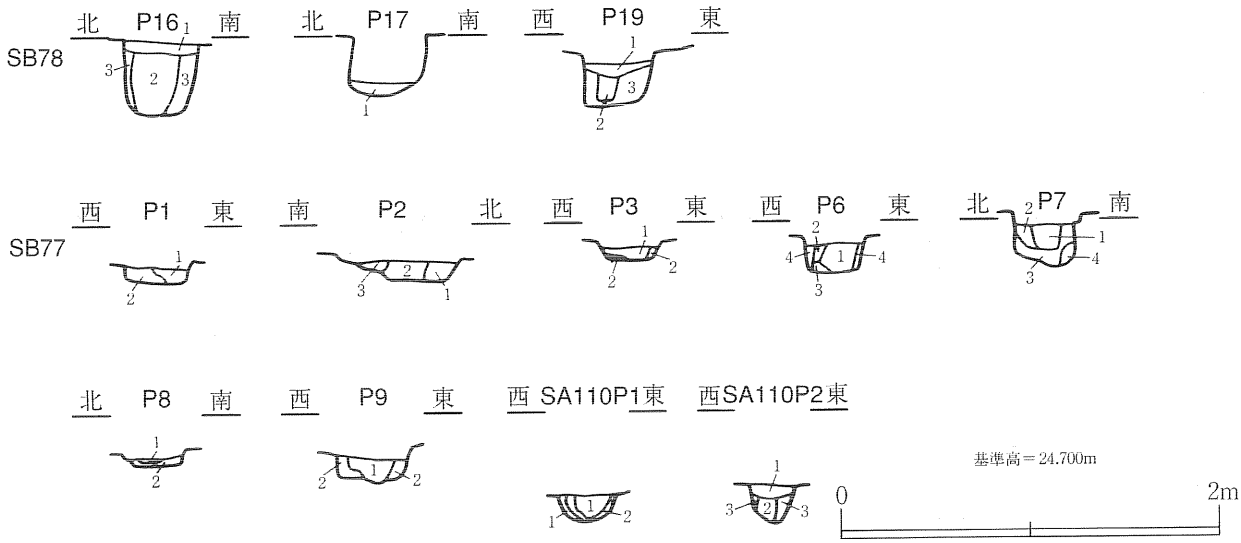
ＳＢ78Ｐ13
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

ＳＢ78Ｐ14
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土に黒褐色土が20％混じる。

ＳＢ78Ｐ15
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒５％含む。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　極めてしまりあり。暗褐色土が20％混じる。

第２１図　ＳＢ７８掘立柱建物跡柱穴断面土層図①

SB79	建物の特徴	南北３間、東西２間、南北棟、間仕切りあり。廂なし				桁行方位	N－1°－E
検出位置	ME51～54、ME51～54				検出層位	地山面	
重複遺構	SB79→SA42、SA112とは新旧不明		出土遺物	土師器坏（9）、甕（図示なし）			
全体の規模	３間×２間	10.00～10.22×5.00～5.28m			廂の出	—	—
計画尺	北から12.5尺＋10.5尺＋10.5尺、西から9尺＋8尺					廂の計画尺	—
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形	26～74cm	14.44～31.8	24.175～24.523m	—	—	—
間仕切り	円形	32cm	18.4cm	24.428m	—	—	—
付属施設	なし			廃絶の状況	抜き取り		
備考							



ＳＢ78Ｐ16
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。焼土中～小粒１%、２%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山土30%混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土の再堆積に暗褐色土が30%混じる。

ＳＢ78Ｐ17
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小塊30%含む。

ＳＢ78Ｐ19
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒15%含む。炭化物小粒５%含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。地山小粒５%含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は、中塊～中粒状に全体にかたよりなく入る。

ＳＢ77Ｐ1
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物極小粒２%含む。地山土10%混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が20%混じる。

ＳＢ77Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５%含む。炭化物小粒５%含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土15%混じる。

ＳＢ77Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５%含む　炭化物小粒２%含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が30%混じる。

ＳＢ77Ｐ6
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒10%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。

ＳＢ77Ｐ7
1　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土　炭化物極小粒２%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。炭化物小粒２%含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山土15%混じる。
4　10ＹＲ4／6　褐色シルト　ややしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

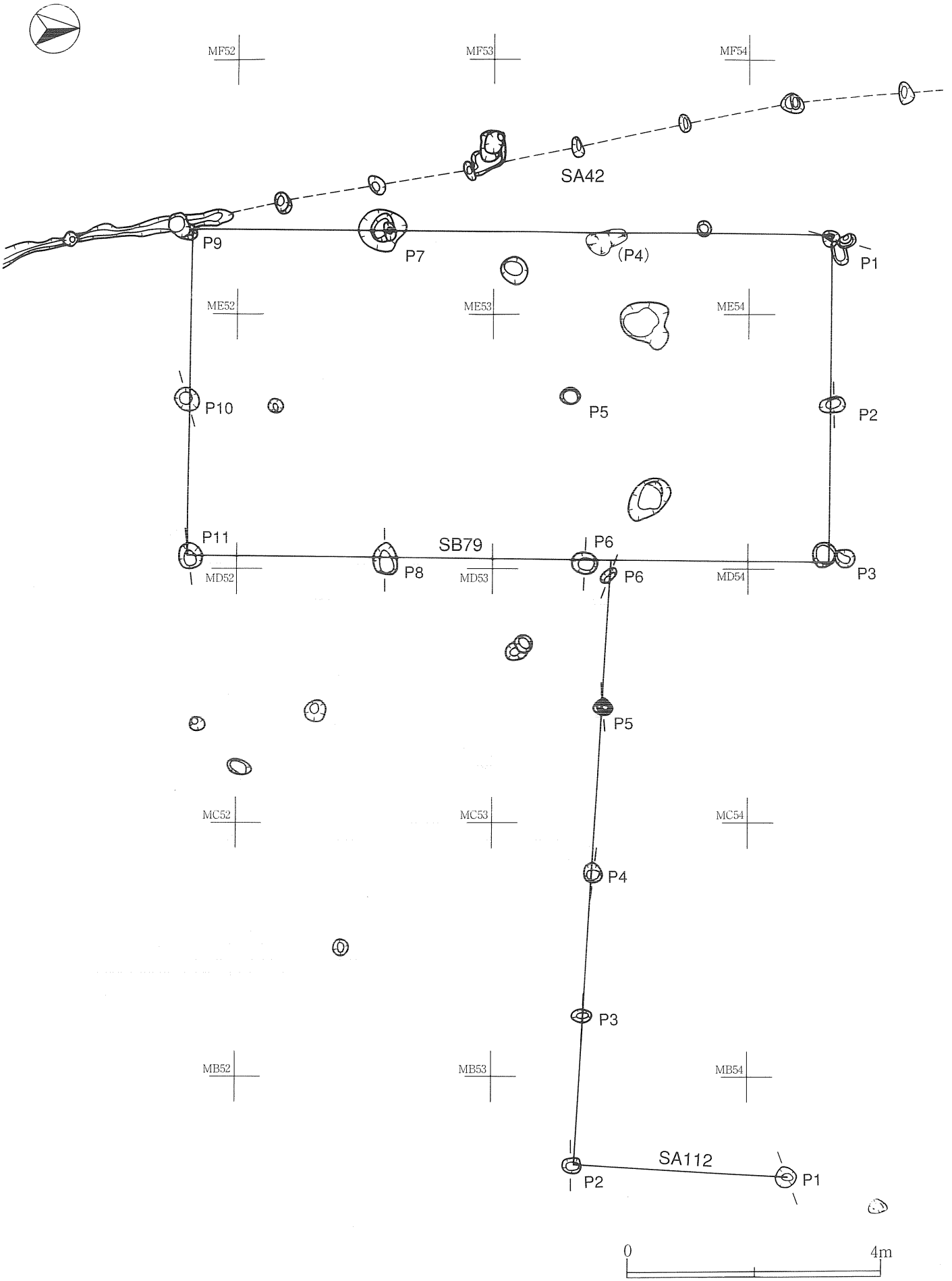
ＳＢ77Ｐ8
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土極小粒２%含む。炭化物極小粒１%含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色粘土質シルト　しまりあり。粘性あり。地山土30%混じる。

ＳＢ77Ｐ9
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物中粒２%含む。地山小～中粒５%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土20%混じる。

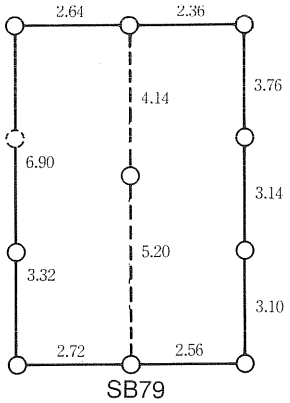
ＳＡ110Ｐ1
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。焼土小粒１%、炭化物小粒１%、地山５%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。
3　10ＹＲ5／8　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土10%混じる。

ＳＡ110Ｐ2
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20%混じる。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒20%含む。（木根による撹乱）
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土20%混じる。

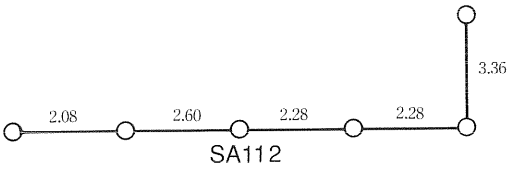
第２２図　ＳＢ７８掘立柱建物跡柱穴断面土層図②、ＳＢ７７掘立柱建物跡、ＳＡ１１０柱列柱穴断面土層図



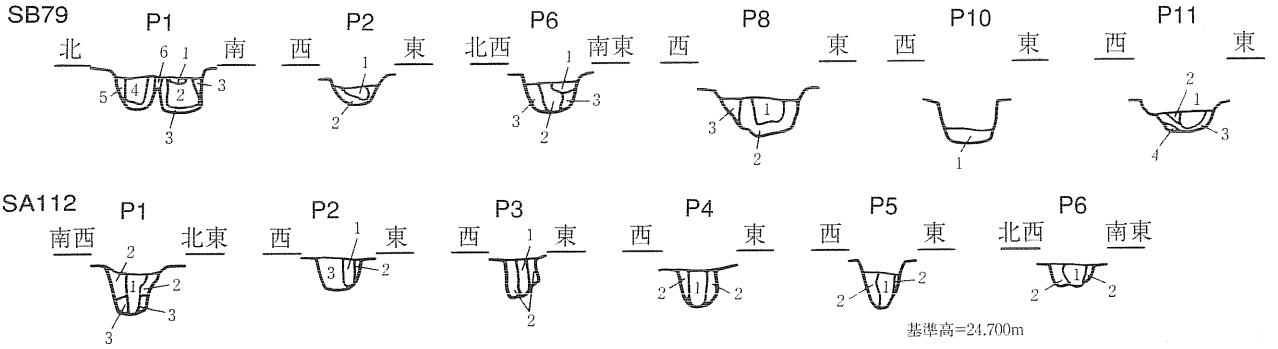
第２３図　ＳＢ７９掘立柱建物跡、ＳＡ１１２柱列



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	23.3	24.434
2	14.4	24.523
3	27.9	24.357
4	16.2	24.458
5	18.4	24. 28
6	18.7	24.452
7	31.8	24.175
8	26.6	24.295
9	—	—
10	23.1	24.254
11	21.9	24.273



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	24.4	24,446
2	18.0	24,456
3	21.9	24,413
4	25.7	24,320
5	24.0	24,400
6	21.3	24,424



ＳＢ79Ｐ1
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小～中粒10％含む。炭化物小粒５％含む。焼土小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山極小粒５％、地山中粒２含む。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒15％含む。炭化物極小粒５％含む。焼土極小粒１％含む。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５％含む。炭化物小粒２％含む。
5　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
6　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト（地山）暗褐色土が10％ひび状に混じる。

ＳＢ79Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ79Ｐ6
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまり。地山土20％混じる。

ＳＢ79Ｐ8
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。炭化物中粒１％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土大塊40％含む。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

ＳＢ79Ｐ10
1　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。（地山土は大塊状）

ＳＢ79Ｐ11
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土30％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土中塊20％含む。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

ＳＡ112Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。（円柱痕跡）
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。炭化物大塊～大粒５％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物痕跡２％含む。

ＳＡ112Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中塊～中粒30％含む。

ＳＡ112Ｐ3
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土20％混じる。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

ＳＡ112Ｐ4
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒１％含む。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。炭化物中粒１％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ112Ｐ5
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ3／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ112Ｐ6
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ4／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

第２４図　ＳＢ７９掘立柱建物跡、ＳＡ１１２柱列柱穴断面土層図

SB100	建物の特徴	南北３間、東西１間以上、南北棟、総柱、廂なし		桁行方位	N－7°－E
検出位置	LM49～51、LN49～51		検出層位	第３層上面	
重複遺構	なし	出土遺物	なし		
全体の規模	３間×１間以上	2.60～2.68＋α×6.52～6.58m	廂の出	—	—
計画尺	北から7尺＋6.5尺＋8.5尺、西から9尺＋α			廂の計画尺	—

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形		11.4～26.2cm	24.548～24.635m	—	—	—
間仕切り	円形		12.4～16.6cm	24.523～24.566m	—	—	—
付属施設	なし			廃絶の状況	抜き取り		
備考	東側は削平により消失。						

SB105	建物の特徴	南北２間、東西２間、南北棟、総柱、廂なし			桁行方位	N－4°－W
検出位置	LQ48・49			検出層位	地山面	
重複遺構	SB106、.SA129、SK101・107いずれも新旧不明		出土遺物	土師器坏（10～12）、甕（図示なし）		
全体の規模	２間×２間	4.86～4.92×4.64～4.68m		廂の出	—	—
計画尺	西から8尺＋8尺、北から7.5尺＋8尺				廂の計画尺	—

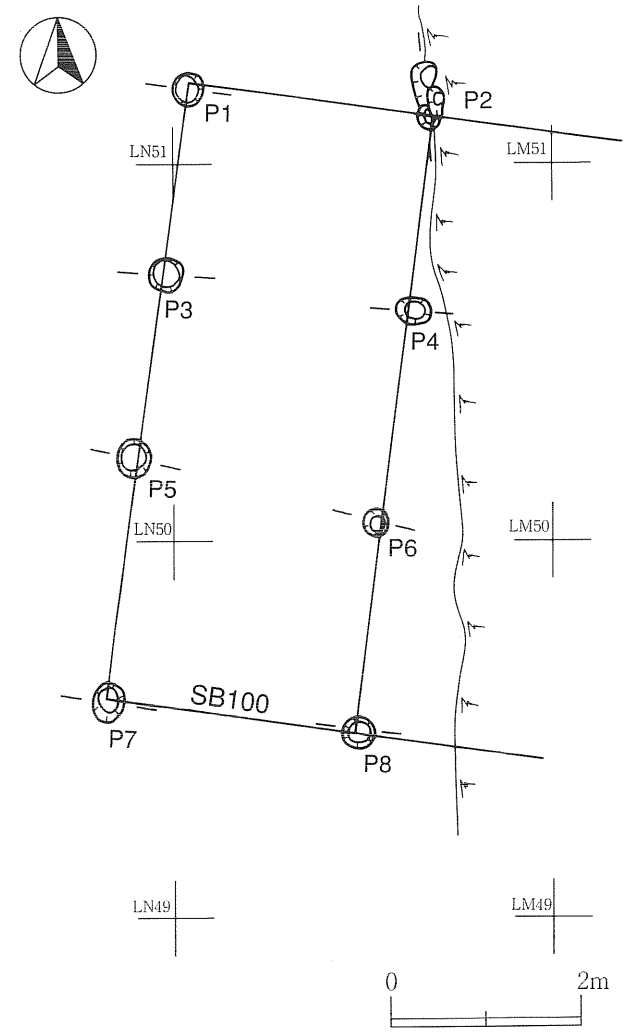
柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円		8.4～45.3cm	24.180～24.605m	—	—	—
間仕切り	円		26.6cm	24.340m	—	—	—
付属施設	SA129が付属し、東面北側に出入り口を設けている可能性あり。			廃絶の状況	抜き取り		
備考	SA113、SA130も付属施設であった可能性あり。SK101、107とは異なる時期の遺構だが、新旧は不明。						

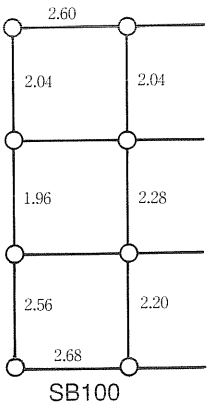
SB106	建物の特徴	南北４間、東西２間、南北棟、間仕切り２箇所あり、廂なし			桁行方位	N－1°－E
検出位置	LQ46～48、LR46～48			検出層位	地山面	
重複遺構	SB105、SK101・103、SA129		出土遺物	土師器（図示なし）		
全体の規模	４間×２間	7.40～7.73×4.92～5.00m		廂の出	—	—
計画尺	北から８尺＋３尺＋6.5尺＋８尺、西から９尺＋８尺				廂の計画尺	—

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形		9.5～25.2	24.200～24.555	—	—	—
間仕切り	円形		13.2～23.9cm	24.280～24.443m	—	—	—
付属施設	なし			廃絶の状況	抜き取り		
備考	Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５は建物の構造とは独立した間仕切り。						

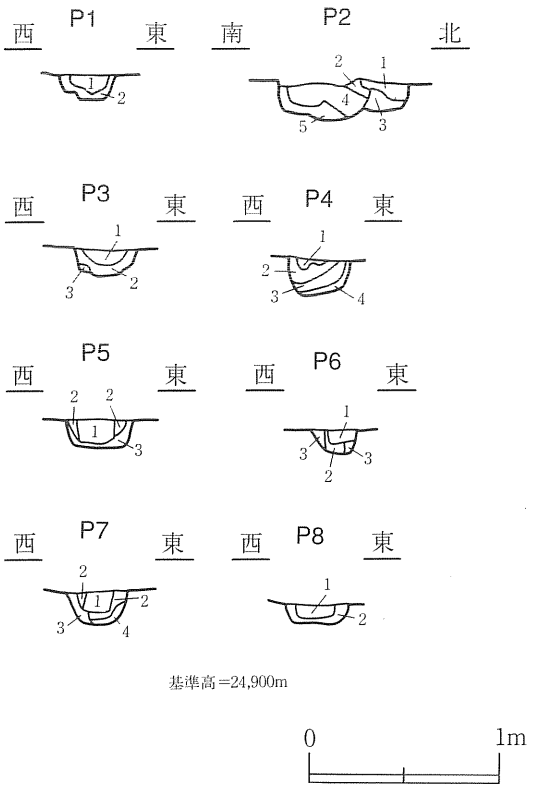
SB114	建物の特徴	南北３間、東西１間以上、南北棟、南面廂付、間仕切り不明			桁行方位	N－0°－E
検出位置	LR45～48、LS45～48			検出層位	地山面、第３層上面	
重複遺構	SB114→SA63		出土遺物	なし		
全体の規模	４間×1間以上	8.64×		廂の出	北面１間	1.44m
計画尺	北から５尺8.5尺8.5尺７尺				廂の計画尺	５尺

柱穴	形	規模	深さ	底面標高	柱痕跡の規模	柱痕跡の深さ	柱痕跡の底面標高
身舎	円形		17.7～24.8cm	24.078～24.278m	16～18cm	18～23cm	24.07～24.14m
廂	円形		7.9cm	24.249m	12cm	13cm	24.25m
付属施設	なし			廃絶の状況			
備考	東側の柱穴のみ検出。中央部から西側は削平されて消滅。						





P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	19.8	24.575
2	26.2	24.548
3	13.5	24.635
4	16.6	24.523
5	17.0	24.575
6	12.4	24.566
7	18.2	24.557
8	11.4	24.556



ＳＢ100Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。炭化物極小粒２％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が40％混じる

ＳＢ100Ｐ2
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土20％混じる。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土20％混じる。
4　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。
5　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ100　Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小粒２％含む。炭化物大粒２％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
3　10ＹＲ6／3　にぶい黄橙色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が染み状に10％混じる。

ＳＢ100Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土小粒５％含む。炭化物小粒２％含む。
4　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

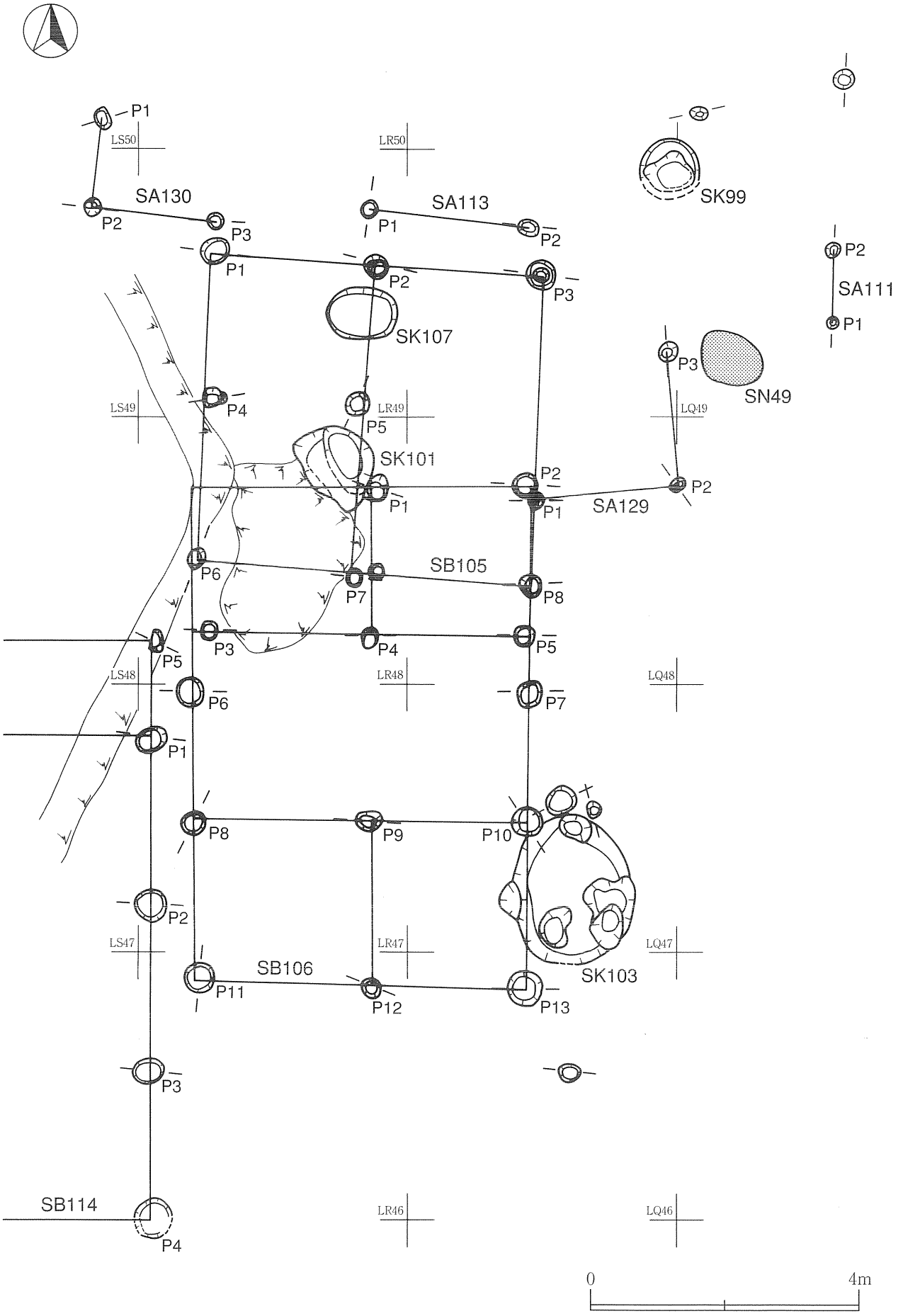
ＳＢ100Ｐ5
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土中粒５％含む。炭化物極小粒１％含む。焼土小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

ＳＢ100Ｐ6
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる。炭化物極小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。

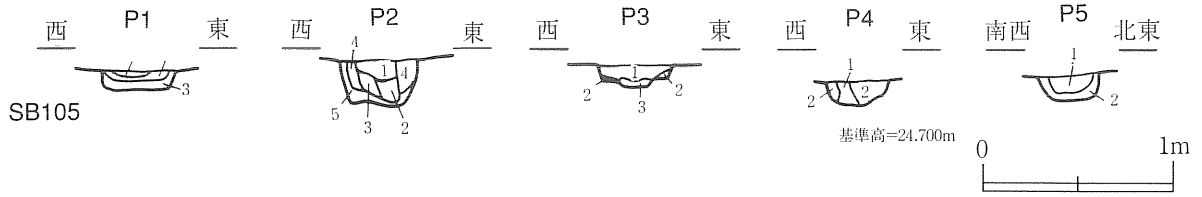
ＳＢ100　Ｐ7
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土小粒10％含む。炭化物極小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土小粒30％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

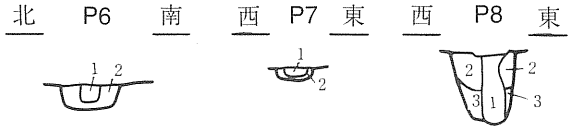
ＳＢ100Ｐ8
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小粒10％含む。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

第２５図　ＳＢ１００掘立柱建物跡



第２６図　ＳＢ１０５・１０６・１１４掘立柱建物跡、ＳＡ１１１・１１３・１２９・１３０柱列





ＳＢ105Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒10%含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒２%含む。
3　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30%混じる。

ＳＢ105Ｐ2
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土５%混じる。炭化物小粒２%含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２%含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２%、地山大塊10%含む。
5　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土が30%混じる。

ＳＢ105Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒１%含む。炭化物小粒２%含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。炭化物小粒２%含む。

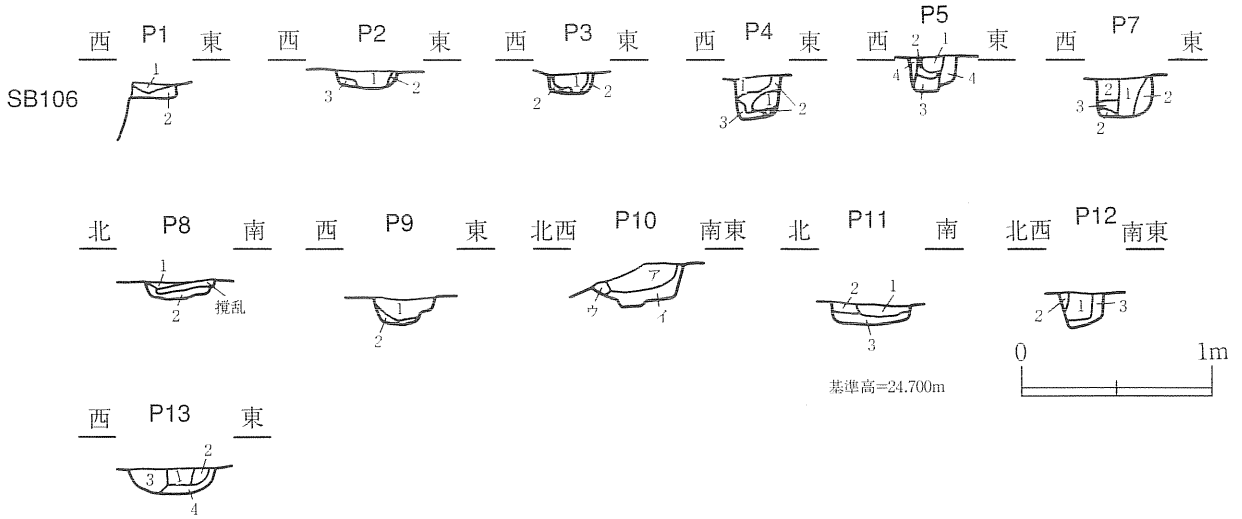
ＳＢ105Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20%混じる。地山土は小粒状。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。地山土中粒～大塊状。

ＳＢ105Ｐ5
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒１%含む。焼土小粒１%、炭化物小粒１%含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土40%混じる。

ＳＢ105Ｐ6
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10%混じる。炭化物極小粒２%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。地山土は大塊～中粒状。

ＳＢ105Ｐ7
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物極小粒１%、地山小粒５%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30%混じる。

ＳＢ105Ｐ8
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒10%含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山大塊～中粒40%含む。



ＳＢ106Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５%混じる。炭化物中粒１%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。

ＳＢ106Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２%含む。炭化物小粒１%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15%混じる。焼土中～小粒１%、炭化物小粒１%含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

ＳＢ106Ｐ3
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　地山土５%混じる。炭化物小粒１%含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土が30%混じる。

ＳＢ106Ｐ4
1　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は中塊状で入る。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒２%含む。炭化物小粒１%含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土に地山土が40%混じる。

ＳＢ106Ｐ5
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。焼土小粒１%、炭化物小粒１%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山中～小粒7%含む。炭化物小粒２%含む。
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山大塊５%含む。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30%混じる。

ＳＢ106Ｐ7
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土７%混じる。炭化物小粒２%含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　地山土の再堆積、黒褐色土が15%混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小塊２、地山小粒５%含む。

ＳＢ106Ｐ8
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５%混じる。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土10%混じる。

ＳＢ106Ｐ9
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりなし。地山土10%混じる。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

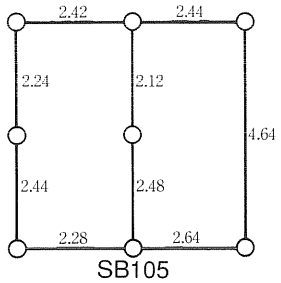
ＳＢ106Ｐ10
ア　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山極小粒２%含む。焼土小粒１%、炭化物極小粒１%含む。
イ　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土の再堆積に暗褐色土が30%混じる。
ウ　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小～中粒15%含む。

ＳＢ106Ｐ11
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒１%含む。炭化物小粒２%含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10%混じる。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に黒褐色土が20%混じる。

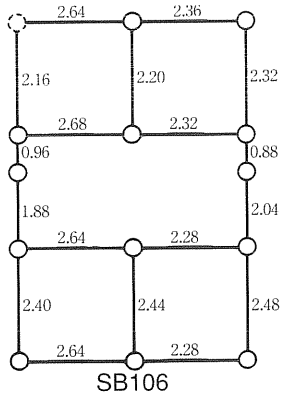
ＳＢ106Ｐ12
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５%混じる。炭化物中粒２%含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５%含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土大塊で20%含む。焼土大粒２%、炭化物大粒５%含む。

ＳＢ106Ｐ13
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５%含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土10%混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒15%含む。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は大塊状に入る。

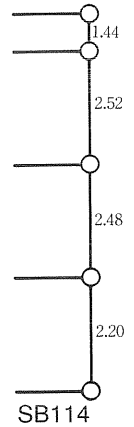
第２７図　ＳＢ１０５・１０６掘立柱建物跡柱穴断面土層図



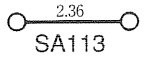
P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	10.4	24,496
2	27.3	24,391
3	11.3	24,605
4	23.7	24,315
5	26.6	24,340
6	12.3	24,327
7	8.4	24,447
8	45.3	24,180

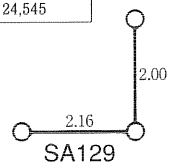


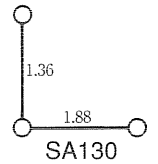
P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	12.8	24,556
2	16.9	24,545



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	9.5	24.511
2	10.8	24.555
3	13.2	24.299
4	23.9	24.280
5	19.3	24.443
6	12.9	24.291
7	25.2	24.296
8	13.2	24.205
9	14.3	24.307
10	18.0	24.318
11	10.0	24.205
12	16.7	24.200
13	14.7	24.300







P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	19.1	24.152
2	24.8	24.078
3	22.8	24.278
4	17.7	24.218
5	7.9	24.249

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	14.4	24.448
2	12.7	24.452
3	10.4	24.478

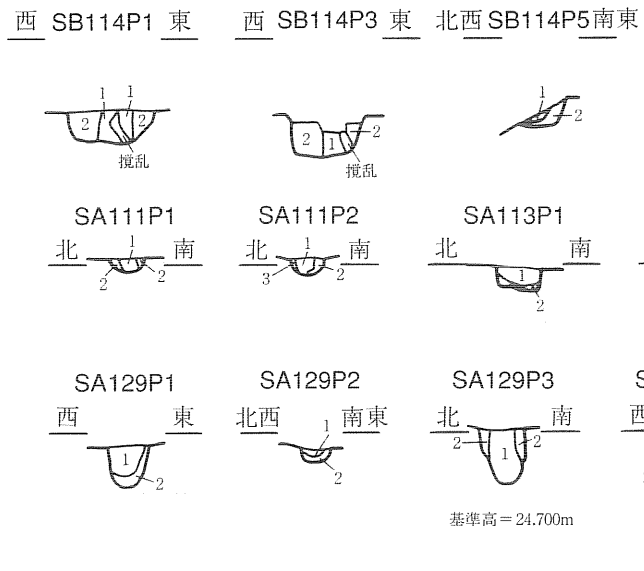
P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	21.0	24.419
2	10.2	24.533
3	30.0	24.420

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	9.0	24,650
2	10.0	24,640

ＳＢ114Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり　地山土40％混じる。地山土は大塊状。

ＳＢ114Ｐ3
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40％混じる。地山土は大塊～中粒状。

ＳＢ114Ｐ5
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40％混じる。地山土は大塊状。



ＳＡ111Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒10％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ111Ｐ2
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。焼土中粒１％、炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒15％含む。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ113Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ113Ｐ2
1　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山土ブロック。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。

ＳＡ129Ｐ1
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる。焼土小粒１％、炭化物極小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ129Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

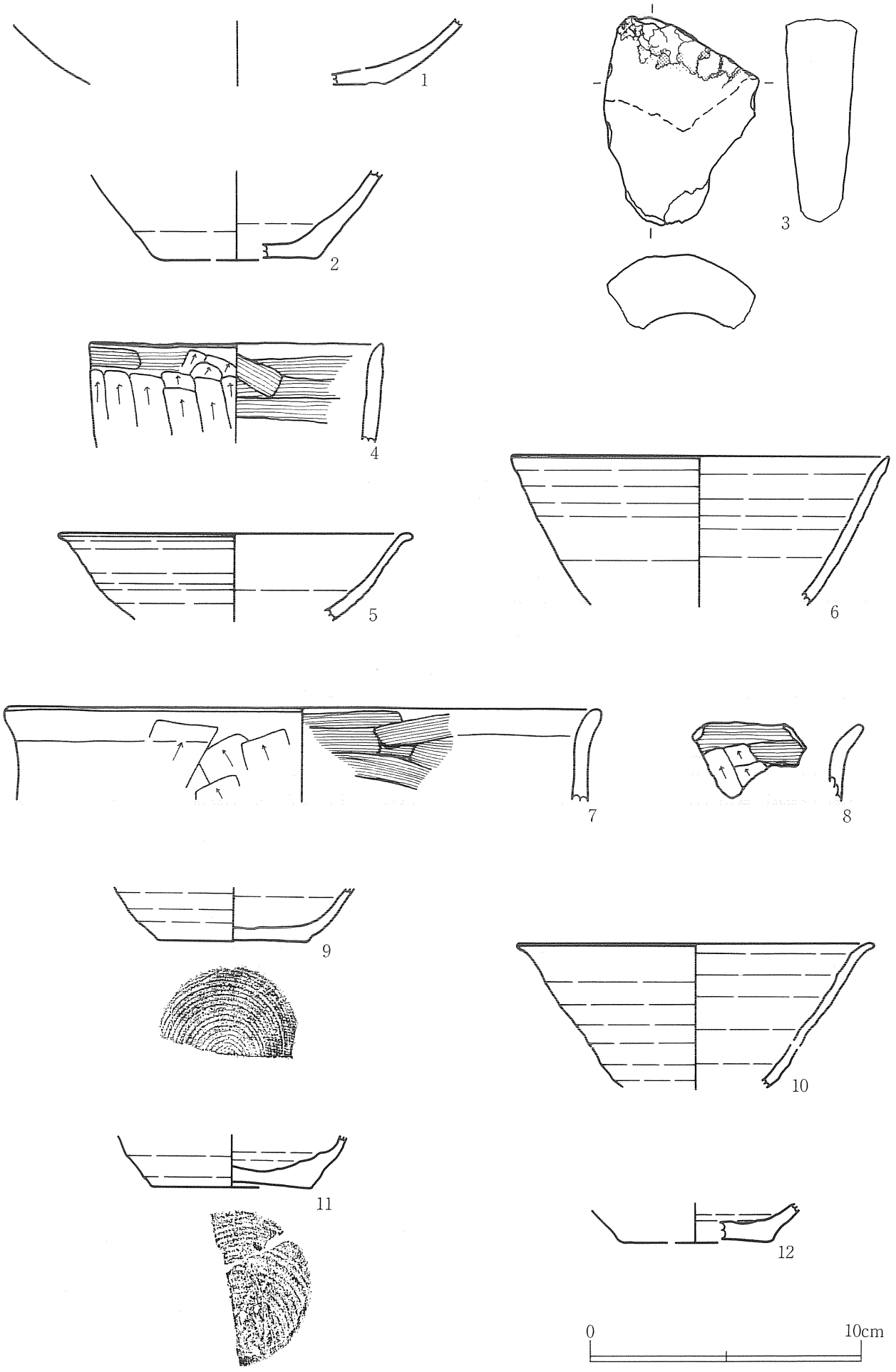
ＳＡ129Ｐ3
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒10％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＡ130Ｐ1
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％、地山中～小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山中～小粒30％含む。

ＳＡ130Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物極小粒１％、地山小粒10％含む。

ＳＡ130Ｐ3
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土10％混じる。

第２８図　ＳＢ１１４掘立柱建物跡、ＳＡ１１１・１１３・１２９・１３０柱列柱穴断面土層図



第２９図　掘立柱建物跡出土遺物（ＳＢ３４・４７・５５・６０・７９・１０５）

掘立柱建物跡出土遺物

SB34

１は高台付坏であるが貼付高台は欠落している。柱穴掘方内から出土した遺物はこの破片のみである。

SB47

３はP9内から出土した羽口の先端部破片である。端部は溶融し鉄滓が付着している。

SB55

２・４～６はいずれも柱穴内埋土中から出土した。２は体部が直線的に外傾するタイプ、６は体部下半が湾曲して膨らむタイプで大型である。５は体部が膨らみ口縁がめくれるように大きく外反する皿である。高台の有無は不明である。４は小型の甕で、先端が尖る口縁が直立する。

SB60

８は身舎、７は廂部分の柱穴内埋土中から出土した。いずれも大型の甕の口縁部である。

SB79

９はP1柱穴埋土中から出土した。体部が湾曲して膨らむ坏である。

SB105

10～12は柱穴埋土中から出土した。10は体部が直線的に外傾し、口縁部が外反する。内・外面ともロクロ目が明瞭に残る。11・12も同タイプの坏かと思われる。

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
1	SB34	土師器	高台付坏	(内) マメツ (外) マメツ	高台剥落	口なし 底5%	中砂混	(良) ↓ 二次受熱	—	—	—	—	30
2	SB55	土師器	坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底20%	細砂混	良	—	(6.0)	—	—	30
4	SB55	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口20% 底なし	細砂少混	良	(10.9)	—	—	—	30
5	SB55	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口13% 底なし	微砂少混	良	(12.9)	—	—	—	30
6	SB55	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	—	口17% 底なし	微砂混	やや良 ↓ 二次受熱	(14.0)	—	—	—	30
7	SB60	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口17% 底なし	中砂少混 粗砂少混	良	(22.0)	—	—	—	30
8	SB60	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口5%以下 底なし	細砂混	良	(—)	—	—	—	30
9	SB79	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底5%	微砂混	良	—	(5.6)	—	—	30
10	SB105	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂混 中砂少混	良	(13.1)	—	—	—	30
11	SB105	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底50%	細砂少混	良	—	(5.9)	—	—	30
12	SB105	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り	口なし 底42%	微砂混	良	—	(5.5)	—	—	30

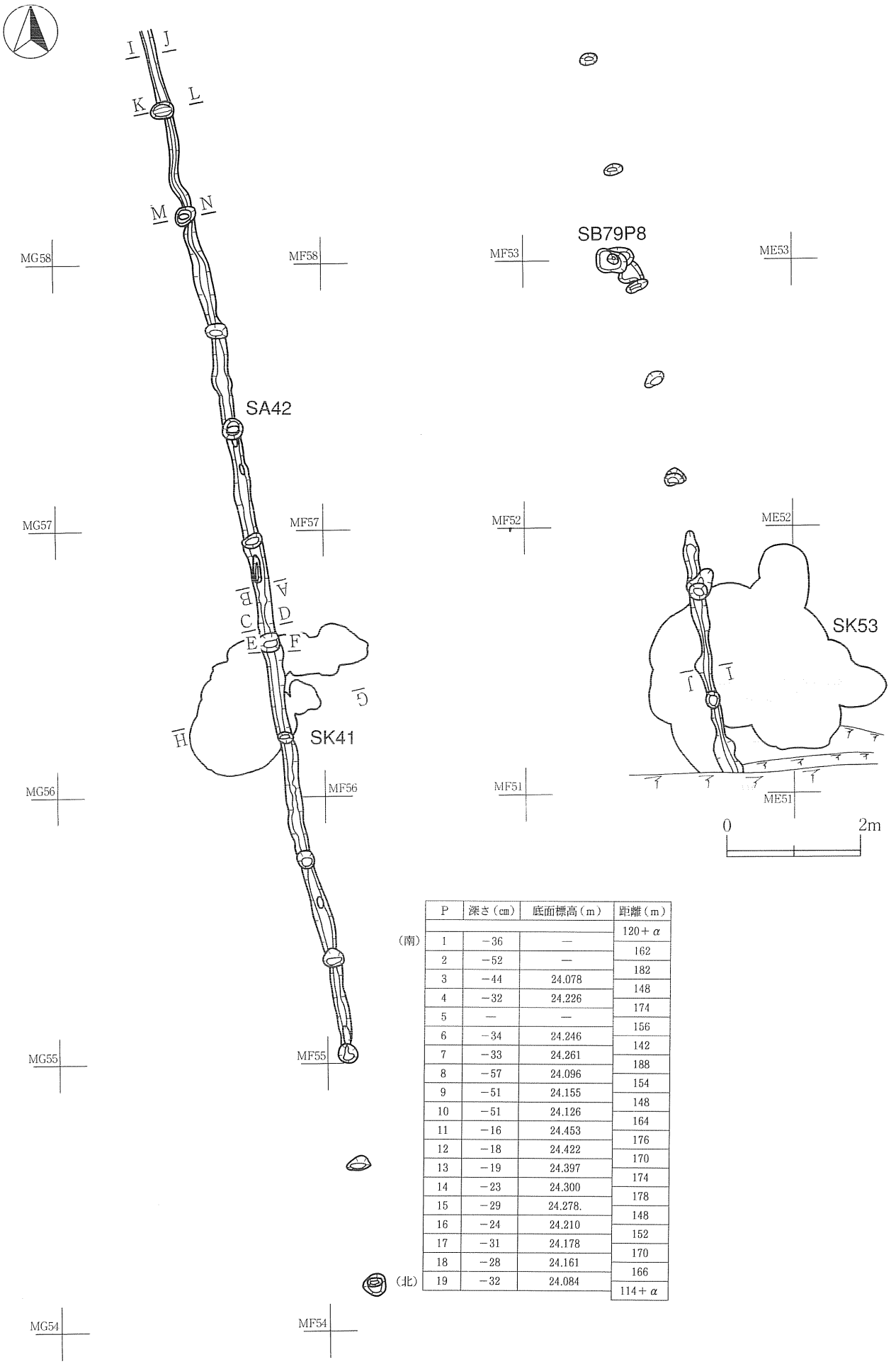
番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平担面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	こしこみ推定角	端部角	図版番号
3	SB47	羽口	先端部近くの破片。鉄滓付着。	スサ入り	—	(○)	(○)	(7.7)	(6.7)	(4.6)	—	—	30

第４表　掘立柱建物跡出土遺物観察表　SB34・SB55・SB60・SB79・SB105

２．板塀跡

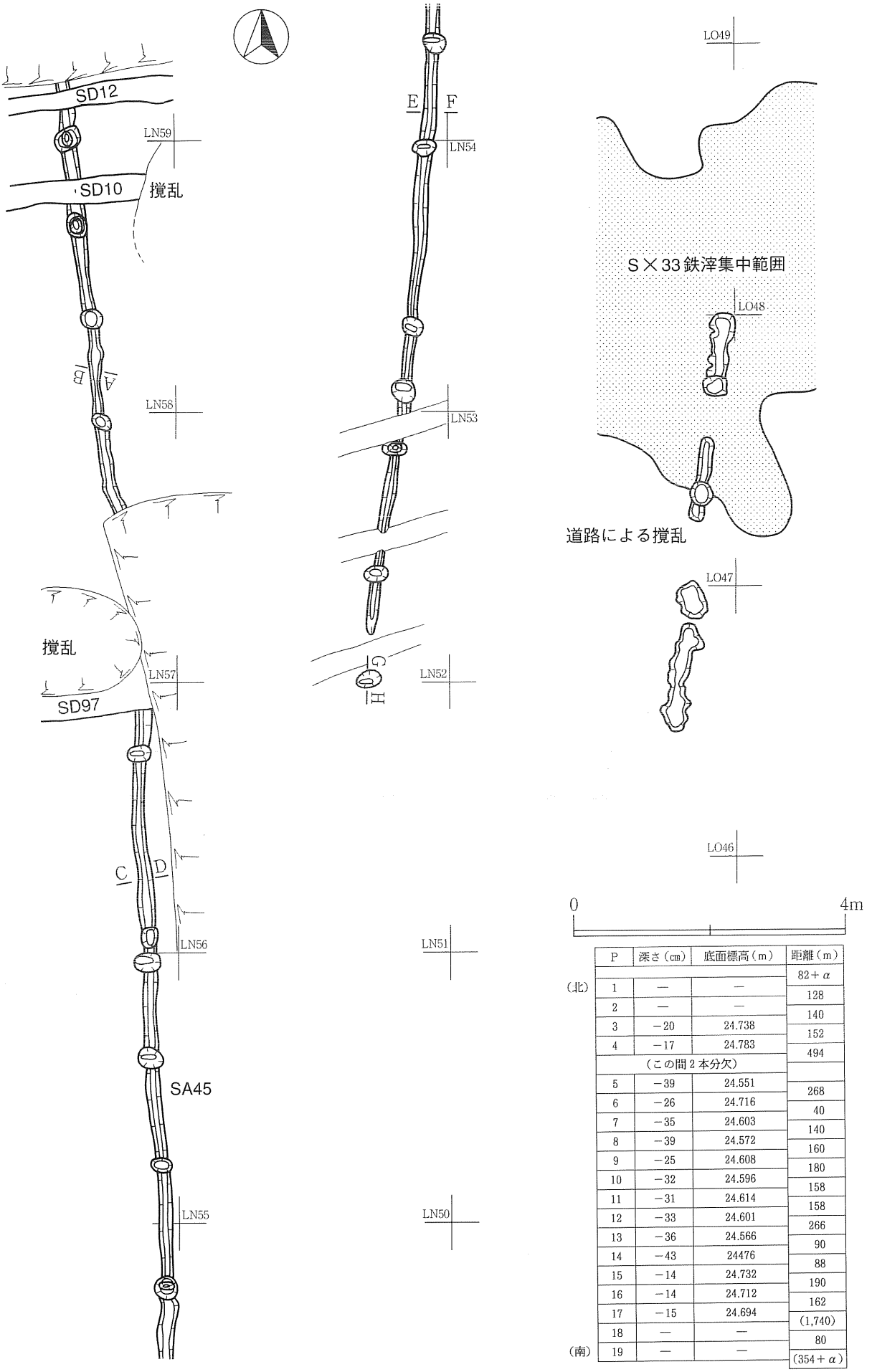
板状の柱をほぼ等間隔に立て、その間を板を並べた痕跡のある溝によって連結されるものである。掘立柱建物群が集中する区域を囲むように合計９条が検出された。北側を東西にＳＡ124・125、西側を南北にＳＡ89・90・42、南側を東西にＳＡ65・63・54、東側を南北にＳＡ４５である。

遺構の重複による板塀どうしの新旧関係は、ＳＡ124・125で認められた。ＳＡ124はＳＡ125をほぼ同位置で作り替えたものである。また、ＳＡ65の東端部は、ＳＡ63と重なるような配置をとるが重複は不明である。板塀跡と他の遺構との重複では、ＳＡ63板塀跡がＳＢ114掘立柱建物跡を壊している。ＳＡ45はＳＸ33鉄滓捨場より古く、鉄滓が捨てられた時点ではすでに存在していないようである。したがってＳＸ33鉄滓捨場は同時と考えられるＳＮ91・98・126製鉄遺構が操業した時期は、ＳＡ45より新しい時期である。



	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
				120＋α
（南）	1	−36	—	162
	2	−52	—	182
	3	−44	24.078	148
	4	−32	24.226	174
	5	—	—	156
	6	−34	24.246	142
	7	−33	24.261	188
	8	−57	24.096	154
	9	−51	24.155	148
	10	−51	24.126	164
	11	−16	24.453	176
	12	−18	24.422	170
	13	−19	24.397	174
	14	−23	24.300	178
	15	−29	24.278.	148
	16	−24	24.210	152
	17	−31	24.178	170
	18	−28	24.161	166
（北）	19	−32	24.084	114＋α

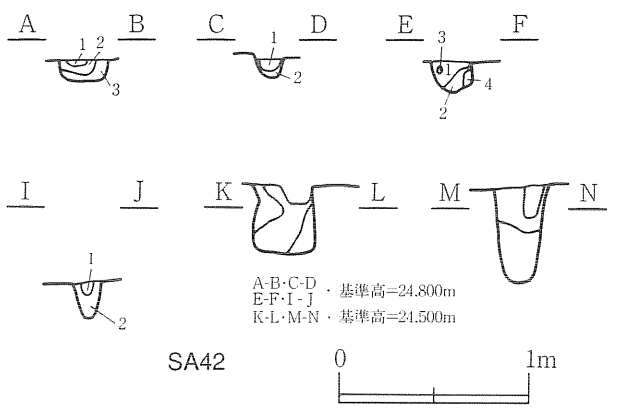
第３０図　ＳＡ４２板塀跡

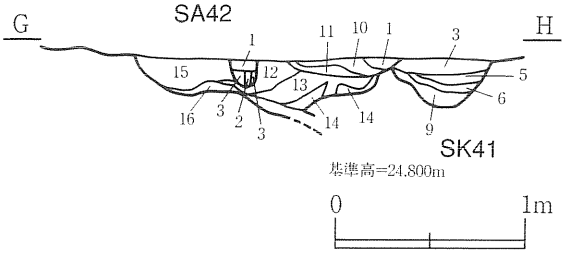


	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
				82＋α
（北）	1	—	—	128
	2	—	—	140
	3	−20	24.738	152
	4	−17	24.783	494
	（この間２本分欠）			
	5	−39	24.551	268
	6	−26	24.716	40
	7	−35	24.603	140
	8	−39	24.572	160
	9	−25	24.608	180
	10	−32	24.596	158
	11	−31	24.614	158
	12	−33	24.601	266
	13	−36	24.566	90
	14	−43	24476	88
	15	−14	24.732	190
	16	−14	24.712	162
	17	−15	24.694	(1,740)
	18	—	—	80
（南）	19	—	—	(354＋α)

第３１図　ＳＤ４５板塀跡

板塀跡は必ずしも直線的ではなく、ＳＡ45・54・63・90のようにやや湾曲する部分もある。特にＳＡ45は南側で西に湾曲し、ＳＤ54の東端部に向かうような配置で、同時期の一連の構築物である可能性がある。またＳＡ45の南北方向はＳＢ55掘立柱建物跡の長軸方向とほぼ一致することから、ＳＢ55とＳＡ42が同時の可能性がある。



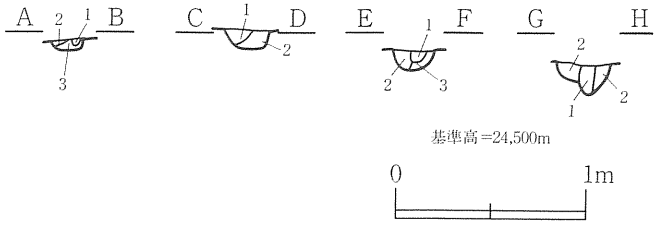


ＳＡ42Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒１％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。
ＳＡ42Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒５％含む。炭化物小粒２％、焼土大～中粒２％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山中～小粒５％含む。炭化物極小粒１％、焼土小粒１％含む。
ＳＡ42Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。
3　10ＹＲ4／6　褐色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山ブロック。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。暗褐色土20％混じる。
ＳＡ42Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山大粒20％含む。炭化物小粒５％、焼土大粒７％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。炭化物小粒１％含む。
ＳＡ42Ｋ－Ｌ
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりなし。細砂５％含む。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。細砂５％含む。地山土30％混じる。
ＳＡ42Ｍ－Ｎ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりなし。細砂５％含む。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。細砂５％含む。地山土30％混じる。

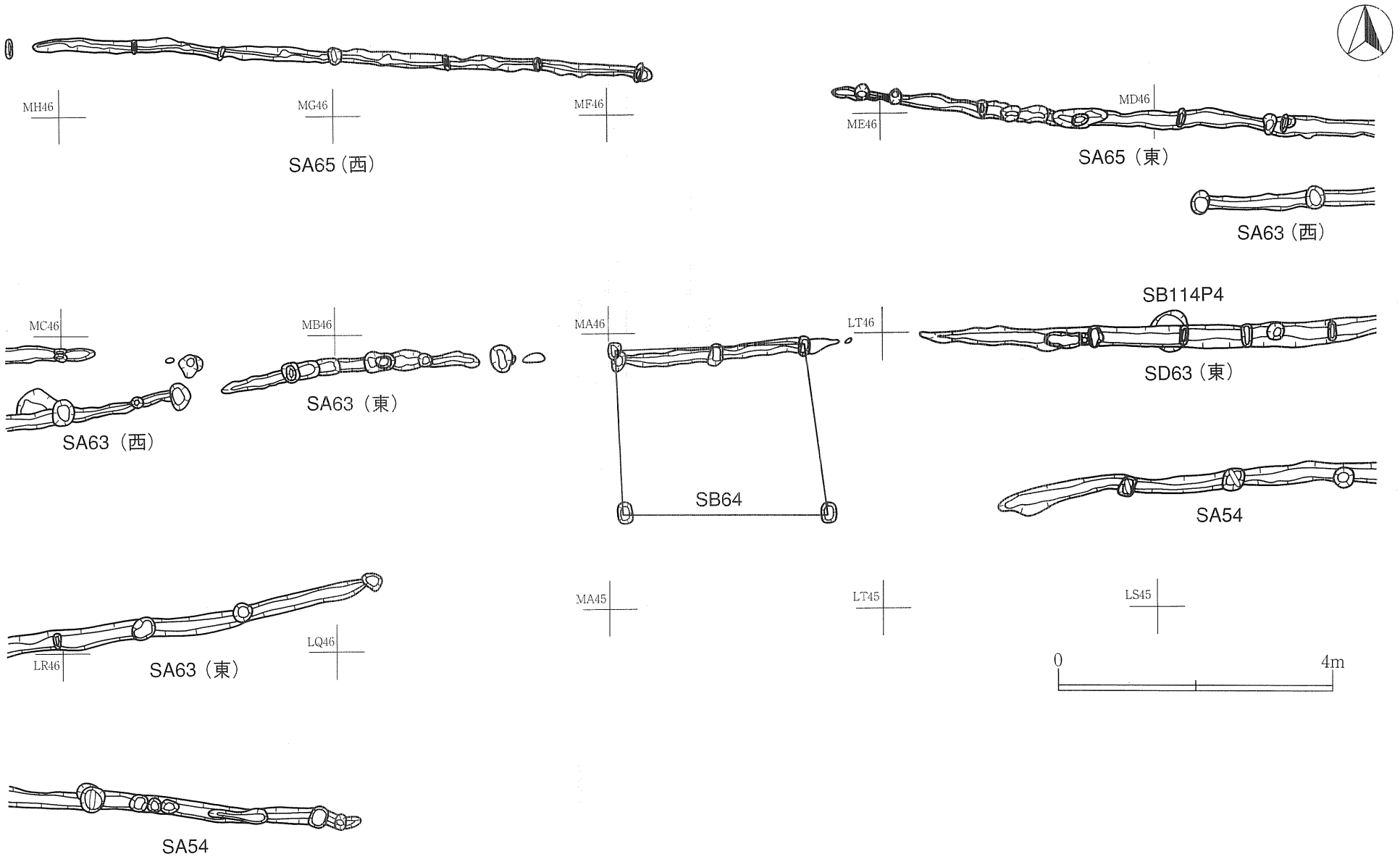
ＳＫ41Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒10％含む。炭化物小粒２％、焼土中～小粒１％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物中～小粒５％含む。焼土中粒２％含む。
5　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土60％混じる。
8　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。
9　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
10　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。炭化物大粒２％含む。
11　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土50％混じる。
12　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物大粒２％含む。
13　地山土の再堆積層（倒木痕の地山部分）
14　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。倒木痕の黒色土が入る部分。
15　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。炭化物小～中粒５％含む。焼土小粒２％含む。
16　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。

（ＳＡ42）
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物中～小粒５％、焼土大～小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。（板状痕跡）
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。

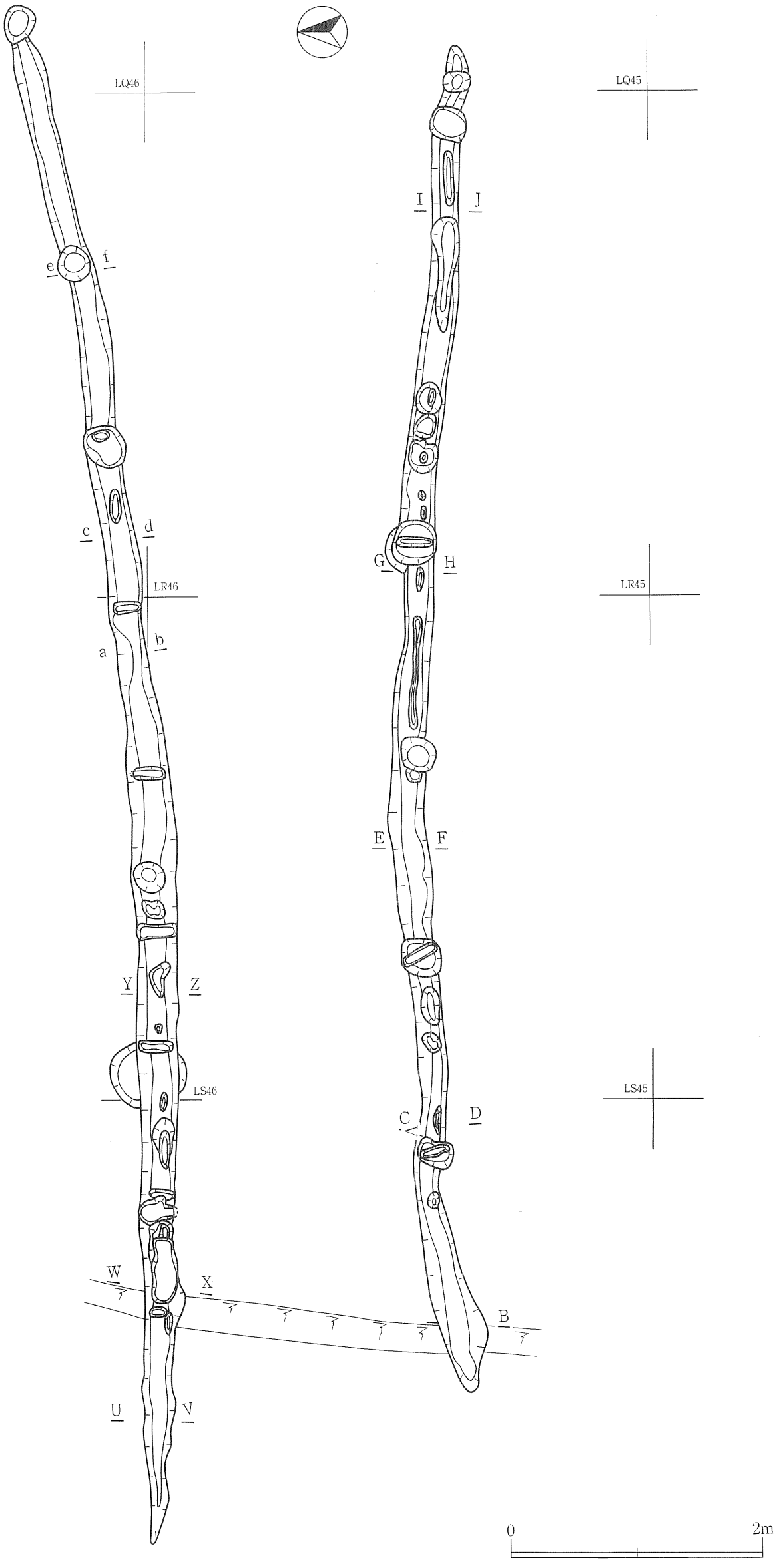
ＳＡ45Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土と暗褐色土の混土。
ＳＡ45Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土40％混じる。
ＳＡ45Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒１％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。
ＳＡ45Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。



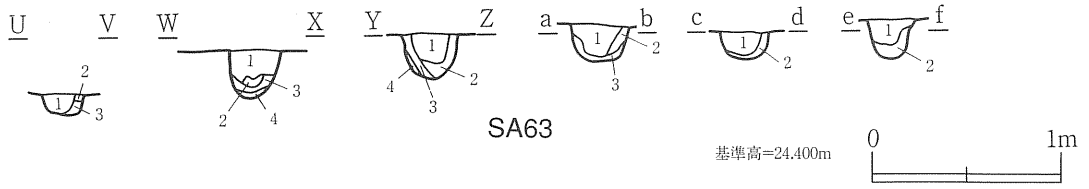
第３２図　ＳＡ４２・４５板塀跡断面土層図



第３３図　ＳＡ５４・６３・６５板塀跡、ＳＢ６４掘立柱建物跡

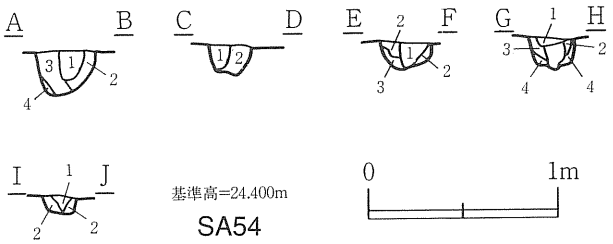


第３４図　ＳＡ５４板塀跡、ＳＡ６３板塀跡①（東側）



ＳＡ63ａ－ｂ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
ＳＡ63ｃ－ｄ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大粒10％含む。
2　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。
ＳＡ63ｅ－ｆ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土中粒５％含む。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ6／4　黄橙色シルト　極めてしまりあり。地山崩壊土は黒褐色土が30％混じる。

ＳＢ63Ｕ－Ｖ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。（地山土は大塊状）炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒20％含む。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土の大塊に暗褐色土がひび状に混じる。
ＳＢ63Ｗ－Ｘ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物小～中粒５％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒10％含む。
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土と黒褐色土の混土。
a　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。基本層位の３
b　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。基本層位の４
ＳＢ63Ｙ－Ｚ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中～小粒５％含む。炭化物小粒５％含む。
4　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。



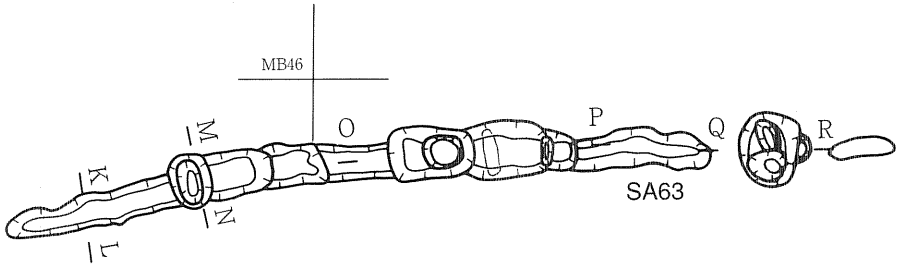
ＳＡ54Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。地山土は極大塊状に入る。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒１％含む。
ＳＡ54Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。
a　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。
b　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。
ＳＡ54Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物極小粒２％含む。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。地山土は大塊状に入る。
ＳＡ54Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ2／3　黄褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
ＳＡ54Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山極小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

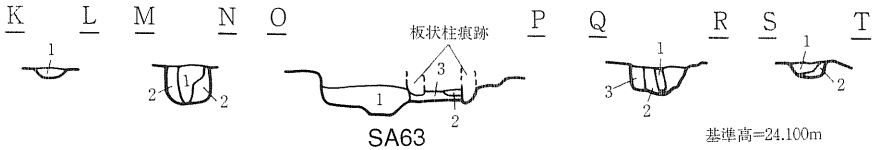
SA54

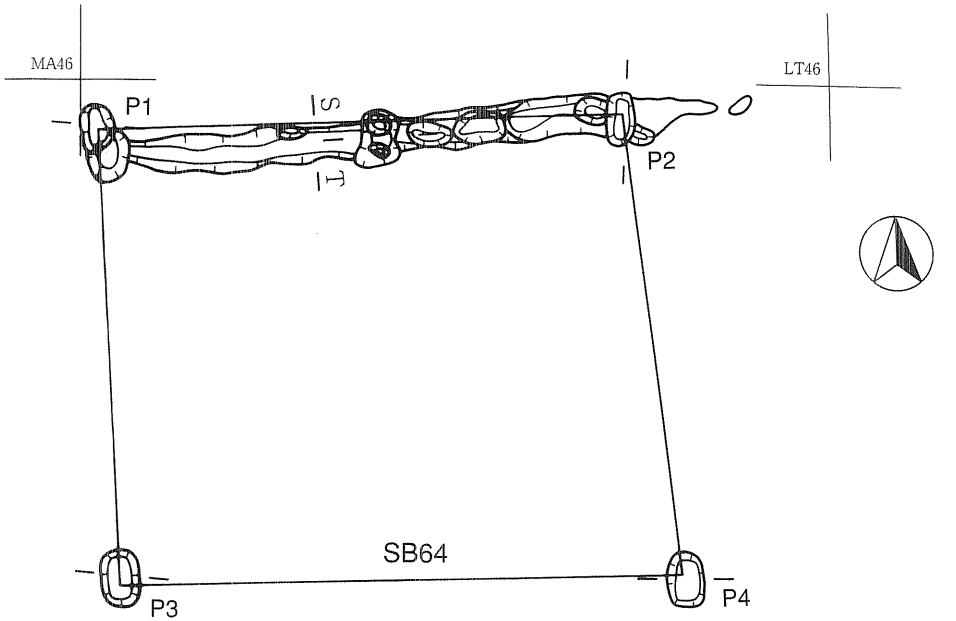
	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
				192＋α
（西）	1	－27	24.084	156
	2	－26	24.070	158
	3	－22	24.141	170
	4	－26	24.121	68
	5	－21	24.164	26
	6	－17	24.205	24
	7	－18	24.201	134
	8	－12	24.285	84
	9	－13	24.280	34
	10	－ 7	24.324	30＋α

P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
15	－ 5	23,976	356
（この間１本分欠）			—
16	－22	24.086	34
17	－40	23.947	46
18	－28	24.092	14
19	－26	24.119	118
20	－27	24.130	92
21	－23	24.167	46
22	－26	24.135	80
23	－27	24.125	134
24	－22	24.215	138
25	－28	24.140	140
26	－23	24.234	194
（東）27	—	—	

第３５図　ＳＡ５４板塀跡、ＳＡ６３板塀跡①（東側）柱穴断面土層図







ＳＡ63Ｋ－Ｌ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物極小粒２％含む。

ＳＡ63Ｍ－Ｎ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。

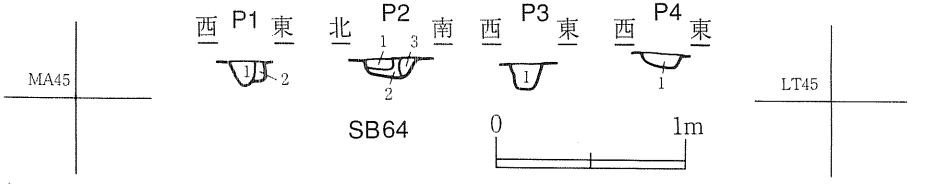
ＳＡ63Ｏ－Ｐ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山大塊30％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山中粒10％含む。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土40％混じる。

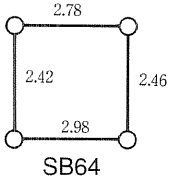
ＳＡ63Ｑ－Ｒ
1　10ＹＲ3／1　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。炭化物中粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。
3　10ＹＲ6／3　にぶい黄橙色粘土質シルト　極めてしまりあり。暗褐色土５％混じる。

ＳＡ63Ｓ－Ｔ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。炭化物中粒１％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土30％混じる。

SA63

	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
（西）	4	−12	23.766	
				168
	5	−24	23.682	
				24
	6	−17	23.761	
				32
	7	−13	23.826	
				64
	8	−24	23.701	
				16
	9	−27	23.671	
				26
	10	−18	23.745	
				28
	11	−20	23.725	
				120
	12	−16	23.802	
				172
	13	—	—	
				144
	14	−13	23.873	
				118
（東）	15	− 5	23.976	





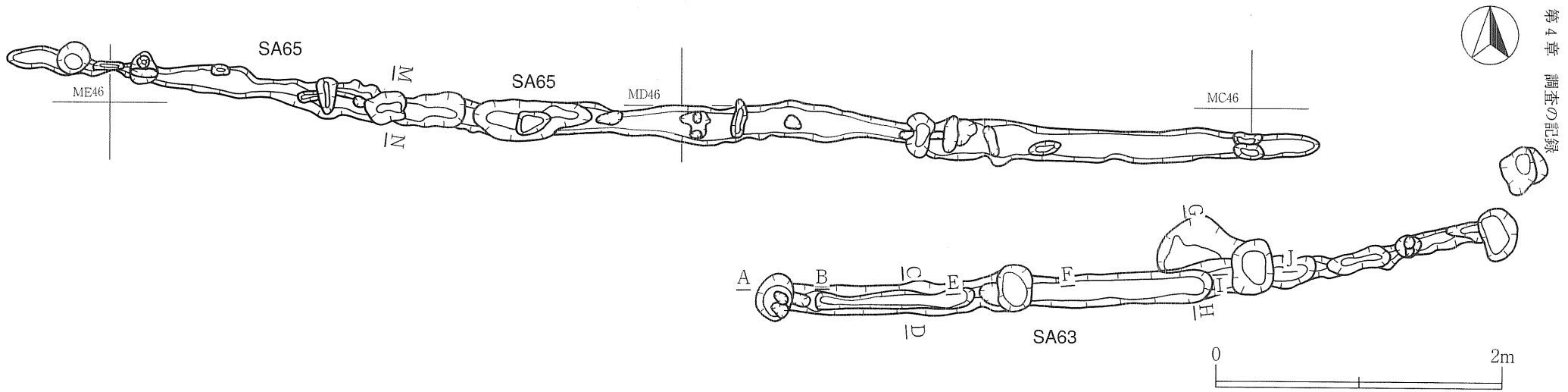
ＳＢ64Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。地山土は大塊状に入る。

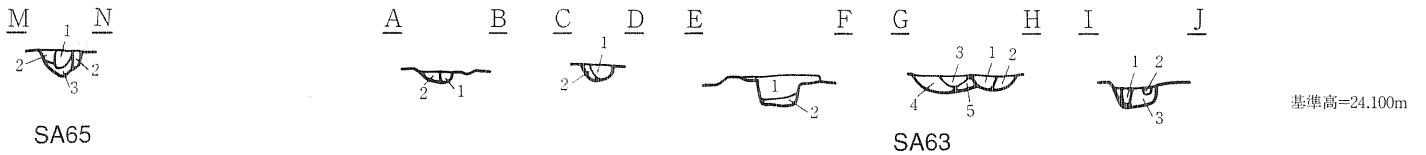
ＳＢ64Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。

ＳＢ64Ｐ3
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土大粒状に15％含む。炭化物中粒５％含む。

ＳＢ64Ｐ4
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土大塊30％含む。

第３６図　ＳＡ６３板塀跡②（中央）、ＳＢ６４建物跡





ＳＡ65Ｍ－Ｎ
1　10ＹＲ3／1　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土30%混じる。（板状痕跡）
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　極めてしまりあり。地山土30%、黒褐色土10%混じる。
3　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土質シルト　極めてしまりあり。暗褐色土10%混じる。

ＳＡ63Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。炭化物大粒２％含む。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒10%含む。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　地山中粒20%含む。

ＳＤ63Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山中粒５％含む。炭化物小粒２％、焼土中粒１％含む。（板状柱痕跡）
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。
ＳＤ63Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。炭化物極小粒２％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。
ＳＤ63Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊30%含む。
2　10ＹＲ6／4　にぶい黄橙色粘土　きわめてしまりあり。１層の暗褐色土が30%混じる。
ＳＤ63Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物小粒２％含む。（板塀痕跡か？）
2　10ＹＲ2／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊30%含む。炭化物極小粒１％含む。（掘方の埋土）
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土10%混じる。炭化物小粒５％含む。（ＳＢ67－Ｐ4）
4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。（ＳＢ67－Ｐ4）
5　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土と暗褐色土の混土。（ＳＢ67－Ｐ4）

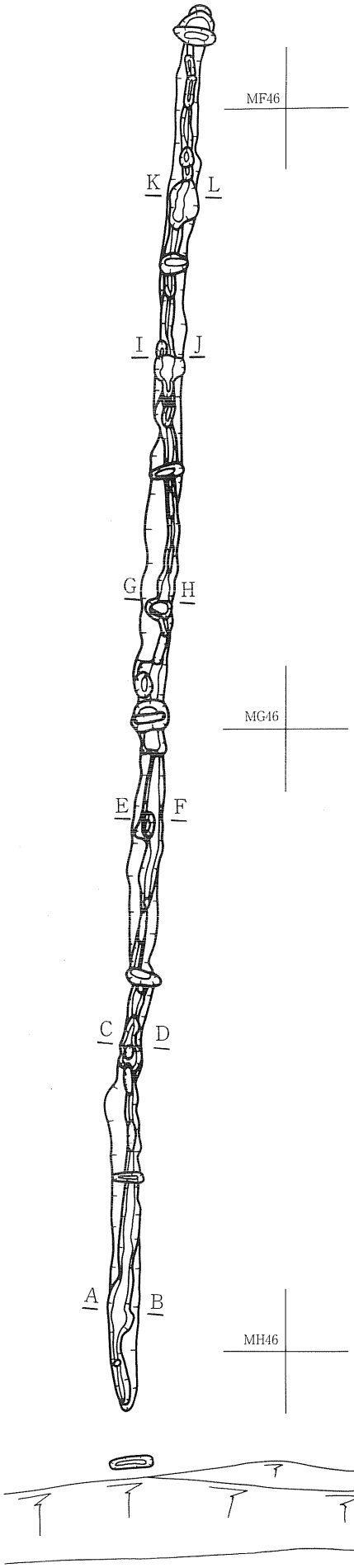
SA63

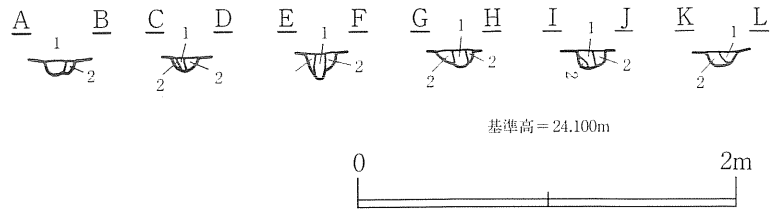
	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
（西）	1	－８	23.796	
				164
	2	－23	23.706	
				170
	3	－20	23.681	
				170
（東）	4	－12	23.766	

SA65

	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
（西）	8	－16	23.787	
				180
	9	－19	23.796	
				144
	10	－11	23.862	
				146
	11	－８	23.860	
				150
	12	－13	23.817	
				208
	13	－６	23.840	
				192
（東）	14	－30	23.596	

第３７図　ＳＡ６３板塀跡③（西側）、ＳＡ６５板塀跡①（東側）





ＳＡ65Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ4／4　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

ＳＡ65Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山中粒10％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる。

ＳＡ65Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が15％混じる。

ＳＡ65Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が15％混じる。

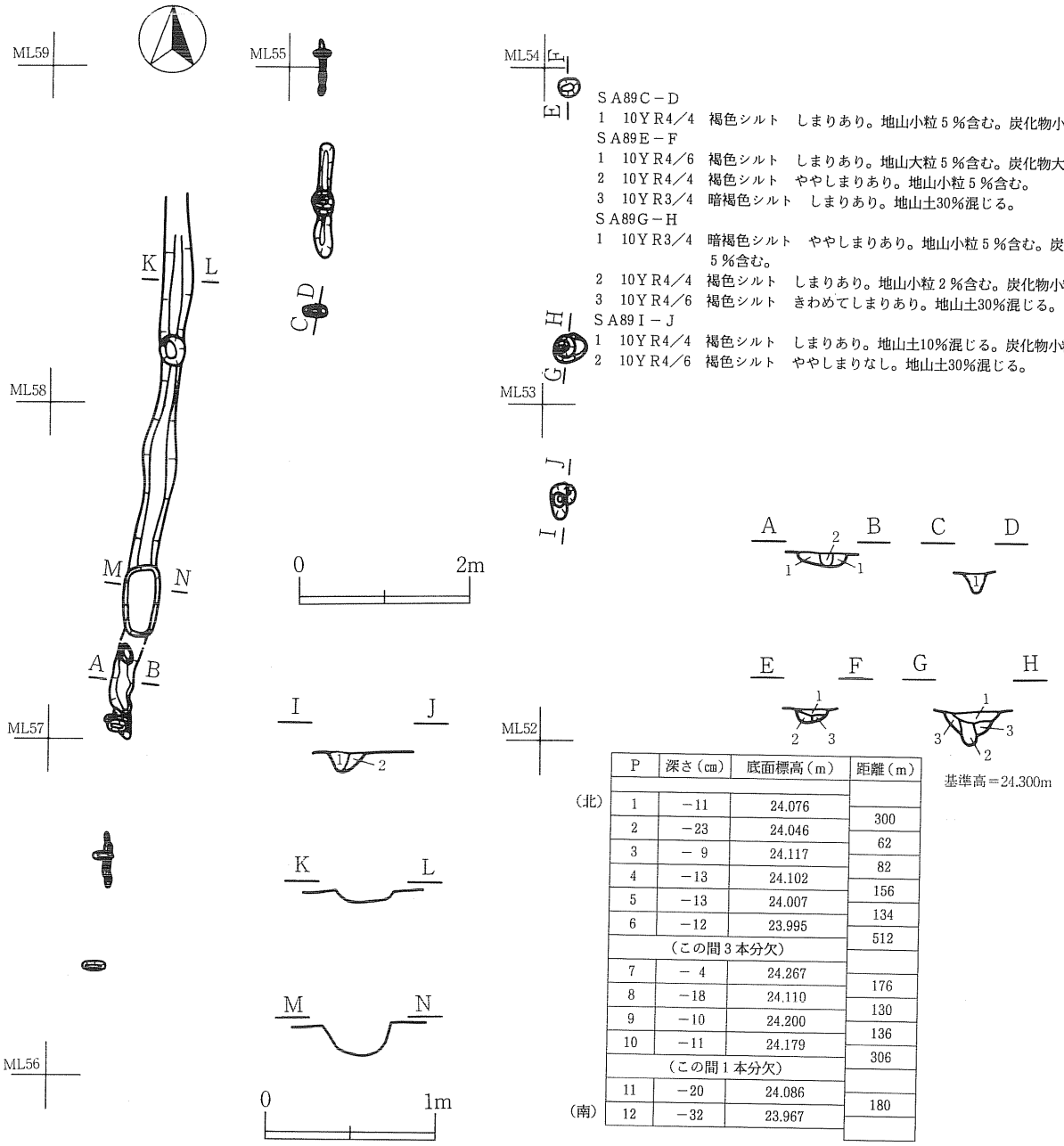
ＳＡ65Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が15％混じる。

ＳＡ65Ｋ－Ｌ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が15％混じる。

SA65

	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
（西）	1	－ 3	23.801	94
	(1－2)	－ 9	23.871	92
	2	－13	23.850	80
	(2－3)	－ 7	23.900	50
	3	－13	23.830	96
	(3－4)	－13	23.856	72
	4	－11	23.882	72
	(4－5)	－ 6	23.930	88
	5	－ 7	23.919	68
	(5－6)	－ 9	23.895	70
	6	－37	23.612	68
	(6－7)	－ 8	23.923	80
（東）	7	－22	23.744	

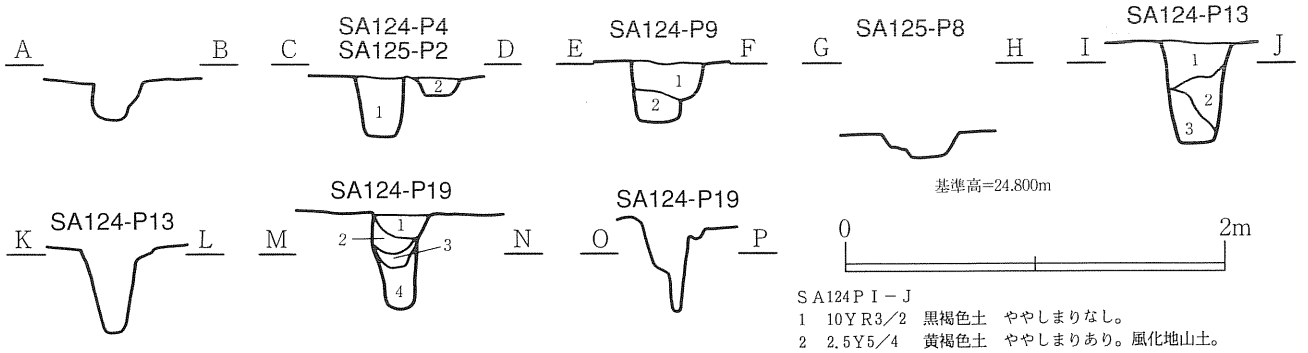
第３８図　ＳＡ６５板塀跡②（西側）



ＳＡ89Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物小粒５％含む。
ＳＡ89Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。地山大粒５％含む。炭化物大粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ89Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。炭化物極小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。炭化物小粒５％含む。
3　10ＹＲ4／6　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ89Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／6　褐色シルト　ややしまりなし。地山土30％混じる。

	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
（北）	1	−11	24.076	
				300
	2	−23	24.046	
				62
	3	− 9	24.117	
				82
	4	−13	24.102	
				156
	5	−13	24.007	
				134
	6	−12	23.995	
				512
	（この間３本分欠）			
	7	− 4	24.267	
				176
	8	−18	24.110	
				130
	9	−10	24.200	
				136
	10	−11	24.179	
				306
	（この間１本分欠）			
	11	−20	24.086	
				180
（南）	12	−32	23.967	

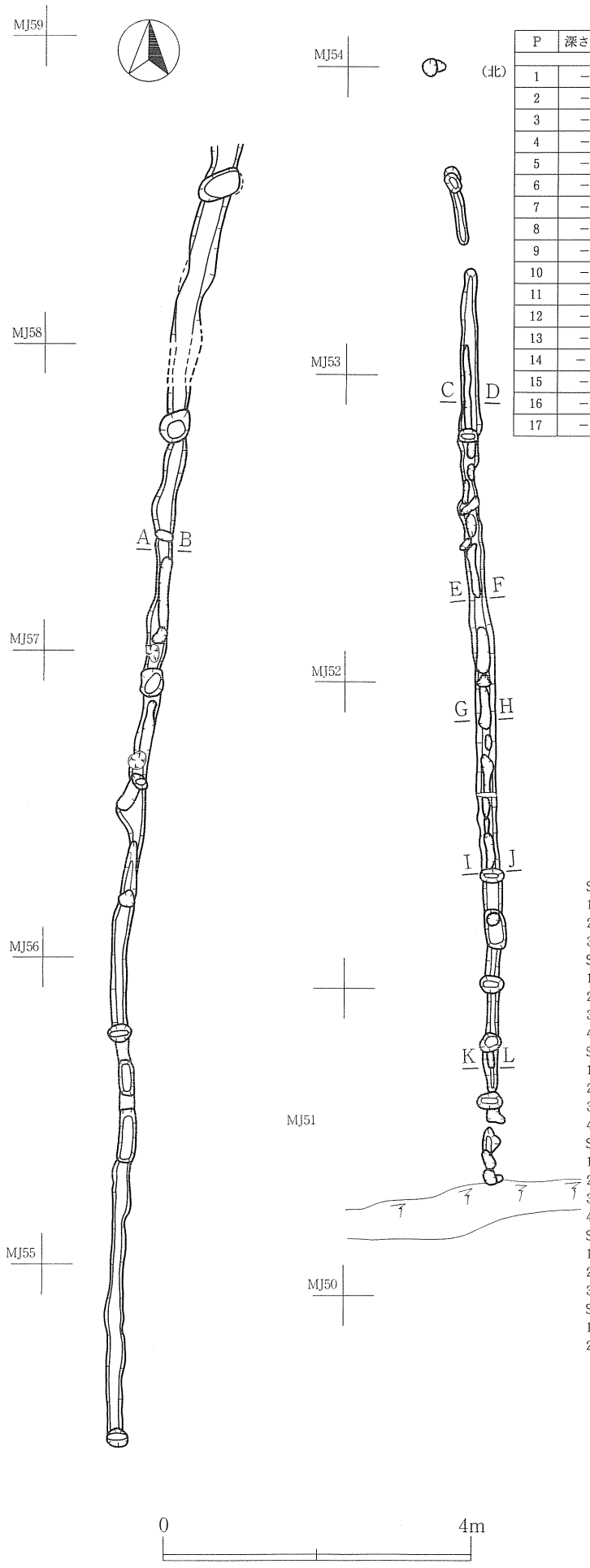
第３９図　ＳＡ８９板塀跡



ＳＡ124・125Ｃ－Ｄ
1　7.5ＹＲ2／3　極暗褐色土　炭化物大粒含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色土　地山大粒含む。
ＳＡ124Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ2／2　黒褐色土　ややしまりあり。炭化物中粒を少量含む。
2　10ＹＲ4／2　灰黄褐色土　ややしまりあり。粘土大粒含む。

ＳＡ124ＰＩ－Ｊ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色土　ややしまりなし。
2　2.5Ｙ5／4　黄褐色土　ややしまりあり。風化地山土。
3　2.5Ｙ6／2　灰黄色土　ややしまりあり。風化粘土。
ＳＡ124Ｐ19
1　2.5Ｙ4／2　暗灰黄色土　極めてしまりあり。
2　2.5Ｙ4／4　オリーブ褐色土　しまりあり。
3　5Ｙ5／5　灰オリーブ色土　しまりあり。風化地山大粒。
4　2.5Ｙ6／2　ややしまりあり。風化粘土。

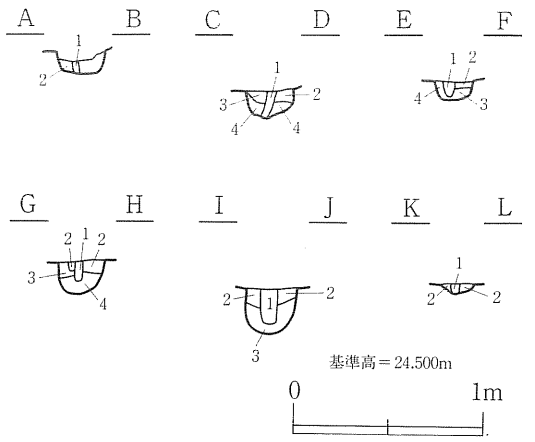
第４０図　ＳＡ１２４・１２５板塀跡・柱穴断面土層図



P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
1	−31	24.287	
2	−40	24.192	324
3	−28	24.125	138
4	−49	23.922	134
5	−12	24.287	64
6	−40	24.009	130
7	−39	24.008	158
8	−36	23.985	172
9	−17	24.129	60
10	− 6	24.188	74
11	−44	23.869	394
12	−14	24.156	178
13	− 8	24.238	150
14	− 39	23.898	330
15	−16	24.156	90
16	−28	23.934	234
17	− 9	24.082	140

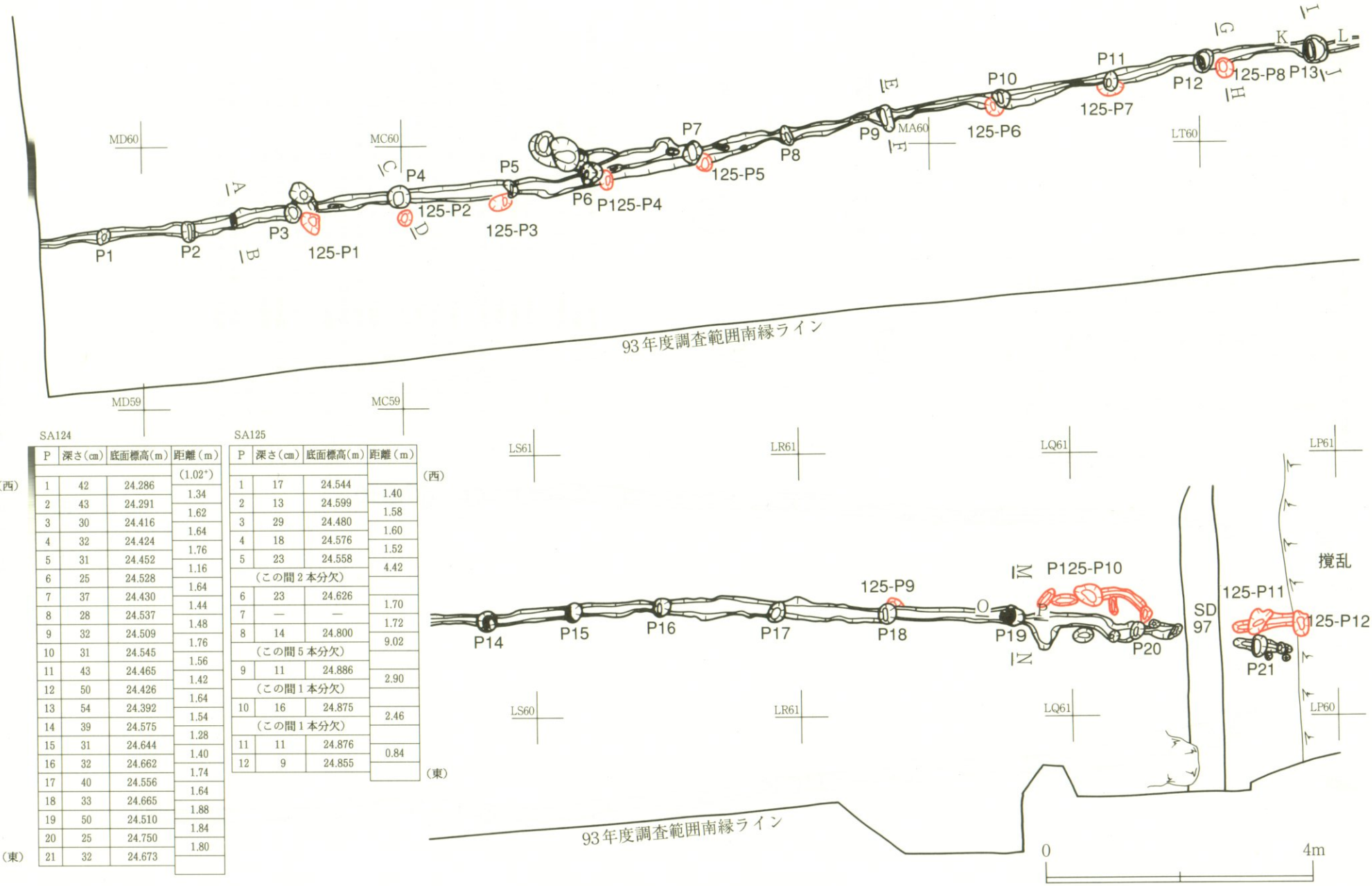
P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
			106
18	−25	23.916	56
19	−38	23.776	22
20	−36	23.797	70
21	−18	23.937	74
22	−10	24.018	80
23	−16	23.957	80
24	− 5	24.088	

（南）



ＳＡ90Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。（板塀跡）
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土30％混じる。
ＳＡ90Ｃ－Ｄ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土30％混じる。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒10％含む。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ90Ｅ－Ｆ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土30％混じる。
3　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に暗褐色土30％混じる。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ90Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山中～小粒５％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山大塊～中粒10％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色土と　10ＹＲ5／6　黄褐色土の混土。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ90Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小～中粒10％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小～中粒５％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。
ＳＡ90Ｋ－Ｌ
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒10％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土40％混じる。

第４１図　ＳＡ９０板塀跡



SA124

	P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
				(1.02⁺)
(西)	1	42	24.286	1.34
	2	43	24.291	1.62
	3	30	24.416	1.64
	4	32	24.424	1.76
	5	31	24.452	1.16
	6	25	24.528	1.64
	7	37	24.430	1.44
	8	28	24.537	1.48
	9	32	24.509	1.76
	10	31	24.545	1.56
	11	43	24.465	1.42
	12	50	24.426	1.64
	13	54	24.392	1.54
	14	39	24.575	1.28
	15	31	24.644	1.40
	16	32	24.662	1.74
	17	40	24.556	1.64
	18	33	24.665	1.88
	19	50	24.510	1.84
	20	25	24.750	1.80
(東)	21	32	24.673	

SA125

P	深さ（cm）	底面標高（m）	距離（m）
1	17	24.544	1.40
2	13	24.599	1.58
3	29	24.480	1.60
4	18	24.576	1.52
5	23	24.558	4.42
（この間２本分欠）			
6	23	24.626	1.70
7	—	—	1.72
8	14	24.800	9.02
（この間５本分欠）			
9	11	24.886	2.90
（この間１本分欠）			
10	16	24.875	2.46
（この間１本分欠）			
11	11	24.876	0.84
12	9	24.855	

(西)
(東)

第４２図　ＳＡ１２４・１２５板塀跡

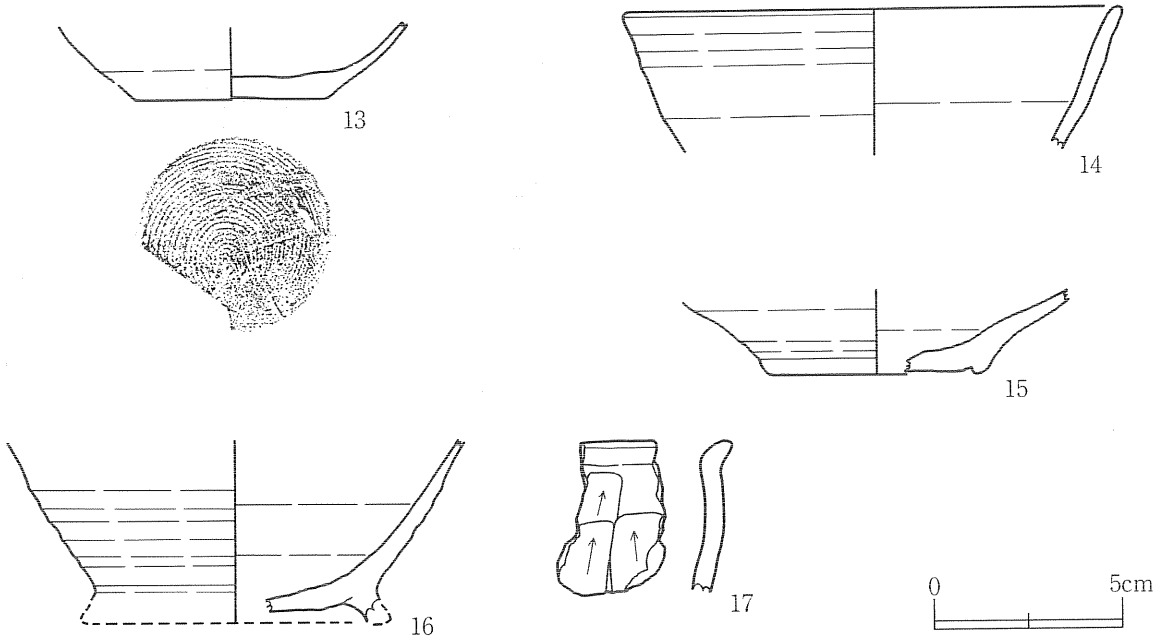
板塀跡出土遺物

SA42

13は溝内埋土中から出土した。体部が湾曲して膨らむタイプである。

SA63

14～17は溝内埋土中から出土した。14は体部が湾曲して膨らむタイプで大型である。15は高台付皿で、体部上半が大きく外反する。高台と底部は高さがほとんど同一である。16は外に張り出す高台付の椀である。体部はやや膨らみがある。17は小型の甕であるが口径を出すに至らない小破片である。



第４３図　板塀跡出土遺物（ＳＡ４２・６３）

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
13	SA42	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底75%	細砂混	良	—	5.2	—	—	44
14	SA63	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口13% 底なし	微砂混	良	(13.0)	—	—	—	44
15	SA63	土師器	高台付坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	(回転糸切り) ↓ 高台貼付	口なし 底33%	微砂少混	やや良	—	(5.3) 高台径 (5.5)	—	—	44
16	SA63	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 高台貼付→ナデ	口なし 底33%	微砂混	良	—	(7.5) 高台径 (8.0)	—	—	44
17	SA63	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口5%以下 底なし	中砂混	良	(—)	—	—	—	44

第５表　板塀跡出土遺物観察表　SA42・SA63

３．柱　　列

板塀跡のように柱穴間を連結する溝跡がなく、柱穴のみが直線的に並ぶものや、Ｌ字形・コの字形に並ぶものを柱列として記載した。

以下の７種に分類する。

１類ａ　柱穴２本１組で構成されるもの
SA111･113･06

１類ｂ　柱穴３本１組が直線的に並ぶもの
SA128･62･123

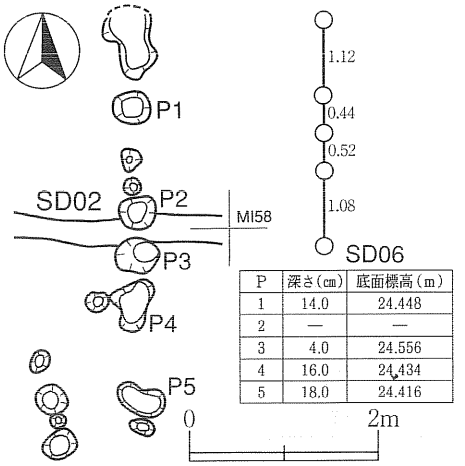
１類ｃ　柱穴４本１組が直線的に並ぶもの
SA127･84･85･86

１類ｄ　柱穴５本１組が直線的に並ぶもの
SA06

２類ａ　柱穴３本１組がＬ字形に並ぶもの
SA129･130

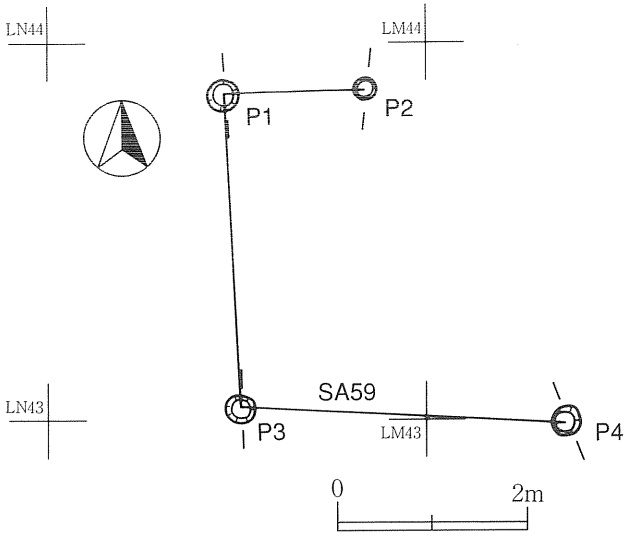
２類ｂ　柱穴６本１組がＬ字形に並ぶもの
SA112

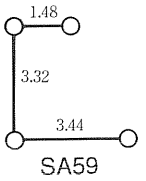
３類　　柱穴４本１組がコの字形に並ぶもの
SA59



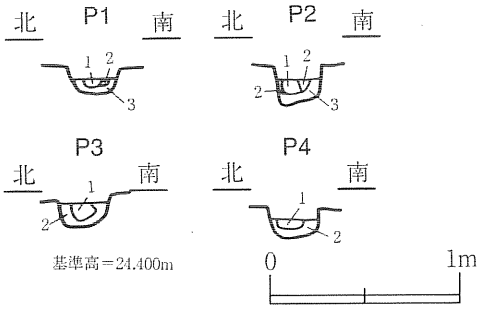
P	深さ(cm)	底面標高(m)
1	14.0	24.448
2	—	—
3	4.0	24.556
4	16.0	24.434
5	18.0	24.416

第４４図　ＳＤ０６柱列



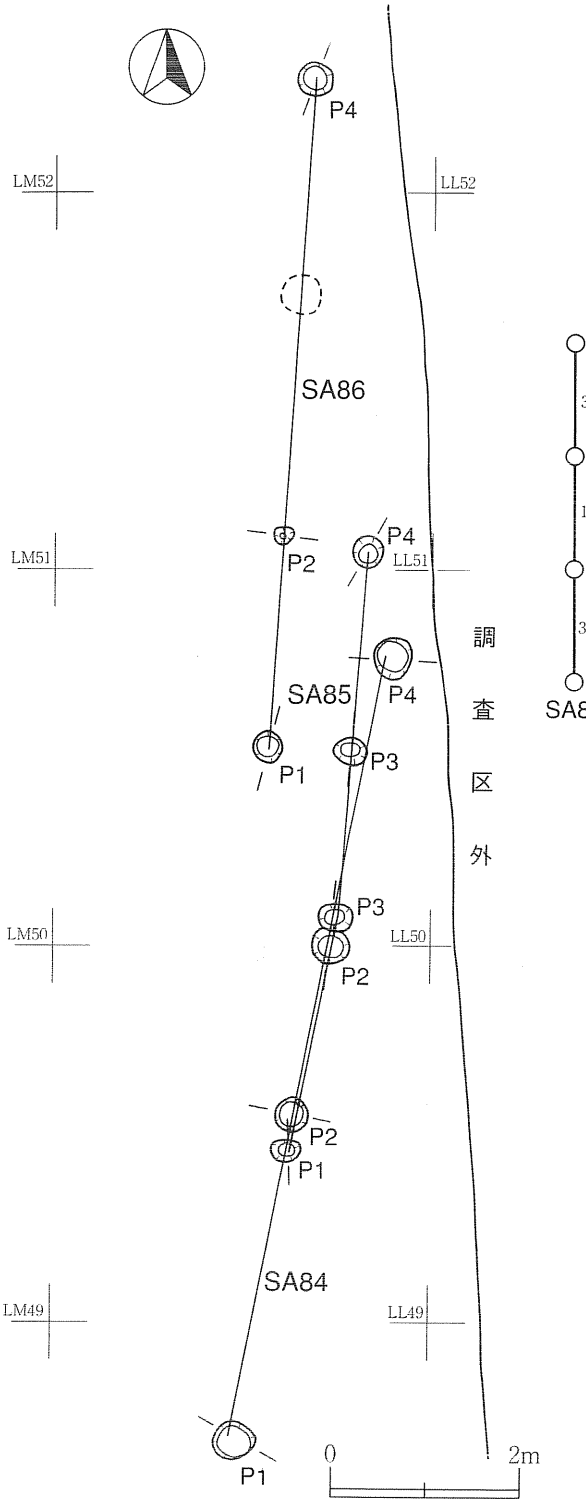


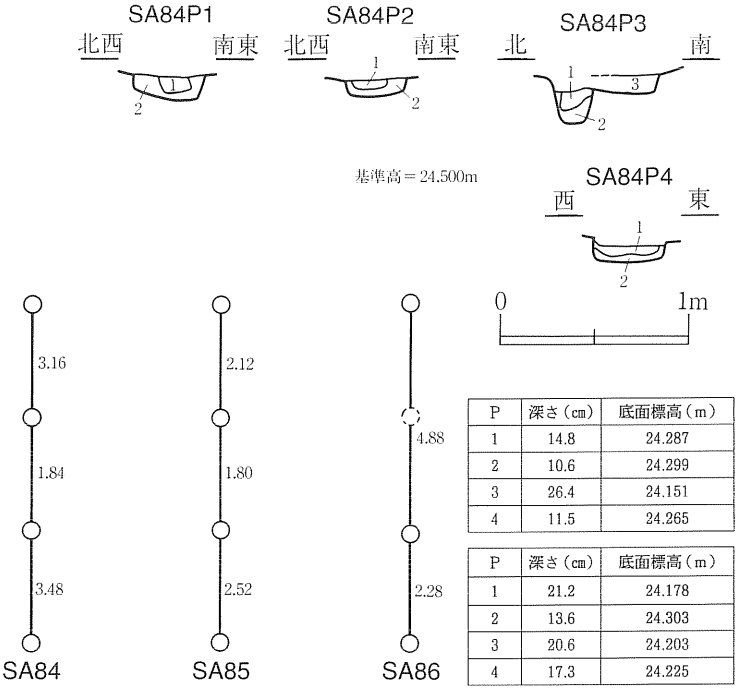
P	深さ(cm)	底面標高(m)
1	17.0	24.080
2	21.2	24.045
3	20.3	23.983
4	17.5	23.930



ＳＢ59Ｐ1
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物大粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土20%混じる。
3　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土40%混じる。
ＳＢ59Ｐ2
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒20%含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土30%混じる。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土に暗褐色土が20%混じる。
ＳＢ59Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小～中粒２％含む。炭化物小粒５％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30%混じる。
ＳＢ59Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。炭化物中粒５％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　極めてしまりあり。地山土40%混じる。

第４５図　ＳＡ５９柱列

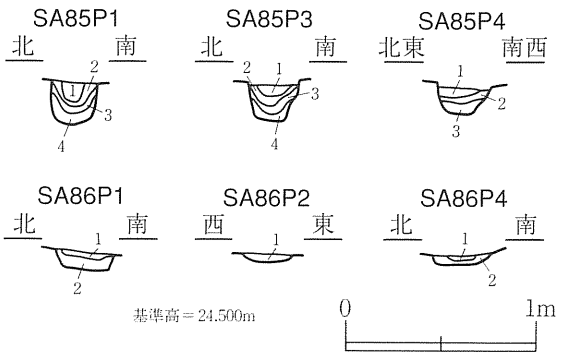




P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	14.8	24.287
2	10.6	24.299
3	26.4	24.151
4	11.5	24.265

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	21.2	24.178
2	13.6	24.303
3	20.6	24.203
4	17.3	24.225

P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	13.9	24.318
2	5.8	24.381
4	18.3	24.,260



ＳＢ84Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が20％混じる。

ＳＢ84Ｐ2
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ84Ｐ3
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物極小粒１％含む。
2　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土大塊に黒褐色土が20％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土大塊40％含む。

ＳＢ84Ｐ4
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりややあり。地山極小粒２％含む。炭化物中～小粒７％含む。
2　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ85Ｐ1
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒５％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山中～大塊20％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山中～大塊10％含む。炭化物小粒１％含む。
4　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山大粒～中塊40％含む。

ＳＢ85Ｐ3
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりややあり。地山小粒５％含む。
2　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山大粒30％含む。
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒15％含む。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土大塊に暗褐色土が20％混じる。

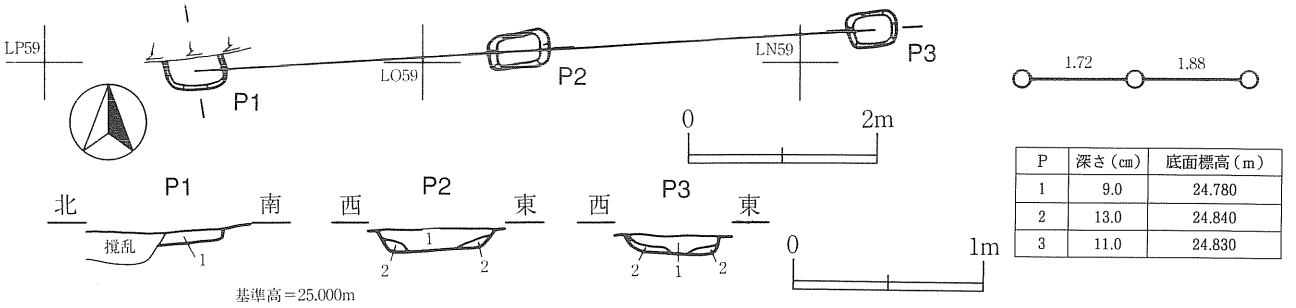
ＳＢ85Ｐ4
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒10％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山大～中粒30％含む。炭化物中粒１％含む。
3　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土大塊に暗褐色土が15％混じる。

ＳＢ86Ｐ1
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒10％含む。
2　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山大塊20％含む。

ＳＢ86Ｐ2
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＢ86Ｐ4
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2　10ＹＲ6／4　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が10％混じる。

第４６図　ＳＡ８４・８５・８６柱列



P	深さ（cm）	底面標高（m）
1	9.0	24.780
2	13.0	24.840
3	11.0	24.830

ＳＡ123Ｐ1・Ｐ2
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。粘性あり。地山粒子を多量に含む。
2　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　しまりあり。粘性あり。地山粒子を含む。

ＳＡ123Ｐ3
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。粘性あり。地山粒子を多量に含む。
2　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　しまりあり。粘性あり。地山粒子を含む。
3　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　極めてしまりあり。粘性あり。地山粒子を多量に含む。

第４７図　ＳＡ１２３柱列

SA06	検出位置	MJ57・58	重複遺構	SD02	層位	地山面
方向	北ー南	全長	3.16m	推定計画尺	北から３尺＋1.5尺＋２尺＋３尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		３尺が基本

SA59	検出位置	LL42・LM43	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	東―西―南―北	全長	8.24m	推定計画尺	東から５尺、南へ11尺、東へ11尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		11尺が基本

SA62	検出位置	LO40・41　LP41	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	北―南	全長	5.37m	推定計画尺	北から８尺＋10尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		８尺が基本

SA84	検出位置	LL48・49・50	重複遺構	SA85	層位	地山面
方向	北―南	全長	8.48m	推定計画尺	北から10尺＋６尺＋11尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		10尺が基本

SA85	検出位置	LL49・50・５	重複遺構	SA84	層位	地山面
方向	北―南	全長	6.44m	推定計画尺	北から７尺＋６尺＋８尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		７尺が基本

SA86	検出位置	LL50・51・52	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	北―南	全長	7.16m	推定計画尺	北から（８尺）＋（８尺）＋７尺	
柱穴の特徴	円形		出土遺物	なし		８尺が基本

SA110	検出位置	MG52・MH52	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	西―東	全長	3.0m	推定計画尺	西から10尺	
柱穴の特徴	円柱か？		出土遺物	なし		10尺が基本

SA111	検出位置	LP49	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	南―北	全長	1.10m	推定計画尺	北から４尺	
柱穴の特徴	浅い円形。第Ⅱ層黒褐色土が入る		出土遺物	なし		４尺が基本

SA112	検出位置	MA53･54、MB53、MC53	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	北―南―東	全長	12.6m	推定計画尺	北から７尺＋９尺＋８尺＋８尺＋東へ11尺	
柱穴の特徴	Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５は板状柱痕跡あり。		出土遺物	なし		８尺が基本

SA113	検出位置	LP49・LR49	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	西―東	全長	2.36m	推定計画尺	西から８尺	
柱穴の特徴			出土遺物	なし		８尺が基本

SA123	検出位置	LM59・LN59・LO59	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	西―東	全長	3.60m	推定計画尺	西から６尺＋６尺	
柱穴の特徴	方形		出土遺物	なし		６尺が基本

SA127	検出位置	LN53・LO53・LP53	重複遺構	なし	層位	第３層上面
方向	西―東	全長	6.96m	推定計画尺	西から９尺＋７尺＋８尺	
柱穴の特徴	Ｐ４・Ｐ３は板状柱痕跡あり		出土遺物	なし		８尺が基本

SA128	検出位置	LN52・LO52・LP52	重複遺構	SB47（新旧不明）	層位	第３層上面
方向	西―東	全長	4.76m	推定計画尺	北西から８尺＋８尺	
柱穴の特徴	Ｐ１は板状柱痕跡あり		出土遺物	なし		８尺が基本

SA129	検出位置	LQ48・49	重複遺構	SB105・106（新旧不明）	層位	地山面
方向	西―東―北	全長	4.16m	推定計画尺	西から７尺、北へ７尺	
柱穴の特徴			出土遺物	なし		７尺が基本

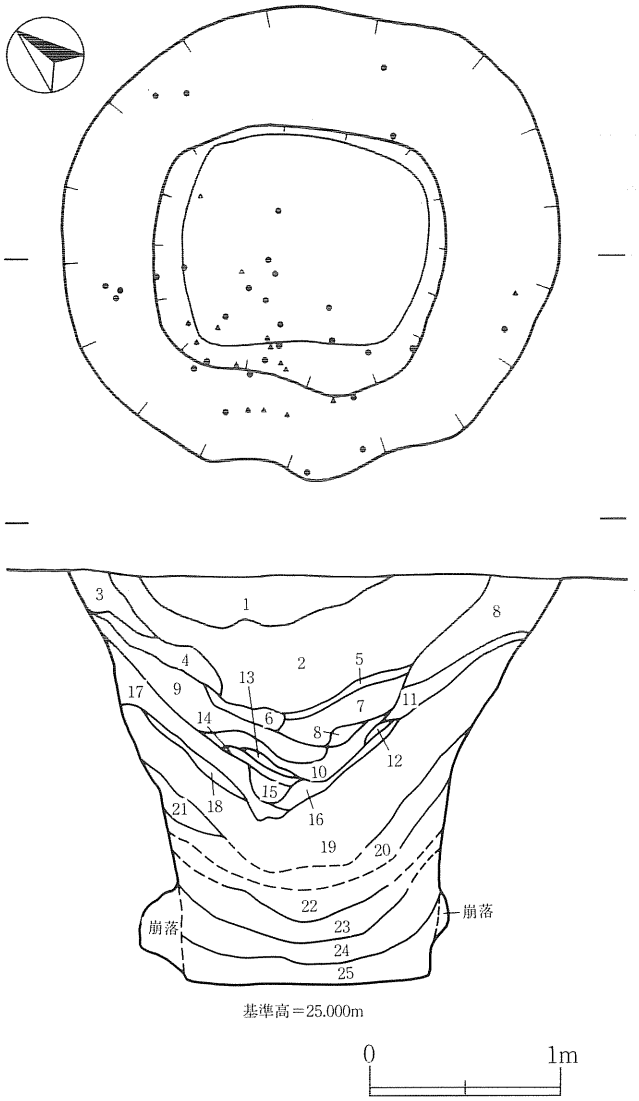
SA130	検出位置	LR49・LS49・50	重複遺構	なし	層位	地山面
方向	北―南―東	全長	3.24m	推定計画尺	北から４尺、東へ６尺	
柱穴の特徴			出土遺物	なし		５尺が基本

４．井戸跡

１基検出した。SX33鉄滓捨場に完全に覆われており、SN98製鉄炉など製鉄関係遺構が造営され操業する時点では、すでに廃絶し壁の崩落と周囲からの土砂流入によって埋没が上部まで進んでいたことが分かる。下部は隅丸方形で上部が逆円錐形であるが埋土中に、上部の壁の崩落土が多く混じっており、本来の形態は上部まであった可能性がある。下部の側壁には底面から70―120cm の高さまで鉄分の著しい沈着が見られる。調査時点では湧水はなかったが、使用時の湧水水位は比較的高かったようである。側板や井桁はない。

埋土中から出土した遺物はすべて廃絶し埋没後に堆積したものである。下部からは出土していない。開口状態で自然流入土とともに土師器・鉄滓が流入または投入され、埋没が進んで深さが約90cm の浅い凹みになったところで、人為的に埋め立てられている。埋め立て土にも鉄滓・土師器が含まれ、SX33鉄滓捨場の堆積土に連続する。SA45板塀跡もSE102井戸跡と同様にSX33鉄滓捨場に完全に覆われて検出されたことから、いずれも製鉄との直接的関係はうすいと考えられる。

SE102	位　　置	LM・LN48	層　　位	第３層上面	重複遺構	SE102→SX33
形　　態	上部は円形、下部は隅丸方形	上端径	2.50m ～ 2.20m		下端径	1.54m ～ 1.36m
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入、上部に土器片・鉄滓の投入あり。		深　さ	220cm	底面標高	22.556m
遺　　物	土師器片、鉄滓		想定水位	70～120cm	湧　水	なし
特　　徴	素掘り。下部埋没後の大きな穴に土器片・鉄滓を多量に投入、最後は人為的に埋め立てている。					



ＳＥ102
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒10%含む。炭化物小粒20%含む。
2　10ＹＲ6／3　にぶい黄橙色シルト　しまりあり。（地山土の再堆積）40%、10ＹＲ5／6　黄褐色シルト40%、10ＹＲ2／3　黒褐色シルト20%の混土。
3　10ＹＲ2／1　黒色シルト　ややしまりなし。地山極小粒５%含む。炭化物極小粒２%含む。
4　10ＹＲ3／4　暗褐色砂質シルト　ややしまりあり。地山極小粒20%、地山中粒５%含む。
5　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　ややしまりなし。地山土30%、黒色土10%混じる。
6　10ＹＲ2／1　黒色シルト　しまりなし。地山小粒10%含む。
7　２層と同じ。
8　６層と同じ。
9　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10～15%混じる層と10ＹＲ4／4褐色シルト地山土30～50%混じる層の互層、各４層ある。
10　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒10%含む層と10ＹＲ4／6褐色シルト中粒層黒褐色土10～20%混じる層の互層、各２層ある。
11　８層と同じ。
12　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色細砂層。10ＹＲ1.7／2黒色土が20%混じる。
13　10ＹＲ1.7／2　黒色シルト　ややしまりあり。細砂極小粒２%含む。
14　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色細砂層。10ＹＲ2／2黒褐色シルト30%混じる。
15　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30%混じる。
16　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10%混じる。
17　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。地山土に黒色土が20%混じる層（２層）と10ＹＲ2／3　黒褐色シルトに地山土30%混じる層（１層）の互層。
18　１６層と同じ。
19　１７層と同じ。　10ＹＲ5／6黄褐色シルト層（５層）と10ＹＲ2／3黒褐色シルト（５層）の互層。
20　10ＹＲ7／2　にぶい黄橙色細砂混じりシルト　しまりあり。暗褐色土10%混じる。
21　20に同じ。　ややしまりあり。
22　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。20層の土が10%混じる。
23　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりなし。地山土10%混じる。湿性大、板、木の腐った状態のものを多く含む。
24　20に同じ。
25　10ＹＲ5／4　にぶい暗褐色シルト　しまりなし。植物体少量含む。

第４８図　ＳＥ１０２井戸跡

５．土坑

合計31基を検出した。形態・埋土・遺物の出土状況等を勘案し、以下の８種類に分類する。

１類ａ：平面形は円形または楕円形。埋土は人為的埋め立て。埋土中には土師器破片・フイゴの羽口破片・鉄滓が多く混じるが、小破片が多く完形品はほとんどない。遺物の種類や量に規則性がなく壺などの須恵器や祭祀的遺物は含まれない。焼土粒や焼土ブロックが混じるものもある。

SK01･20･25･39･53･118･119･76･99･107

１類ｂ：平面形は円形または楕円形。埋土中には遺物が多く混じる。遺物の特徴は１類ａと同様である。埋土は自然流入。地山土粒が混じる。

SK (16)58･103(131)･118(120)

２類　：平面形は不整形。円形や楕円形の小土坑が多数重複して集合した状態で、底面は凹凸が著しい。埋土には地山土粒が多く混じる部分がある。埋土の下部では人為的埋め立てと思われる部分もある。上部は自然流入。埋土中には遺物が多く混じるがほとんどは破片である。

SK16･131･120･101

３類　：平面形は円形。直径１ｍ前後。浅い中華鍋状の形状である。底面から上端部まで全面的に薄い炭化物層が形成されている。埋土中に炭化物が多く混じる。埋土は自然流入。

SK31･35･36

４類　：平面形は不整円形。上端部の長軸は、約１ｍ70cm。須恵器壺が含まれる。埋土は人為的埋め立て。

SK57

５類　：平面形は円形または楕円形。やや深く円筒形の形状である。直径は80cm。埋土は地山土が多く混じり、人為的埋め立て。

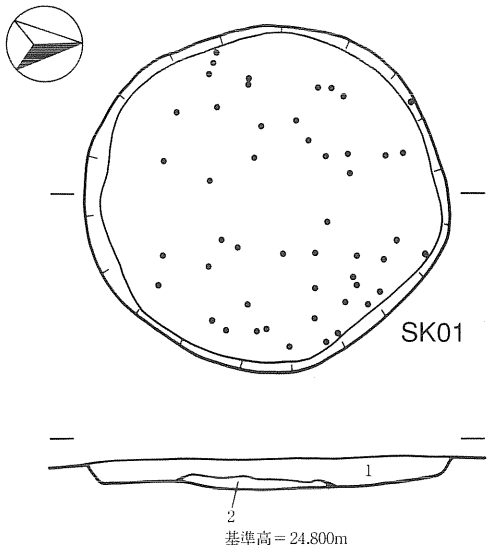
SK41･44･132

６類　：平面形は不整円形や隅丸方形など。上端の最大径は１ｍ未満。埋土は自然流入。埋土中には遺物が少量含まれるが、流入土に混じったもの。

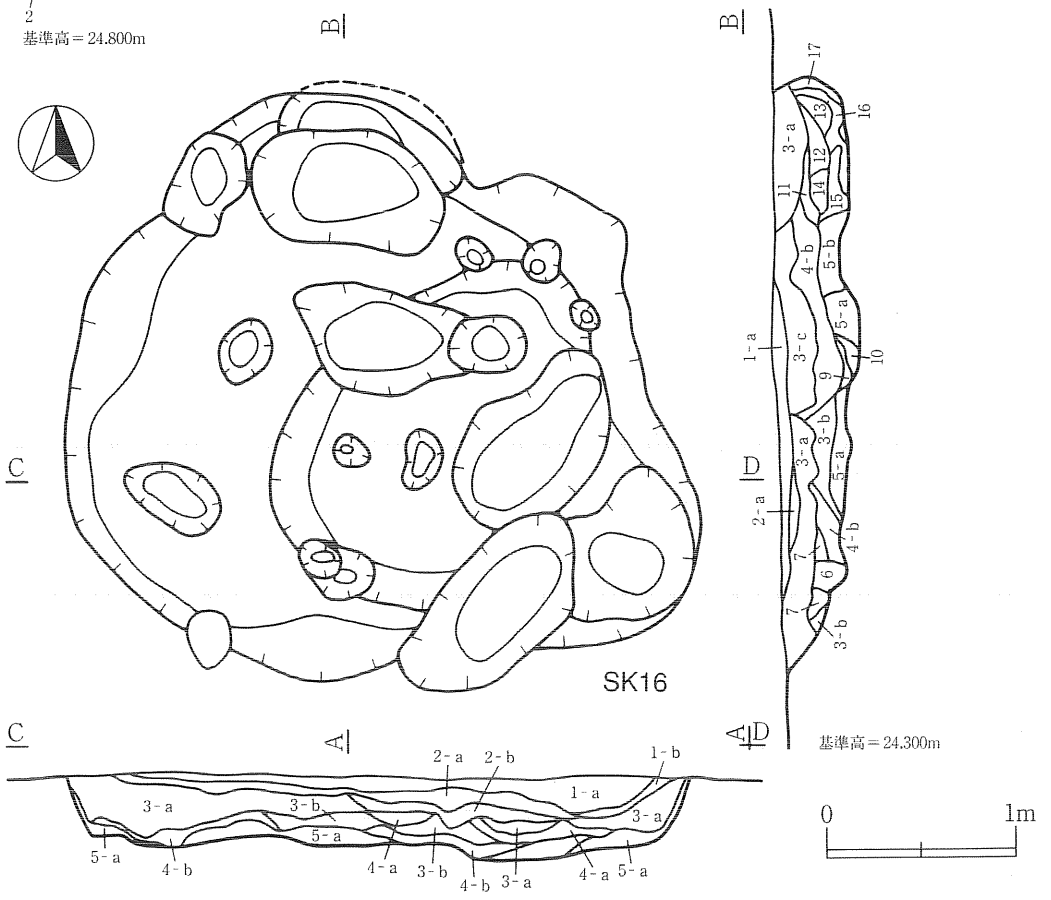
SK21･22･23･24･69･70

上記分類毎に、土坑の機能を推定する。

１類ａは、埋土が人為的埋め立てで出土遺物は埋め立て時に投入されたと推測される。祭祀遺構や製鉄炉下部の防湿構造とする積極的根拠もないことから、廃棄物・不要物を投入し埋め立てた廃棄用土坑と考えられる。１類ｂも同様に廃棄用土坑と考えられるが埋め立てられておらず、ある程度長期間継続して使用されたものであろう。１類ａはその場所の再利用を前提にし、１類ｂは周辺遺構群の中では比較的最終段階に近い時期にも機能していた可能性がある。２類は、形態や底面の状態から、粘土（地山土）採掘坑の可能性が高い。粘土（地山土）の供給先としては製鉄炉の炉壁等が考えられる。ＳＫ１６では、地山土採掘後に廃棄用土坑として利用されている。３類は、小規模で簡便な炭焼き施設と考えられる。４類は、規模・埋土・須恵器壺の出土からみて、土坑墓の可能性がある。５類は、形態からみて柱穴と考えられる。６類は、１～５類のように機能を推定することができないものを一括した。

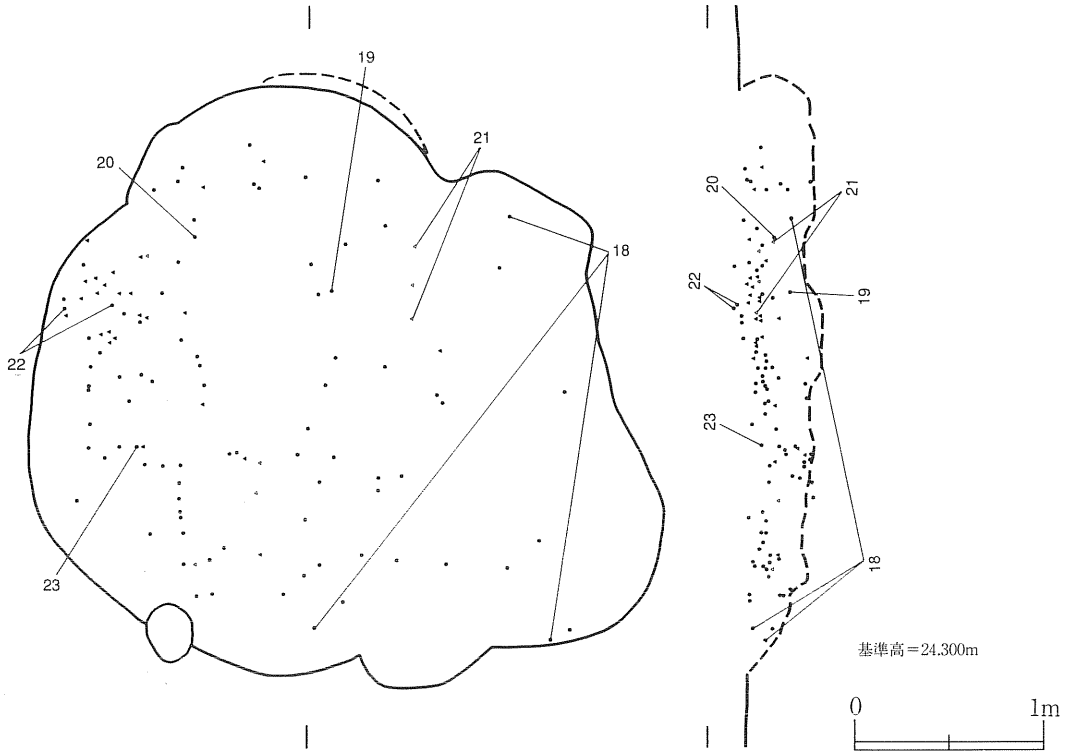


ＳＫ01
1　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物粒を含む。
2　10ＹＲ4／8　赤褐色シルト　焼土。ややしまりあり。焼土大粒・炭化物大粒を多く含む。



ＳＫ16
1－ａ　10ＹＲ1.7／1　黒色シルト　ややしまりあり。黒褐色土小粒１％含む。
1－ｂ　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。1－ａ層と3－ａ層が10％混じる。
2－ａ　10ＹＲ2／1　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
2－ｂ　10ＹＲ3／2　黒褐色粘土質シルト　しまりあり。地山土15％混じる。炭化物中～大粒１％含む。
3－ａ　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。炭化物小粒１％含む。
3－ｂ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒１％含む。炭化物小粒１％含む。
3－ｃ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。
4－ａ　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。炭化物小粒１％含む。
4－ｂ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土40％混じる。炭化物小粒１％含む。
5－ａ　10ＹＲ5／3　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色～にぶい黄褐色土が30％混じる。
5－ｂ　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土に黒褐色～暗褐色土が40％混じる。
6　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒１％含む。
7　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物中～小粒１％含む。
8　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。炭化物小粒１％含む。
9　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土10％混じる。
10　10ＹＲ4／2　灰黄褐色粘土質シルト　しまりあり。地山土30％混じる。
11　10ＹＲ4／2　にぶい黄褐色粘土質シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
12　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小～中粒２％含む。焼土小粒２％含む。
13　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物極小粒２％含む。
14　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物小～中粒５％含む。焼土が20％混じる。
15　10ＹＲ3／2　黒褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土50％混じる。炭化物小粒１％含む。
16　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒２％含む。炭化物小粒２％含む。
17　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる。炭化物小粒１％含む。

第４９図　ＳＫ０１・１６土坑



第５０図　ＳＫ１６土坑遺物出土分布図

SK01	位　置	MF・MG58	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	円形	上端径	1.94m ～ 1.84m		下端径	1.78m ～ 1.72m	
埋没過程	焼土塊・土器片・鉄滓を投入し、人為的に埋め立て。		深　さ	18cm	底面標高	24.618m	
遺　物	土師器破片・鉄滓。図示なし。				性　格	廃棄用土坑	
特　徴	SK20・25と同種の廃棄用土坑。土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。						

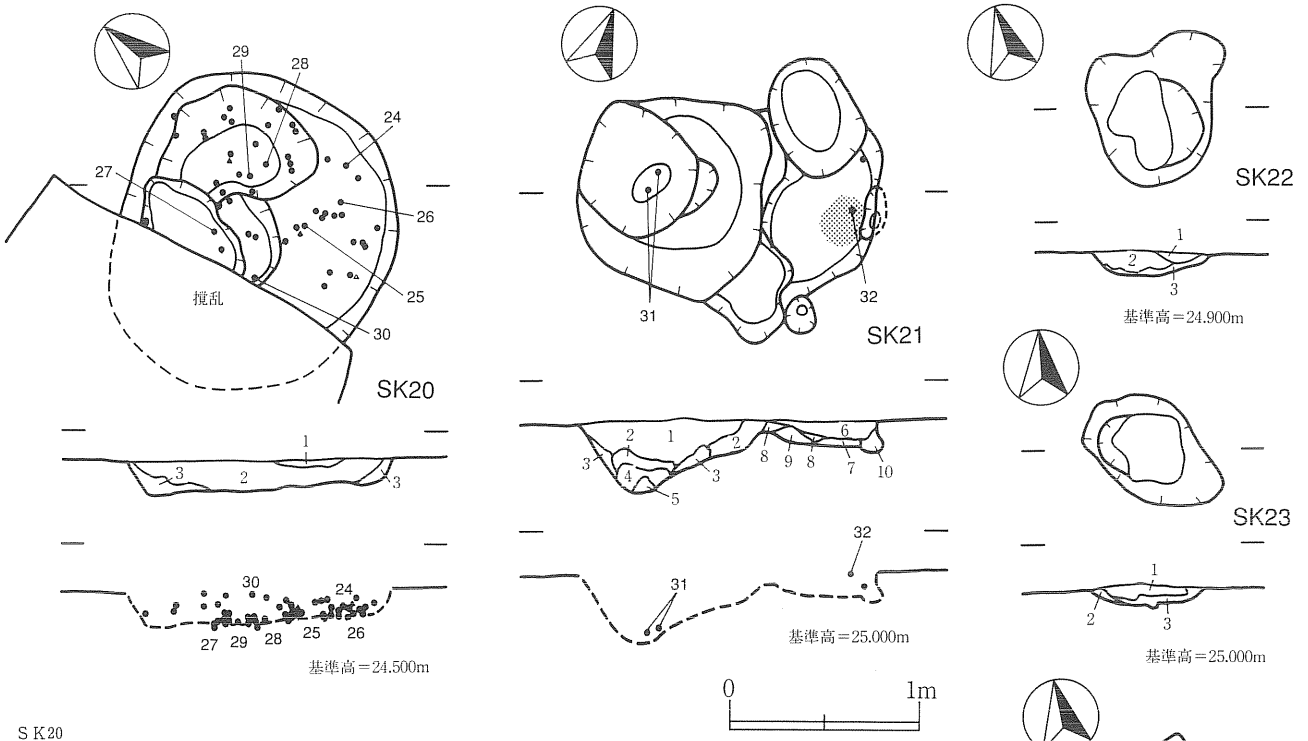
SK16	位　置	LP41・LP42	層　位	地山面	重複遺構	SK16→SB60P13	
形　態	不整円形	上端径	3.52m ～ 2.90m		下端径	3.02m ～ 2.88m	
埋没過程	下部は地山土の多く混じる土で埋め戻し。上部は自然流入		深　さ	55cm	底面標高	23.582m	
遺　物	土師器（坏18～23）、鉄滓、石器（21）				性　格	粘土採掘坑	
特　徴	凹凸が多く、多数の不整形土坑の集合体状。粘土質シルトの地山土を掘り込み、その下の粘土層まで達している。						

SK20	位　置	MG51	層　位	地山面	重複遺構	SK20→撹乱(範確トレンチ)	
形　態	楕円形	上端径	(1.58m) ～ (1.26m)		下端径	(1.38m) ～ (1.18m)	
埋没過程	土器片・鉄滓・羽口を投入し、人為的に埋め立て。		深　さ	19cm	底面標高	24.151m	
遺　物	土師器（坏24～27、甕29）、フイゴの羽口（28）、鉄滓				性　格	廃棄用土坑	
特　徴	SK01、25と同種。土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。						

SK21	位　置	MD54	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	不整円形	上端径	1.58m ～ 1.52m		下端径	1.20m ～ 0.72m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。		深　さ	39cm	底面標高	24.477m	
遺　物	土師器（高台付坏31・鍋32）				性　格	不明	
特　徴	土坑が重複している可能性あり。土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。						

SK22	位　置	MD・ME53	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	不整楕円形	上端径	0.86m ～ 0.74m		下端径	0.44m ～ 0.50m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。		深　さ	13cm	底面標高	24.698m	
遺　物	土師器、鉄滓。図示なし。				性　格	不明	
特　徴	土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。検出した時点では隅丸方形プランだった。						

SK23	位　置	MD53	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	楕円形	上端径	0.79m ～ 0.51m		下端径	0.40m ～ 0.40m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。		深　さ	10cm	底面標高	24.772m	
遺　物	なし。				性　格	不明	
特　徴	土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。						



ＳＫ20
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒５％含む。炭化物中粒２％、焼土小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大～中粒10％含む。炭化物大～中粒５％、焼土大～中粒３％含む。
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。炭化物小粒１％含む。

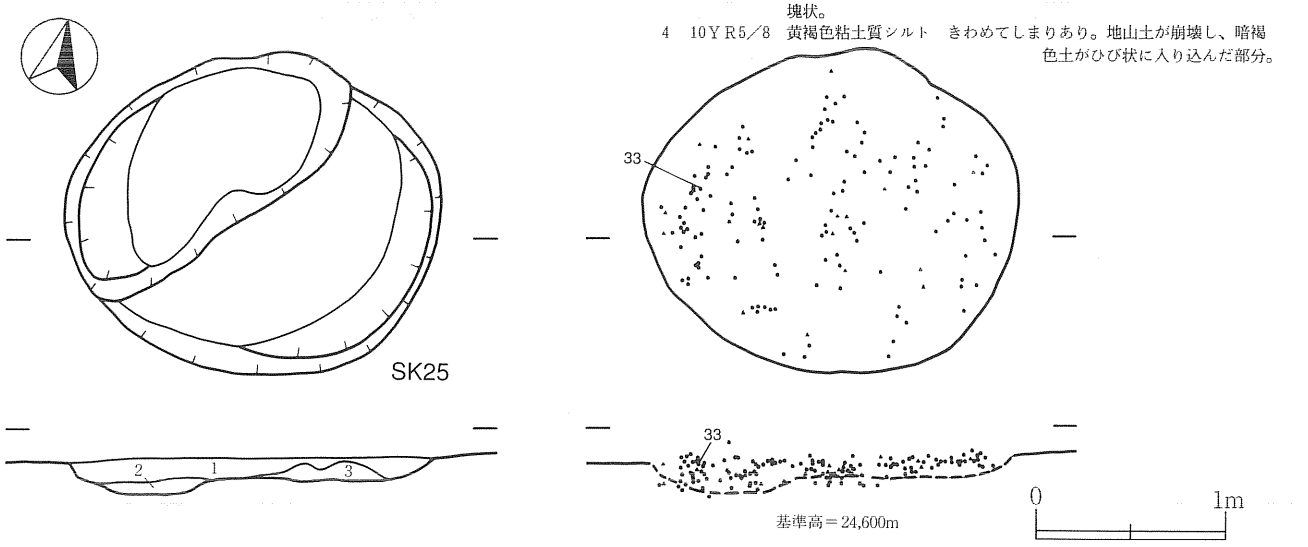
ＳＫ21
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒５％含む。炭化物中粒５％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物極小粒１％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土40％混じる。
4　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒１％含む。
5　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。
6　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物極大～中粒５％含む。
7　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山中粒５％含む。炭化物大～中粒５％、焼土大～中粒7％含む。
8　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物中粒５％含む。焼土大～中粒２％含む。
9　10ＹＲ4／4　褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。
10　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。炭化物小粒１％含む。

ＳＫ22
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山極小粒１％含む。炭化物中～小粒３％含む。
3　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山中～小粒30％含む。

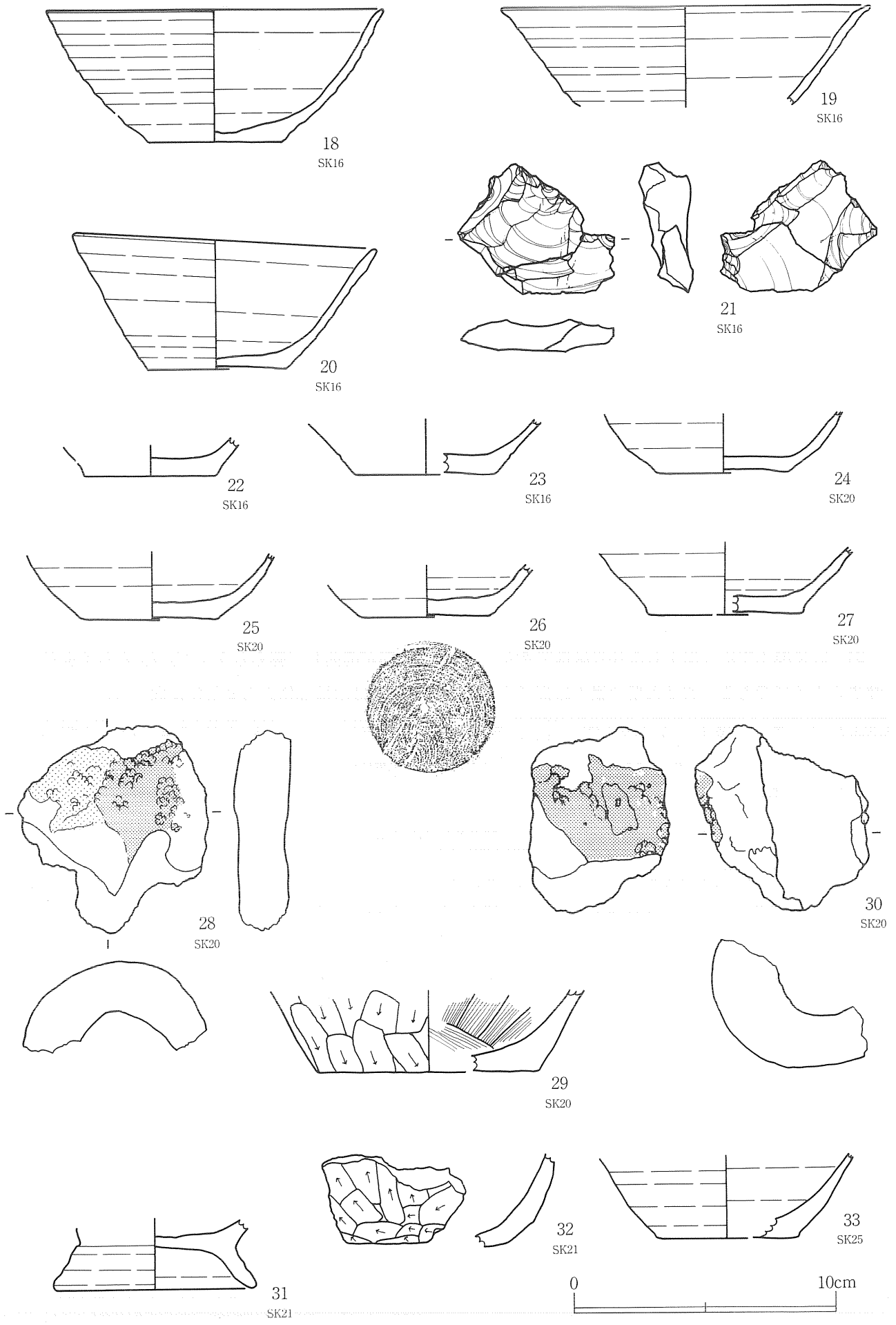
ＳＫ23
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒10％含む。炭化物小粒１％、焼土小粒１％含む。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土に黒褐色土が30％混じる。

ＳＫ24
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中～大粒10％含む。炭化物中粒１％、焼土大～中粒２％含む。
2　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土（10ＹＲ5／8シルト質粘土）と暗褐色土の混土。暗褐色土が40％混じる。炭化物、焼土を含まない。

ＳＫ25東西ベルト
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物中粒５％、焼土中粒4％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30％混じる。地山土は小塊状。
4　10ＹＲ5／8　黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。地山土が崩壊し、暗褐色土がひび状に入り込んだ部分。



第５１図　ＳＫ２０・２１・２２・２３・２４・２５土坑



第５２図　土坑内出土遺物（１）ＳＫ１６・２０・２１・２５

SK24	位　　置	MG55		層　　位	地山面	重複遺構	なし	
形　　態	不整隅丸方形		上　端　径	0.69m ～ 0.57m		下　端　径	0.62m ～ 0.51m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。				深　　さ	5cm	底面標高	24.537m
遺　　物	土師器破片。図示なし。						性　　格	不明
特　　徴	土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。							

SK25	位　　置	MF52		層　　位	地山面	重複遺構	なし	
形　　態	楕円形		上　端　径	1.97m ～ 1.62m		下　端　径	1.84m ～ 1.48m	
埋没過程	土器片・鉄滓を投入し、人為的埋め立て。				深　　さ	20cm	底面標高	24.249m
遺　　物	土師器（坏33）、鉄滓、フイゴの羽口						性　　格	廃棄用土坑
特　　徴	SK01・20と同種。土坑の下部のみ残存し、上部は削平されている。							

土坑内出土遺物

SK16

坏では体部が湾曲して膨らむタイプ（18）と、直線的に外傾するタイプ（19･20･22･23）がある。口縁部は直線的につくられる傾向が強いようだが19は外反している。甕は小破片が多く図示していない。21は二次加工のある剥片である。SK16土坑の埋没過程で土砂とともに混入したもの、２点が接合した。素材剥片の打面側・末端側ともに打瘤を含めて切断除去されている。末端側は切断面を打面として裏面の両側縁に二次加工を施している。その後に裏面右側に二次加工を施し成形している際に、加撃が強すぎて折れたと思われる。刃部は作出されておらず、おそらく不定形石器を作成する途中で折れてしまったため廃棄されたものであろう。

SK20

24～27は埋土中から出土した坏の底部である。24･25は体部が湾曲して膨らむタイプ。26･27は直線的に外傾するタイプである。29は大型の甕の底部で平底である。外面は口縁部側から底部側に向かってヘラケズリ

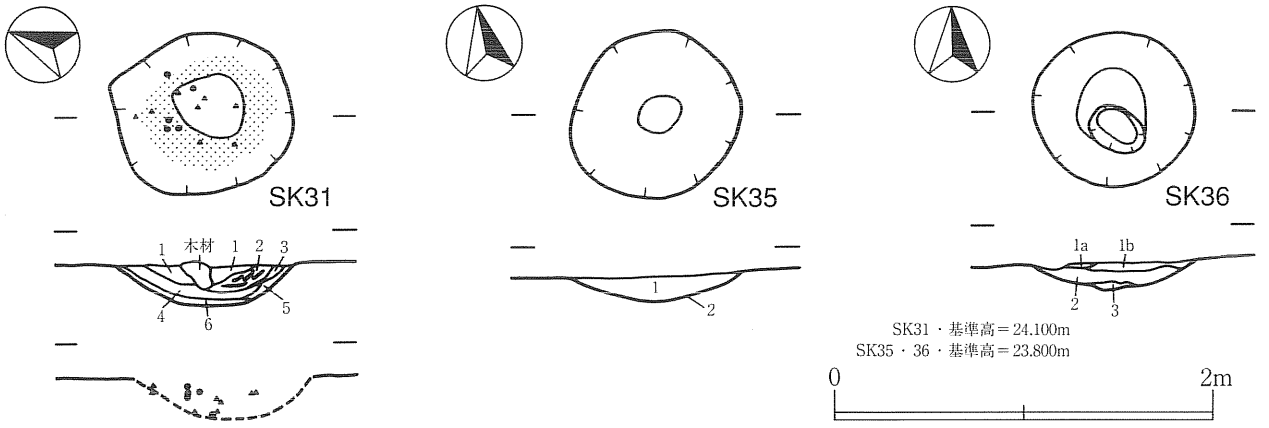
番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
18	SK16	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口45% 底100%	細砂混	良	(13.0)	5.2	5.1	左 — 右30.0°	53
19	SK16	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口15% 底なし	細砂混	良	(14.0)	—	—	—	53
20	SK16	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口84% 底100%	微砂混 粗砂少混	良	11.7	5.4	5.3	左25.0° 右34.0°	53
22	SK16	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 棒状圧痕	口なし 底67%	微砂混	良	—	(5.2)	—	—	53
23	SK16	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底25%	微砂混	良	—	(5.5)	—	—	53
24	SK20	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り	口なし 底67%	細砂混	良	—	(5.1)	—	—	53
25	SK20	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底100%	細砂混	良	—	5.2	—	—	53
26	SK20	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 板状圧痕	口なし 底100%	微砂混 粗砂少混	良	—	5.2	—	—	53
27	SK20	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底50%	中砂混	良	—	(6.0)	—	—	53
29	SK20	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↓	マメツ	口なし 底25%	粗砂多混	良	—	(8.5)	—	—	53
31	SK21	土師器	高台付坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	マメツ	口なし 底100%	細砂混	良 ↓ 二次受熱	—	(6.0) 高台径 (7.6)	—	—	53
32	SK21	土師器	鍋	(内) 指オサエ→ナデ (外) ヘラケズリ↑	(ヘラケズリ)	口なし 底5%以下	細砂多混	良	—	(—)	—	—	53
33	SK25	土師器	坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底33%	細砂少混	やや良	—	(5.5)	—	—	53

番号	出土地点	種別	特　　徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
28	SK20	羽口	30と同一個体か。鉄滓は付着せず。	スサ入り	○	○	○	(8.0)	(7.2)	(3.9)	—	—	53
30	SK20	羽口	28と同一個体か。鉄滓は微量付着。	スサ入り	○	○	○	(7.2)	(7.4)	(3.5)	—	—	53

番号	出土地点	器　種	特　　徴	刃部角	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
21	SK16	二次加工のある剥片	不定形石器の未製品か。	—	5.0	6.0	2.1	36.4	53

第６表　土坑出土遺物観察表（１）SK16・SK20・SK21・SK25

調整されている。28･30はフイゴの羽口の先端部に近い部分である。表面が溶融しガラス化した部分や鉄滓が付着した部分がある。



ＳＫ31
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。生の木根が入り、ガラス片が出土。
2　10ＹＲ2／2　黒褐色中砂混じりシルト　しまりあり。中砂は10％混じる。炭化物大粒（10～30ｍｍ）が層状に入る。中砂も層状に流入した状態で入る。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色中砂混じりシルト　しまりあり。中砂は20％混じる。炭化物小粒５％含む。
4　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。中砂５％混じる。炭化物小粒が層状に入る。中砂も層状に流入した状態で入る。
5　10ＹＲ4／2　灰黄褐色シルト　きわめてしまりあり。炭化物小粒２％含む。
6　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　しまりあり。粘性ややあり。底面近くには、厚さ5ｍｍの炭化物層がある。層中にも炭化物小粒は入るが砂粒は入らない。

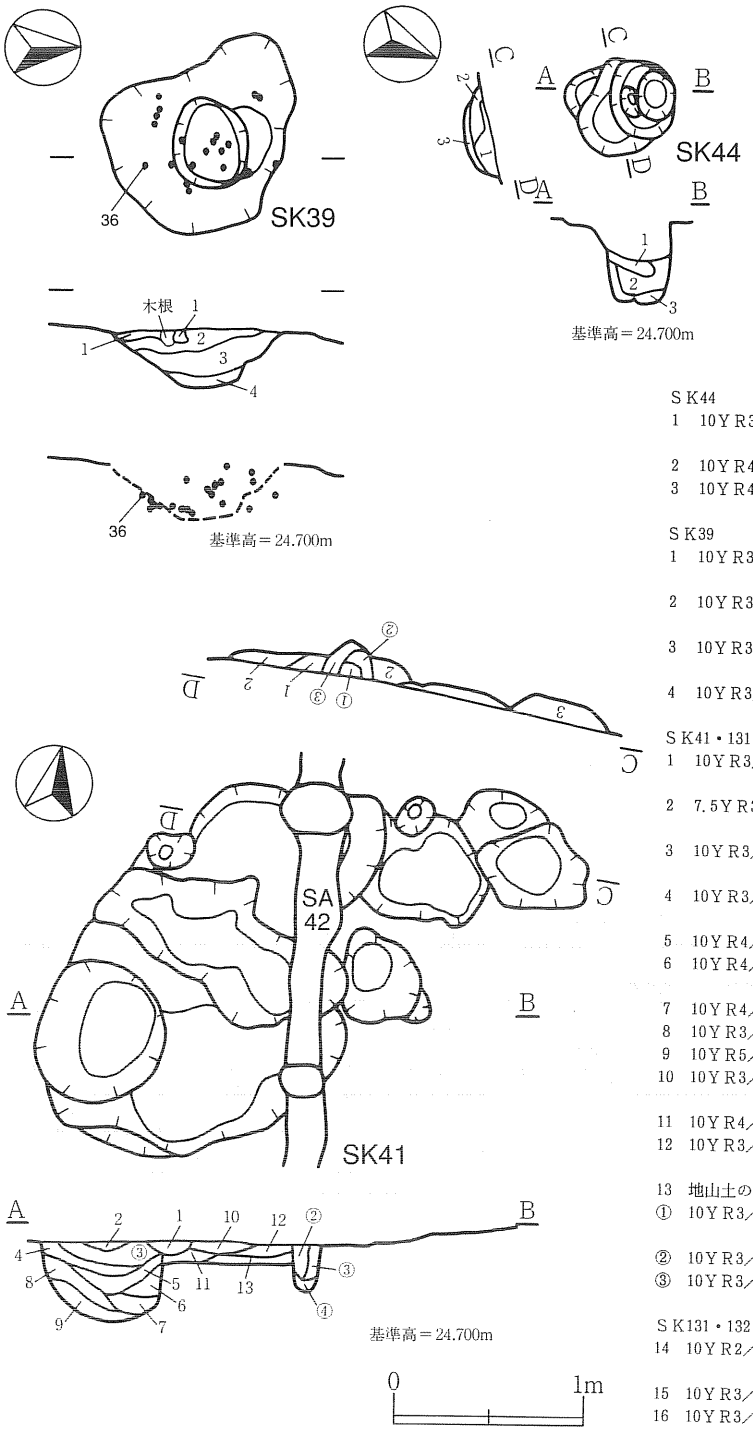
ＳＫ35
1　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物２％含む。10ＹＲ5／6　黄褐色粘土小塊焼土中粒１％及び中粒２％、7.5ＹＲ4／6　褐色焼土中粒１％含む。
2　7.5ＹＲ1.7／1　黒色　うすい炭の層である。しまり弱くブヨブヨしている。真黒である。

ＳＫ36
1－ａ　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト質粘土　かたくしまっている。　粘性弱。遺構確認面まで削平され盛土整地された際に、めり込んだ盛土。
1－ｂ　10ＹＲ4／4褐色粘土＋10ＹＲ4／6褐色シルト質粘土＋10ＹＲ5／6黄褐色シルト質粘土　かたくしまっている。　粘性弱。遺構確認面まで削平され盛土整地された際に、めり込んだ盛土。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。粘性あり。炭化物中粒２％含む。7.5ＹＲ4／6　褐色焼土中粒２％含む。
3　7.5ＹＲ4／3　褐色シルト　しまりあり。粘性あり。炭化物中粒１％含む。

第５３図　ＳＫ３１・３５・３６土坑

SK31	位　置	ME44・45	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	円形	上端径	0.92m ～ 0.85m		下端径	0.70m ～ 0.61m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。			深　さ	24cm	底面標高	23.698m
遺　物	土師器破片、鉄滓。図示なし。					性　格	炭焼坑
特　徴	底面に薄く炭化物層が形成されている。SK35・36と同種。						

SK35	位　置	MF41	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	円形	上端径	0.90m ～ 0.88m		下端径	0.26m ～ 0.21m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。			深　さ	15cm	底面標高	23.469m
遺　物	なし。					性　格	炭焼坑
特　徴	底面に薄く炭化物層が形成されている。SK31･36と同種。						



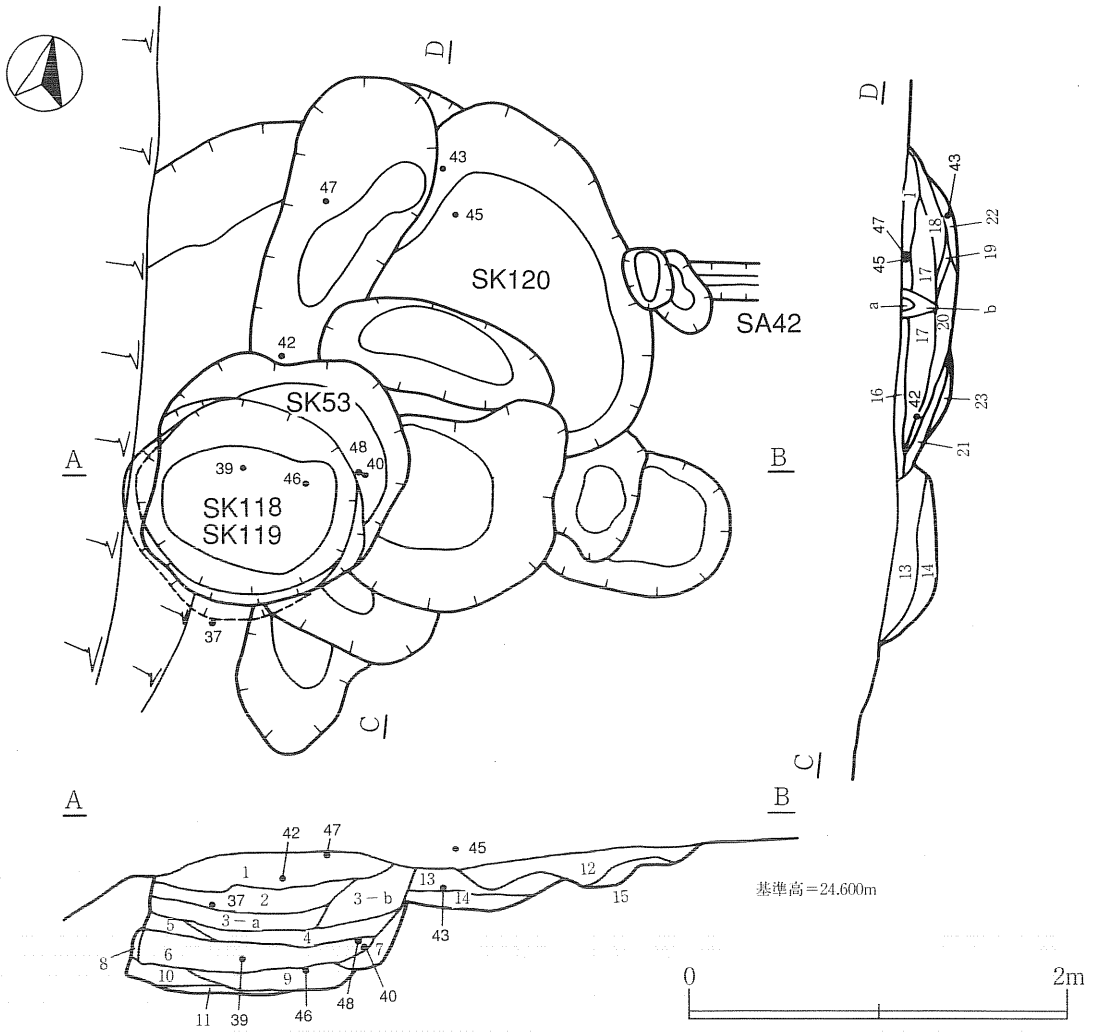
ＳＫ44
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物小粒１％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＫ39
1　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。炭化物小粒５％、焼土中粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山極小粒１％含む。炭化物中～小粒５％、焼土中粒１％含む。
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５含む。炭化物極小粒１１％含む。
4　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。

ＳＫ41・131・ＳＤ42Ａ－Ｂ
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土小粒10％含む。炭化物小粒２％、焼土中～小粒１％含む。（ＳＫ41）
2　7.5ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土小粒１％含む。炭化物大～中粒５％、焼土中粒５％含む。（ＳＫ41）
3　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物中～小粒５％、焼土中粒２％含む。（ＳＫ41）
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小～中粒５％含む。炭化物中～小粒２％、焼土小粒１％含む。（ＳＫ41）
5　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土60％混じる。（ＳＫ41）
6　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土50％混じる。炭化物小粒２％含む。（ＳＫ41）
7　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりなし。地山土30％混じる。（ＳＫ41）
8　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。（ＳＫ41）
9　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。（ＳＫ41）
10　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。炭化物大粒２％含む。（ＳＫ131）
11　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土50％混じる。（ＳＫ　131）
12　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小粒５％含む。炭化物大粒２％含む。（ＳＫ131）
13　地山土の再堆積層（倒木痕の地山部分）（ＳＫ131）
①　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小粒５％含む。炭化物中～小粒５％、焼土大～小粒５％含む。（ＳＡ42）
②　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。（ＳＡ42）
③　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。（ＳＡ42）

ＳＫ131・132Ｃ－Ｄ
14　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土小粒１％含む。炭化物小粒１％含む。（ＳＫ131）
15　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。（ＳＫ131）
16　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土小粒５％含む。（ＳＫ131）

第５４図　ＳＫ３９・４１・４４・１３１・１３２土坑



ＳＫ53・118・119・120Ａ－Ｂ

1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中塊10％含む。炭化物大粒５％、焼土大粒～小粒２％含む。（ＳＫ53）

2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。炭化物大粒５％含む。焼土大塊～中粒７％含む。（ＳＫ53）

3－a　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。炭化物大粒～小塊２％含む。焼土小粒２％含む（ＳＫ53）

3－b　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土15％混じる。炭化物中粒２％含む。焼土中粒～小粒２％含む（ＳＫ53）

4　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土15％混じる。炭化物小粒２％含む。焼土小粒１％含む。（ＳＫ118）

5　10ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。（ＳＫ118）

6　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物中粒５％含む。焼土中粒１％含む。（ＳＫ118）

7　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土７％混じる。炭化物小粒５％含む（ＳＫ118）

8　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる（ＳＫ119）

9　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土10％混じる。炭化物小粒１％含む。（ＳＫ119）

10　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりなし。地山崩壊土40％混じる。（ＳＫ119）

11　10ＹＲ2／1　黒色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む（ＳＫ119）

12　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土５％混じる。炭化物小粒２％含む。（ＳＫ120）

13　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒５％含む。（ＳＫ120）

14　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土30％混じる。（ＳＫ120）

15　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土30％混じる（ＳＫ120）

ＳＫ53・118・119・120Ｃ－Ｄ

16　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土20％混じる。炭化物中粒５％含む。焼土小粒～中粒７％含む。（ＳＫ120）

17　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。炭化物中～小粒２％含む。（ＳＫ120）

18　7.5ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりなし。炭化物小粒１％、地山小粒２％含む。（ＳＫ120）

19　10ＹＲ6／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土10％混じる（ＳＫ120）

20　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土60％混じる。（ＳＫ120）

21　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山小～中粒５％含む。炭化物小粒１％含む。（ＳＫ120）

22　7.5ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土10％混じる。（ＳＫ120）

23　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土90％、暗褐色土10％混じる。（ＳＫ120）

a　10ＹＲ4／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山大粒20％含む。炭化物小粒５％、焼土大粒７％含む。（ＳＡ42）

b　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山30％混じる。炭化物小粒１％含む。（ＳＡ42）

第５５図　ＳＫ５３土坑

SK36	位　置	MG・MH42	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	円形	上端径	0.83m ～ 0.82m		下端径	0.38m ～ 0.42m	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。		深　さ	13cm	底面標高	23.475m	
遺　物	なし。				性　格	炭焼坑	
特　徴	底面に薄く炭化物層が形成された痕跡がある。SK31・35と同種。						

SK37	位　置	MG41	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	円形	上端径	m ～ m		下端径	m ～ m	
埋没過程	人為的埋め立て。		深　さ	cm	底面標高	m	
遺　物	土師器片・鉄滓・フイゴの羽口（34）・炉壁。				性　格	廃棄用土坑	
特　徴	鉄滓と羽口が多量に充填されている。鉄滓は流動滓を含まない。鍛冶に関連する廃棄用土坑である。						

SK39	位　置	MF53･54、ME54	層　位	地山面	重複遺構	SK39→倒木痕	
形　態	不整楕円形	上端径	1.10m ～ 1.00m		下端径	0.56m ～ 0.49m	
埋没過程	土器片を投入し、人為的に埋め立て。		深　さ	33cm	底面標高	24.476m	
遺　物	土師器（坏35）、フイゴの羽口、鉄滓。				性　格	廃棄用土坑	
特　徴	遺物は破片のみで、土坑下部に多い。小規模な廃棄用土坑である。						

SK41	位　置	ME・MF56	層　位	地山面	重複遺構	SK131→SK41	
形　態	楕円形	上端径	0.75m ～ 0.66m		下端径	0.54m ～ 0.39m	
埋没過程	地山土が多く混じる層があり、人為的埋め立てと思われる。		深　さ	45cm	底面標高	m	
遺　物	土師器片。図示なし。				性　格	桂穴か？	
特　徴	円筒形に近く、桂穴様の形態である。						

SK131	位　置	MF56	層　位	地山面	重複遺構	SK131→SK41、SK131→SA42	
形　態	不整楕円形	上端径	2.12m ～ 1.52m		下端径	1.92m ～ (1.10)m	
埋没過程	自然流入か。		深　さ	cm	底面標高	m	
遺　物	土師器片、鉄滓。図示なし。				性　格	不明	
特　徴	平面形・底面とも不整。浅い小土坑が繰り返し重複して掘られた状態。						

SK132	位　置	ME・MF56	層　位	地山面	重複遺構	SK131→SK132	
形　態	不整円形	上端径	0.62m ～ 0.51m		下端径	0.33m ～ 0.30m	
埋没過程	埋土は１層しかなく、人為的埋め立てと思われる。		深　さ	12cm	底面標高	m	
遺　物	なし。				性　格	不明	
特　徴	SK131の小土坑と一連の土坑の可能性もあるが、柱穴の下部が残存したものの可能性もある。						

SK44	位　置	MF55･56	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	不整円形	上端径	0.55m ～ 0.48m		下端径	0.34m ～ 0.22m	
埋没過程	人為的埋め立て。		深　さ	45cm	底面標高	m	
遺　物	土師器（坏36）、鉄滓。				性　格	柱穴	
特　徴	円筒形の柱穴。柱の抜き取りによって上端部が不整形に崩落した。						

SK53	位　置	MD・ME51	層　位	地山面	重複遺構	SK119→SK118→SK53←SK120	
形　態	不整円形	上端径	(1.40m) ～ 1.28m)		下端径	(1.10m) ～ (0.90m)	
埋没過程	埋土に地山土が多く入り、人為的埋め立てである。		深　さ	(41cm)	底面標高	(23.980m)	
遺　物	土師器片、鉄滓。図示なし。				性　格	廃棄用土坑か	
特　徴	SK118のつくり替えか。若干フラスコ状になる部分がある。						

SK118	位　置	MD・ME51	層　位	地山面	重複遺構	SK119→SK118→SK53←SK120	
形　態	不整円形	上端径	(1.10m) ～ (1.00m)		下端径	(1.24m) ～ m	
埋没過程	埋土に地山土が多く入り、人為的埋め立てである。		深　さ	(64cm)	底面標高	(23.760m)	
遺　物	土師器（坏39・40）、フイゴの羽口（48）、鉄滓。				性　格	廃棄用土坑か	
特　徴	若干フラスコ状になる。						

SK119	位　置	MD・ME51	層　位	地山面	重複遺構	SK119→SK118→SK53←SK120
形　態	不整円形	上端径	(1.08m) ～ (1.06m)		下端径	(1.14m) ～ (0.96m)
埋没過程	埋土に地山土が多く入り、人為的埋め立てである。		深　さ	76cm	底面標高	23.664m
遺　物	土師器片、弥生土器片（後期）、フイゴの羽口（46）。				性　格	廃棄用土坑か
特　徴	フラスコ状土坑。					

SK120	位　置	MD・ME51	層　位	地山面	重複遺構	SK119→SK118→SK53←SK120
形　態	不整形。	上端径	(3.60m) ～ (3.22m)		下端径	(3.14m) ～ (2.80m)
埋没過程	人為的埋め立てか。		深　さ	46cm	底面標高	24.250m
遺　物	土師器（坏37・38・42、高台付皿47、甕41・43～45・49）、鉄滓。				性　格	不明
特　徴	不整形土坑の集合体状の形状。人為的埋め立てと土坑掘削を繰り返したことによるものか。					

SK57	位　置	LQ55	層　位	第２層上面	重複遺構	なし
形　態	楕円形	上端径	1.72m ～ 1.56m		下端径	1.50m ～ 1.42m
埋没過程	人為的埋め立て。		深　さ	22cm	底面標高	24.480m
遺　物	土師器（坏50・51、甕52）、須恵器（壺53）、フイゴの羽口、鉄滓。				性　格	土坑墓か
特　徴	上部が削平され、土坑下部のみ残存。形態はSK01などと類似するが、土坑墓の可能性もある。					

SK21

31は底面付近から出土した高台付坏の下部である。外に大きく開く高い高台が付く。32は丸底の鍋の底部である。全面ヘラケズリを施して整形している。

SK25

埋土中からは土師器の小破片が多数出土したが、図示できるのは33のみである。体部はやや膨らみ湾曲するが、直線的外傾タイプに近い。

SK37

礫・鉄滓・フイゴの羽口が多量に入っていた土坑である。34はフイゴの羽口の先端部に近い部分で溶融し鉄滓の付着が認められる。

SK39

35は体部が湾曲して膨らむタイプの坏である。

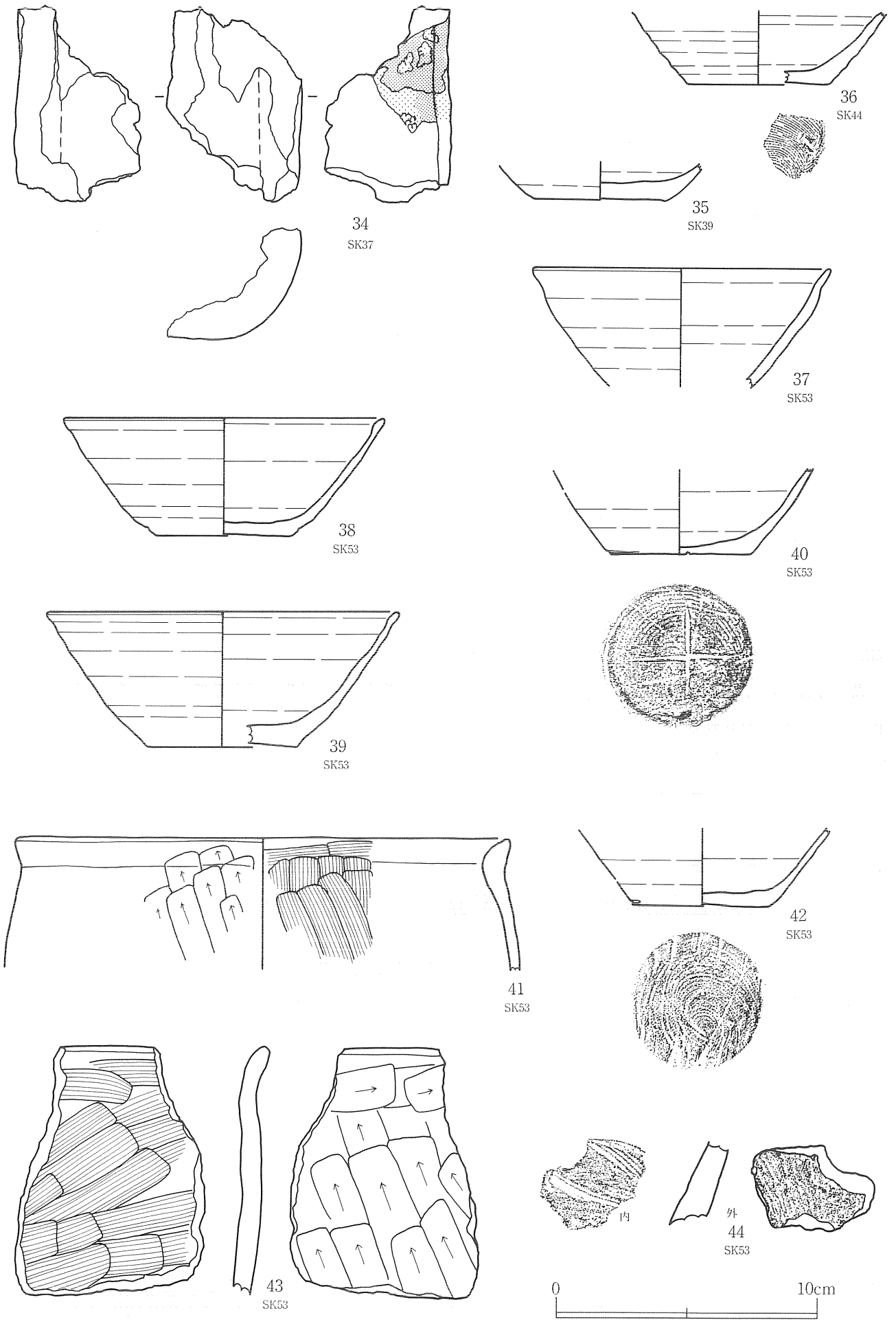
SK44

36は体部が直線的に外傾するタイプの坏で、おそらく口縁部は外反するものと思われる。

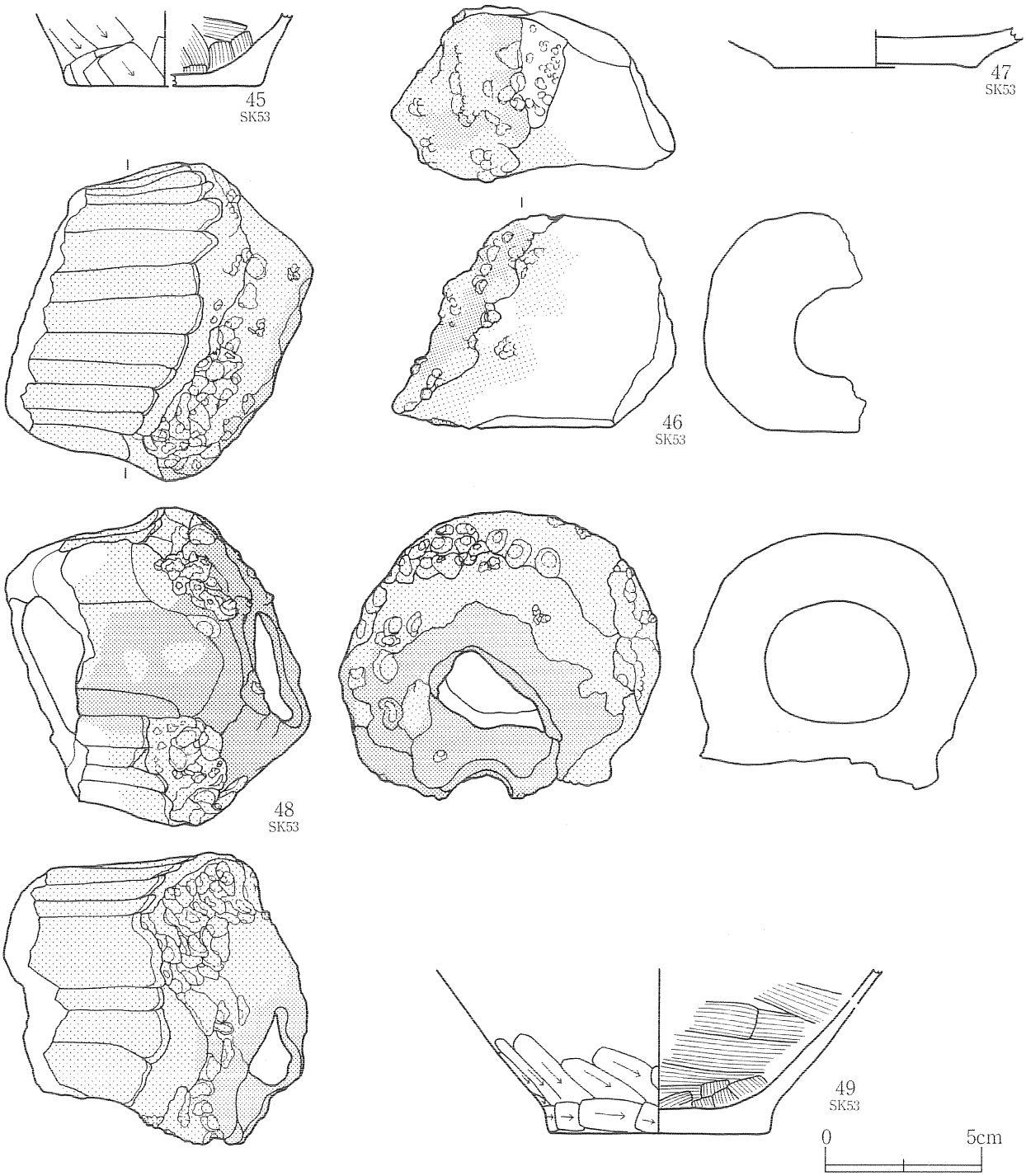
番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
35	SK39	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) マメツ	回転糸切り	口なし 底50%	細砂混	良 ↓ 二次受熱	—	(5.0)	—	—	58
36	SK44	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↺	口なし 底17%	微砂混	良	—	(5.5)	—	—	58
37	SK120	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口17% 底なし	細砂混	良	(11.5)	—	—	—	58
38	SK120	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↺	口20% 底62%	微砂混	良	(12.3)	(5.3)	4.6	31.5°	58
39	SK118	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 棒状圧痕	口25% 底38%	微砂混	良	(13.5)	(5.8)	5.3	31.0°	58
40	SK118	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↺ ↓ ヘラ記号「＋」	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.4	—	—	58
41	SK120	土師器	甕	(内) ナデ↕ (外) ヘラケズリ↑	—	口5% 底なし	細砂混	良	(19.0)	—	—	—	58
42	SK120	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↺ ↓ 板状圧痕	口なし 底100%	細砂混	良	—	5.4	—	—	58
43	SK120	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口5%以下 底なし	粗砂混	—	(—)	—	—	—	58
44	SK120	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	—	—	粗砂混	良	—	—	—	—	58

番号	出土地点	種別	特　徴	胎　土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
34	SK37	羽口	端部付近のガラス化著しい。器壁薄手。	スサ入り	○	×	○	(7.1)	(7.3)	(5.6)	—	—	58

第７表　土坑出土遺物観察表（２）　SK37・SK39・SK44・SK118①・SK120①



第５６図　土坑内出土遺物（２）ＳＫ３７・３９・４４・５３①

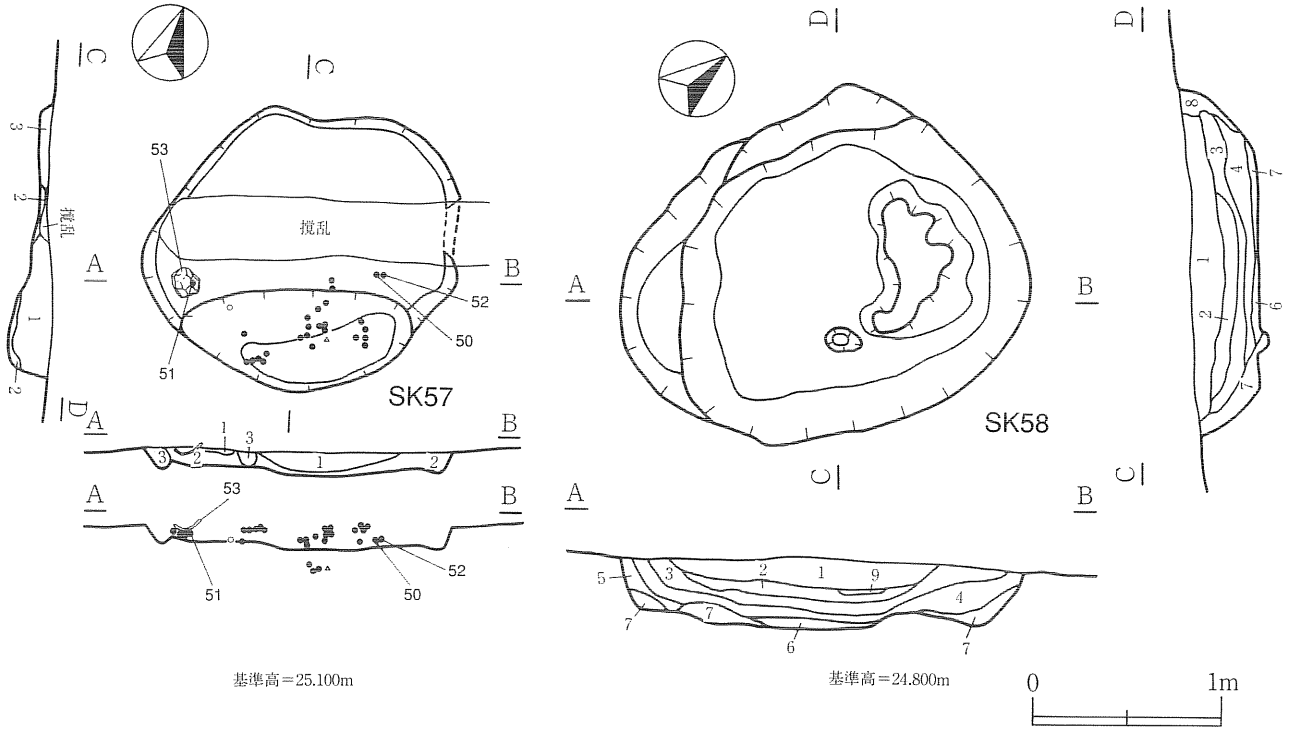


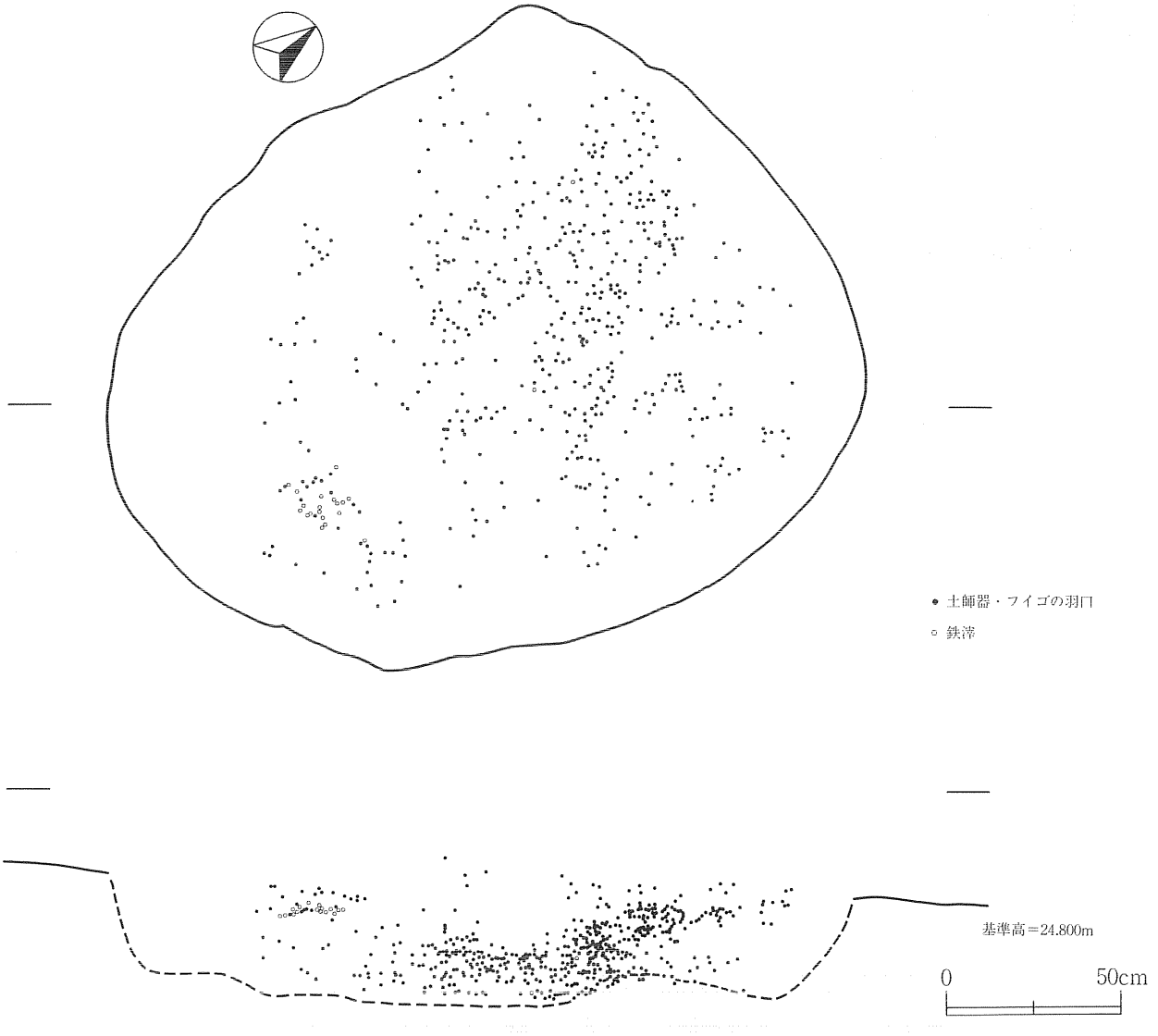
第５７図　土坑内出土遺物（３）ＳＫ５３②

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
45	SK120	土師器	坏	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	微砂圧痕	口なし 底25%	微砂混	良	—	6.0	—	—	59
47	SK120	土師器	高台付皿	(内) マメツ (外) ヘラケズリ高台ケズリ出し	ヘラケズリ（細）	口なし 底45%	微砂混 中砂少混	良	—	(6.5)	—	—	59
49	SK120	土師器	壺	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	ヘラケズリ	口なし 底42%	粗砂混	良	—	(7.0)	—	—	59

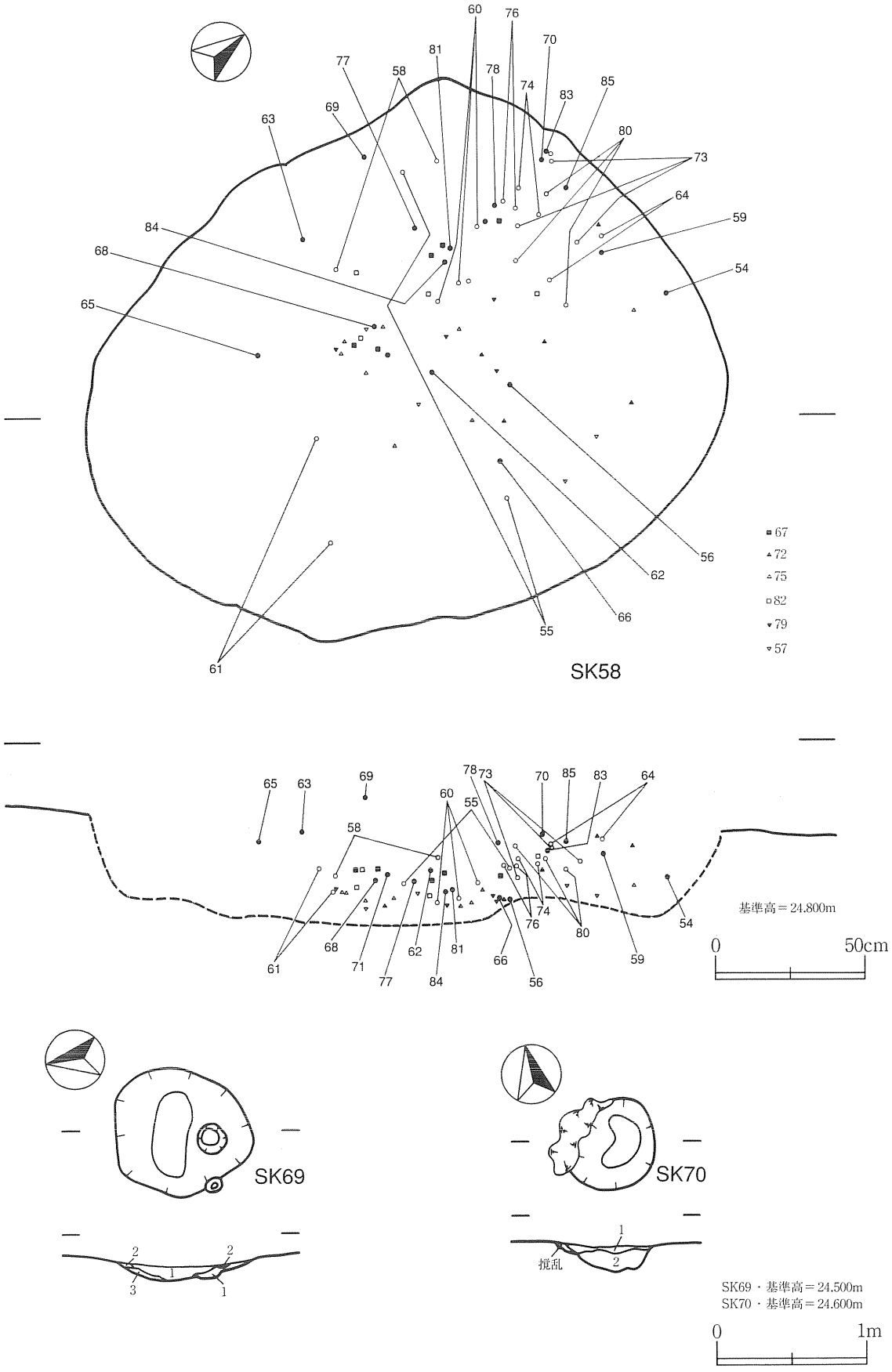
番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
46	SK119	羽口	先端部に鉄滓付着。	スサ入り	○	○	○	(9.2)	(7.5)	(3.1)	50.0	57.0°	59
48	SK118	羽口	先端部のガラス化著しい。鉄滓付着は少量。	スサ入り	○	○	○	(9.9)	10.3	4.6	—	70.0°	59

第８表　土坑出土遺物観察表（３）　SK118②・SK119・SK120②





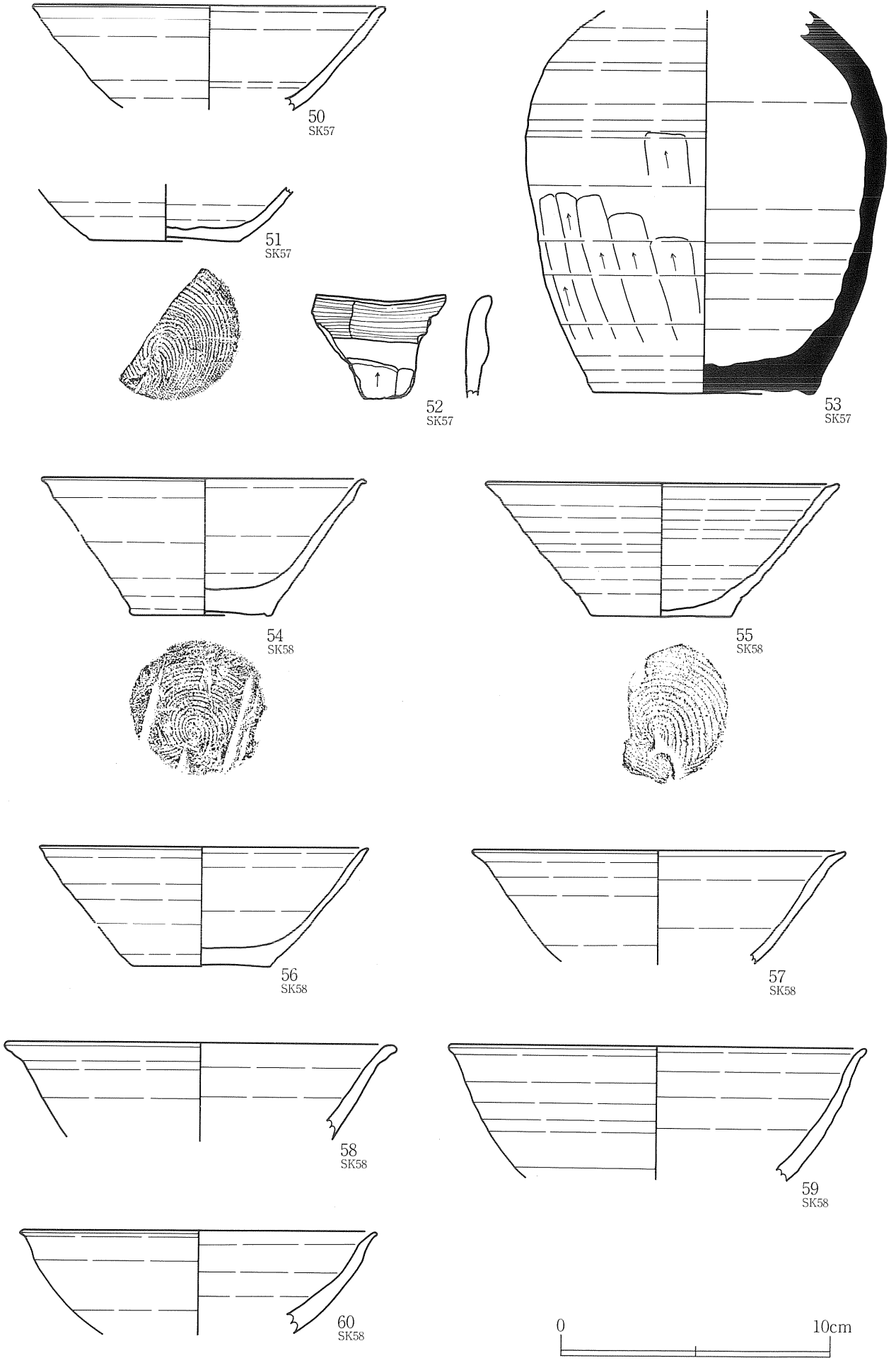
第５８図　ＳＫ５７・５８土坑



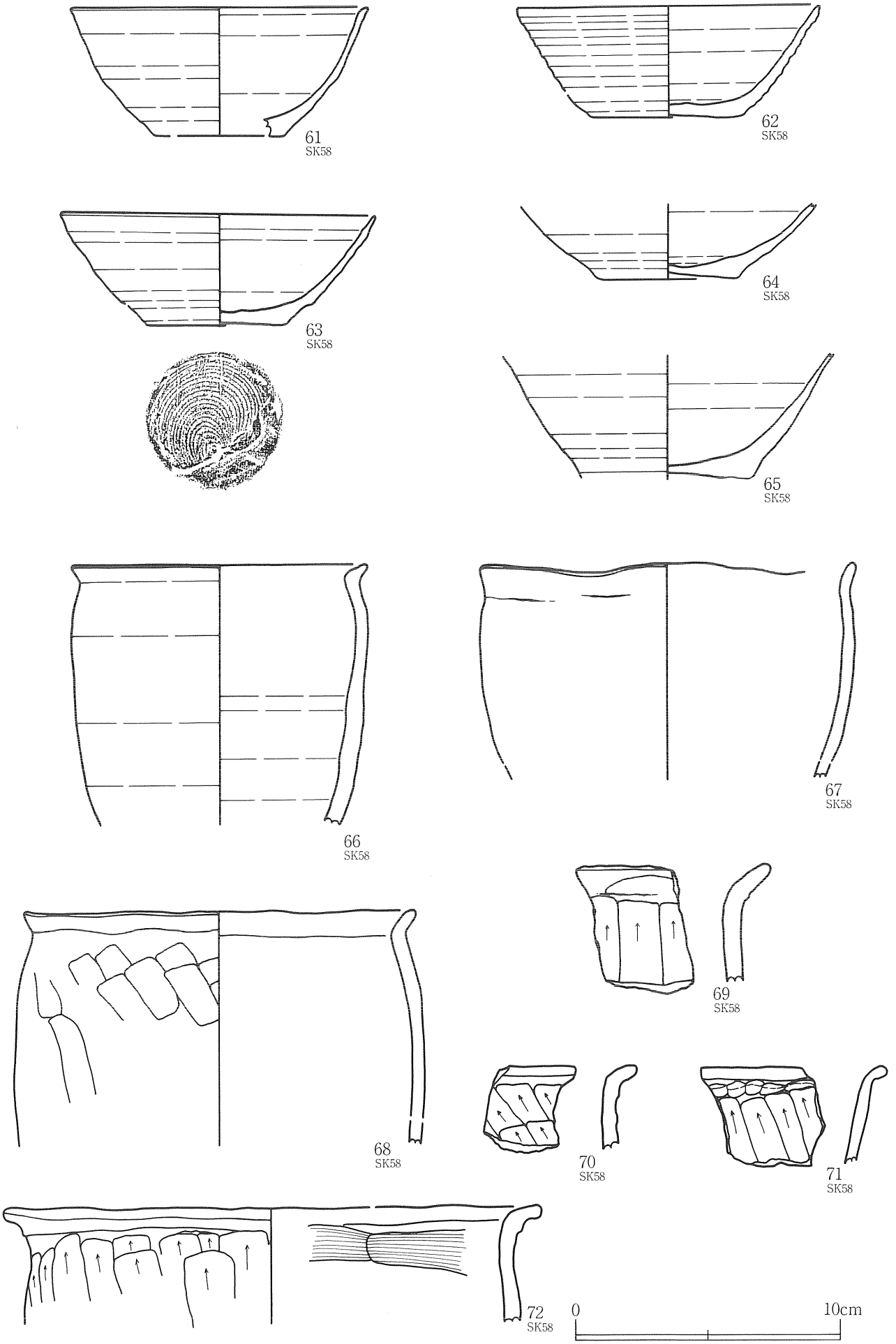
ＳＫ69
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中粒10％含む。炭化物小粒１％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山中粒30％含む。炭化物中粒２％含む。
3　10ＹＲ4／6　褐色シルト　しまりあり。暗褐色土30％混じる。

ＳＫ70
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大～中粒30％含む。炭化物大～中粒５％、焼土極小粒１％含む。
2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中～小粒10％含む。炭化物極小粒１％、焼土中～小粒２％含む。

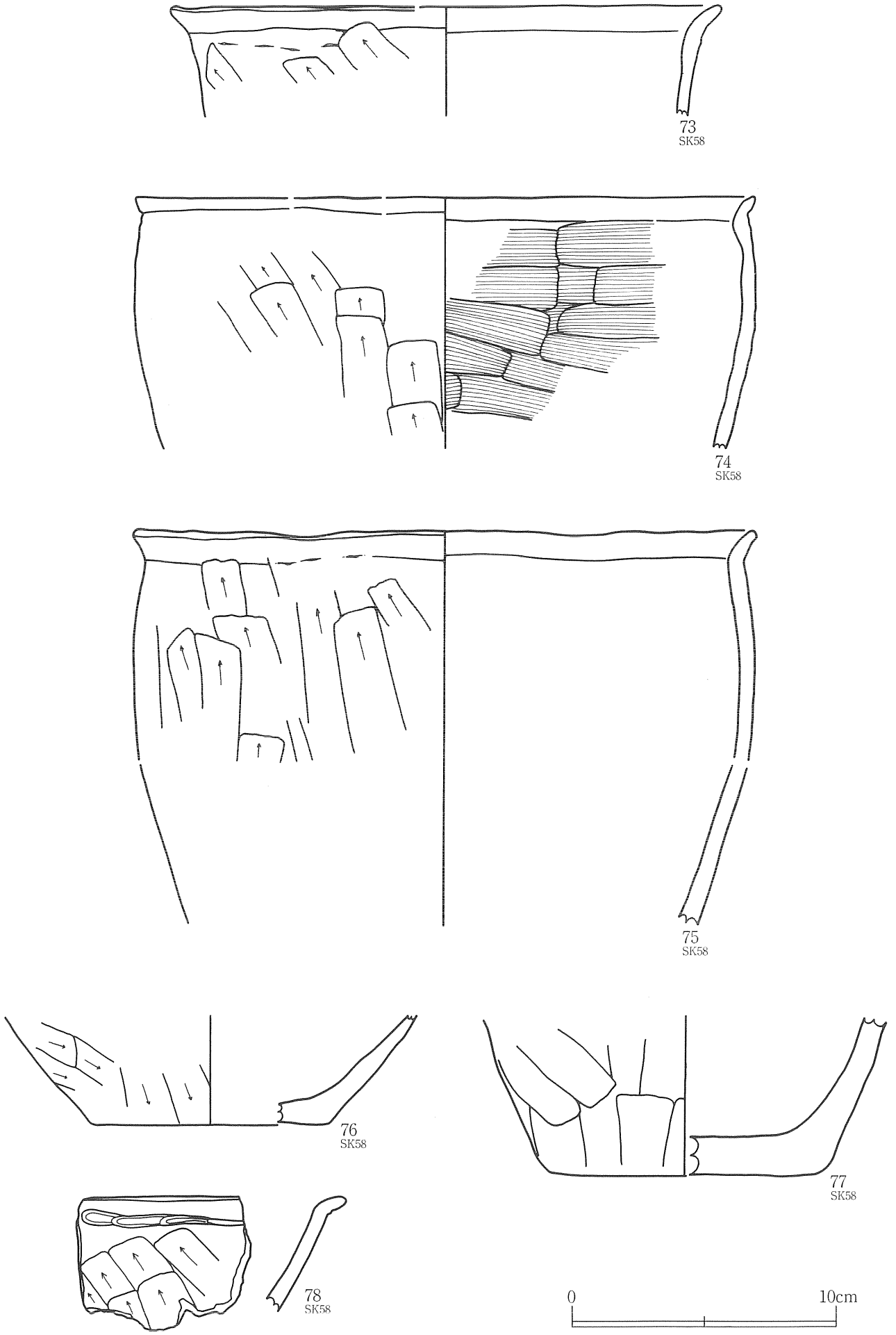
第５９図　ＳＫ５８土坑遺物出土位置図、ＳＫ６９・７０土坑



第６０図　土坑内出土遺物（４）ＳＫ５７・５８①



第６１図　土坑内出土遺物（５）ＳＫ５８②



第６２図　土坑内出土遺物（６）ＳＫ５８③

SK53

すべて埋土中の上層から出土した。37～40･41の坏はすべて体部が直線的に外傾するタイプである。37は口縁部が外反する。40の底面には焼成前のヘラ記号がある。47は高台付皿と思われるが、底径が通常の坏・皿より１ cm 程大きい。底面をわずかに削り高台を作り出している。41は大型の甕で、短く肥厚した口縁部が屈曲して外反する。44は内外面ハケ目調整された甕の破片、45は小型の甕である。49は体部が大きく膨らみ壷と思われる。底辺部には横方向のヘラケズリを施している。46･48はフイゴの羽口の先端部である。両方とも溶融が著しい。特に48は端部全面がガラス化し、大きい気泡が多数認められる。底面には平坦に作るためのケズリ痕が並ぶ。やや幅約１ cm の湾曲した工具を用いたと推定される。

SK57

50･51はいずれも体部が直線的に外反するタイプである。52は大型甕の口縁部である。53は長頸壺である。底面を削り高台を作出した後にナデ調整を施している。体部下半は下から上へヘラケズリ後にロクロナデ調整している。

第６３図　土坑内出土遺物（７）ＳＫ５８④

SK58

土坑埋土中から極めて多量の遺物が出土した。多くは土師器である。坏には体部から口縁部まで直線的に外傾するタイプ（54～56）、体部が膨らみ湾曲し口縁部が外反するタイプ（57～60）、体部が膨らみ湾曲し口縁部は直線的なタイプ（61～63）の３種が混在する。59はやや大型で、高台が付く可能性もある。65は高台

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
50	SK57	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口25% 底なし	微砂混	良	(13.1)	—	—	—	62
51	SK57	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底50%	微砂少混	良	—	(5.6)	—	—	62
52	SK57	土師器	甕	(内) ナデ (外) ナデ、ヘラケズリ↑	—	口10%以下 底なし	粗砂多混	良	(—)	—	—	—	62
53	SK57	須恵器	壺	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ↑→ロクロナデ	高台ケズリ出し ↓ ナデ	口なし 底42%	微砂少混	やや良 ↓ 二次受熱	—	(8.2)	—	—	62
54	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口8% 底100%	微砂混	良	(12.0)	5.3	5.1	34.0°	62
55	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口30% 底50%	微砂混	きわめて良	(13.1)	(5.2)	5.0	38.0°	62
56	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口13% 底50%	微砂混	きわめて良	(12.6)	5.2	4.5	36.0°	62
57	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂混	良	(13.9)	—	—	—	62
58	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口5% 底なし	微砂混	良	(12.6)	—	—	—	62
59	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口13% 底なし	微砂混	良	(15.4)	—	—	—	62
60	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂混	良	(13.2)	—	—	—	62
61	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口30% 底20%	微砂混	良	(11.2)	(4.9)	4.9	(27.0°)	63
62	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口25% 底100%	微砂混	きわめて良	(11.4)	5.7	4.2	59.0°	63
63	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口15% 底100%	微砂混	良	(11.9)	5.3	4.3	34.0°	63
64	SK58	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底50%	微砂混	良	—	(5.3)	—	—	63
65	SK58	土師器	高台付坏	(内) マメツ→黒色処理？ (外) マメツ	マメツ→高台貼付	口なし 底50%	細砂混	やや良	—	(6.5)	—	—	63
66	SK58	土師器	甕	(内) マメツ (外) ロクロナデ	—	口17% 底なし	粗砂多混	良	(12.0)	—	—	—	63
67	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ	—	口55% 底なし	粗砂多く混じる	良	(14.0)	—	—	—	63
68	SK58	土師器	甕	(内) (マメツ) (外) ヘラケズリ↖	—	口50% 底なし	粗砂混 小礫混	良	(15.0)	—	—	—	63
69	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口5%以下 底なし	粗砂混	良	(—)	—	—	—	63
70	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ	—	口5%以下 底なし	粗砂混	きわめて良	(—)	—	—	—	63
71	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ	—	口10%以下 底なし	細砂混	良	(—)	—	—	—	63
72	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口50% 底なし	粗砂混	良	(20.0)	—	—	—	63
73	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口45% 底なし	細砂混	良	(21.0)	—	—	—	64
74	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口5%以下 底なし	粗砂混	良	(23.5)	—	—	—	64
75	SK58	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ	—	口40%	粗砂混	良	(23.5)	—	—	—	64
76	SK58	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	ヘラケズリ	口なし 底25%	粗砂混	良	—	(9.0)	—	—	64
77	SK58	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	ヘラケズリ	口なし 底25%	細砂混	良	—	(10.2)	—	—	64
78	SK58	土師器	鍋	(内) マメツ (外) ヘラケズリ↑	—	口10%以下	粗砂混	良	(26.0)	—	—	—	64
79	SK58	土師器	鍋	(内) マメツ (外) マメツ	ヘラケズリ	口なし 底25%	中砂混	良 ↓ 二次受熱	—	(11.0)	—	—	65
80	SK58	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↓	ヘラケズリ	口なし 底なし	粗砂混	良	—	(—)	—	—	65
81	SK58	土師器	鍋	(内) マメツ (外) ヘラケズリ→	ヘラケズリ	口なし 底25%	粗砂多混	良 ↓ 二次受熱	—	(10.0)	—	—	65

番号	出土地点	種別	特　　徴	胎　土	平 坦 面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	きしこみ角	端部角	図版番号
82	SK58	羽口	先端部が斜めに溶融する。鉄滓付着せず。	スサ入り	—	○	○	(13.0)	(7.8)	(4.7)	33.0°	(50.0°)	65
83	SK58	羽口	器壁薄手。鉄滓付着せず。	スサ入り	—	○	○	(4.3)	(5.6)	(5.2)	—	—	65
84	SK58	羽口	体部のみ。溶融や黒変はなし。	スサ入り	—	—	—	(8.4)	(4.7)	(2.0)	—	—	65
85	SK58	羽口	体部のみ。平坦面側は器壁が薄い。	スサ入り	○	—	—	(4.0)	(4.8)	(4.1)	—	—	65

第９表　土坑出土遺物観察表（４）　SK57・SK58

が剥離しているが、外側に張り出す高い高台と思われる。54は回転糸切り直後乾燥前に平行に置かれた丸棒上に置かれた痕跡が明瞭である。66～68は小型の甕、69～79は大型の甕である。66のみロクロナデ調整が施されている。他はヘラケズリである。短い口縁部が屈曲して外反するものが多く、69のみやや口縁部が長い。76は体部下半が大きく外反しており壷の可能性もある。78～81は鍋である。78･79から推測すれば、器高が比較的高く、短い口縁部が屈曲して外反する器形のようである。82～85はフイゴの羽口の破片である。小破片のみで原形に復元できるものではない。82は先端部が溶融し、ガラス化している。

SK69

86は大型甕の体部破片で、埋土中から出土した。

SK70

87はロクロ非使用の小型甕で、内外面ともナデ調整が施されている。88は体部から口縁端部まで直線的に

SK70	位置	MH54	層位	地山面	重複遺構	なし	
形態	円形	上端径	0.71m ～ 0.62m		下端径	0.35m ～ 0.25m	
埋没過程	埋土には焼土粒を含む。自然流入か、人為的埋戻しかは不明。		深さ	28cm	底面標高	24.155m	
遺物	土師器（甕87、鍋88）。				性格	不明	
特徴	埋土は基本的に単一層。土坑上部は削平されている。						

SK76	位置	MH･MI50、MH50･MI51	層位	地山面	重複遺構	なし	
形態	不整円形	上端径	2.40m ～ 1.44m		下端径	1.29m ～ 1.28m	
埋没過程	土師器片、鉄滓・羽口を投入し、人為的に埋め立て。		深さ	cm	底面標高	m	
遺物	土師器（坏89～91、甕92～100）、鉄滓、フイゴの羽口。				性格	廃棄用土坑	
特徴	埋土中の土器片は細片が多い。甕が多く坏は少ない。南北に張り出し部分があるが、埋土は一連のもので、同時に埋め立てている。						

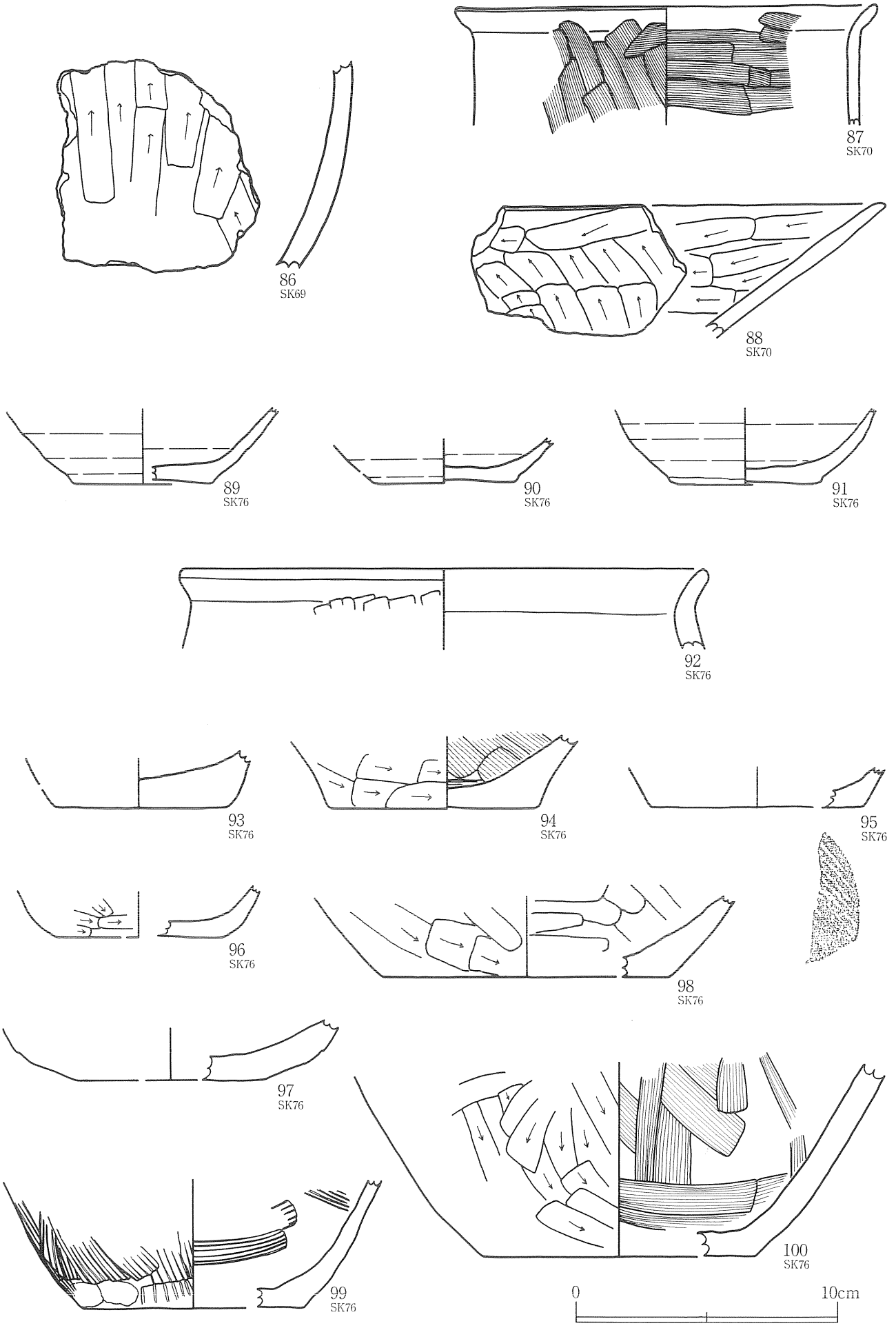
SK96	位置	LP51	層位	第2層上面	重複遺構	なし	
形態	不整円形	上端径	1.71m ～ (1.03m)		下端径	1.42m ～ (1.03m)	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。埋土上～中層に火山灰を含む。		深さ	47cm	底面標高	24.448m	
遺物	土師器片、鉄滓。図示なし。				性格	不明	
特徴	火山灰を含む土坑はこの1箇所のみである。底面の一部には、不整形で凹凸の著しい掘り込み部がある。						

SK99	位置	LP49・50、LO49･50	層位	第3層上面	重複遺構	なし	
形態	円形	上端径	0.90m ～ (0.78m)		下端径	0.50m ～ (0.41m)	
埋没過程	焼土塊・土器片・鉄滓を投入し、人為的に埋め立て。		深さ	24cm	底面標高	24.537m	
遺物	土師器（坏101、甕102）、鉄滓。				性格	廃棄用土坑	
特徴	埋土は基本的に単一層。出土土器は破片のみ。						

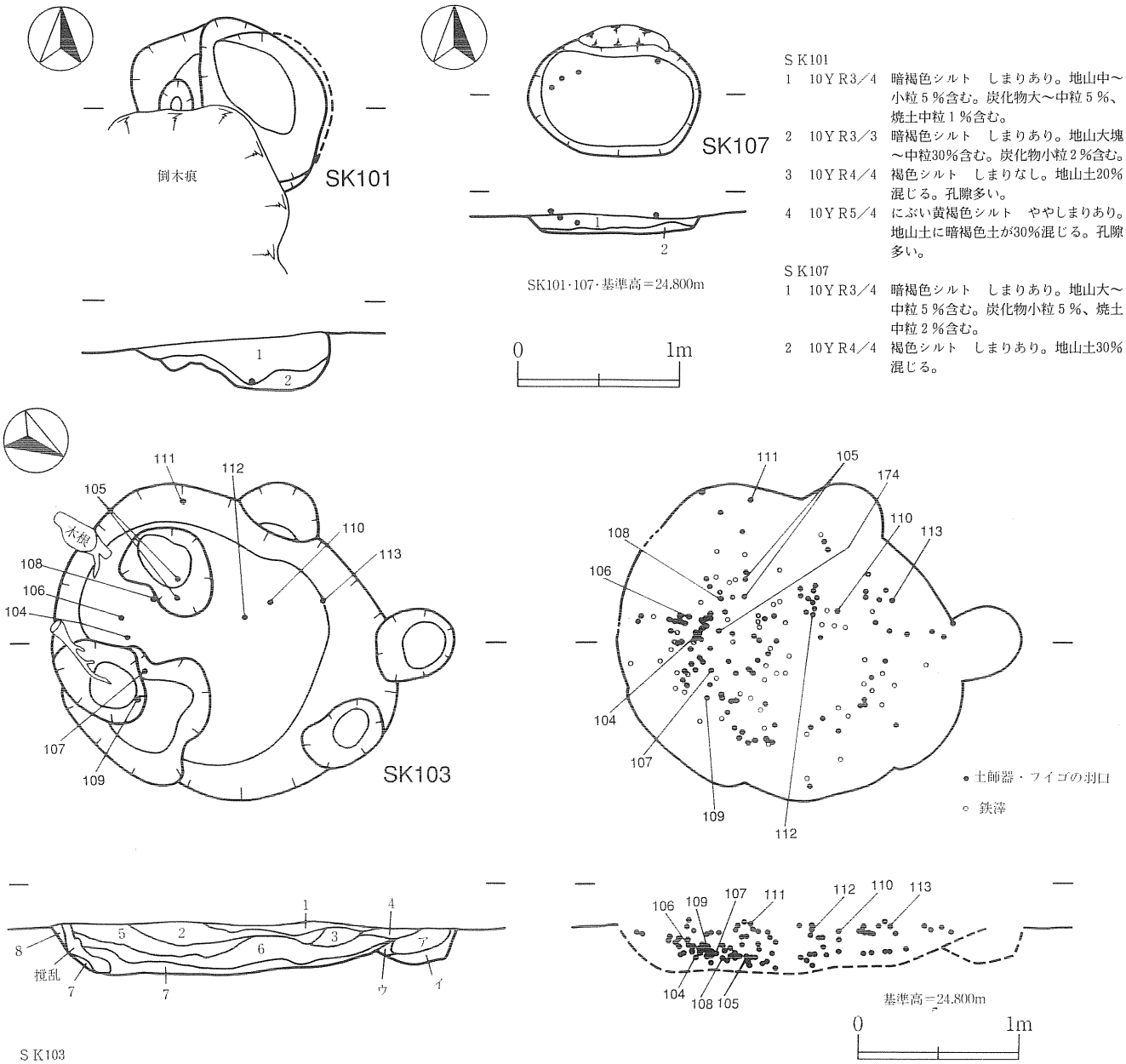
SK101	位置	LR48	層位	地山面	重複遺構	なし	
形態	楕円形	上端径	1.28m ～ (0.66m)		下端径	0.72m ～ (0.36m)	
埋没過程	開口状態で廃絶し、自然流入。		深さ	36cm	底面標高	23.237m	
遺物	土師器片。図示なし。				性格	不明	
特徴	南側は倒木痕によって切られる。						

SK103	位置	LQ43・44	層位	地山面	重複遺構	SB106P10→SK103	
形態	楕円形	上端径	2.42m ～ 2.10m		下端径	1.36m ～ 0.70m	
埋没過程	土器片・鉄滓などを投入し開口状態で廃棄、その後自然流入。		深さ	34cm	底面標高	22.556m	
遺物	土師器（坏103～111、高台付坏112、壺113）、フイゴの羽口（114～118）、鉄滓、鉄塊系遺物、炉壁。				性格	廃棄用土坑	
特徴	土器片や鉄滓の投入と土砂の小規模な流入の繰り返しにより埋没。						

SK107	位置	LR49	層位	地山面	重複遺構	なし	
形態	楕円形	上端径	1.02m ～ 0.73m		下端径	0.96m ～ 0.56m	
埋没過程	人為的埋め立て。		深さ	12cm	底面標高	24.540m	
遺物	土師器（坏119・121、甕120･122）、鉄滓。				性格	不明	
特徴	埋土中に少量の土師器・鉄滓を含む。上部は削平されて底面近くのみ残存。						



第６４図　土坑内出土遺物（８）ＳＫ６９・７０・７６



ＳＫ101
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山中～小粒５％含む。炭化物大～中粒５％、焼土中粒１％含む。
2　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山大塊～中粒30％含む。炭化物小粒２％含む。
3　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりなし。地山土20％混じる。孔隙多い。
4　10ＹＲ5／4　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。孔隙多い。

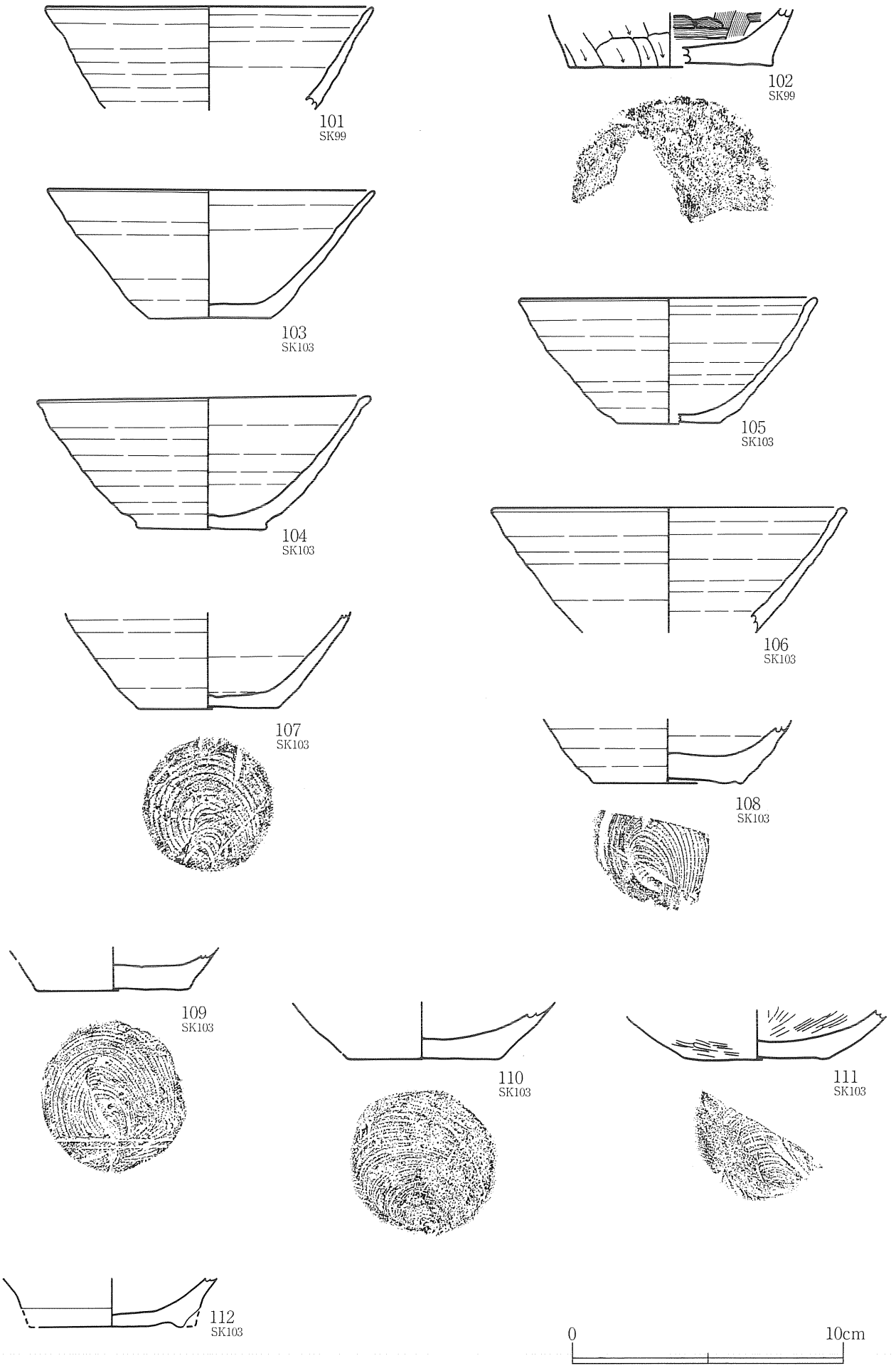
ＳＫ107
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山大～中粒５％含む。炭化物小粒５％、焼土中粒２％含む。
2　10ＹＲ4／4　褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

ＳＫ103
1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒２％含む。炭化物中粒５％、焼土大塊～中粒15％含む。
2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山大～中粒１％含む。炭化物中粒２％、焼土中粒１％含む。
3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。炭化物小粒１％含む。
4　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物極小粒１％、焼土極小粒１％含む。
5　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物中粒５％、焼土中粒２％含む。
6　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物大塊～中粒５％、焼土中粒２％含む。
7　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。地山土10％混じる。炭化物小粒５％、焼土中～大塊10％含む。
8　10ＹＲ4／4　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。

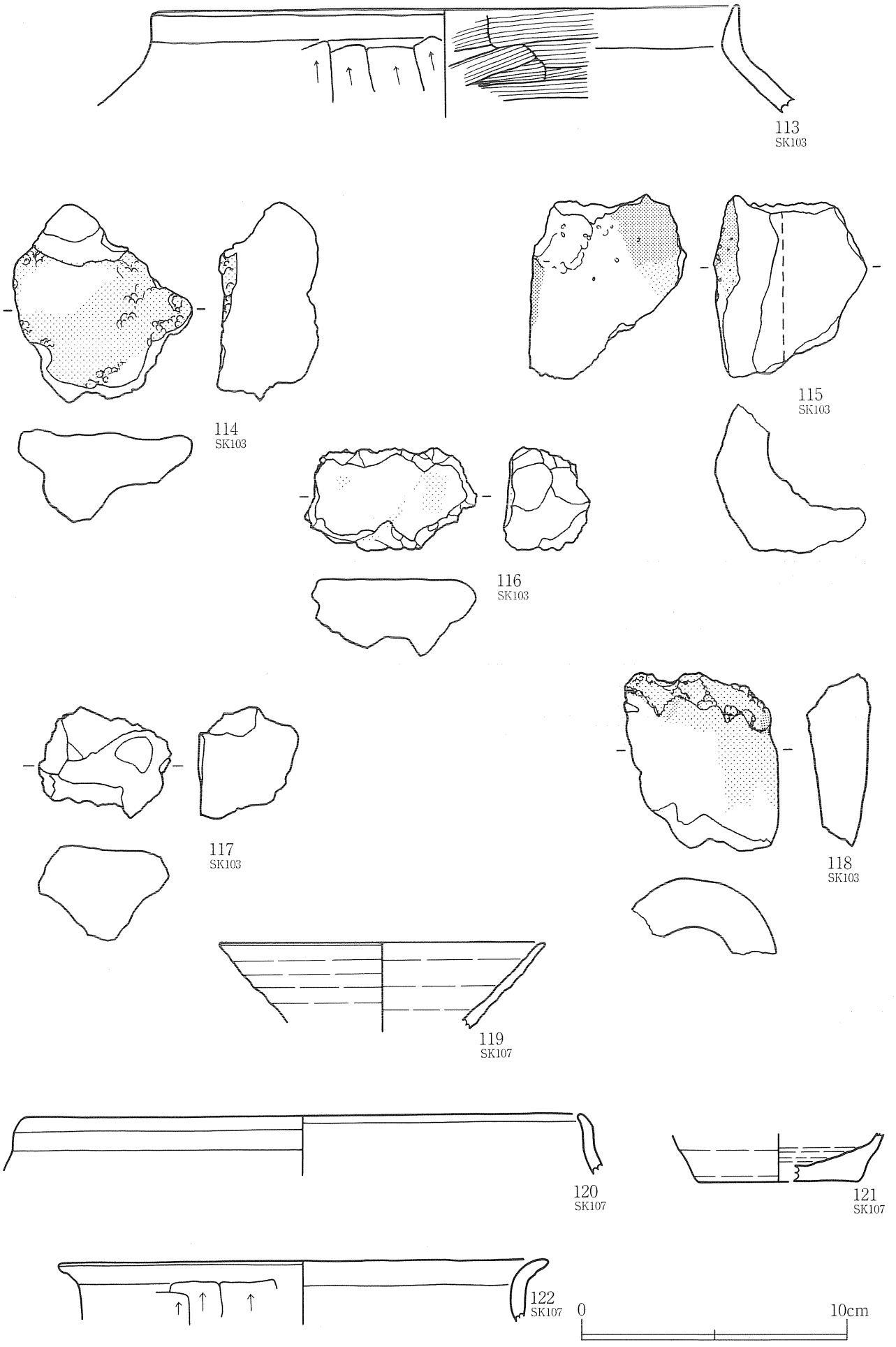
第６５図　ＳＫ１０１・１０３・１０７土坑

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
86	SK69	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口なし 底なし	粗砂混	良	—	—	—	—	67
87	SK70	土師器	甕	(内) ナデ (外) ナデ	—	口10% 底なし	中砂少混	良	(16.0)	—	—	—	67
88	SK70	土師器	鍋	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	—	口10%以下	粗砂混	良	(—)	—	—	—	67
89	SK76	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底33%	微砂少混	良	—	(5.3)	—	—	67
90	SK76	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.4	—	—	67
91	SK76	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底90%	微砂少混	良	—	5.7	—	—	67
92	SK76	土師器	甕	(内) マメツ (外) マメツ	—	口10% 底なし	中砂混	良	(20.0)	—	—	—	67
93	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) マメツ	マメツ	口なし 底100%	細砂混	良	—	5.7	—	—	67

第10表　土坑出土遺物観察表（５）　SK69・SK70・SK76



第６６図　土坑内出土遺物（９）ＳＫ９９・１０３①



第６７図　土坑内出土遺物（１０）ＳＫ１０３②・ＳＫ１０７

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
94	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ ↘	中砂圧痕	口なし 底17%	粗砂混	良	—	(8.0)	—	—	67
95	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) ナデ	底面板状痕	口なし 底17%	微砂混	良	—	(8.2)	—	—	67
96	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	底面ヘラケズリ	口なし 底20%	微砂少混	良	—	(6.4)	—	—	67
97	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) マメツ	マメツ	口なし 底8%	粗砂混	良	—	(7.0)	—	—	67
98	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ ↘	板状痕跡	口なし 底12%	粗砂混	良	—	(11.0)	—	—	67
99	SK76	土師器	甕	(内) ハケメ (外) ハケメ	ナデ	口なし 底33%	粗石少混	良	—	(8.5)	—	—	67
100	SK76	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	細砂圧痕	口なし 底40%	細砂混	良	—	(10.5)	—	—	67

第11表　土坑出土遺物観察表（５）　SK76

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
101	SK99	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口50% 底なし	細砂少混	良	(12.0)	—	—	—	69
102	SK99	土師器	甕	(内) ナデ→黒色処理 (外) ヘラケズリ	中砂圧痕	口なし 底50%	中砂混	良	—	(7.6)	—	—	69
103	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口100% 底100%	微砂少混	やや良	12.2	4.5	4.8	左35.0° 右37.0°	69
104	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口5%以下 底100%	微砂少混	良	12.2	(4.7)	5.0	33.0°	69
105	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 板状圧痕	口40% 底17%	微砂混	良	(10.9)	(3.8)	4.7	32.0°	69
106	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口25% 底なし	細砂少混	きわめて良	(13.0)	—	—	—	69
107	SK103	土師器	坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底100%	細砂混	良	—	(5.3)	—	—	69
108	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 棒状圧痕	口なし 底38%	微砂混	良	—	(5.5)	—	—	69
109	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 板状圧痕	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.6	—	—	69
110	SK103	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.5	—	—	69
111	SK103	土師器	坏	(内) ミガキ黒色処理 (外) ミガキ黒色処理	回転糸切り ↻	口なし 底50%	微砂混	良	—	(5.2)	—	—	69
112	SK103	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 高台貼付	口なし 底17%	微砂混	良	—	(5.4)	(1.8)	—	69
113	SK103	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ ↑	—	口8% 底なし	中砂混 粗砂少混	良	(22.2)	—	—	—	70
119	SK107	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口20% 底なし	微砂混	良	(12.4)	—	—	—	70
120	SK107	土師器	甕	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口20% 底なし	微砂混	良	(21.0)	—	—	—	70
121	SK107	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底42%	微砂混	良	—	(6.0)	—	—	70
122	SK107	土師器	甕	(内) マメツ (外) ヘラケズリ ↑	—	口10%	中砂混	良 ↓ 二次受熱	(18.2)	—	—	—	70

番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
114	SK103	羽口	炉壁。表面硬化。	スサ入り	—	—	—	—	—	—	—	—	70
115	SK103	羽口	先端のガラス化した部分は剥落し一部のみ残存。	スサ入り	○	—	○	(6.9)	(6.6)	(2.2)	—	—	70
116	SK103	羽口	炉壁。表面硬化。	スサなし	—	—	—	—	—	—	—	—	70
117	SK103	羽口	炉壁。表面硬化。羽口の一部の可能性もあり。	スサ入り	—	—	—	—	—	—	—	—	70
118	SK103	羽口	先端部に鉄滓付着。	スサ入り	—	○	○	(6.8)	(6.3)	(2.8)	50.0°	46.0°	70

第12表　土坑出土遺物観察表（６）　SK103・SK107

外傾する器形の鍋である。内外面とも全面ヘラケズリ調整が施されている。

SK76

埋土中には土師器の破片が多数含まれていたが、坏は復元して全体の器形がわかるものはない。坏の破片よりも甕の小破片が多かった。89･90は体部が直線的に外傾するタイプと思われる。91は体部が湾曲し膨らむ器形である。92は大型の甕で短い口縁部が屈曲して外反する。93～100は甕底部であるが、外面の調整がヘラケズリ（94･96･98･100）、ハケ目（99）の２種がある。95は底面に板圧痕が認められる。

SK99

101は体部から口縁部まで直線的に外反する坏である。口縁部は体部よりやや薄手である。102は底面全面に中粒砂の圧痕が認められる。

SK103

埋土中には多数の土師器破片が含まれていたが、SK76とは対称的に坏の破片が多い。103･106･107は体部が直線的に外傾するタイプ。104･105･108は体部が湾曲して膨らむタイプである。103～106はいずれも口縁部が直線的で外反しない。111は内外面とも細かいミガキ調整を施し、黒色処理している。底面はわずかに上げ底で回転糸切り痕が残る。体部が大きく湾曲して膨らむ器形である。112は貼付高台の付く坏である。底面中央には回転糸切り痕が残る。113は土師器の短頸壺である。先端の尖る短い口縁部が直立する。内面はナデ、外面はヘラケズリ調整である。114･116･117は製鉄遺構の炉壁または底面の一部である。116･117は強い受熱により硬化し、116は一部に溶融と鉄滓の付着が認められる。114は溶融し気泡が発生して硬化した部分である。115･118はフイゴの羽口の先端部破片である。

SK107

119･121は体部から口縁部まで直線的に外傾するタイプの坏であるが、器高が低めで皿に近い器形である。120は口縁部の作りからみれば小型のロクロ使用甕と似るが､傾きと口径を復元すれば図のようになる。偶然焼きひずみ部分のみが残存し、本来は小型の甕であった可能性も否定できない。122は口縁部が強く外反する小型の甕である。

６．焼土遺構

製鉄遺構と炭焼遺構（土坑３類）を除き、火を焚いて焼土が形成された遺構である。以下の５種に分類する。

１類　浅い土坑内に焼土が形成されているもの。土坑内に土器片などを投入した後、焚火をし、埋め立てている。土坑１類ａと同様の機能（廃棄用土坑）か。

ＳＮ１４・１０９

２類ａ　地床炉

ＳＮ４３・４９・５０・７１・７２・７３

ＳＮ４３は地山上の地床炉で、赤変硬化の度合いがきわめて強く、長時間または強い火熱を受けたことが伺える。周囲には柱穴がなく屋外の地床炉と考えられる。ＳＮ４９・５０・７１も屋外の地床炉である。いずれも機能を推定すべき材料に欠ける。ＳＮ７２・７３は、ＳＢ７７・７８掘立柱建物跡の範囲にあるＳＢ３４・５５掘立柱建物跡のように建物身舎内の一画に地床炉を取り込んでいる例からすればＳＮ７２・７３がＳＢ７８の地床炉である可能性もある。ＳＮ７３とＳＢ７７では、ＳＢ７７の西側桁の直下に地床炉が存在する事になり、やや無理がある。

２類ｂ　地床炉であるが、２類ａと異なり焼土中・焼土上にきわめて多量の遺物が散布する。

ＳＮ１０８

ＳＮ１０８は、隣接して同程度の赤変硬化した部分が２箇所あり、一連の遺構と判断した。焼土は赤変硬化の度合いがきわめて強く、相当の火熱であったと考えられる。焼土上や焼土中からは坏・小型甕が多く出土した。坏は非ロクロ使用で外面をヘラケズリ調整したもの、表裏両面ミガキ調整のものがあり、他遺構出土坏とは様相が異なる。この遺構の性格が反映されていると思われるが、この程度の坏の性格がどう位置付けられるのか今後の判断を待ちたい。

SN14	位　置	LM43・LN43	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	楕円形	規　模	0.43m ～ 0.17m	標　高	23.297m ～ 23.207m		
焼土の厚さ	9cm	埋没過程	土器片を投入しながら土坑を埋め立て、浅い凹地となったところで焚火。				
土　坑	楕円形	土坑の規模	1.04m ～ 0.82m	深　さ	19cm	底面標高	24.112m
遺　物	土師器（甕123・124）					性　格	不明
特　徴	東側が深く西側が浅い土坑の埋土上部に形成された焼土。土坑中央部に焼土が厚く、周辺は焼土粒と炭化物粒。						

SN15	位　置	LT43･44、MA43･44、MB43･44	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	不整形	規　模	m ～ m	標　高	m ～ m		
焼土の厚さ	cm	埋没過程	鉄滓・礫・土器を遺棄し、自然流入により埋没。埋土には炭化物を多く含む。				
土　坑	不整形	土坑の規模	m ～ m	深　さ	cm	底面標高	m
遺　物	土師器（坏126～132、甕133～136・139）、須恵器（壺138・140）、フイゴの羽口（137）、鉄滓（141～146）					性　格	鍛冶関連か
特　徴	不整形の浅い土坑で、炭化物・鉄滓・礫がまとまっている。焼土層は希薄。						

SN43	位　置	ME56	層　位	地山面	重複遺構	SB75新旧不明	
形　態	楕円形	規　模	0.70m ～ 0.59m	標　高	24.696m ～ 24.655m		
焼土の厚さ	8cm	埋没過程	畑の耕作土直下で検出。覆土は表土のみ。				
土　坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深　さ	－cm	底面標高	－m
遺　物	なし					性　格	地床炉
特　徴	非常に固く焼けしまった地床炉。						

SN49	位　置	LP49	層　位	第３層上面	重複遺構	なし	
形　態	円形	規　模	0.71m ～ 0.62m	標　高	24.713m ～ 24.682m		
焼土の厚さ	9cm	埋没過程	覆土は表土と第２層。遺棄されたもの。				
土　坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深　さ	－cm	底面標高	－m
遺　物	なし					性　格	地床炉
特　徴	第３層上面の単独地床炉。						

SN50	位　置	LQ51	層　位	第３層上面	重複遺構	なし	
形　態	楕円形	規　模	0.66m ～ (0.32m)	標　高	24.818m ～ 24.782m		
焼土の厚さ	9cm	埋没過程	覆土は第２層。				
土　坑	楕円形	土坑の規模	1.04m ～ (0.46m)	深　さ	16cm	底面標高	24.710m
遺　物	土師器片					性　格	不明
特　徴	浅い土坑内での焚火で焼土が形成されたもの。						

SN71	位　置	MG52・53	層　位	地山面	重複遺構	なし	
形　態	楕円形	規　模	0.80m ～ 0.49m	標　高	24.615m ～ 24.437m		
焼土の厚さ	10cm	埋没過程	覆土は表土のみ。				
土　坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深　さ	－cm	底面標高	－m
遺　物	なし					性　格	地床炉
特　徴	南半部は撹乱を受け残存しない。周辺には柱穴状の小ピットが散在。						

SN72	位　置	MG53	層　位	地山面	重複遺構	SB78新旧不明	
形　態	不整楕円形	規　模	1.97m ～ 0.95m	標　高	24.627m ～ 24.558m		
焼土の厚さ	8cm	埋没過程	覆土は表土のみ。				
土　坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深　さ	－cm	底面標高	－m
遺　物	なし					性　格	地床炉
特　徴	地山面に形成された地床炉。SB78内に付属する屋内地床炉の可能性もある。						

SN73	位　置	MG54・MH54	層　位	地山面	重複遺構	SB77・78新旧不明	
形　態	不整形	規　模	(1.20m) ～ 21.0m	標　高	24.430m ～ 24.270m		
焼土の厚さ	5cm	埋没過程	覆土は表土のみ。				
土　坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深　さ	－cm	底面標高	－m
遺　物	なし					性　格	地床炉
特　徴	中央部が撹乱によって破壊され２箇所に分断されている。地山面まで受熱し赤変している。						

３類　広い範囲に炭化物が散乱し、堆積土には焼土粒も混じる。受熱礫や鉄滓が集中する。

ＳＮ１５

ＳＮ１５は火熱によって明瞭な焼土が形成されているわけではないが、浅い土坑内に炭化物層が形成され、炭化物や焼土粒も散布することから、この地点で火を焚いたと判断し、焼土遺構内に含めた。出土遺物には特に椀状鉄滓が多く、流動滓はほとんどないこと、底面から埋土中にかけて土師器坏などが多量に含まれることが注目されている。土師器等は二次受熱によってかなりもろくなったものもある。火を用いた行為が土師器等の投棄または遺棄、及び礫や鉄滓の配置の後に行われていること、炭化物層の分布範囲が広いこと、強い火熱によって形成される焼土が存在しないことからすれば、遺物が投棄または遺棄された後に全体的に受熱した可能性が高い。ただし、礫の中にはかなりの高温を受けて赤変し割れ砕けているものが多く、焼土が形成されない程度の火力でここまでになるかどうか疑問である。したがって、礫の受熱はこの遺構に置かれる以前にすでに受熱し、この遺構で再受熱したとも考えられる。なお、受熱礫や椀状鉄再の出土状況から、ＳＮ１５が鍛治遺構であるとの見方もできようが、火炉が存在しないこと、埋土全量の水洗によっても鍛造剥片が検出されなかったことから、その可能性は否定される。ただし、鍛治遺構が別の場所に存在し、そこで使用・生成した受熱礫や椀状鉄滓がＳＮ１５に集中投棄され、土師器等と一緒に焼却された可能性は充分に考えられる。

４類　比較的大型の浅い土坑内に大量の遺物が投棄され、全体に火熱を受け、土坑底面から検出面まで焼土層が形成される。焼土層は、土坑検出面では広範囲に及ぶ。

ＳＮ８８

ＳＮ８８には大量の遺物が包含されていた。出土土師器の器種は甕が多い。坏・甕・フイゴの羽口とも完形品はなく、破片のみである。また、鉄滓には流動滓・鍛治滓ともに含まれる。鉄滓・使用されている端部が溶融したフイゴ羽口の破片が出土したことから、この遺構は土師器焼成遺構ではないと判断される。埋土中には遺物・焼土とも全体的に含まれ、自然流入による堆積でないことは明らかで、短期間の焚火によって形成され、１類焼土遺構とは規模形態・遺物量や焼土の量、範囲が大きく異なるものの現時点では廃棄焼却目的の施設としておきたい。

焼土遺構出土遺物

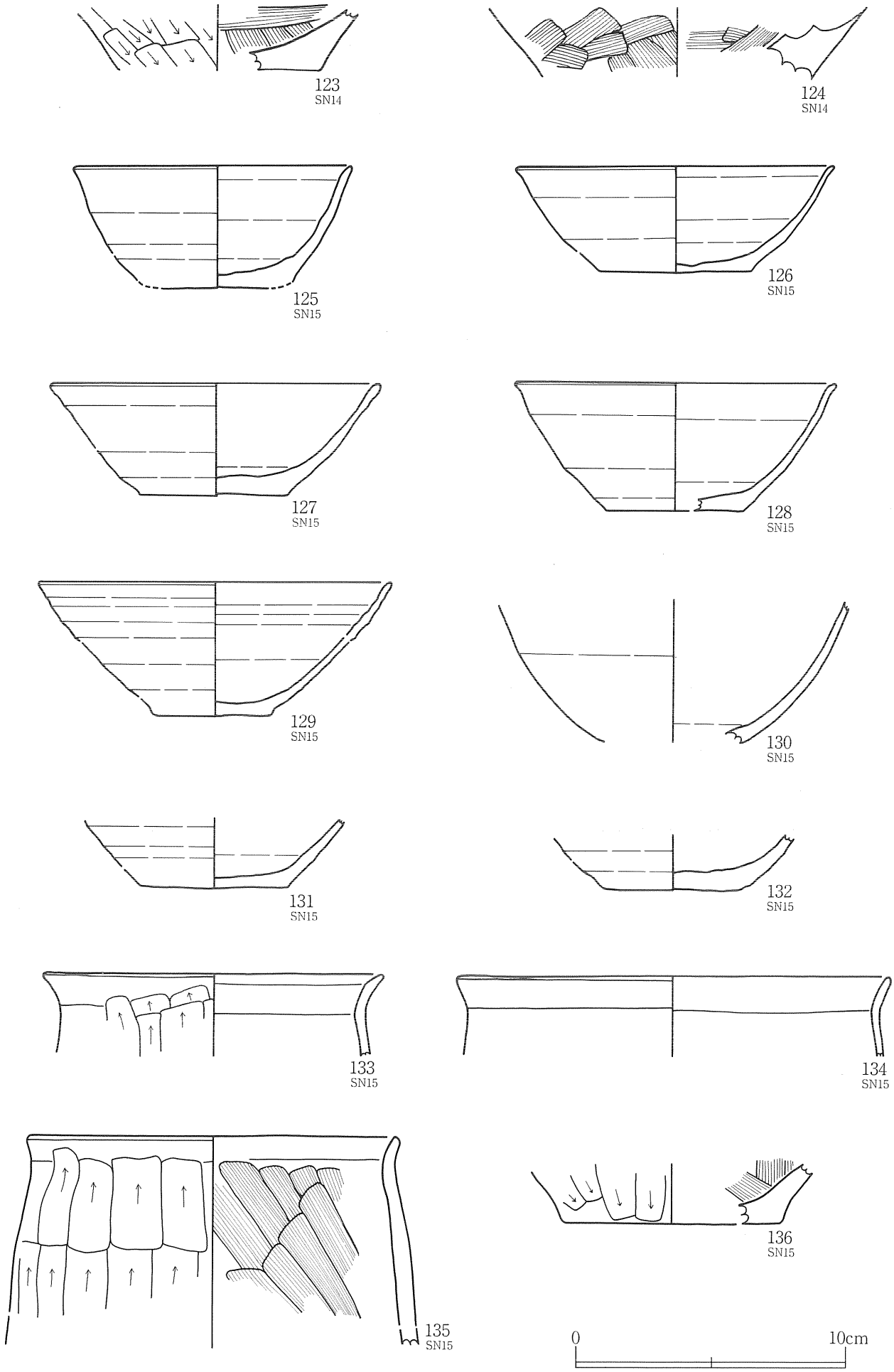
SN14

123は小型の甕、124は大型の甕の破片である。124は内外面ともナデ調整を施している。

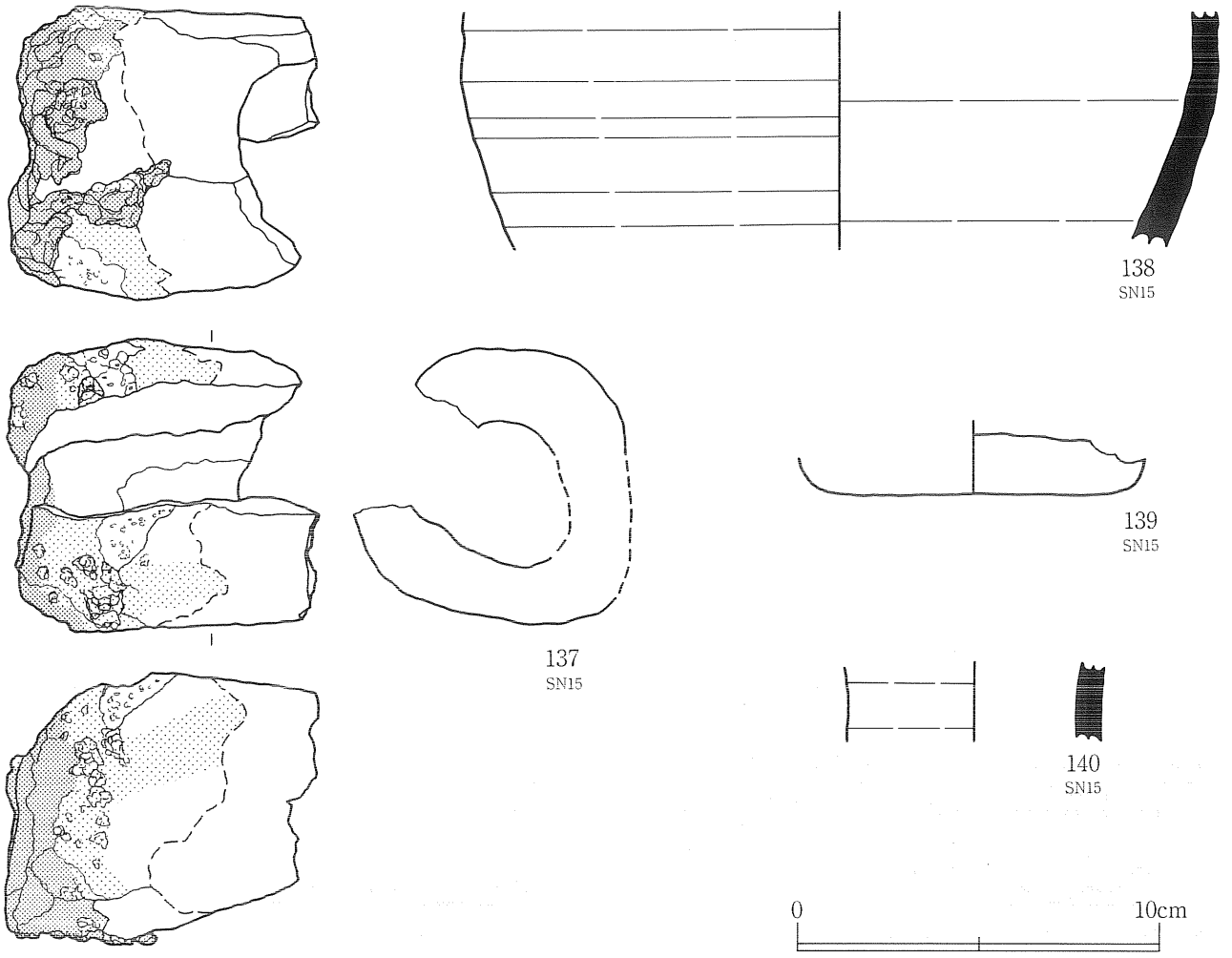
SN15

遺物が多数出土したが、特に鉄滓と復元可能な坏が目立つ。坏は程度差はあるがほとんどが体部が湾曲し膨らむタイプのものである。口縁部は端部がわずかに外反するもの126･128と直線的に立ち上がるものの２種がある。

小型で体部の立ち上がりが急なもの(125)、体部の膨らみが大きく椀形のもの(130)など器形はバラエティーがある。133～135は小型の甕である。ロクロ非使用で外面はヘラケズリ調整を施している。136の底辺部も調整は同様である。139も甕の底部と思われる。底面には木葉痕が残る。138は須恵器壺の胴部である。外面はロクロ調整痕が明瞭でヘラケズリ痕は全く認められない。140は須恵器長頸壺の頸部である。137はフイゴの羽口の先端部で、著しく溶融している。端部はガラス化し、鉄滓の付着も認められる。141～146は椀状滓である。141･146は半分に折れた状態のものである。これらは表面の凹凸に炭をかみ込んでいる。143･144は



第６８図　焼土遺構内出土遺物（１）ＳＮ１４・１５①



第６９図　焼土遺構内出土遺物（２）ＳＮ１５②

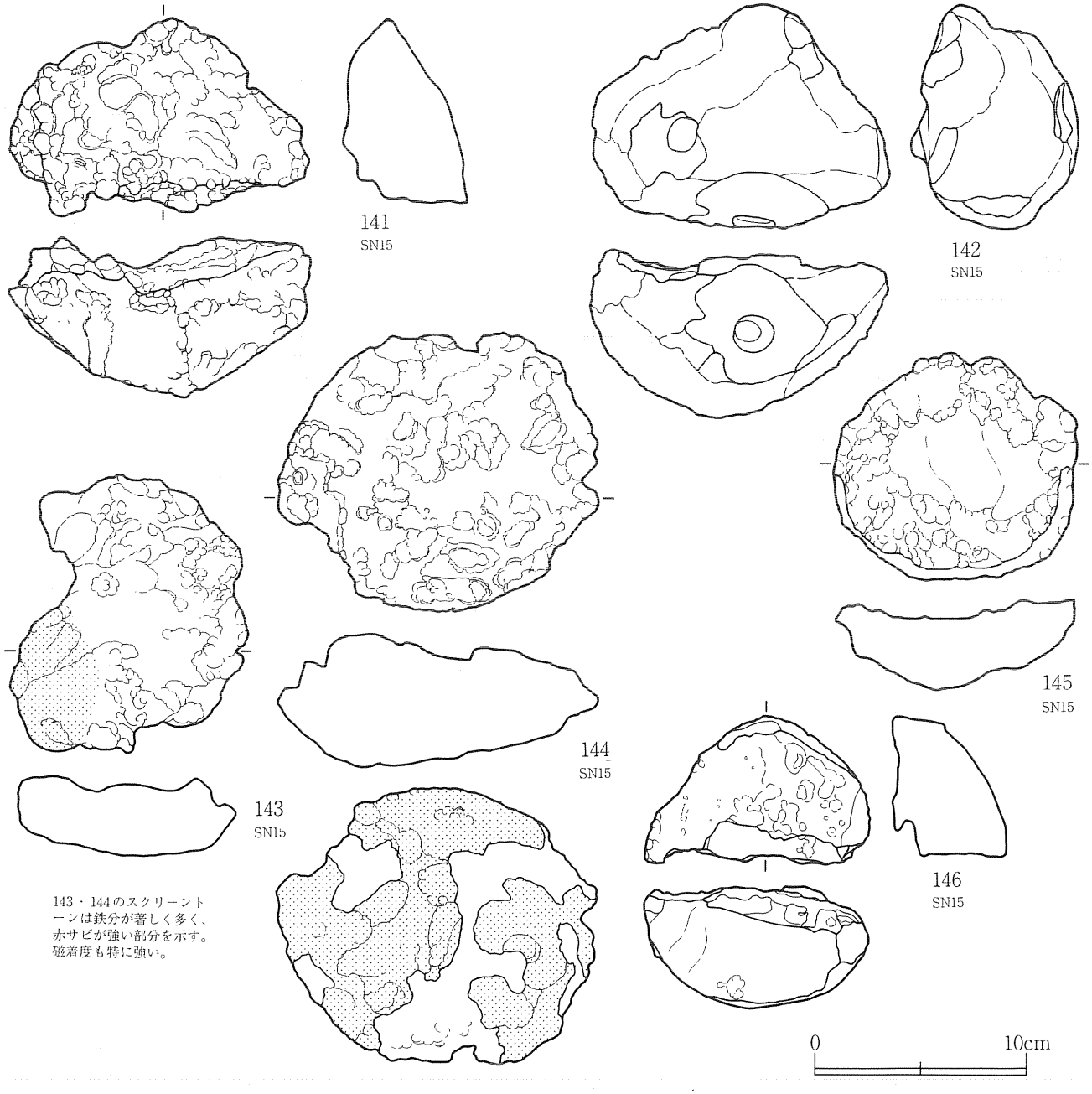
番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
123	SN14	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	(剥離)	口なし 底17%	細砂混	良	—	(8.0)	—	—	73
124	SN14	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ→ナデ	—	口なし 底なし	細砂混 粗砂少混	良	—	—	—	—	73
125	SN15	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) マメツ	高台剥離	口5%以下 底100%	中砂混	やや良	(10.3)	(5.7)	(4.6)	(27.0°)	73
126	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り ↻	口25% 底100%	細砂混	やや軟	(11.8)	5.6	4.0	31.0°	73
127	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り ↻	口5%以下 底100%	微砂混	やや軟	(12.1)	5.5	4.2	34.0°	73
128	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り ↻	口8% 底40%	細砂混	良 ↓ 二次受熱	(11.9)	(5.2)	4.8	30.0°	73
129	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	回転糸切り	口15% 底100%	細砂少混	やや軟	(13.0)	4.2	(5.0)	(38.0°)	73
130	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	—	口なし 底なし	微砂混	(良) ↓ 二次受熱	(12.5)	—	—	—	73
131	SN15	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.5	—	—	73
132	SN15	土師器	坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口なし 底100%	細砂混	良 ↓ 二次受熱	—	5.2	—	—	73
133	SN15	土師器	甕	(内) マメツ (外) ヘラケズリ↑	—	口15% 底なし	粗砂混	やや良	(12.5)	—	—	—	73
134	SN15	土師器	甕	(内) マメツ (外) マメツ	—	口13% 底なし	粗砂混	(良) ↓ 二次受熱	(16.0)	—	—	—	73
135	SN15	土師器	甕	(内) ナデ↑ (外) ヘラケズリ↑	—	口17% 底なし	中砂混	良	(13.5)	—	—	—	73
136	SN15	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↓	マメツ	口なし 底13%	中砂混	良	—	(6.0)	—	—	73
138	SN15	須恵器	壺	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	—	微砂混 粗砂少混	きわめて良	—	—	—	—	74
139	SN15	土師器	甕	(内) ナデ (外) —	ナデ ↓ 木葉痕	口なし 底60%	粗砂多混	良	—	(8.5)	—	—	74
140	SN15	須恵器	壺	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	—	微砂少混	良	—	—	—	—	74

番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部の変化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	ふしこみ角度	端部角	図版番号
137	SN15	羽口	端部に鉄滓少量付着。	スサ入り	○	○	○	(8.65)	8.25	4.0	65.0°	84.0°	74

第13表　焼土遺構出土遺物観察表（１）　SN14・SN15

一部が特に赤錆化し、鉄分が特に多く含まれるようである。144は赤錆化した部分が下面全体を取り巻くように付着している。どの椀状滓も磁着性が強いが、144の下面は特に強い。142の側面にはフイゴの羽口が密着したかのように見える部分がある。底面が半球形、上面は平坦であるが、周囲には上面と垂直な平坦な面が一面あり、その中央部にフイゴの羽口の断面とも見える部分がある。中心には径約2.2cm の孔の痕跡が凹みとなっており、その周囲を幅約2,5cm の同化した土がドーナツ状に取り巻いている。フイゴの羽口が使用中に椀状滓に密着すれば当然空気を送入するという本来の機能が失われてしまうので、何らかの事情で141の鉄滓が形成される途中に羽口先端部の破片が融着したものとしておきたい。

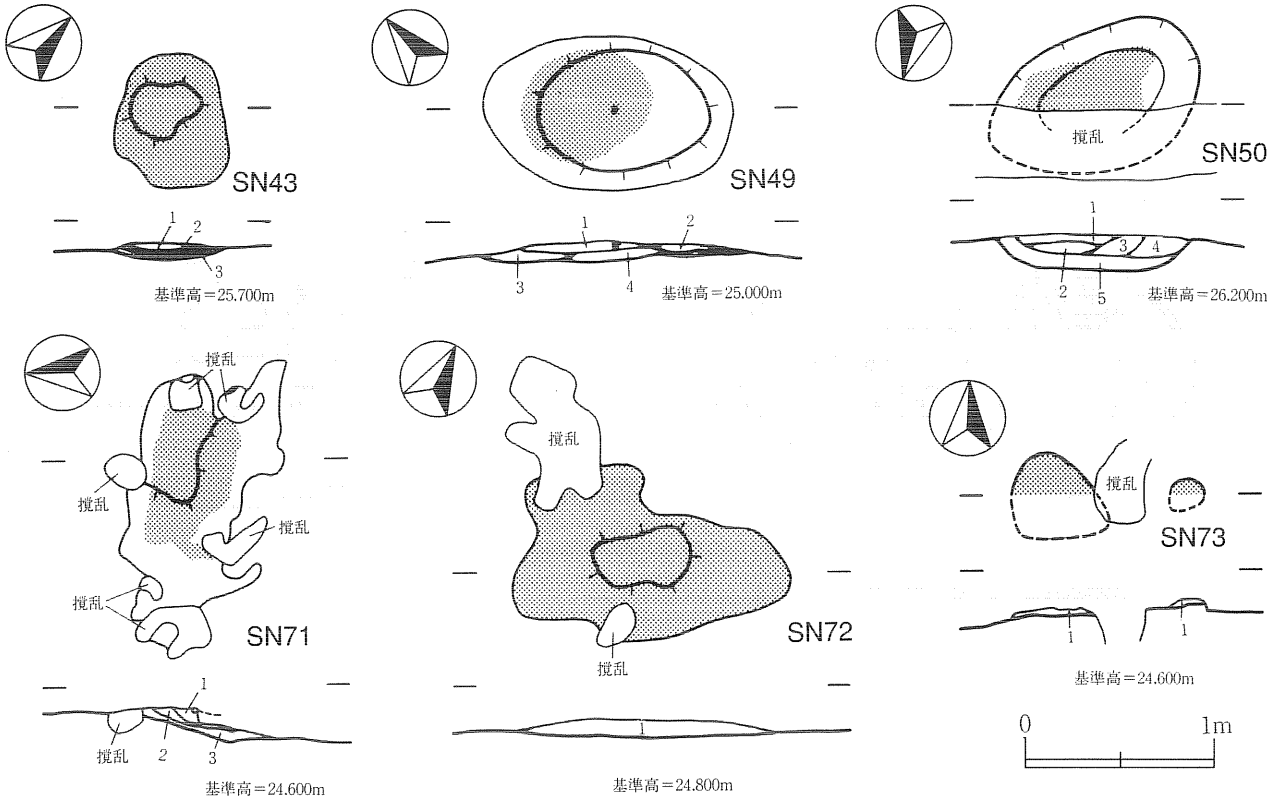
SN88	位　置	MI53・54		層　位	地山面	重複遺構	なし
形　態	楕円形	規　模	0.54m ～ 0.34m	標　高	24.392m ～ 24.328m		
焼土の厚さ	8cm	埋没過程	土器片・鉄滓・フイゴ羽口を投棄後に燃やし、人為的に埋め立てたものか？				
土　坑	不整楕円形	土坑の規模	2.42m ～ 1.40m	深　さ	35cm	底面標高	23.972m
遺　物	土師器（坏147～149・151・153、高台付坏150・152、鉢154、甕155～164、鍋165・166）、フイゴの羽口（167～170）、鉄滓						
特　徴	最も強く焼けているのは南端部周辺だが、焼土粒の混じる範囲は広い。廃棄用土坑または土師器の焼成遺構か。						



第７０図　焼土遺構内出土遺物（３）ＳＮ１５③

SN88

埋土中から多量の土師器が出土した。坏は少量で大半が甕である。二次的受熱が著しく、復元し図示できたものは全体の量からすれば一部にすぎない。坏は体部が湾曲して膨らみ口縁部が外反するタイプ（147･148･153）と、体部から口縁部まで直線的に外傾するタイプ（149）がある。149･151の底面には棒状圧痕が認められる。150･152の高台付坏は、体部の湾曲は弱く、152では口縁部が強く外反する。比較的薄く低い高台を「ハの字形」に外側に開くように貼り付けている。154は小型の鉢である。器高より口径が大きい器形である。155～157は小型の甕であるが器形にはバラエティーがある。155は体部が膨らみ頸部がすぼまって口縁部が外反する壺形に似た器形である。156は口縁部が垂直に立ち上がる器形である。158～164は大型の甕である。158は口縁部が外反するタイプ。159は口縁部直立タイプである。161･162は底面に粗粒砂の圧痕がある。163は内外面ともハケ目調整を施したものである。165･166は体部から口縁部まで直線的に外傾する器形の鍋である。フイゴの羽口は比較的大きい破片が出土した。167～169はフイゴの羽口の中央部分、



S N43
1　2.5Y R4／8　赤褐色シルト　焼土。焼けしまっていてきわめて硬化している。
2　5Y R4／6　赤褐色シルト　焼土。きわめてしまりあり。
3　5Y R3／4　暗赤褐色シルト　焼土。きわめてしまりあり。地山土が漸移的に赤変する部分。

S N49
1　10Y R3／3　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。炭化物小粒１％含む。7.5Y R4／6褐色焼土大塊～中粒30％混じる。
2　10Y R3／4　暗褐色シルト　きわめてしまりあり。炭化物小粒５％含む。焼土中～小粒２％含む。
3　10Y R3／4　暗褐色シルト　しまりあり　地山土10％混じる。炭化物小粒２％含む。
4　10Y R4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。（漸移層）　炭化物小粒１％含む。焼土小粒１％含む。

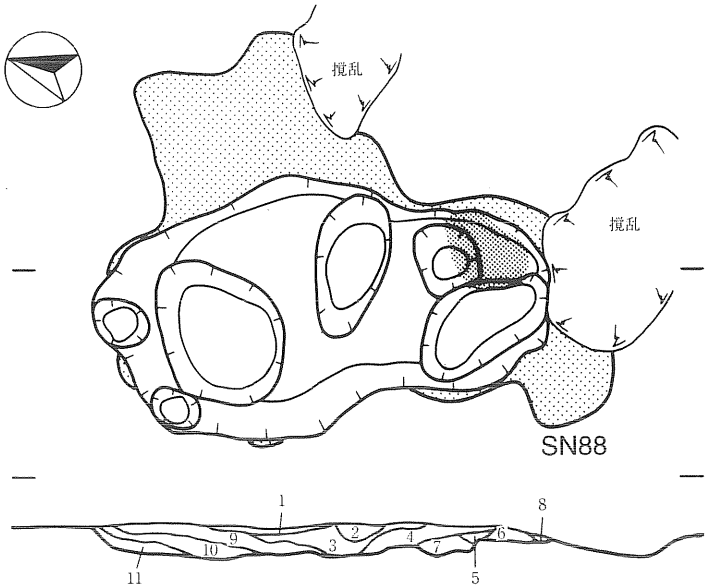
S N71
1　7.5Y R4／8　赤褐色～7.5Y R5／8　明褐色シルト　焼土。しまりあり。暗褐色土（7.5Y R3／4）40％混じる。炭化物小粒２％含む。
2　5Y R3／4　暗褐色シルト　焼土。しまりあり。火熱による赤変が及んだ部分。母材は、10Y R3／4暗褐色シルト。
3　10Y R3／4　暗褐色シルトと地山土の混土。１層の焼土小粒１％、炭化物小粒１％含む。

S N50
1　7.5Y R3／4　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒10％含む。焼土小粒10％含む。
2　7.5Y R4／4　褐色シルト　しまりあり。7.5Y R5／8　明褐色焼土大～小粒50％、炭化物小粒５％含む。（焼土層）
3　7.5Y R4／6　褐色シルト　しまりあり。炭化物大～中粒５％含む。焼土中～小粒20％含む。
4　10Y R2／3　黒褐色シルト　しまりあり。炭化物大粒５％含む。焼土小粒２％含む。
5　10Y R3／4　暗褐色シルト　しまりあり。炭化物大塊１％、炭化物小粒２％含む。焼土小粒１％含む。
6　10Y R2／3　黒褐色シルト　しまりあり。倒木痕の埋土。
7　10Y R3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土20％混じる。倒木痕の埋土。
8　10Y R5／4　にぶい黄褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土に暗褐色土が30％混じる。倒木痕の埋土。

S N72
1　7.5Y R4／8　赤褐色～7.5Y R5／8　明褐色シルト　焼土。しまりあり。暗褐色土（7.5Y R3／4）40％混じる。炭化物小粒２％含む。

S N73
1　5Y R4／6　赤褐色シルト　焼土。きわめてしまりあり。地山土が火熱によって赤変したもの。

第７１図　ＳＮ４３・４９・５０・７１・７２・７３焼土遺構



ＳＮ88

1　10ＹＲ3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。炭化物小粒１％含む。焼土中～大粒５％含む。

2　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　ややしまりなし。地山土20%混じる。炭化物小粒１％含む。焼土小粒１％含む。

3　10ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　ややしまりあり。地山中粒５％含む。炭化物小粒２％、焼土小～中粒５％含む。

4　7.5ＹＲ4／3　褐色シルト　しまりあり。地山中粒２％含む。炭化物小粒２％、焼土中粒７％含む。

5　7.5Ｒ4／6　褐色シルト　焼土。しまりあり。炭化物小粒５％含む。焼土30%混じる。

6　5ＹＲ5／8　明赤褐色シルト　焼土。しまりあり。炭化物中粒５％含む。焼土　80%含む。褐色土20%混じる。

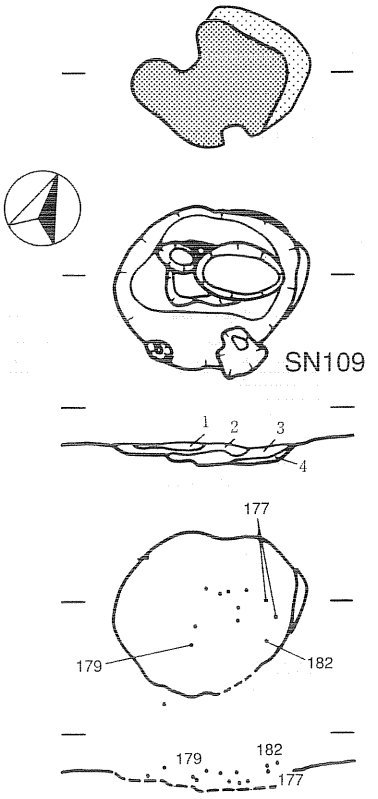
7　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山土10%混じる。炭化物大～中粒　10%、焼土小粒５％含む。

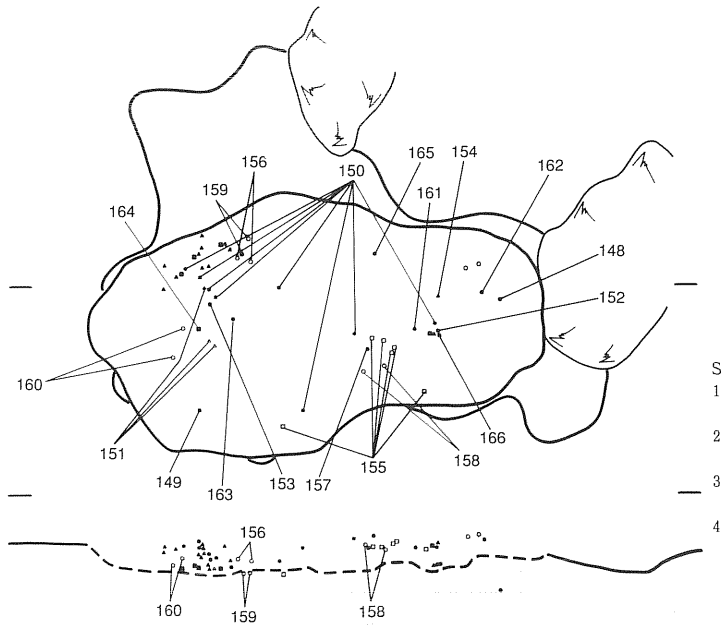
8　7.5ＹＲ4／6　褐色シルト　ややしまりあり。地山土５％混じる。炭化物小粒１％焼土大粒10%含む。

9　7.5ＹＲ4／3　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土５％混じる。炭化物中粒５％含む。焼土小粒２％含む。

10　7.5ＹＲ4／4　褐色シルト　焼土。しまりあり。地山土５％、炭化物30%混じる。焼土20%、土師器多量に含む。

11　10ＹＲ4／6　褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土30%混じる。





ＳＮ109

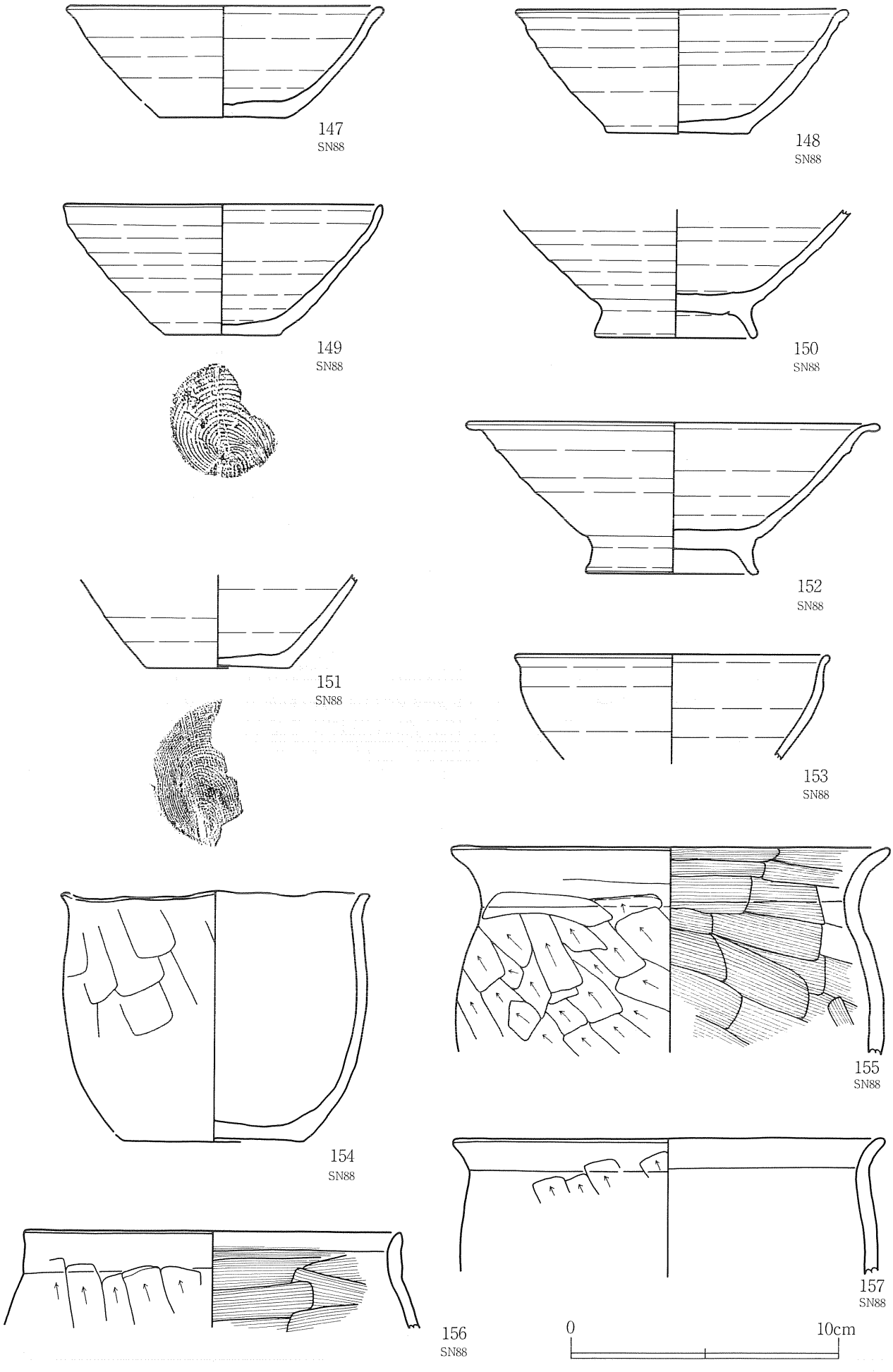
1　10ＹＲ5／6　黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。暗褐色土20%混じる。地山土のかたまりに、焼土小粒２％、炭化物中粒２％含む。

2　7.5ＹＲ4／4　褐色シルト　ややしまりあり。焼土大塊～中粒20%、炭化物小粒５％含む。

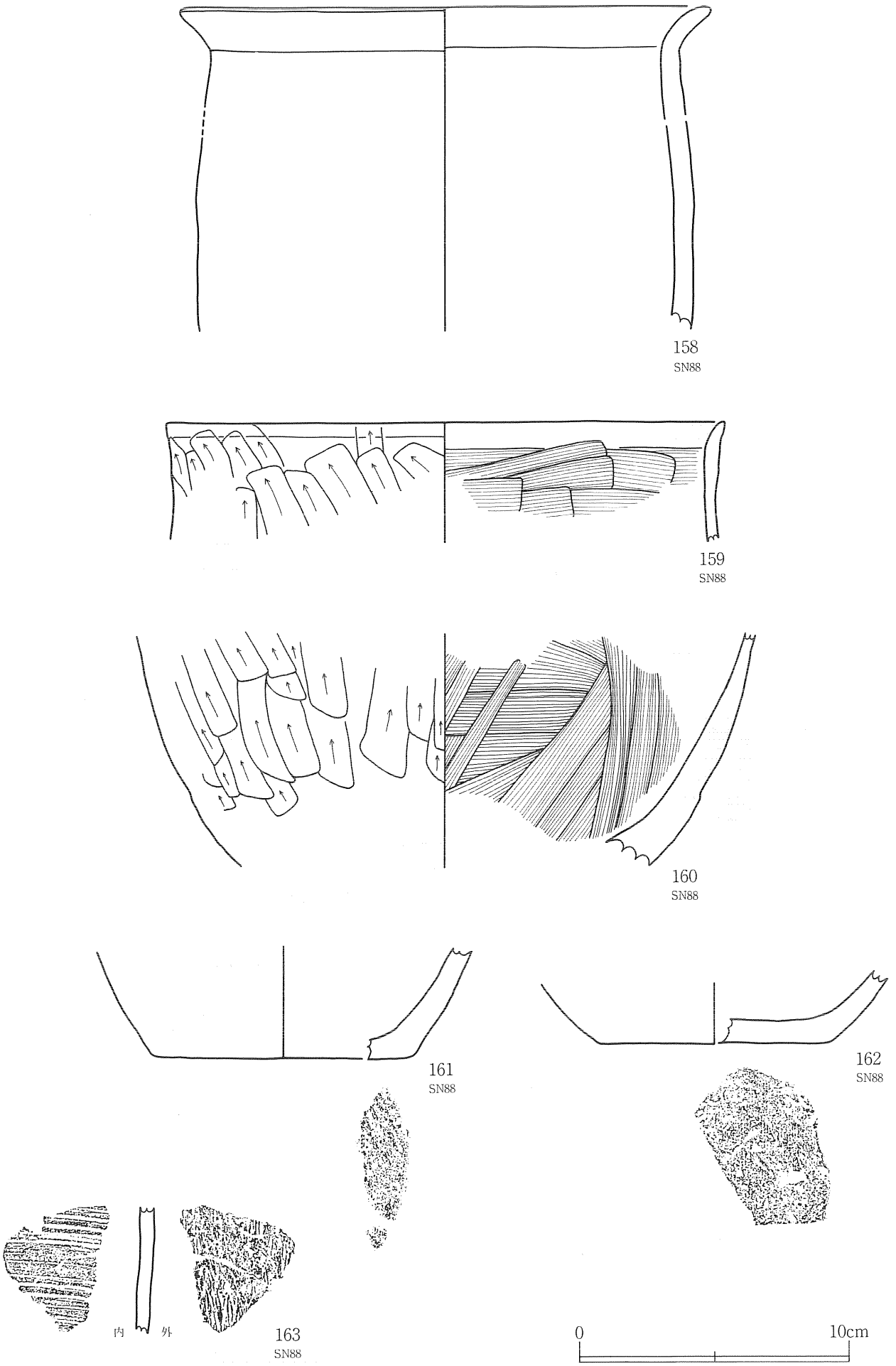
3　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりあり。地山小粒５％含む。炭化物小粒５％、焼土小粒２％含む。

4　10ＹＲ5／6　黄褐色シルト　しまりあり。暗褐色土30%混じる。炭化物小粒１％含む。

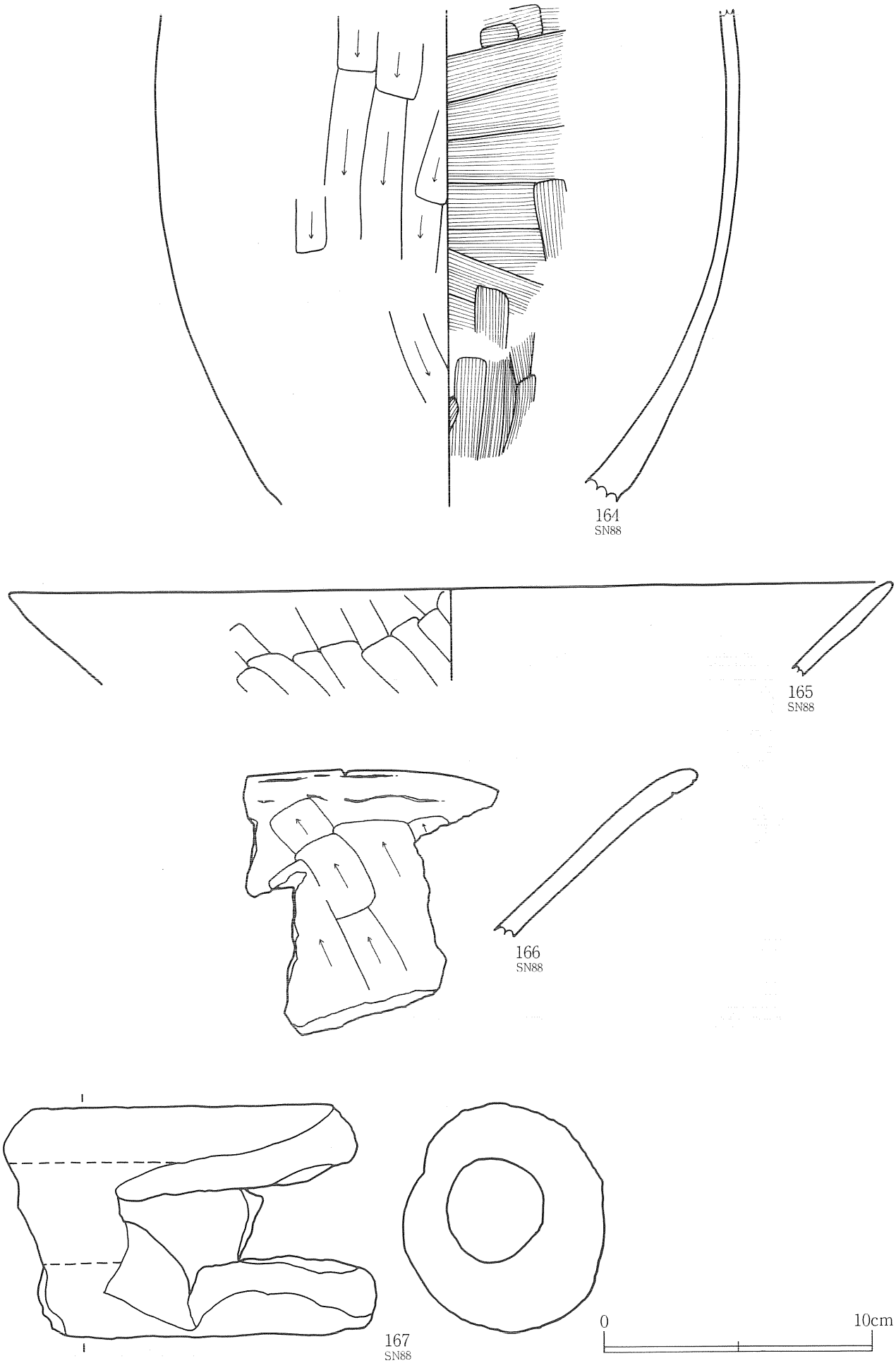
第７２図　ＳＮ８８・１０９焼土遺構



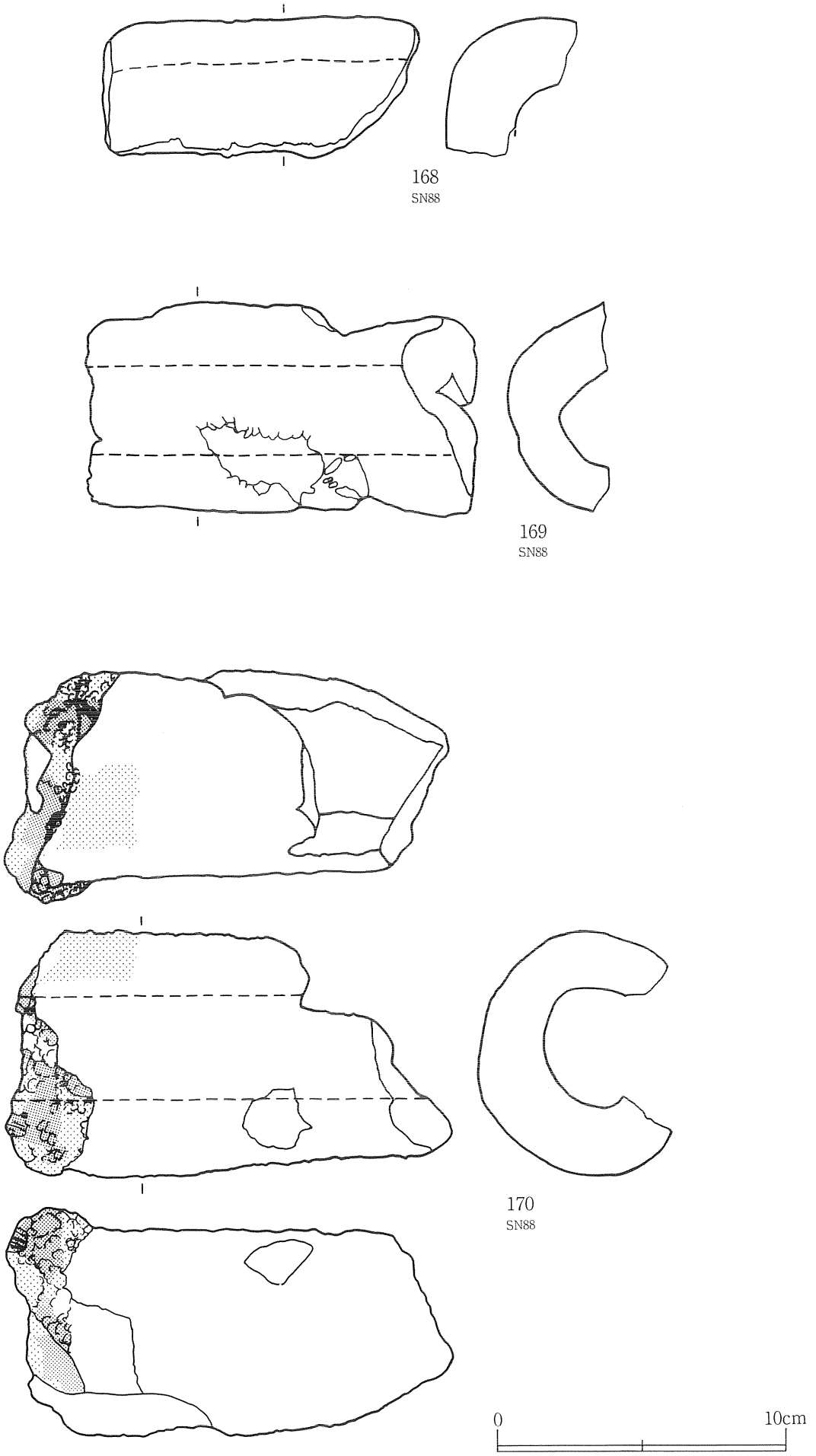
第７３図　焼土遺構内出土遺物（４）ＳＮ８８①



第７４図　焼土遺構内出土遺物（５）ＳＮ８８②



第７５図　焼土遺構内出土遺物（６）ＳＮ８８③

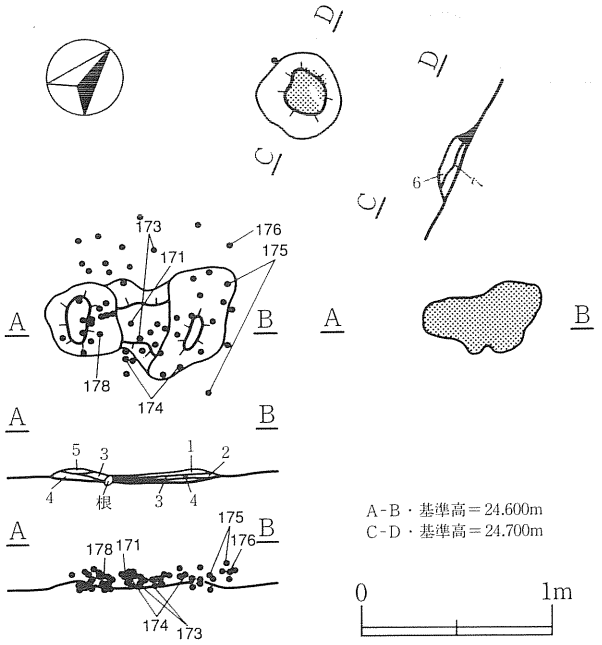


第７６図　焼土遺構内出土遺物（７）ＳＮ８８④

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
147	SN88	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口40% 底50%	微砂混	良	(11.9)	4.8	4.2	33.0°	78
148	SN88	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口83% 底100%	微砂少混	良	12.3	5.3	4.7	左32.0° 右31.0°	78
149	SN88	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 植物茎圧痕	口17% 底67%	微砂混	良	(12.0)	(4.8)	4.9	33.0°	78
150	SN88	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 高台貼付→ロクロナデ	口なし 底100%	微砂混	良	—	5.9 高台径 6.4	—	—	78
151	SN88	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 板状圧痕	口なし 底50%	微砂混	良	—	(5.4)	—	—	78
152	SN88	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 高台貼付→ロクロナデ	口33% 底92%	微砂混	良	(15.4)	6.6 高台径 6.4	5.7	—	78
153	SN88	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂混	—	(11.8)	—	(4.1)	—	78
154	SN88	土師器	鉢	(内) マメツ（ナデ？） (外) ヘラケズリ↑	ナデ	口50% 底100%	中砂混	良	(11.4)	6.7	9.3	—	78
155	SN88	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) 体部 ヘラケズリ↑ 口縁部 ヨコナデ	—	口25% 底なし	粗砂混	きわめて良	(16.5)	—	—	—	78
156	SN88	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ	—	口14% 底なし	中砂混	良	(14.0)	—	—	—	78
157	SN88	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口13% 底なし	粗砂混	良	(16.0)	—	—	—	78
158	SN88	土師器	甕	(内) ナデ (外) マメツ	—	口5% 底なし	粗砂混	やや良 ↓ 再受熱	(19.4)	—	—	—	79
159	SN88	土師器	甕	(内) ヨコナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口25% 底なし	中砂混	良	(21.0)	—	—	—	79
160	SN88	土師器	甕	(内) ナデ→黒色処理 (外) ヘラケズリ↑	—	口なし 底なし	粗砂混	良	—	—	—	—	79
161	SN88	土師器	甕	(内) マメツ (外) マメツ	ナデ	口なし 底20%	粗砂混	良 ↓ 再受熱	—	(10.0)	—	—	79
162	SN88	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ底辺部↘	細砂・粗砂圧痕	口なし 底25%	粗石混	良	—	(9.5)	—	—	79
163	SN88	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	—	口なし 底なし	粗砂混	良	—	—	—	—	79
164	SN88	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↓↑	—	口なし 底なし	粗砂混	良	—	—	—	—	80
165	SN88	土師器	鍋	(内) ヨコナデ→黒色処理 (外) ヘラケズリ↑	—	口10% 底なし	細砂多混	良	(—)	—	—	—	80
166	SN88	土師器	鍋	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口10% 底なし	中砂混	良	(—)	—	—	—	80

番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ角	端部角	図版番号
167	SN88	羽口	体部中央部。ガラス化部分なし。	スサ入り	○	—	—	(13.9)	8.7	3.9	—	—	80
168	SN88	羽口	体部。フイゴ側に近い部分。	スサ入り	○	—	—	(11.0)	(6.8)	(3.1)	—	—	81
169	SN88	羽口	フイゴ側端部か。	スサ入り	—	—	—	(13.5)	7.5	(2.9)	—	—	81
170	SN88	羽口	端部に鉄滓付着。	スサ入り	○	○	○	(15.5)	8.6	4.1	37.0°	65.0°	81

第14表　焼土遺構出土遺物観察表（２）　SN88



SN108A－B

1　5YR6／8　橙色シルト　焼土。焼けしまっていてきわめて硬化している。

2　7.5YR2／2　黒褐色シルト　しまりあり。１層の焼土小粒５％、炭化物極小粒１％含む。

3　10YR3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。火熱によりわずかに硬化している。炭化物小粒５％含む。

4　10YR5／4　にぶい黄褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。地山漸移層である。

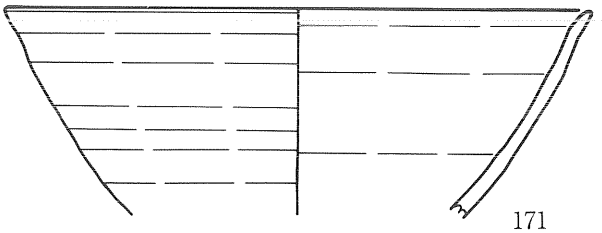
5　10YR4／3　褐色シルト　ややしまりあり。１層の焼土小～中粒20％、炭化物小粒５％含む。

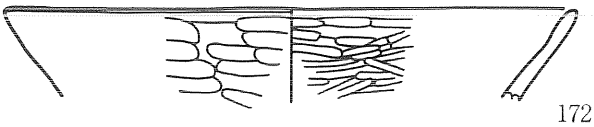
SN108C－D

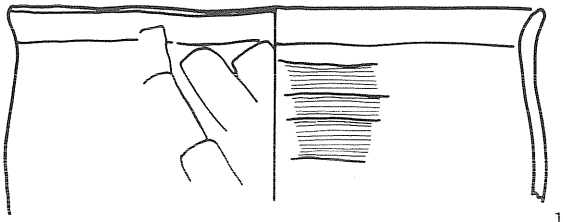
6　7.5YR6／8　橙色シルト　ややしまりあり。焼土大塊～大粒含む。7.5YR3／2黒褐色シルト50％混じる。

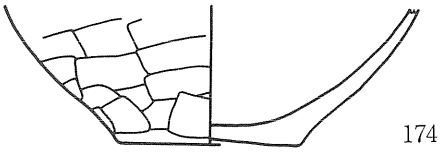
7　10YR3／3　暗褐色シルト　ややしまりあり。１層の焼土小粒５％含む。

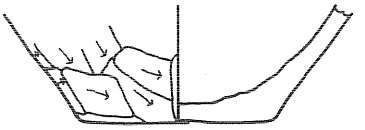
第７７図　ＳＮ１０８焼土遺構

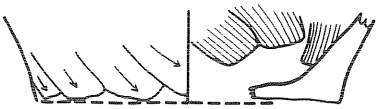

171
SN108

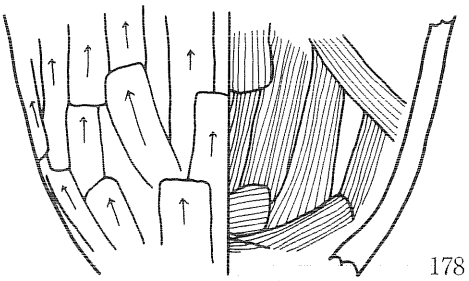

172
SN108

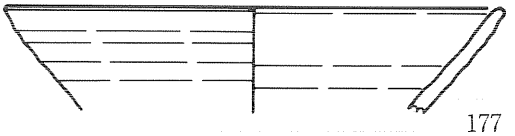

173
SN108

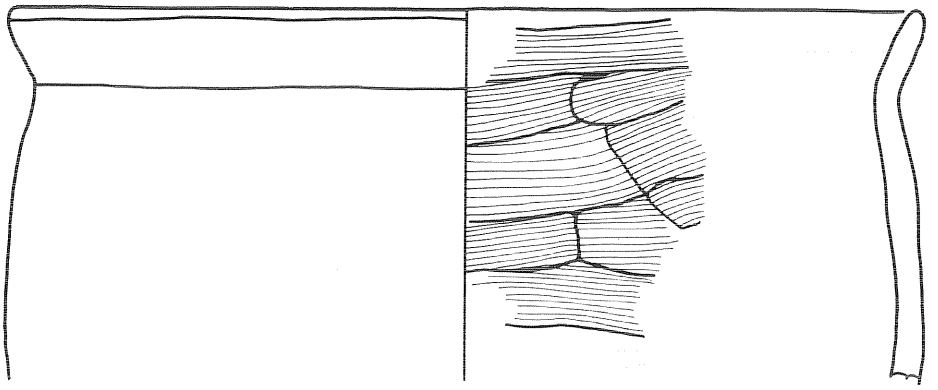

174
SN108

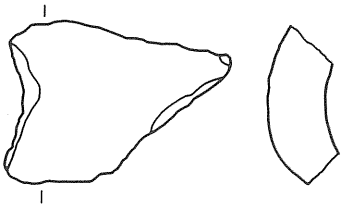

175
SN108

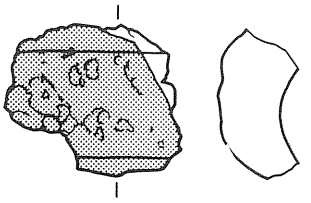

176
SN108


178
SN108


177
SN109

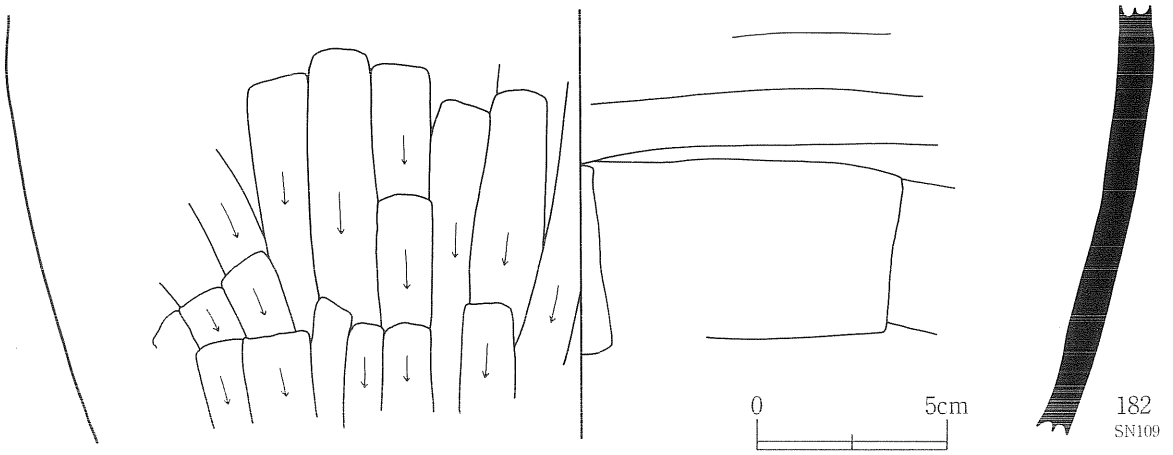

179
SN109


180
SN109


181
SN109

0　10cm

第７８図　焼土遺構内出土遺物（８）ＳＮ１０８・１０９①



第７９図　焼土遺構内出土遺物（９）ＳＮ１０９②

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
171	SN108	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口13% 底なし	細砂少混	良	(15.5)	—	—	—	83
172	SN108	土師器	坏	(内) ミガキ黒色処理 (外) ミガキ↔	—	口8% 底なし	微砂少混	良	(15.0)	—	—	—	83
173	SN108	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口25% 底なし	中砂混	良	(14.0)	—	—	—	83
174	SN108	土師器	坏	(内) ヨコナデ→ヘラミガキ(横・斜) (外) ヘラケズリ→	細砂圧痕	口なし 底70%	中砂混	良	—	(4.8)	—	—	83
175	SN108	土師器	甕	(内) 黒色処理→焼けはじけ (外) ヘラケズリ	細砂圧痕	口なし 底50%	中砂少混	良	—	(5.2)	—	—	83
176	SN108	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ→	剥離	口なし 底32%	粗砂混	良	—	(8.0)	—	—	83
177	SN109	土師器	坏	(内) マメツ (外) マメツ	—	口17% 底なし	微砂少混	良	(13.0)	—	—	—	83
178	SN108	土師器	甕	(内) ナデ↕ (外) ヘラケズリ↑	—	口なし 底なし	粗砂混	良	—	—	—	—	83
179	SN109	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口10% 底なし	細砂混	良	(23.8)	—	—	—	83

番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	丸しこみ推定角	端部角	図版番号
180	SK108	羽口	中央部～フイゴ側の一部。	スサ入り	—	—	—	(5.9)	(5.9)	(3.8)	—	—	83
181	SN109	羽口	先端部近い。溶融著しい。	スサ入り	—	○	○	(5.0)	—	—	—	—	83

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
182	SN109	須恵器	壺	(内) ロクロナデ (外) ヘラケズリ↓	—	—	微砂混	良	—	—	—	—	84

第15表　焼土遺構出土遺物観察表（３）　SN108・SN109

SN108	位置	LQ46	層位	第３層上面	重複遺構	なし
形態	(北)円形 (南)楕円形	規模	(北)0.23 m ～ 0.22 m (南)0.64 m ～ 0.36 m	標高	(北)24.490 m ～ 24.470 m (南)24.350 m ～ 24.380 m	
焼土の厚さ	(北) 2 (南) 3 cm	埋没過程	覆土は表土・第２層。人為的埋め立てをせず遺棄したもの。			
土坑	なし	土坑の規模	－m ～ －m	深さ	－cm	底面標高 －m
遺物	土師器（坏171・172・174、甕173・175・176）、フイゴの羽口（180）、鉄滓				性格	地床炉
特徴	２箇所に分かれる。どちらも地床炉。南部には土師器が多量に含まれ、焼土周辺にも散布する。					

SN109	位置	MI53	層位	地山面	重複遺構	なし
形態	不整円形	規模	0.94 m ～ 0.71 m	標高	24.310 m ～ 24.185 m	
焼土の厚さ	12cm	埋没過程	地山土を多く含む土で人為的に埋め立て。			
土坑	楕円形	土坑の規模	1.01 m ～ 0.87 m	深さ	12cm	底面標高 24.185 m
遺物	土師器（坏177、甕178・179）、須恵器（壺182）、フイゴの羽口（181）、鉄滓				性格	不明
特徴	土器片等を多量に投入した後に焚火をし、人為的に埋め立てている。焚火の目的は不明。					

170は先端部である。170は端部の溶融が著しくガラス化している。 SN108　171は体部が湾曲し口縁部が外反する大型の坏である。172･174はロクロ非使用の坏である。172は内外面ともヘラミガキ・黒色処理が施されている。174は体部が湾曲し膨らむ器形の坏である。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ後にヘラミガキしている。黒色処理はしていない。底面には全面に細粒砂の圧痕が認められる。175は小型の甕の底部である。内面に黒色処理を施している。外面はヘラケズリ整形、底面には全面に細粒砂の圧痕がある。176も小型の甕の底部で、底面は剥離欠失したものである。178は小型の甕で外面は粗いヘラケズリによって整形している。

SN109

177は比較的器高が低く皿に近い器形である。179は幅広の大型の甕で口縁部が外反する器形である。180はフイゴの羽口の中央部、181は先端部分の破片である。焼土中に大破片は含まれておらずこの遺構で使用したものとは考えにくい。隣接するSN88焼土遺構との関係がある遺物であろうか。182は須恵器壺の胴体部の破片である。内面は幅の広いナデ調整、外面はヘラケズリ調整であるがこの破片より上部では外面がロクロナデ調整に変わるようである。

７．溝跡

調査区北部で東西方向の溝 SD02･SD10･SD12、南北方向の溝 SD03を検出した。 SD10と SD12は中心間距離で約1.4m の間隔をあけて並行に延びる。 SD10の東端・ SD12の西端はいずれも撹乱により残存しないが、２条の溝は長さがほぼ同じで２条一組の施設と推測される。 SD02は西端が鉤形に南へ屈曲する部分が２箇所あり、この部分だけを作り替えている可能性がある。板塀跡と重複する場合すべて溝跡の方が新しい。SD97は調査区北東隅を「逆コの字」形に囲む溝で、東側はすでに失われている。南北の溝間距離は約16m である。方形に閉じるのか逆コの字に東側が開放するのかは不明である。 SD45･SD123板塀跡と重複し、両者より新しい。溝の形状や埋土は SD29とよく似る。これらの溝は古代の板塀跡より新しく、 SD29と SD97の類似関係から掘削の時期はおよそ近世以降と推定される。

調査区南部では東西方向に延びる SD18･SD133溝跡とその東端付近で重複する SD29を検出した。 SD18溝跡は SD133溝跡と同じ位置で重複する。底面はいずれも東から西に傾斜する。 SD29溝跡は SD133溝跡よりは新しく SD18溝跡よりは古い。

溝跡出土遺物

SD18

埋土中から183･184が出土した。183は縄文時代の擦石である。楕円形のシルト岩円礫の一側縁に二次加工をした後、その側面が擦られて平坦面となっている。擦痕からわかる擦りの方向は長軸方向である。104は胎土に繊維を含む縄文前期の土器で LR 原体を横方向に回転施文している。

SD133

底面に近い部分で185の磁器が出土した。185は肥前系の染付椀で、菊花文が描かれている。肥前磁器Ⅳ期の製品である。

SD18・ SD133・ SD29は前後関係と時代について以下のように推察される。

最も古い溝は SD133である。底面近くから肥前Ⅳ期相当の磁器椀が出土したことから、江戸時代中頃以降に溝が掘られたのであろう。 SD18･SD133は改修が繰り返し行われながら使用され最後は人為的に埋め戻されている。その埋め戻しに使用した土の中には明治以降の遺物を全く含まないことから SD18溝跡の構築・使

SD02	位　置	MD～MK58、MI～MK59			層　位	3層上面
重複遺構	SA06・SA09・SA41→SD02				方　向	東―西
全　長	28.4m	傾斜方向	東から西	端部の状況	東端不明。西端は南にＬ字形に折れる。	
上端部幅	0.39m ～ 0.28m	下端部幅	0.35m ～ 0.22m		深　さ	cm ～ cm
埋没過程	人為的埋め立てか。	遺　物	なし		底面標高	m ～ m

SD03	位　置	MD58・59			層　位	3層上面
重複遺構	なし				方　向	南―北
全　長	(4.30m)	傾斜方向	南から北	端部の状況	南・北端とも不明。	
上端部幅	0.40m ～ 0.10m	下端部幅	0.20m ～ 0.05m		深　さ	7cm ～ cm
埋没過程	人為的埋め立てか。	遺　物	なし		底面標高	24.570m ～ m

SD10	位　置	LN・LO58			層　位	地山上面
重複遺構	SA45→SD10				方　向	東―西
全　長	(6.80m)	傾斜方向	東から西	端部の状況	西端あり。東端不明。	
上端部幅	0.40m ～ 0.25m	下端部幅	0.30m ～ 0.15m		深　さ	6cm ～ cm
埋没過程	人為的埋め立てか？	遺　物	なし		底面標高	24.920m ～ m

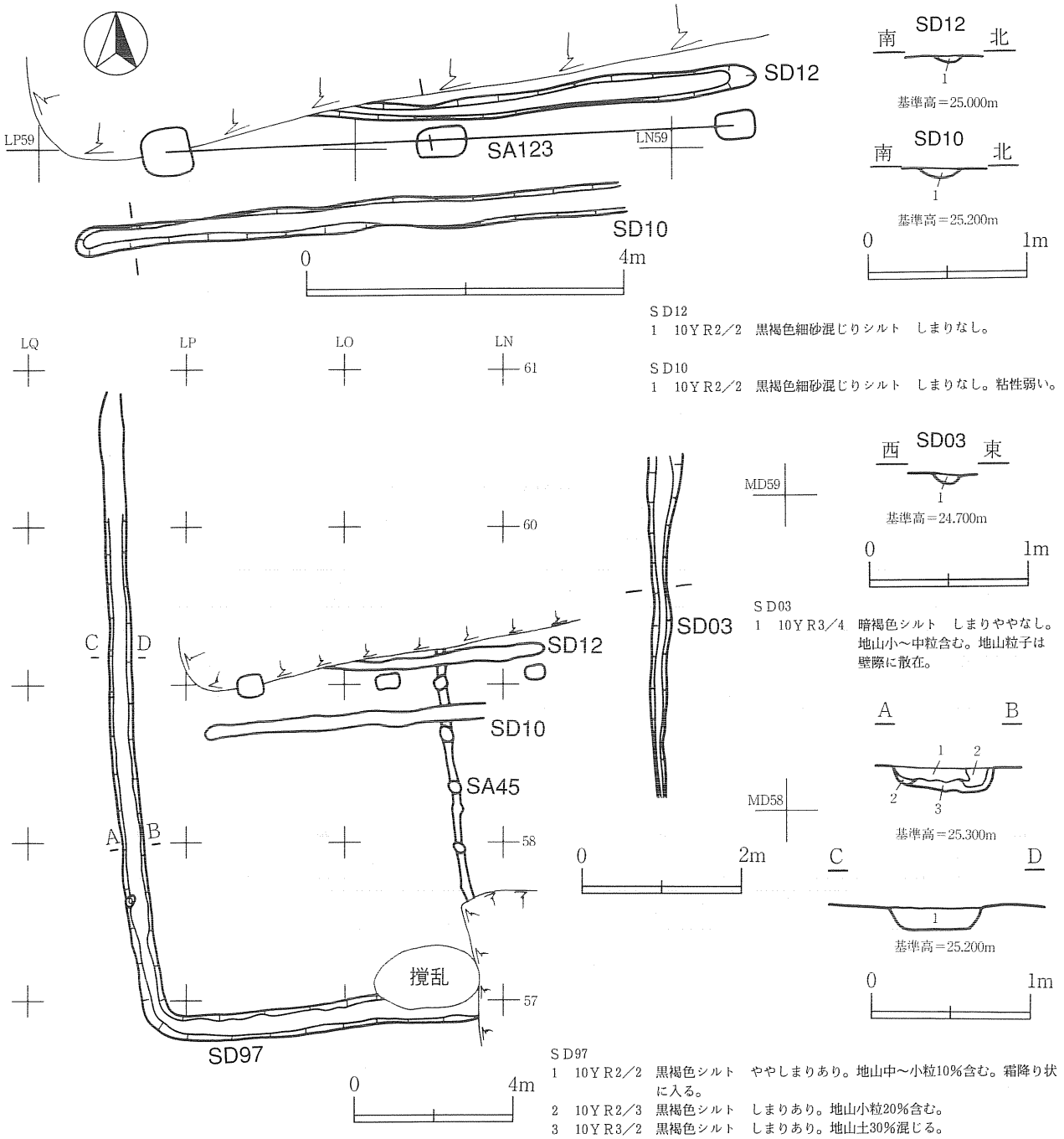
SD12	位　置	LM～LO59			層　位	地山上面
重複遺構	SA45→SD12、SA123P1とは前後不明。				方　向	東―西
全　長	(5.60m)	傾斜方向	東から西	端部の状況	西端不明。東端あり。	
上端部幅	0.35m ～ 0.25m	下端部幅	0.25m ～ 0.10m		深　さ	3cm ～ cm
埋没過程	人為的埋め立てか。	遺　物	なし		底面標高	24.940m ～ m

SD18	位　置	MC～LK38、LK39			層　位	第３層上面	
重複遺構	SD133→SD18、SD29→SD18				方　向	東―西、東端は南西―北東	
全　長	(48.10m)	傾斜方向	東から西	端部の状況	東・西端とも不明。		
上端部幅	1.90m ～ 0.94m	下端部幅	1.20m ～ 0.68m		深　さ	42cm	35cm
埋没過程	地山土による人為的埋め立て	遺　物	土師器片、フイゴの羽口、鉄滓、縄文土器・石器		底面標高	23.460m	23.050m

SD133	位　置	MC～LK38、LK39			層　位	(SD18に完全に覆われる)
重複遺構	SD133→SD18、SD133→SD29				方　向	東西、東端は南西―北東
全　長	(48.10m)	傾斜方向	東から西	端部の状況	東西端とも不明。	
上端部幅	(0.84m) ～ (0.42m)	下端部幅	0.53m ～ 0.16m		深　さ	49cm ～ 2cm
埋没過程	流入土による自然堆積	遺　物	磁器		底面標高	22.770m ～ 23.122m

SD29	位　置	LL38・39、LK38～40			層　位	地山上面
重複遺構	SD133→SD29、SD29→SD18				方　向	南―西―北東
全　長	(6.30m)	傾斜方向	北東から南西	端部の状況	北・東端は不明。南西端はSD18・SD133から分岐。	
上端部幅	0.72m ～ 0.43m	下端部幅	0.34m ～ 0.12m		深　さ	44cm ～ 34cm
埋没過程	人為的埋め立てか。	遺　物	なし・下駄		底面標高	23.211m ～ 23.270m

SD97	位　置	LN56・57、LO56・57、LP56～60			層　位	地山上面
重複遺構	SA45→SD97、SA124・125→SD97				方　向	東→西→北、逆Ｌ字形に屈曲
全　長	(20.60m)	傾斜方向	屈曲部から北と東へ	端部の状況	両端とも不明。	
上端部幅	0.70m ～ 0.52m	下端部幅	0.50m ～ 0.18m		深　さ	20cm ～ 11cm
埋没過程	人為的埋め立てか？	遺　物	なし		底面標高	24.763m ～ 24.876m



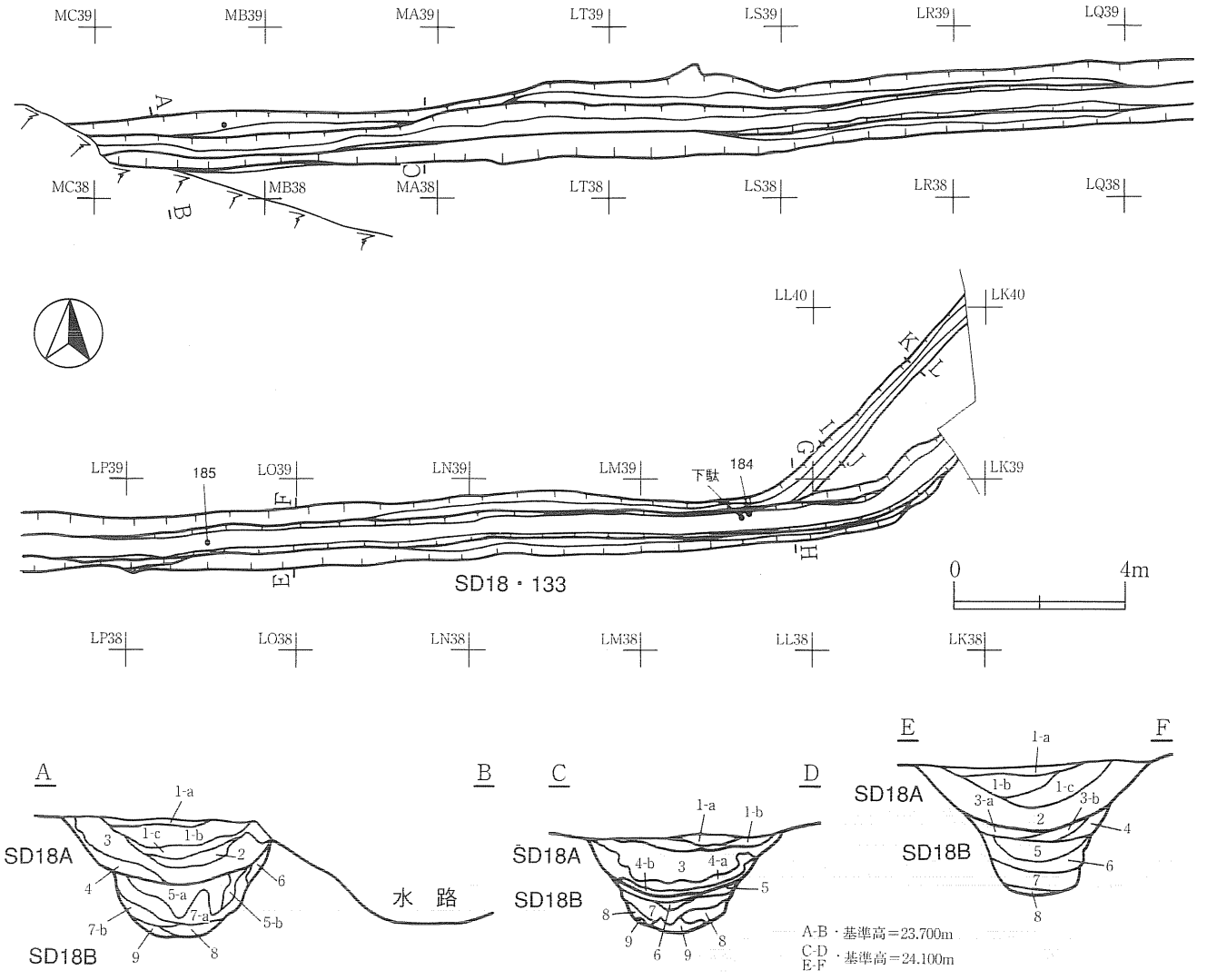
ＳＤ12
1　10ＹＲ2／2　黒褐色細砂混じりシルト　しまりなし。

ＳＤ10
1　10ＹＲ2／2　黒褐色細砂混じりシルト　しまりなし。粘性弱い。

ＳＤ03
1　10ＹＲ3／4　暗褐色シルト　しまりややなし。地山小～中粒含む。地山粒子は壁際に散在。

ＳＤ97
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒10％含む。霜降り状に入る。
2　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　しまりあり。地山小粒20％含む。
3　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　しまりあり。地山土30％混じる。

第８０図　ＳＤ０３・１０・１２・９７溝跡



ＳＤ18･133Ａ－Ｂ

1－ａ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

1－ｂ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山小～中粒30％含む。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

1－ｃ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山小～中粒20％含む。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

2　10ＹＲ3／2　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山小粒10%含む。Ａ溝

3　10ＹＲ2／2　黒褐色粘土質シルト　ややしまりあり。地山小～中粒30%含む。霜降り状に均等に含む。（ＳＤ18）。

4　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土質シルト　しまりあり。地山中粒30%含む。霜降り状に均等に含む。（ＳＤ18）。

5－ａ　10ＹＲ4／2　灰黄褐色泥岩粘土　ややしまりあり。地山土大塊～大粒30％含む。植物遺体少量含む。（ＳＤ133）。

5－ｂ　10ＹＲ4／2　灰黄褐色泥岩粘土　ややしまりあり。地山大～中粒30％含む。霜降り状に均等に含む。植物遺体少量含む。（ＳＤ133）。

6　10ＹＲ5／2　灰黄褐色粘土　きわめてしまりあり。黒褐色土10%混じる。（ＳＤ133）

7－ａ　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土質泥岩　ややしまりなし。地山土５％混じる。植物遺体（植物根状、　きわめて小さい草本）20%含む。（ＳＤ133）

7－ｂ　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土質泥岩　ややしまりなし。地山大～中粒15％、植物遺体（植物根状、きわめて小さい草本）20%含む。（ＳＤ133）

8　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土質泥岩　ややしまりなし。地山小粒５％、植物遺体（細かい草本）10%含む。（ＳＤ133）。

9　10ＹＲ3／1　黒褐色泥岩　ややしまりなし。地山極小粒５％、植物遺体20%含む。フワフワする。８層よりも植物片はやや大きめである。（ＳＤ133）。

ＳＤ18･133Ｃ－Ｄ

1－ａ　10ＹＲ6／6　明黄褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。黒褐色土15％混じる。地山土再堆積。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

1－ｂ　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土質シルト　きわめてしまりあり。1－ａ層の地山土30%混じる。地山土再堆積。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒５％含む。孔隙ややあり、フワフワした感じがする。（ＳＤ18）。

4－ａ　10ＹＲ2／2　黒褐色粘土質シルト　しまりあり。やや孔隙あり。（ＳＤ18）。

4－ｂ　10ＹＲ3／1　黒褐色粘土　きわめてしまりあり。粘性あり　地山土５％混じる。（ＳＤ18）。

5　10ＹＲ4／1　褐灰色泥岩質粘土　ややしまりあり。地山小粒５％、植物遺体小片10%含む。（ＳＤ133）。

6　10ＹＲ5／1　褐灰色泥岩質粘土　ややしまりあり。粘性ややあり。地山土30%混じる。植物遺体小片10%含む。（ＳＤ133）。

7　10ＹＲ4／2　灰黄褐色粘土質泥岩　ややしまりあり。植物遺体（ワラ状草本、小枝等）15%含む。（ＳＤ133）。

8　10ＹＲ4／1　褐灰色泥岩　ややしまりあり。植物遺体（ワラ状草本、小枝等）20%含む。（ＳＤ133）。

9　10ＹＲ3／1　黒褐色泥岩質粘土　しまりあり。細砂（地山由来）５％混じる。植物遺体10%含む。（ＳＤ133）。

ＳＤ18Ｅ－Ｆ

1－ａ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山土40%混じる。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

1－ｂ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山小～中粒30％含む。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

1－ｃ　10ＹＲ2／3　黒褐色シルト　きわめてしまりあり。地山小～中粒20％含む。埋め戻し土。（ＳＤ18）。

2　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山中～小粒５％含む。孔隙ややあり、フワフワした感じがする。（ＳＤ18）。

3－ａ　10ＹＲ2／2　黒褐色粘土質シルト　ややしまりあり。地山中粒10%含む。（ＳＤ133）

3－ｂ　10ＹＲ2／2　黒褐色粘土質シルト　しまりあり。地山大粒20%含む。

4　10ＹＲ4／1　褐灰色泥岩質粘土　ややしまりあり。地山小粒５％、植物遺体小片（ＳＤ133)10%含む。（ＳＤ133）。

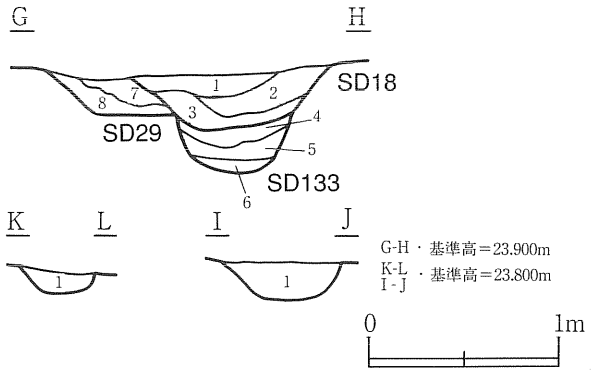
5　10ＹＲ4／1　褐灰色シルト　ややしまりなし。地山土と暗褐色土の混土。均質に混じる。（ＳＤ133）

6　10ＹＲ4／2　灰黄褐色粘土質泥岩　ややしまりあり。植物遺体（ワラ状草本、小枝等）15%含む。（ＳＤ133）。

7　10ＹＲ4／1　褐灰色泥岩　ややしまりあり。植物遺体（ワラ状草本、小枝等）20%含む。（ＳＤ133）

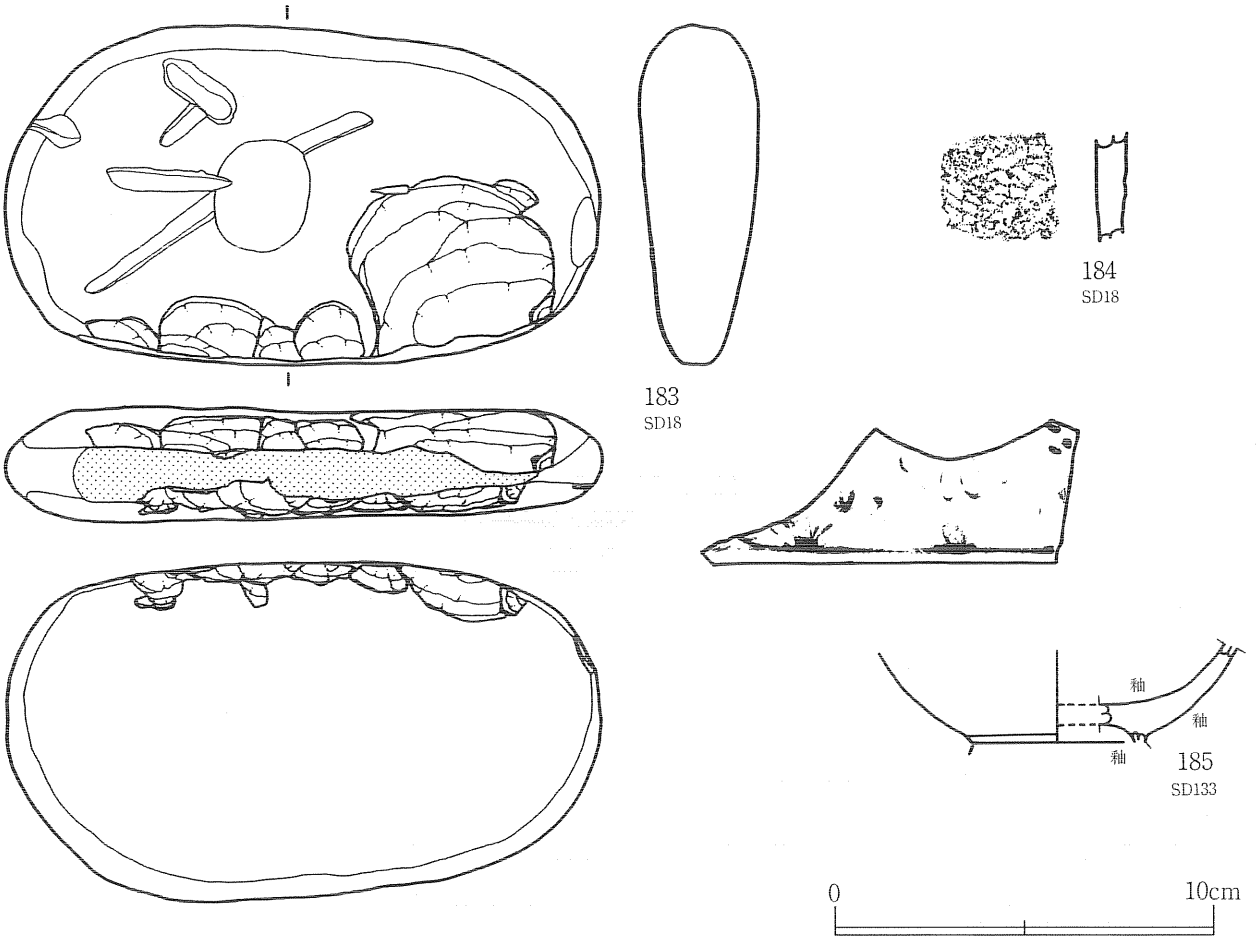
8　10ＹＲ3／1　黒褐色泥岩質粘土　しまりあり。細砂（地山由来）５％混じる。植物遺体10%含む。（ＳＤ133）。

第８１図　ＳＤ１８・２９・１３３溝跡（１）



ＳＤ18133･29Ｇ－Ｈ
1　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山土大塊状10％含む。再堆積。（ＳＤ18）
2　10ＹＲ3／1　黒褐色シルト　ややしまりなし。地山小粒５％含む。（ＳＤ18）
3　10ＹＲ2／2　黒褐色シルト　ややしまりあり。地山小粒２％含む。（ＳＤ18）
4　10ＹＲ2／1　黒色泥岩　ややしまりなし。地山土10％混じる。植物遺体の細片20％含む。（ＳＤ133）
5　10ＹＲ2／1　黒色泥岩　ややしまりなし。地山極小粒５％、植物遺体の大片25％含む。（ＳＤ133）
6　10ＹＲ2／1　黒色粘土質泥岩　しまりなし。植物遺体は細片15％。草本（ワラ・アシ状）（ＳＤ133）
7　10ＹＲ2／1　黒色シルト　しまりあり。地山中～小粒５％含む。（ＳＤ29）
8　10ＹＲ2／1　黒色シルト　しまりあり。地山中～小粒５％含む。細砂10％混じる。（ＳＤ29）
ＳＤ29Ｋ－Ｌ・Ｉ－Ｊ
1　10ＹＲ2／1　黒色シルト　しまりあり。地山中～小粒５％含む。

第８２図　ＳＤ１８・２９・１３３溝跡（２）



第８３図　溝跡内出土遺物ＳＤ１８・１３３

番号	出土地点	器　種	特　　徴	刃部角	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
183	SD18	擦石	一側縁に擦面あり。	—	15.7	9.0	3.2	715.0	88

番号	出土地点	種別	器種	特　　徴	胎土	焼成	原体	回転方向	時期	図版番号
184	SD18	縄文土器	深鉢	小破片で全体は不明だが、器面全面に縄文を施文する土器か？	繊維含	良	ＬＲ	横	前期	88

番号	出土地点	種別	器種	釉　薬　・　絵　付	特　　徴	胎土	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	時期区分	図版番号
185	SD133	磁器	碗	染付（藍）	菊花文・草花文	白色	—	(2.9)	(4.5)	Ⅳ	88

第16表　溝跡出土遺物観察表　SD18・SD133

用時期はおよそ江戸時代中頃～末頃である。

SD133溝内には断続的に弱い水流があって砂が堆積することもあったようだが、泥炭が形成されていることからすれば、水が滞留し、周囲には植物が繁茂し泥が堆積しやすい環境であったと考えられる。そのため、水流を確保する目的で溝の改修が繰り返し行われたことがＥ－Ｆ断面の土層から伺える。

SD133から分岐するSD29の底面標高や、SD133から作り替えられたSD18の底面標高がSD133の当初の底面標高よりもかなり高いということは、SD133溝内が泥炭化して底が浅くなってもなお水路として機能していたことを推測させる。

SD133がSD29に近い底面標高まで泥で埋没した状態でSD29とともにしばらく使用された後、溝の幅を２倍以上に広げる大改修が行われてSD18が掘られる。溝の断面積を増やす方法として、深さではなく幅を大きくすることで水流と水量の確保を目的とした改修である。この時点ではSD29は黒色土で埋没している。SD29とSD18が同時並存しないことから、SD29はSD133から分岐する新規の溝ではなく、埋没が著しいSD133の一部を部分的に流路変更した溝跡で、SD18を掘ることでその役目を終えたものと推測される。

しかし、SD18もまた砂や泥の堆積が止まらず自然に深さを失っていったようである。その後SD18は人為的に地山土をかぶせて埋め戻されている。

SD133･SD29･SD18の一連の経過は江戸時代中～後期における遺跡周辺の水田経営の一端を示すものである。遺物から推定される江戸時代中期頃にはおそらく新規の水田の造成や区画の整理に伴って主要な水路の一つとして掘られたと思われ、この地区の水田経営の一画期を示す遺構と言える。この時の水路位置、水田の大区割、水流管理がSD18が埋め立てられるまで長期に継続する次の大きな画期は、SD133内の泥堆積・泥炭層化に対して底さらいの繰り返しやSD29のようなバイパスの溝を掘って対処していたものから、全面的な大改修事業を行うことになった時点がである。SD29がSD133のバイパスとすればその断面積は約２倍に拡大し、流れる水量も大きく増量する。これは、この水路の機能や果たす役割、およびこの地域の水田経営に大きな変化があったことを示唆する。この時点での水需要の増大は、地域の水田面積の拡大、背量とし、特に下流域（遺跡西側）の新規水田造成が進められたことに由来するものと考えられる。その後、SD18が人為的に埋め戻されて一連の溝は消滅するが、この時点もこの地域の土地利用の画期である。すなわち、溝の下流域への代替水路の新規建設、溝の埋め立て後の遺跡一帯の土地利用形態変更等、おそらく土地所有権（占有権）の移動をも伴う変化があったことが伺えるのである。溝の跡地は畑地・林地・萱刈場といった利用をしたのか原野のままだったかは分からないが、現代の発掘時まで構造物は設置されていない。以上の３つの画期（SD133の掘削、SD18の掘削、SD18の埋め立て）は単に溝の重複関係にとどまらず、この地区の近世後期における水田経営の画期を示すものである。

８．製鉄遺構

調査区北東端で１基（ＳＮ52）、中央部東側で３基（ＳＮ91・126・98）検出した。ＳＮ52は重複がなく、単独である。４基ともほとんど平坦地に構築され、炉の前部を大きく掘り凹めて作業坑として使用している。

ＳＮ52は、長軸を東西方向にとる。西側に炉本体、その東側に長さ２ｍ、幅１ｍの作業坑が付属する。本体は地上部分がすべて削平され存在しない。本体内には鉄滓の付着した炉壁破片がつまっていた。掘方は長さ1.2ｍ、幅約60㎝で、上端より地下部分の幅が若干広くなる袋状の形態である。底面には厚さ約５㎝の炭の層があり、側壁には流動滓が付着している。特に南側の壁に著しく、地上部分から炭層までの深さ約30㎝の側壁全体に付着している部分がある。作業坑内にも鉄滓が少量含まれていたが、流動滓は少なく、鍛冶滓

状で鉄分が赤錆となって表面を覆うものがほとんどである。作業坑の東側に連続する鉄滓捨場は検出されず、鉄滓捨場の存在は確認できなかった。これはＳＮ52を含め、調査区北側全体が畑地造成時に削平されていたこと、及びＳＮ52の東側約３ｍで農道工事が本発掘調査前にすでに終了していたことによると思われる。

ＳＮ91・98・126はそれぞれ重複関係があり、造り替えられながら３回にわたって連続的に操業していたと考えられる。その過程は次のように推測される。

まず、ＳＮ91を構築して操業している。操業後ＳＮ91本体は地上部分を破壊し、本体掘方を埋め立てて平坦に整地している。その際には排出された鉄滓、炉壁やフイゴの羽口等は、炉の北側に掘られた作業坑に捨てられるとともに、さらに北東側に広く散布させている。次にＳＮ91本体西側約２ｍの地点にＳＮ91とほぼ並行にＳＮ126を構築し、その北側には作業坑が掘られている。ＳＮ91の作業坑は、このときに地山土によって固く埋め立てられている（巻頭図版１－１、図版13－６・７）。ＳＮ126の操業の際に排出された鉄滓や炉壁、フイゴの羽口等は作業坑内及びその北側でＳＮ91から排出された鉄滓等の散布域に重複させて散布させている。ＳＮ126の操業後、さらにＳＮ126の南側に、ＳＮ126の掘方を延長する形で新たにＳＮ98を構築している。ＳＮ98はＳＮ126南側に新たに楕円形土坑を掘って本体を構築し、ＳＮ126本体の掘方の上端部を崩して幅を広げ、この部分とＳＮ126の作業坑に地山土を貼って作業坑を造成している。ＳＮ126の地山部分の炉壁はすべて取り除かれ、地下部分下半の一部のみにＳＮ126の受熱赤変硬化した部分が残っている。ＳＮ126作業坑を埋め立てる地山土層は最厚部で約35㎝の層厚がある。ＳＮ98は操業後本体上部が破壊されているが、地表面から約15㎝の高さまでは残存していた。ＳＮ91・ＳＮ126とも地上部分を破壊し、ＳＮ91は埋め立て整地、ＳＮ126は作業坑として改築再利用しているのに対し、ＳＮ98地山部分を一部残存させた状態で廃絶していることは、この場所における操業の最終段階の状況を示すものである。ＳＮ98の操業によって排出される鉄滓は、SN126に引き続き、作業坑の北側のＳＸ33鉄滓捨場に集積されたと考えられるが、SX33の西側が農道によって削平されていたこともあり、必ずしもＳＮ98の作業坑に連続した分布域を形成していない。

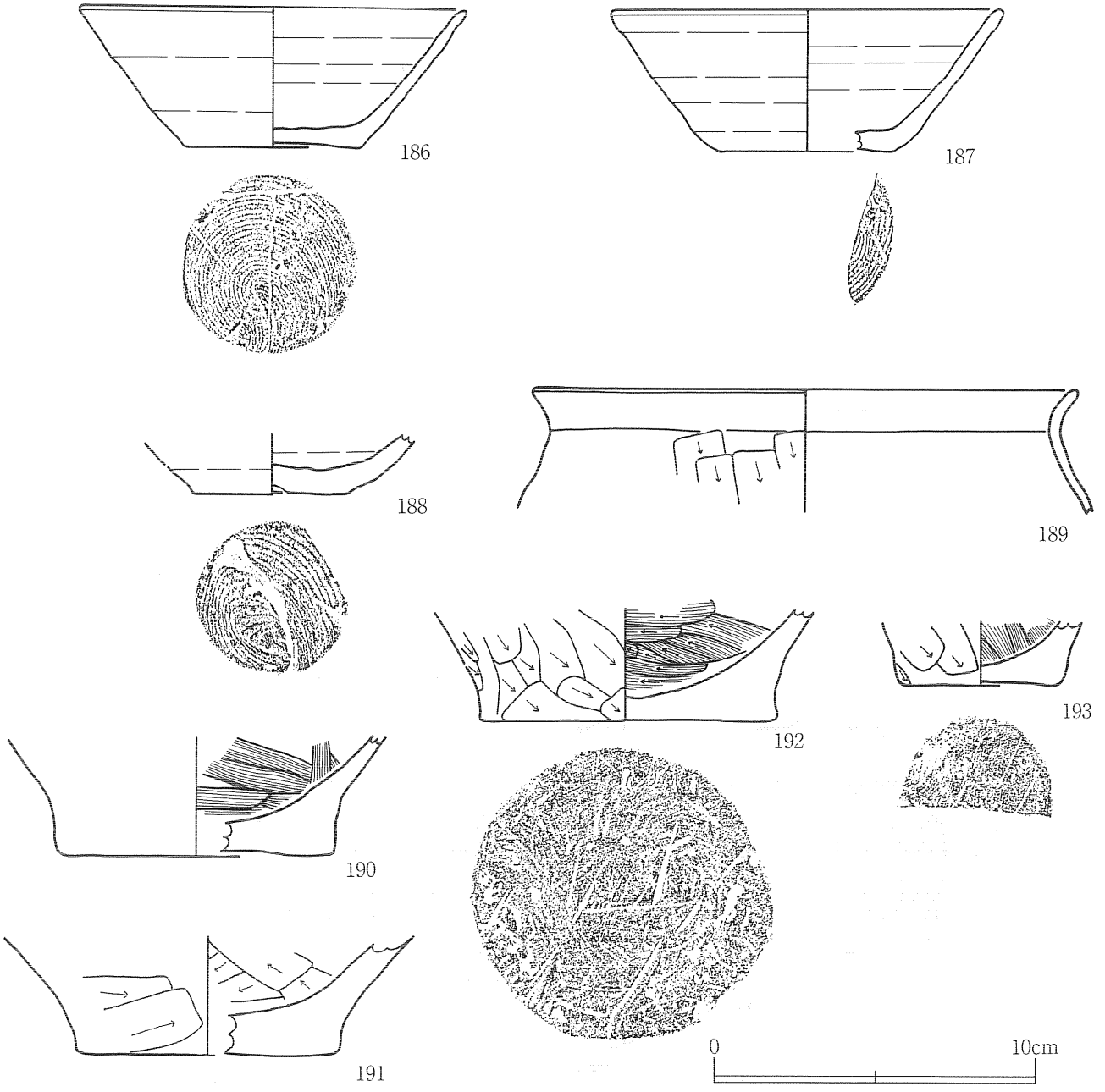
ＳＮ91作業坑の埋め立て、ＳＮ126本体炉壁と作業坑の埋め立て、ならびにＳＮ91・ＳＮ126・ＳＮ98本体炉壁構築のためには大量の粘質土が必要であるが、その供給源としては粘土採掘坑の可能性が高いＳＫ16・101土坑も含めた地山土利用を考える必要がある。ＳＮ91本体炉壁用粘土は、ＳＮ91作業坑の掘削によって出る地山土の利用が可能である。ＳＮ126本体炉壁構築材とＳＮ91作業坑埋め立て土は、ＳＮ126本体掘方及び作業坑掘削土を充てることが可能である。この他にＳＫ16・101から供給されたと考えられる。ＳＫ16では数回の掘削単位が分離でき、またＳＫ16の採取土量を考えあわせればＳＮ91の段階からＳＫ16から採取していた可能性がある。

製鉄遺構出土遺物

186～191はＳＮ98製鉄遺構の作業坑から出土したものである。186・187は体部下半から口縁部まで直線的に外傾するタイプの土師器坏である。188は体部下半が湾曲して膨らむタイプの土師器坏である。189は胴体部が大きく膨らむ壺形の器形の小型甕である。191も同様な器形かと思われる。

194は大きさがおよそ４㎝×６㎝×３㎝の鉄塊系遺物が付着した鉄滓である。鉄滓部分はほとんど磁性がないが、鉄塊系遺物の部分は強磁性である。鉄滓は径10㎜以下の粒状のものが集積して融着した状態で層状に積み重なっており、中には炭をかみこんでいる。

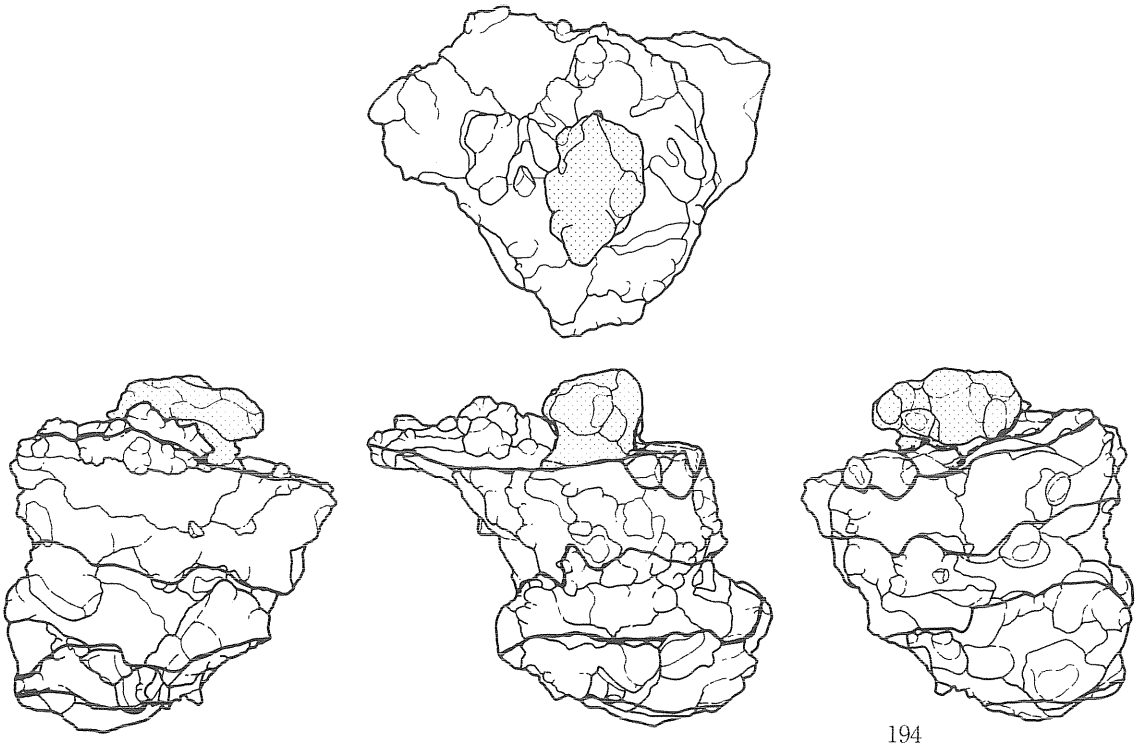
195も強磁性の部分とほとんど磁性のない部分が融合したものである。表面に塊状に鉄塊系遺物が付着し、中心部は炭度を多量にかみこんだ鉄滓である。

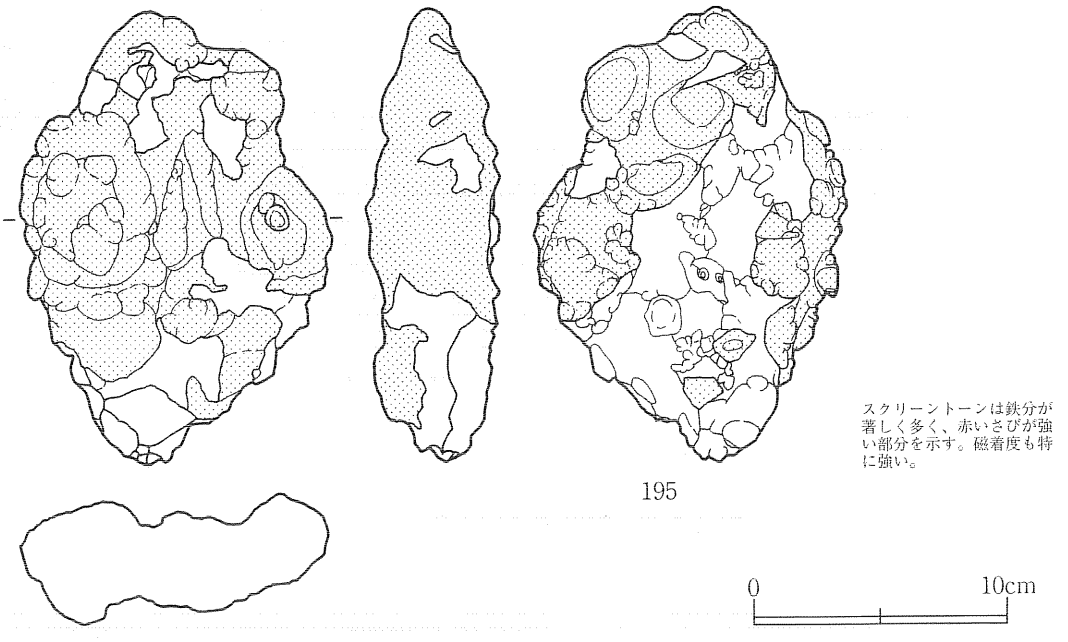


第８４図　製鉄遺構出土遺物（１）ＳＮ９８①

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
186	SN98	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↺	口100% 底100%	細砂混	良	19.0	5.5	4.4	34.0°	94
187	SN98	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り	口33% 底25%	微砂混	良	(12.0)	(5.5)	4.4	33.0°	94
188	SN98	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り 粘土剥離痕あり	口なし 底80%	細砂混	良	—	4.8	—	—	94
189	SN98	土師器	甕	(内) ナデ (外) (口) ヨコナデ、(体) ヘラケズリ	—	口30% 底なし	粗砂少混	良	(17.0)	—	—	—	94
190	SN98	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	マメツ	口なし 底40%	粗砂混	良	—	(8.6)	—	—	94
191	SN98	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	ナデ	口なし 底17%	小礫混	良	—	(8.1)	—	—	94
192	SN98	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	板状圧痕	口なし 底100%	小礫少混 細砂混	良	—	9.3	—	—	94
193	SN98	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	ナデ→板状圧痕	口なし 底50%	小礫少混	良	—	(4.9)	—	—	94

第17表　製鉄炉跡出土遺物観察表　SN98

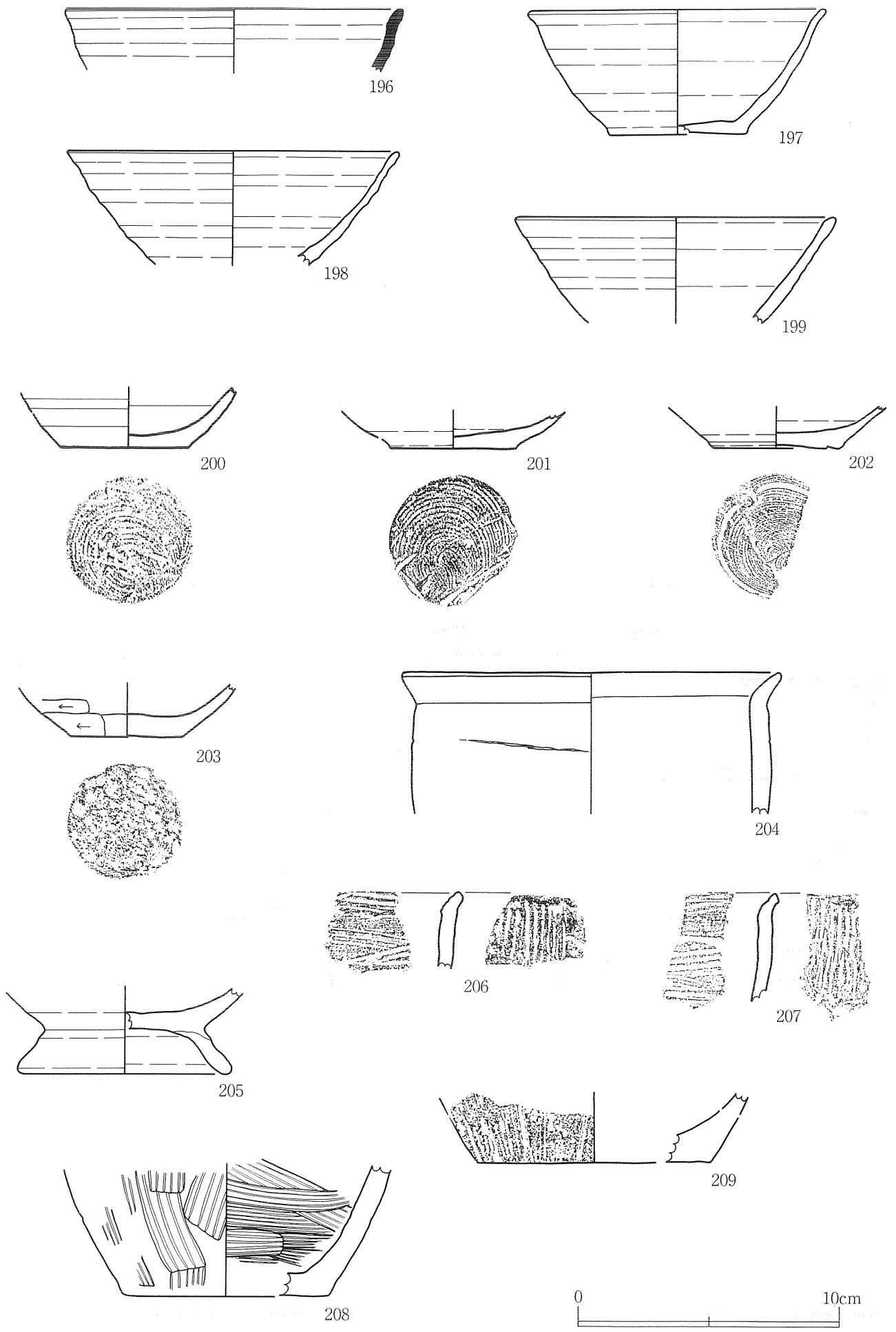




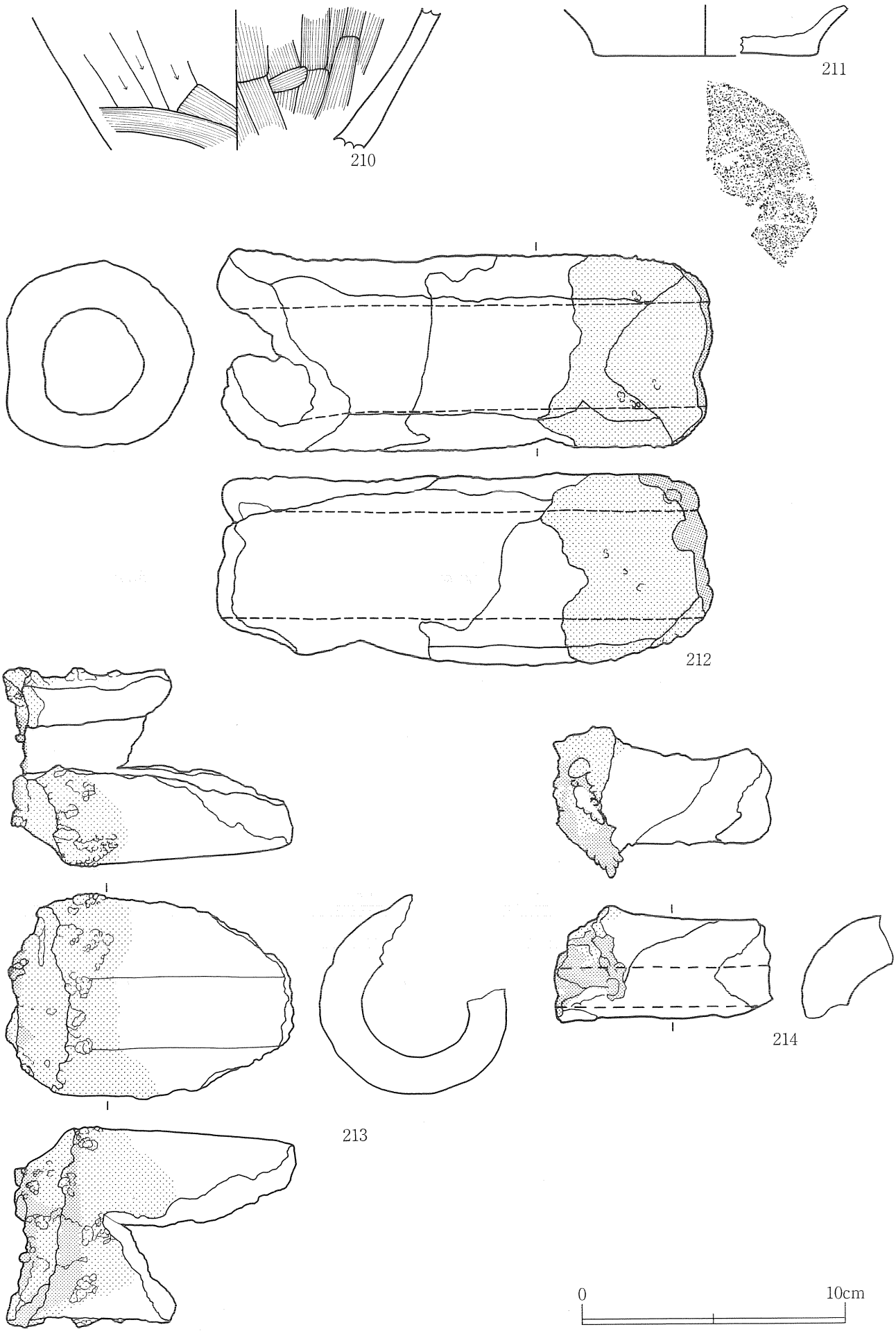
第８５図　製鉄遺構出土遺物（２）ＳＮ９８②

９．鉄滓捨場

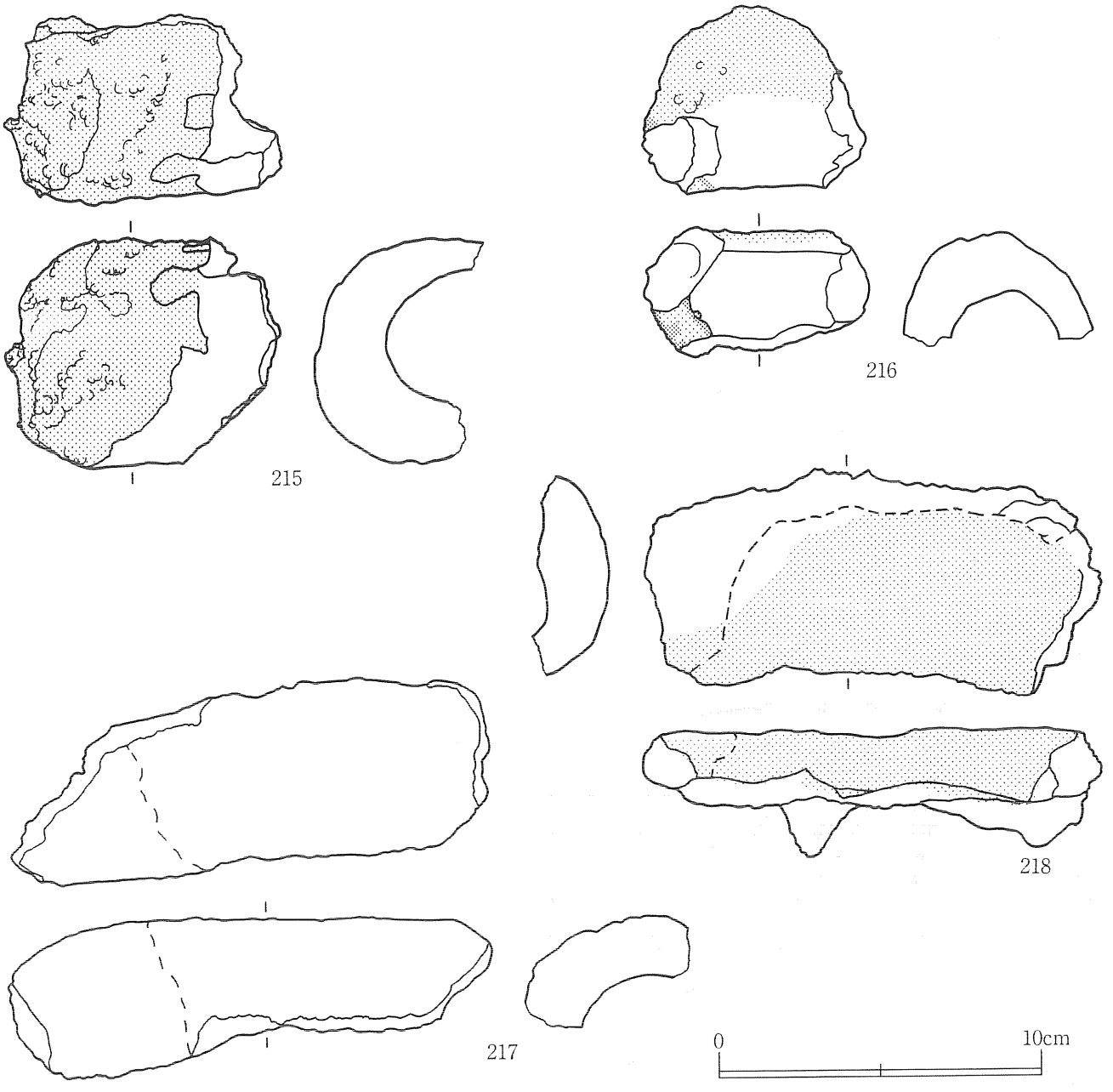
ＳＮ91・ＳＮ126・ＳＮ98の北側に、東西約10ｍ、南北約６ｍの鉄滓・土師器・フイゴの羽口・炉壁等が厚く堆積する層を検出し、ＳＸ33鉄滓捨場とした。この範囲の中央部で堆積層の厚さは約40㎝である。西側は農道によって削平されているが、農道敷の一部にも鉄滓の堆積があることや、ＳＮ126・ＳＮ98との位置関係から、本来はもっと西側にも広がっており、東西約12ｍ、南北約８ｍの範囲に鉄滓等が集積されていたと推定される。出土した鉄滓の総重量は約３トンである。堆積層の下部ではフイゴの羽口や炉壁が比較的多く、上部では鉄滓に混在して土師器の小破片が多く出土した。



第８６図　鉄滓捨場出土遺物（１）ＳＸ３３①



第８７図　鉄滓捨場出土遺物（２）ＳＸ３３②

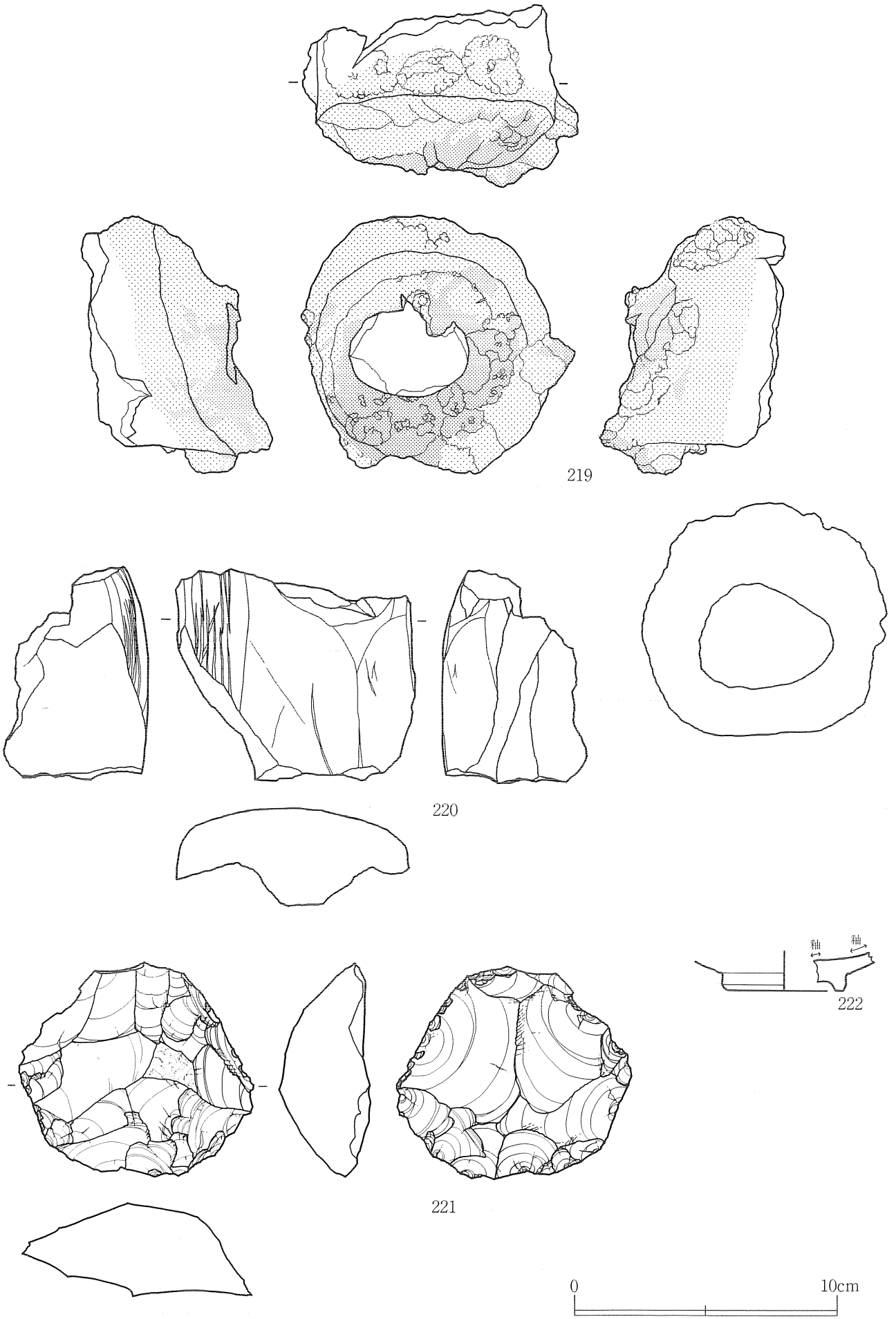


第８８図　鉄滓捨場出土遺物（３）ＳＸ３３③

ＳＥ102井戸跡、ＳＤ45板塀跡は、いずれもＳＸ33鉄滓捨場の堆積層を取り除いた後で検出したもので、ＳＸ33より古い遺構である。したがってこの２遺構は、ＳＸ33の鉄滓供給源であるＳＮ91・ＳＮ126・ＳＮ98製鉄遺構よりも古い。この区域は、板塀によって区画された状態の後に、製鉄が行われ多量の鉄滓等が捨てられたことが明らかとなった。

鉄滓捨場出土遺物

196は須恵器坏の破片である。体部上半が内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや外反する。197は体部下半が膨らみ口縁部が外反するタイプ、198・199は口縁部が外反しないタイプの土師器坏である。200～202は回転糸切りの土師器坏底部資料で、200は砂粒の圧痕があり、201・202は植物茎などの圧痕が付いている。203はロクロの使用の坏である。成形後、体部はヘラケズリによって整形され、底面には砂粒圧痕がある。



第８９図　鉄滓捨場出土遺物（４）ＳＸ３３④

番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
196	SX33 (LP47)	須恵器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂混	やや良	(12.8)	—	—	—	97
197	SX33 (LN48)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口20% 底38%	微砂混	良	(11.2)	(5.4)	4.8	27.0°	97
198	SX33 (LO47)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口17% 底なし	微砂混	良	(12.6)	—	—	—	97
199	SX33 (LO47)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口38% 底なし	微砂混	良	(12.3)	—	—	—	97
200	SX33 (LN47)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 砂粒圧痕→ナデ	口なし 底100%	微砂含 細砂少	良	—	4.9	—	—	97
201	SX33 (LN47)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 植物茎の圧痕	口なし 底100%	微砂混	良	—	4.9	—	—	97
202	SX33 (LO48)	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 植物茎の圧痕	口なし 底58%	微砂混	良	—	4.9	—	—	97
203	SX33 (LN48)	土師器	坏	(内) (ナデ) 不明瞭 (外) ロクロナデ 下部はロクロナデ→粘土付着→ヘラケズリ	(回転糸切り) ↓ 中砂圧痕	口なし 底100%	微砂混 細砂混	良	—	4.3	—	—	97
204	SX33 (LO48)	土師器	甕	(内) ナデ (外) マメツ	—	口13% 底なし	細砂混 粗砂少混	良	(14.5)	—	—	—	97
205	SX33 (LP48)	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	ヨコナデ	口なし 底38%	微砂混	良	—	(6.1) 高台径 (7.8)	—	—	97
206	SX33 (LO48)	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	—	口5%以下 底なし	微砂混	良	(—)	—	—	—	97
207	SX33 (LO48)	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	—	口5%以下 底なし	微砂混	良	(—)	—	—	—	97
208	SX33 (LO48)	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	ナデ	口なし 底17%	細砂混 粗砂・小礫少混	良	—	(8.0)	—	—	97
209	SX33 (LN48)	土師器	甕	(内) ナデ (外) ハケメ↕	ナデ	口なし 底20%	粗砂混	良	—	(9.0)	—	—	97
210	SX33 (LO48)	土師器	甕	(内) ナデ↕ (外) ヘラケズリ↓底辺部のみヨコナデ	—	口なし 底なし	微砂混	良	—	(9.5)	—	—	98
211	SX33 (LO46)	土師器	甕	(内) 剥離 (外) ヨコナデ	微砂圧痕	口なし 底17%	粗砂混	良	—	(8.5)	—	—	98

番号	出土地点	種別	特徴	胎土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
212	SX33 (LO47)	羽口	先端部の溶融はそれほど強くない。	スサ入り	○	○	○	(18.9)	7.8	4.0	49.0°	45.0°	98
213	SX33 (LO47)	羽口	212と形態・大きさがよく似る。先端部に鉄滓付着。	スサ入り	○	○	○	(11.0)	7.9	4.2	—	43.0°	98
214	SX33 (LO47)	羽口	先端部は著しく溶融している。	スサ入り	—	○	○	(8.4)	(6.2)	(4.2)	44.0°	45.0°	98
215	SX33 (LN48)	羽口	先端部に鉄滓付着。	スサ入り	—	○	○	(8.7)	7.2	3.9	39.0°	40.0°	99
216	SX33 (LN48)	羽口	先端部の一部が著しく発泡しはじけとんでいる。	スサ入り	○	○	○	(7.0)	(5.7)	3.3	—	16.0°	99
217	SX33 (LO47)	羽口	先端に近い部分は黒色に変色している。	スサ入り	○	—	—	(15.0)	(7.9)	(4.8)	65.0°	—	99
218	SX33 (LN47)	羽口	先端は著しく溶融し鉄滓も付着している。	スサ入り	○	○	○	(13.7)	(7.4)	(3.2)	65.0°	65.0°	99
219	SX33	羽口	先端はきわめて著しく溶融する。鉄滓の付着もある。	スサ入り	○	○	○	(7.0)	10.6	5.1	—	48.0°	100

番号	出土地点	器種	特徴	石質	使用面数	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
220	SX33	砥石	残存する３面はすべて使用している。一部に１cm幅の中に６本の条線がある。	泥岩	3	8.2	9.2	5.6	333.0	100
221	SX33	二次加工のある剥片	表裏両面に二次加工して不正六角形に成形している。刃部はない。	頁岩	—	8.2	9.0	3.5	221.0	100

番号	出土地点	種別	器種	釉薬・絵付	特徴	胎土	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	時期区分	図版番号
222	SX33 LO46	磁器	皿	外面無釉、内面施釉（緑）	見込み蛇目釉剥ぎ	灰色	—	(1.3)	高台径 4.5	Ⅳ	100

第18表　鉄滓捨場出土遺物観察表　SX33

206～209は内外面ともハケメ調整痕のある小型甕の破片である。206・207は短い口縁部が外反し、口唇端は面取りされている。206～208から、この種の甕は内面が横方向、外面は縦方向のハケメ調整が全面に施されていたことがわかる。211は体部下半が大きく膨らむ器形の甕である。

212～219はフイゴの羽口である。212は最も残りがよく、溶融した先端部から、体部中央付近まで残り、平坦面が明瞭である。216・218は孔径がやや小さいタイプ、217・219は大孔径のタイプである。212～215は先端部の溶融程度も類似している。

220は砥石で、全面がよく使用されている。一部に認められる条線は、何らかの工具を研磨した痕跡と思われる。

第２節　遺構外出土遺物

１．土師器（223～240）・須恵器（241～246）

223は体部から口縁部まで直線的に外傾するタイプ、224～227は、体部が丸く膨らみ口縁部が外反するタイプの坏である。遺構外からは両タイプが出土したが、後者が圧倒的に多い。228･229は高い高台の付く坏、230は低い高台の付く坏である。いずれも体部はやや膨らみ、口縁は外反するものと思われる。231･232･234は小型の甕、233～235･236は大型の甕である。いずれも体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。外面のヘラケズリは231のみ上から下方向、他は下から上方向で、底部側から調整を始め、口縁部直下の屈曲部で止まるものが多い。237･238は破片のみであるが内外両面をハケ目調整しているものである。内外面は異なる工具で調整を施す。内面は横方向に比較的密に、外面は縦方向である。239は小型甕の底部である。底面の中央部と周縁部に細砂が付着した圧痕がある。240は大型甕の底部である。底辺部はヘラケズリ後に横方向にナデ調整を施している。

241･242は須恵器の皿である。241は高台付、242は無台である。両者とも体部下半から底部にはヘラケズリ痕がわずかに残るが、ほぼ全面にロクロによるナデ調整が施されている。体部の器高が低く口縁部が大きくめくれるように外反する器形である。若美町西海老沢窯では同様の器形の皿が生産されているが、西海老沢窯の製品かどうかは不明である。243はおそらく高台付の坏かと思われる。実測図は小破片から復元したものであり、外傾度は誤差を含む。244は広口壺の口縁部である。口唇端部を上方に折ってつまみあげ、さらに内傾させている。245･246は甕の破片で外面は平行、タタキ目、内面は弧状の当て具痕が認められる。

２．フイゴの羽口

247は断面形がカマボコ形で底面が平坦な羽口の先端部の破片である。著しく溶融し両側面はガラス化している。溶融した鉄滓が先端から約3.5cm 垂れ下がり、製鉄遺構底面または側面で溜まった状態で固着したことが明瞭である。平坦な羽口の底面を水平に置くと、この鉄滓の垂れ下がりの先端は約30度傾斜する。従って製鉄遺構の底面または側面は少なくとも30度以上の傾斜をもった面であることが推測される。

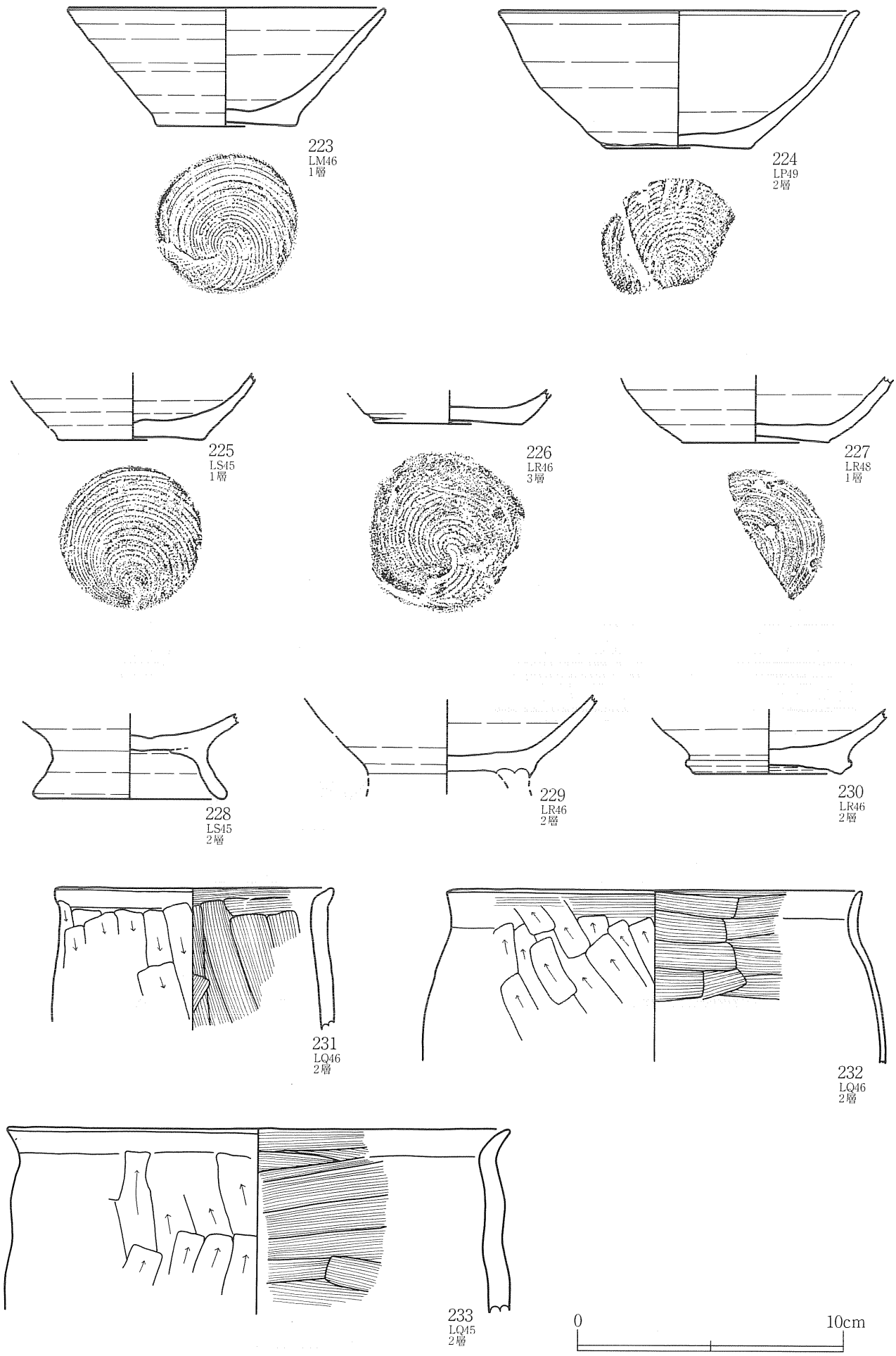
248は先端部が溶融しているもののそれほど著しくはない。孔端の上部には1cm 程、鉄滓の垂れ下がりが認められる。受熱変色部分や鉄滓の垂れ下がりの具合から、羽口のさしこみ角は約23度と推定される。

249は先端部のみが溶融し下部に１ cm 程の鉄滓の垂れ下がりがある。垂れ下がりの先端はわずかに屈曲した状態で止まっている。また折断面側の一部に受熱変色の弱い部分が斜めにある。これらをもとに羽口のさしこみ角は約47度と推定される。

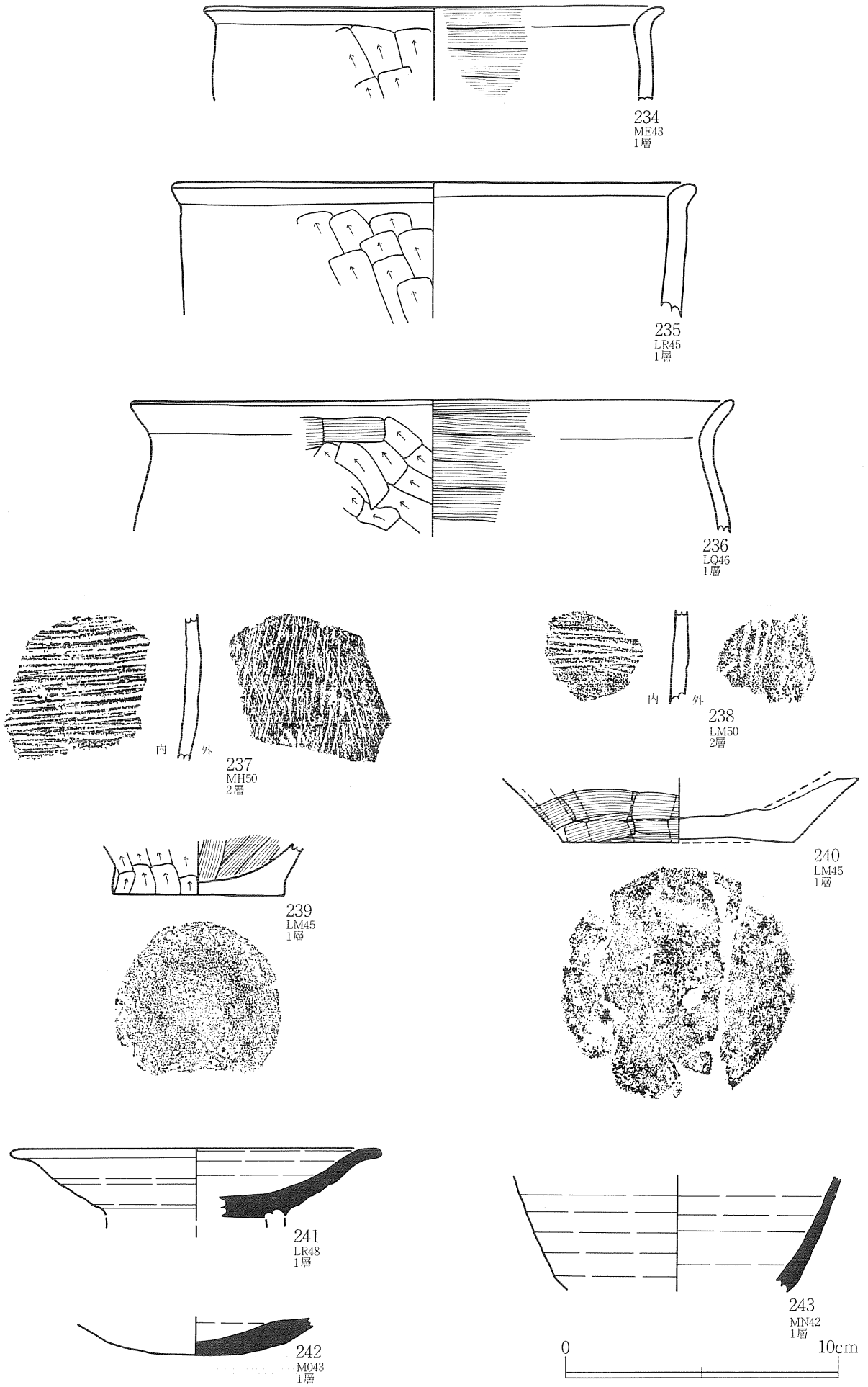
250は先端部の一部である。端部の溶融と鉄滓の付着は中程度である。さしこみ角は不明である。251は先端部の一部で、端部が溶融し、わずかに下に流れて固着している。側面の受熱変色部から推定したさしこみ角は約35度である。252は先端部の一部で受熱変色し、気泡が形成された部分が認められる。253は側面が面取りされた羽口の一部である。孔の断面形は円形なので外面の平坦な部分と角では厚さに差が生じている。254は先端部の一部で端部は受熱変色し、鉄滓が付着する。255･256は製鉄遺構の壁または底面の一部である。表面は溶融し固化している。255は厚さ3～5mm 程度の鉄滓が全面に付着している。胎土はスサ入り粘土で孔隙が多くガサガサした感じである。

３．縄文土器

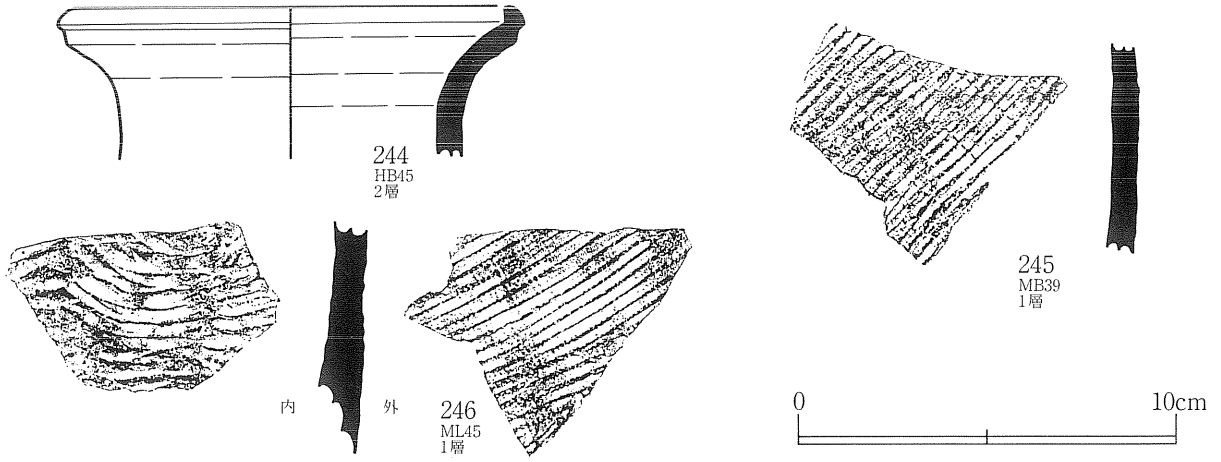
257は細い粘土紐を平行に貼付けて無文帯を作り、この無文帯によって文様を描く。258はＬ撚糸文を縦位～斜位に施文する。いずれも中期末葉の大木10式並行期の土器である。260･261はキザミ目のある隆帯を横



第９０図　遺構外出土遺物（１）土師器・須恵器①



第９１図　遺構外出土遺物（２）土師器・須恵器②

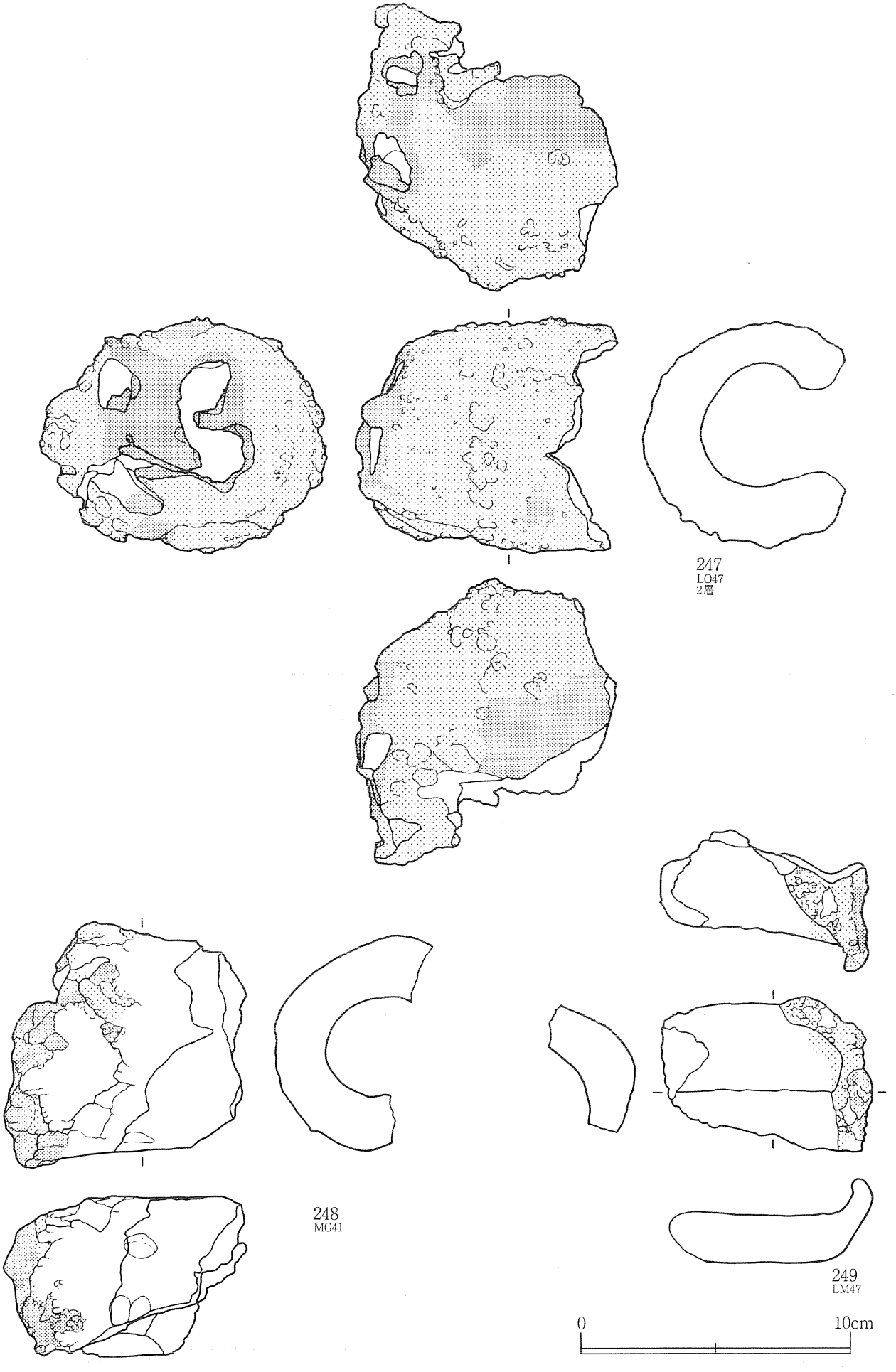


第９２図　遺構外出土遺物（３）土師器・須恵器③

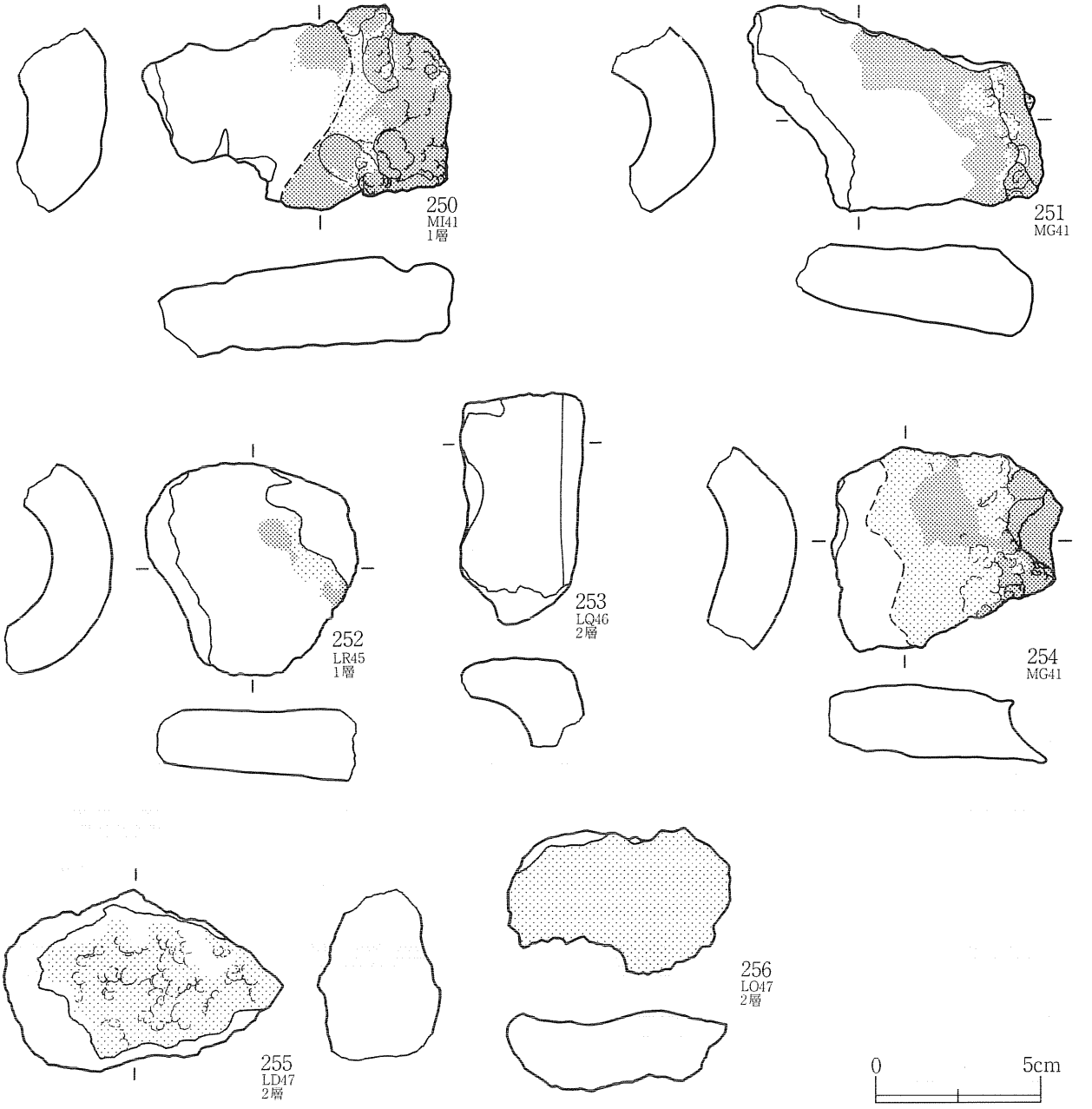
番号	出土地点	種別	器種	内・外面の特徴	底面の特徴	残存率	胎土	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外傾度	図版番号
223	LM46	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口33% 底100%	細砂少混	良	(12.0)	5.4	4.4	左37.0° 右38.0°	101
224	LP49	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↓ 棒状圧痕	口15% 底60%	細砂混	良	(13.5)	(5.5)	5.2	31.0°	101
225	LS45	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 棒状圧痕	口なし 底100%	細砂混 粗砂少混	良	—	5.5	—	—	101
226	LR46	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻ ↓ 棒状圧痕	口なし 底83%	微砂混	良	—	5.7	—	—	101
227	LR48	土師器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転糸切り ↻	口なし 底45%	細砂少混	良	—	(5.5)	—	—	101
228	LS45	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(回転糸切り) ↓ 高台貼付	口なし 高台45%	細砂混	良	—	(5.8) 高台径 (7.3)	—	—	101
229	LR46	土師器	高台付坏	(内) マメツ (外) ロクロナデ	(回転糸切り) ↓ 高台貼付	口なし 底100%	細砂混	やや良	—	(6.1)	—	—	101
230	LR46	土師器	高台付坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	(回転糸切り) ↓ 高台貼付	口なし 底40%	細砂混	やや良	—	(6.0)	—	—	101
231	LQ46	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↓	—	口25% 底なし	粗砂少混	良	(10.4)	—	—	—	101
232	LQ46	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口18% 底なし	粗砂混	良	(15.6)	—	—	—	101
233	LQ45	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ↑	—	口8% 底なし	中砂混	良	(19.0)	—	—	—	101
234	MF43	土師器	甕	(内) ヘラケズリ (外) ナデ	—	口5% 底なし	細砂混	良	(16.7)	—	—	—	102
235	LR45	土師器	鍋	(内) マメツ (外) ヘラケズリ	—	口10%以下 底なし	粗砂混	良 ↓ 再受熱	(19.0)	—	—	—	102
236	LQ46	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	—	口５％ 底なし	中砂混	良	(22.0)	—	—	—	102
238	LM50	土師器	甕	(内) ハケメ↔ (外) ハケメ↕	—	口なし 底なし	細砂少混	良	—	—	—	—	102
239	LM45	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ	周囲と中央に細砂圧痕	口なし 底100%	粗砂混	良	—	6.3	—	—	102
240	LM45	土師器	甕	(内) ナデ (外) ヘラケズリ→ナデ	(剥離)	口なし 底90%	細砂混 粗砂少痕	良 ↓ 再受熱	—	(8.5)	—	—	102
241	LR48	須恵器	高台付皿	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	高台貼付	口25% 底40%	中砂混	良	(14.0)	(6.5)	—	—	102
242	MO43	須恵器	皿	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	回転ヘラ切り痕	口なし 底30%	中砂少混	良	—	(6.0)	—	—	102
243	MN42	須恵器	坏	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口なし 底なし	細砂混	良	—	—	—	—	102
244	MB45	須恵器	壺	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	—	口10% 底なし	微砂少混	良	(13.5)	—	—	—	103
245	MB39	須恵器	甕	(内) あて具痕なし (外) タタキ目	—	口なし 底なし	微砂少混	良	—	—	—	—	103
246	ML45	須恵器	甕	(内) 同心円文あて具痕 (外) タタキ目	—	口なし 底なし	細砂混	良	—	—	—	—	103

第19表　遺構外出土遺物観察表（１）　土師器・須恵器

位に貼付ける。260は隆帯以外の部分にもキザミ目を施し、261はＬＲ原体の横位回転施文圧痕が認められる。いずれも後期中葉の土器である。262は横位の隆沈線で区画され、下部はＲＬ原体の横位回転施文による斜縄文である。263は折り返し気味に若干肥厚する口縁部に節の細かいＬＲ原体の横位回転による斜縄文が施文されている。これらは後期中葉から後葉の土器であろうか。264は沈線区画文の内部に異種原体（ＲＬとＬＲ）による羽状縄文が充填される。259はＲＬ原体の横位回転施文による縄文が充填される。いずれも無



第９３図　遺構外出土遺物（４）フイゴの羽口①



第９４図　遺構外出土遺物（５）フイゴの羽口②

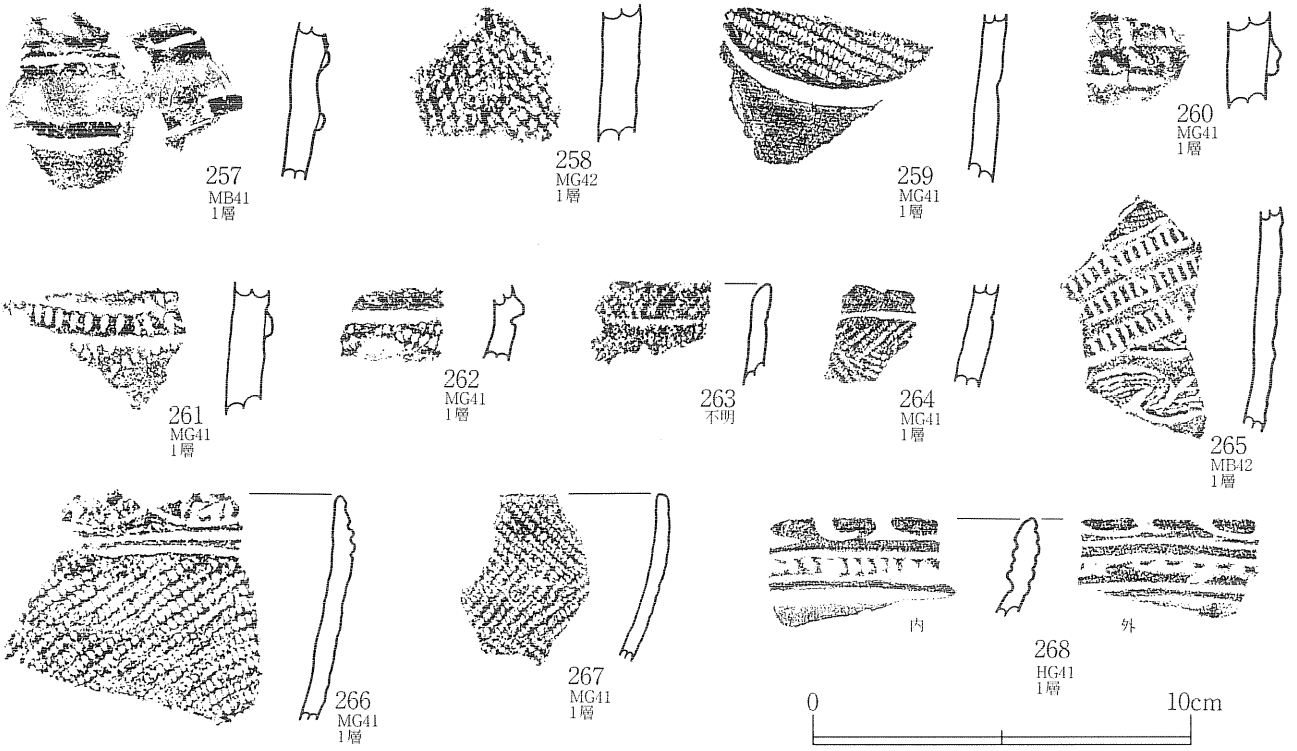
番号	出土地点	種別	特　　徴	胎　土	平坦面	先端部	先端部のガラス化	長さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	さしこみ推定角	端部角	図版番号
247	SX33 (LO47)	羽口	きわめて著しく溶融している。鉄滓が多量付着。	スサ入り	○	○	○	(10.8)	8.7	4.7	—	49.0°	104
248	MG41	羽口	端部はガラス化。鉄滓付着。	スサ入り	—	○	○	(9.9)	9.2	(4.3)	23.0°	36.0°	104
249	LM47	羽口	端部はガラス化著しい。鉄滓付着。	スサ入り	○	○	○	(7.8)	(5.6)	(4.4)	47.0°	63.0°	104
250	MI41	羽口	端部に鉄滓が多く付着。	スサ入り	—	○	○	(9.4)	(9.2)	(4.2)	—	—	105
251	MG41	羽口	端部に鉄滓付着。	スサ入り	○	○	○	(9.0)	(6.5)	(3.2)	35.0°	45.0°	105
252	LR45	羽口	一部黒変し発泡。先端部にやや近い破片。	スサ入り	—	—	—	(6.5)	(6.7)	(3.9)	—	—	105
253	LQ46	羽口	面取りあり。平坦面部分は器壁が薄い。	スサ入り	○	—	—	(7.0)	(4.6)	(3.6)	—	—	105
254	MG41	羽口	端部全面に鉄滓付着。	スサ入り	—	○	○	(7.0)	(7.5)	(5.8)	—	55.0°	105
255	SX33 (LO47)	炉壁	表面は鉄滓が付着し硬化。	スサ入り	—	—	—	—	—	—	—	—	105
256	SX33 (LO47)	炉壁	表面は硬化、鉄滓は付着せず。	スサ入り	—	—	—	—	—	—	—	—	105

第20表　遺構外出土遺物観察表（２）羽口、SX33 羽口・炉壁

文部はよく研磨されている。これらは後期後葉の土器である。265の文様は３段のキザミ目文帯と節の細かい入組帯状文からなる。後期末～晩期初頭の土器である。266は口縁部と体部を２条の沈線によって区切り、口唇部にはＢ突起が付き突起を囲むように沈線とキザミ目を施している。267は異種原体（ＲＬとＬＲ）の横位回転施文を交互に段状に施すことによって羽状縄文を施文する鉢形土器である。268は口縁部の内外両面をキザミ目と沈線文で装飾する皿形土器である。外面には羊歯状文が描かれている。いずれも晩期前葉の土器である。

４．石器

269は有茎石鏃である。表裏両面とも全面に二次加工を施し整形している。270は縦長剥片素材の不定形石器である。刃部は表面右側縁の下部で、素材剥片の末端は二次加工を施さずヒンジフラクチャーが残る。他の側縁には表裏両面に二次加工を施し、刃つぶしを行っている。機能は削器と思われる。272も縦長剥片素材の不定形石器である。刃部は表面左側縁で、素材の鋭い縁辺をそのまま使用している。右側縁には刃つぶ

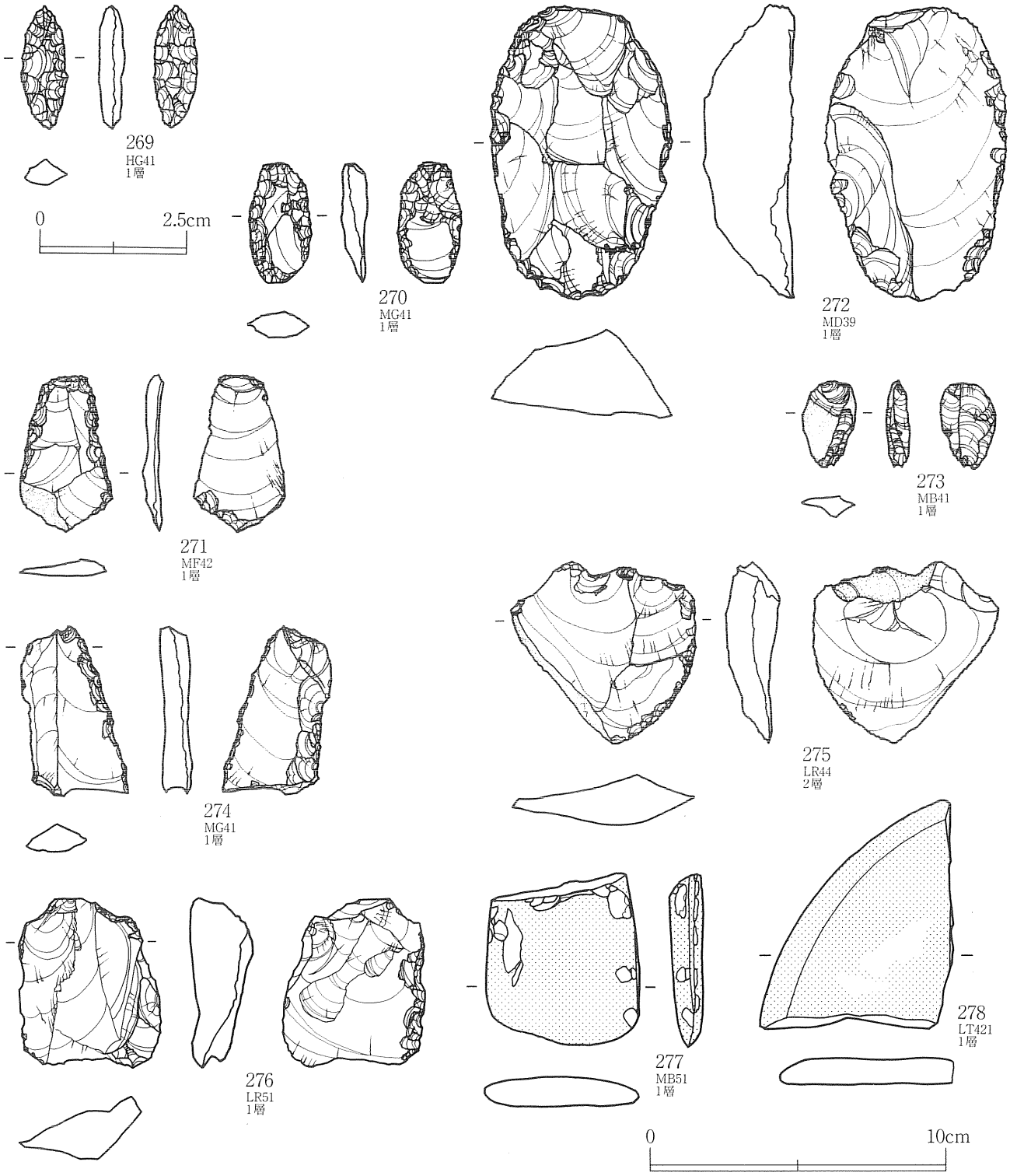


第９５図　遺構外出土遺物（６）縄文土器

番号	出土地点	器　種	特　　徴	刃部角	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
269	MG41	石鏃	有茎。	—	2.1	0.8	0.5	0.7	107
270	MG41	不定形石器	楕円形に整形。削器。	25.0°	4.1	2.2	0.9	8.1	107
271	MF42	不定形石器	周縁二次加工。削器。	左25.0° 右50.0°	5.4	3.2	0.7	9.0	107
272	MD39	不定形石器	楕円形に整形。厚みあり。掻器。	55.0°	10.0	6.2	2.9	180.7	107
273	MB41	ピエス・エスキーユ	両極打法により生成。黒曜石製。	—	3.0	1.9	0.8	3.3	107
274	MG41	不定形石器	素材剥片の両側縁のみ二次加工。末端は折断。削器。	25.0°	5.7	3.7	1.2	16.1	107
275	LR44	不定形石器	二次加工は刃部作出のみ。削器。	40.0°	6.2	6.2	1.9	47.3	107
276	LR51	微小剥離痕のある剥片	二次加工はないが、著しい微小剥離痕がある。掻器。	50.0°	5.7	4.9	2.1	41.9	107
277	MB51	磨製石斧	薄手。刃部再生を繰り返している。	50.0°	5.9	5.2	1.1	51.2	107
278	LT42	磨痕のある礫	円盤形。砂岩製。用途不明。	—	(7.8)	(6.6)	(0.9)	(66.8)	107

第21表　遺構外出土遺物観察表（３）　石器

しの二次加工が施されている。刃部角が大きいことから機能は掻器と思われる。271も縦長剥片素材の不定形石器である。打瘤のある素材の上部を折り取り他の側縁に二次加工を施している。両側縁の二次加工痕は表面のみ、末端部は裏面のみである。刃部は両側縁とも使用している可能性があるが表面右側縁が特に使用されたようである。機能は削器と思われる。274は縦長剥片素材で、末端が折り取られている。表面右側縁は素材の鋭利な縁辺を利用した刃部で、使用による刃こぼれと思われる微小剥離痕がある。左側縁は刃つぶしの二次加工が施されている。機能は削器と思われる。275は打面と表面左側縁に礫皮面の残る剥片を素材とし、右側縁に二次加工を施して凸丸刃を作り出している。刃部以外には二次加工を施していない。機能は削器と思われる。273は黒曜石のピエス・エスキーユである。表面には両端部から中央に向かうリングの詰



第９６図　遺構外出土遺物（７）石器

まった剥離痕が明瞭である。裏面には３面の剥離面があり、２面は下から上へ１面は上から下へ交叉状に並ぶ。上下両端のつぶれは著しい。推定長約3.5cm の小転石を両極打法によって打ち割った際に生成した剥片の一つと考えられる。276は裏面の右側縁に著しい微小剥離が認められる。削器として使用したものと思われる。277は磨製石斧の刃部である。基部は欠失する。薄い板状に剥離する。安山岩製で表面には部分的に磨り残しの凹部が残る。裏面は凹凸が著しく平坦に磨られているのは刃部と右側縁のみである。刃部は再成を繰り返しており、左側は特に減っていて刃部先端が斜めになっている。全体に薄手である。278は砂岩製で表裏全面が磨られ周縁は斜めに面取りされている。円形の盤状石製品の一部である。機能は不明である。

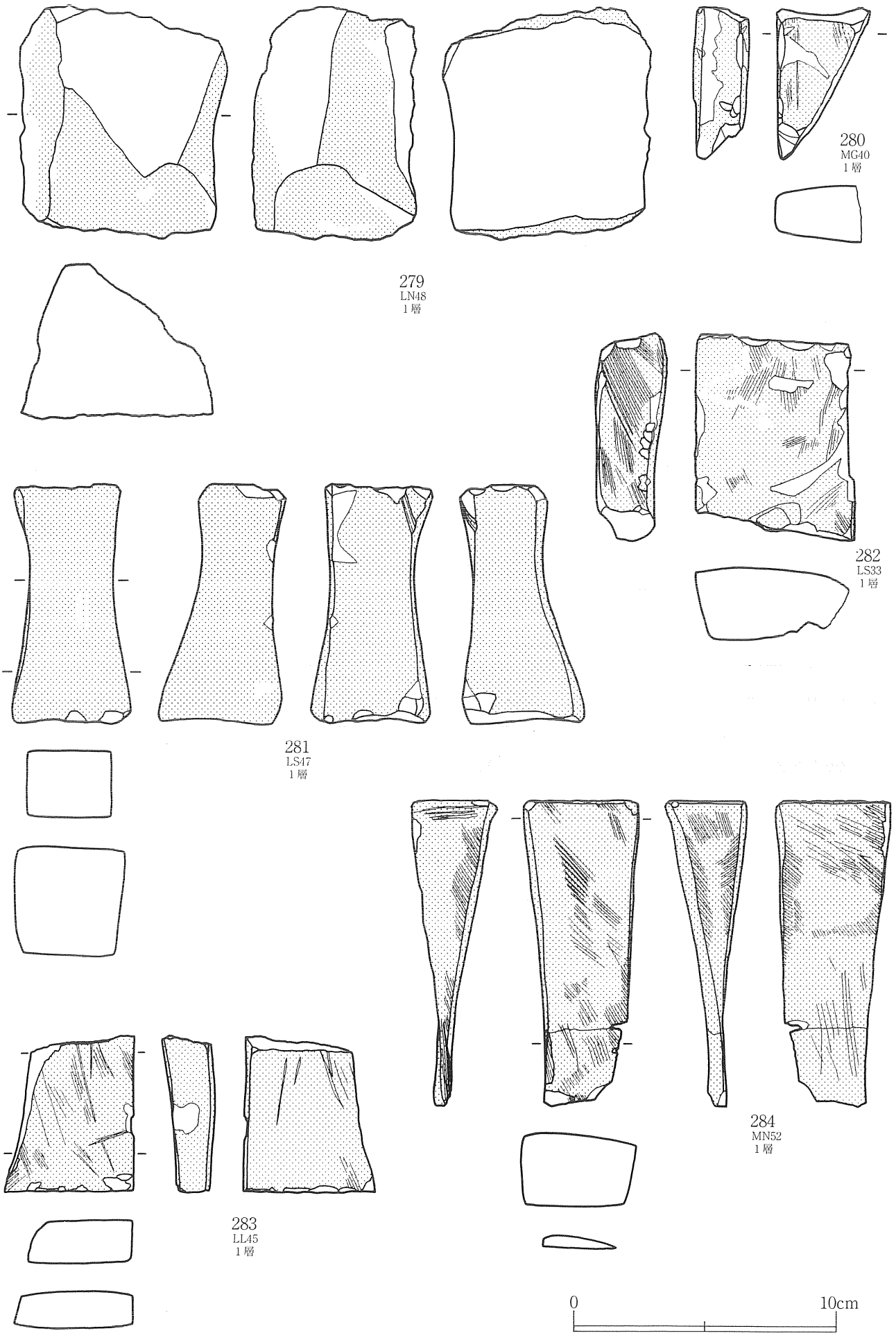
279～284は砥石である。279･281は砂岩製、280は凝灰岩製、281･282･284は泥岩製である。いずれも帰属年代を決定する共伴遺物はなく、古代のものかどうか断定できない。

５．磁器

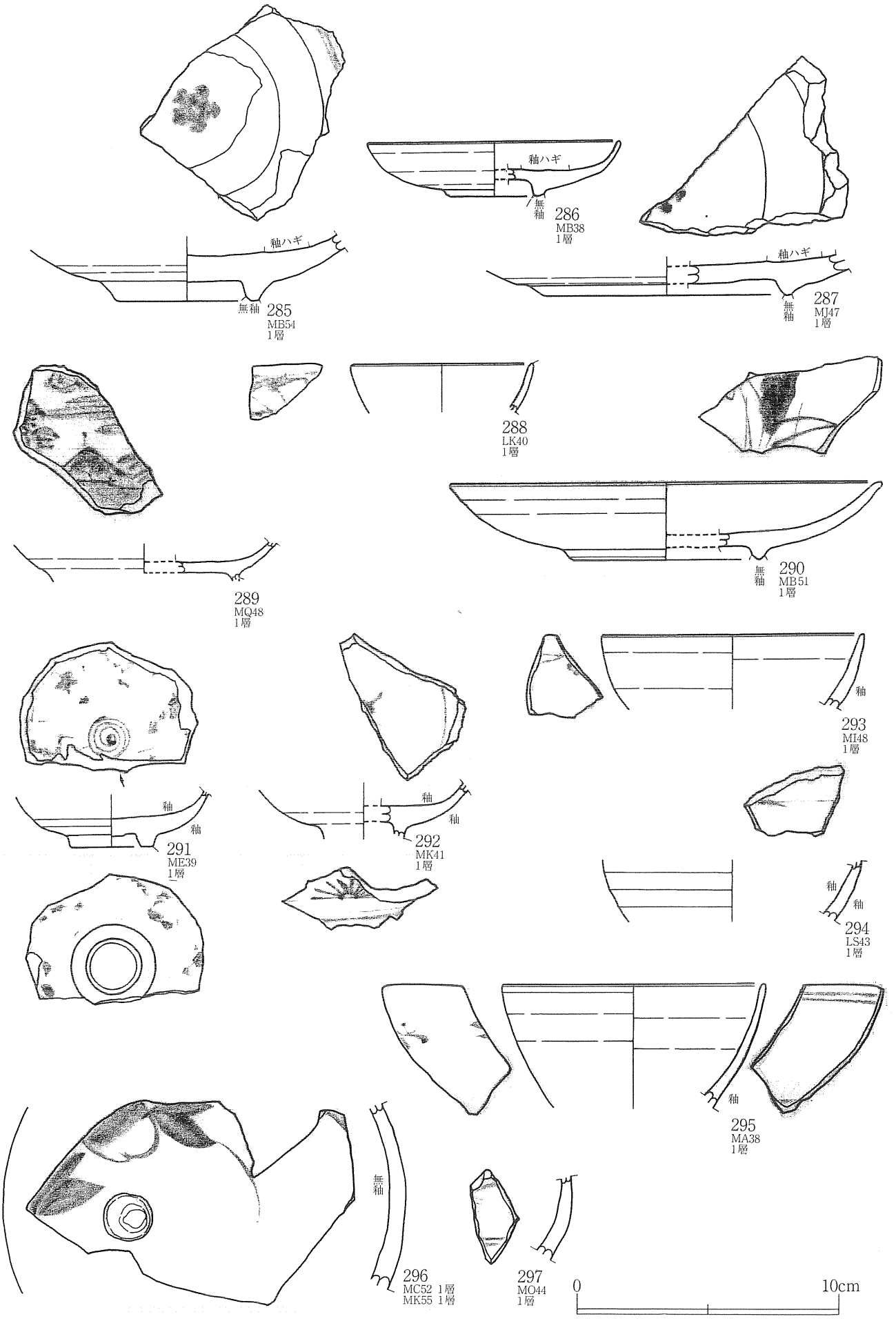
近世の磁器のみ図示した。すべて肥前系の磁器である。器種は皿・椀・徳利・猪口・澗徳利である。299･300は泉沢中台遺跡出土品ではなく、遺跡の南方約600m にある標高約30m の台地上で表面採集したものである。参考資料として掲載する。ほ場整備事業により大規模に掘削された残土中から採集した。300は無釉の底部外面と高台部分が橙色（5YR6/6）を呈する。断面で観察できる胎土は白色である。見込の蛇目釉ハギ部分は周縁の一部に橙色部分が残り、釉を剥ぐために削った部分はわずかに橙色を残した灰色である。したがってこの橙色は施釉前の化粧土を塗ったものと考えられる。泉沢中台遺跡出土磁器にはこの種のものはなかった。

番号	出土地点	器種	特　　徴	石質	使用面数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
279	LN48	砥石	大礫の一部を打ち割り、砥石素材としている。	砂岩	3	(8.9)	(8.0)	(6.3)	(435.5)	108
280	MG40	砥石	長方形の板状砥石の一部。	泥岩	3	(5.8)	(3.6)	(2.2)	(43.7)	108
281	LS47	砥石	４面とも使用により中央部が大きく凹んでいる。	砂岩	4	(9.2)	(4.6)	(4.8)	(209.9)	108
282	LS33	砥石	長方形の板状砥石、。非使用面には整形痕がわずかに残る。	泥岩	3	(7.9)	(6.1)	(2.8)	(186.4)	108
283	LL45	砥石	仕上砥。使用により表面は凹部・裏面は凸部が形成されている。	泥岩	3	(6.0)	(5.0)	(2.1)	(60.5)	108
284	MN52	砥石	仕上砥。表裏両面が大きく凹み、最大厚と最小厚に30倍の差がある。	泥岩	4	(11.7)	(4.4)	(3.0)	(97.7)	108

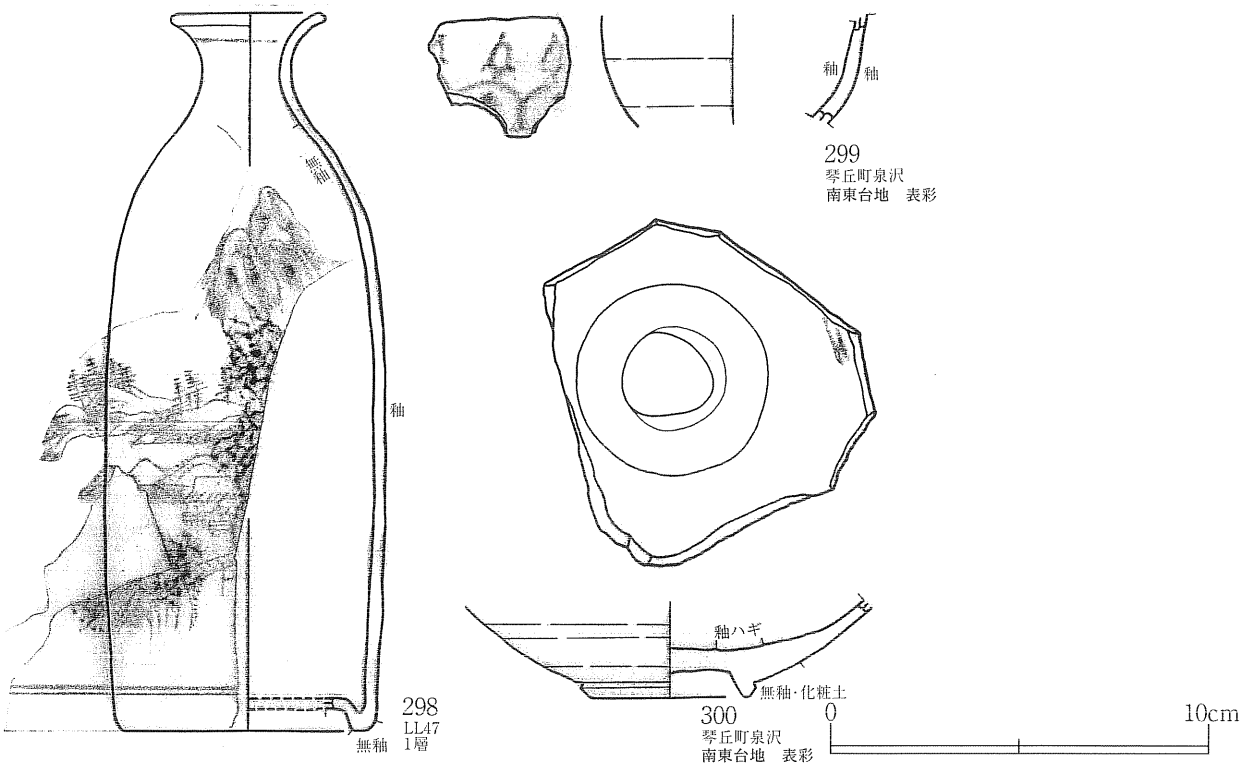
第22表　遺構外出土遺物観察表（４）　砥石



第９７図　遺構外出土遺物（８）砥石



第９８図　遺構外出土遺物（９）磁器①



第９９図　遺構外出土遺物（１０）磁器②

番号	出土地点	器　種	釉薬・絵付	特　　徴	胎土	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	時期区分	図版番号
285	MB54	Ⅲ	染付（青緑）	見込蛇目釉ハギ	灰色	—	(2.6)	5.4	Ⅳ	109
286	MB38	Ⅲ	染付（青緑）	見込蛇目釉ハギ	白色	9.7	2.1	3.9	Ⅳ	109
287	MJ47	Ⅲ	絵付なし	見込蛇目釉ハギ	白色	—	(1.5)	9.4	Ⅳ	109
288	LK40	猪口	染付（青）		白色	7.0	(1.9)	—	Ⅳ	109
289	MQ48	Ⅲ	染付（紺）		白色	—	(1.5)	(7.2)	Ⅴ	109
290	MB51	Ⅲ	染付（青）		白色	16.6	3.0	7.1	Ⅳ	109
291	ME39	碗	染付（紺）		白色	—	(2.1)	3.2	Ⅴ	109
292	MK41	碗	染付（紺）		白色	—	(2.2)	3.1	Ⅴ	109
293	MI48	碗	染付（藍）		白色	10.0	(2.9)	—	Ⅳ	109
294	LS43	碗	染付（藍）		白色	—	(2.3)	—	Ⅳ	109
295	MA38	碗	染付（紺）	二次受熱	白色	10.0	(4.8)	—	Ⅳ	109
296	MC52 MK55	徳利	染付（紺）	他製品の融着痕あり。	灰白色	—	(7.2)	—	Ⅳ	109
297	MO44	Ⅲ	染付（青緑）		白色	—	—	—	Ⅳ	109
298	LL47	潤徳利	染付（紺）		白色	3.9	19.1	6.5	Ⅳ	110
299	表　採	猪口	染付（青灰）		白色	—	(2.9)	—	Ⅳ	110
300	表　採	碗	染付（青緑）	見込蛇目釉ハギ・化粧土	白色	—	(2.5)	4.2	Ⅳ	110

第23表　遺構外出土遺物観察表（５）　磁器

第５章　自然科学分析

はじめに

泉沢中台遺跡では、平安時代の製鉄炉・掘立柱建物跡・井戸・土坑等の遺構が検出されている。秋田県では、これまでにも、平安時代を中心とした遺跡で様々な自然科学分析が行われてきた。(パリノ・サーヴェイ株式会社，1988，1993など)。これらの調査により、各時代の古環境や植物利用に関する資料が収集されつつある。

また、第２節では、製鉄燃料材と考えられる炭化材の樹種を明らかにする。第１節では土坑と井戸の覆土についてテフラ分析およびテフラの屈折率測定を行い遺構構築時期に関する資料を得る。第３節は製鉄炉の機能を解明することを目的として、鉄滓、鉄塊などの金属学的分析を行った結果を掲載する。分析と解析は岩手県立博物館の赤沼英男氏に委託した。その結果報告書である。

第１節　テフラ分析

１　試料

試料は土坑 SK-96の試料番号３および井戸跡 SE-102の試料番号４の２点である。分析時の観察では、SK-96の試料番号が黒褐色砂混じりシルト、SE-102の試料番号４が明黄褐色し混じり砂である。(第24表)。

２　分析方法

試料は、適量を蒸発皿に取り、水を加え、超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラ本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石の産状を調べる。さらに火山ガラスの屈折率の測定を行う。以上の観察および屈折率の測定結果からテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、古澤（1995）に示された温度変化型屈折率測定装置を用いて行う。

３　結果・考察

SK-96の試料番号３には、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスが含まれる。火山ガラスは薄手平板状のいわゆるバブル型、気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型、スポンジ状に発泡した軽石型が混在する。この中ではバブル型と繊維束型が多く、軽石軽石は少量である。ほとんどの火山ガラスの屈折率は、形態にかかわらず最小値1.4974、最大値1.4996である。また、直径屋久1.2ｍｍで白色を呈し、発泡が良好な軽石が中量含まれる。この火山ガラスや軽石は、町田外、(1981)、Arai et.al.（1986)、町田・新井（1992）等の記載から、A.D.915年に十和田カルデラより噴出した十和田ａテフラ（To-a）に由来すると考えられる。

また、火山ガラスの中には、屈折率が1.510～1.518のバブル型のものも極微量認められる。この火山ガラスは、町田ほか（1981)、Arai et.al.（1986)、町田・新井（1992）等の記載から、白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）に由来すると考えられる。B-Tm は中国・北朝鮮国境にある白頭山火山を給源とし、その噴出年代は To-a 噴出後の１０世紀と考えられている。すなわち、SK-96試料番号３に含まれるテフラは To-a を主体とするが、微量の B-Tm も混在しているといえる。以上の結果から、SK-96は少なくとも A.D.915年よりも前に構築され、A.D.915年の時点では廃絶されていたことが推定される。

遺構番号	試料番号	スコリア		火山ガラス		軽石	
		量	色調・発泡度・最大粒径	量	色　調　・　形　態	量	色調・発泡度・粒径
SK-96	3	—		＋＋＋	Cl・ bw, pm	＋＋＋	W・g　1.2
SE-102	4	—		—		—	

—：含まれない　＋：微量　＋＋：少量　＋＋＋：中量　＋＋＋＋：多量
Ｂ：黒色　Ｇ：灰色　Ｂｒ：褐色　ＧＢ：灰黒色　ＧＢｒ：灰褐色　Ｒ：赤色　Ｗ：白色
ｇ：良好　ｓｇ：やや良好　ｓｂ：やや不良　ｂ：不良
最大粒径はmm
ｃｌ：無色　ｂｒ：褐色
ｂｗ：バブル型　ｐｍ：軽石型

第24表　テフラ分析結果表

SE-102の試料番号４には、火山ガラスおよび軽石は全く認められなかったため、分析結果から井戸の構築および廃絶された時期を確認することができなかった。

第２節　炭化材の樹種

１　試料

試料は、平安時代の２基の製鉄炉（SN52、SN98）から採取された燃料材と考えられる炭化材２点（SN52；試料番号1・SN98；試料番号2）出ある。

２　方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３　結果

炭化材は、２点ともクリに同定された（表１）。解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～１５細胞高。組織は周囲状および短接線状。

４　考察

製鉄燃料材と考えられる炭化材は、２点ともクリであった。炭化材はそれぞれ異なる製鉄炉から検出されており、今回の結果からクリが選択的に利用されていた可能性がある。しかし、いずれの遺構も試料が１点であるために断定には至らない。

秋田県では、堪忍沢遺跡で平安時代中期の製鉄燃料材にサンショウとヤマウルシが同定されている。（パリノ・サーヴェイ株式会社，1987）。また、山形県山海窯跡群では、製鉄燃料材と考えられる炭化材に５種類が確認されている。（パリノ・サーヴェイ株式会社，1991）。これらの調査例から、製鉄燃料材が複数の種

類で構成されていることがうかがえる。同様の例は、福島県相馬地域で行われた製鉄燃料材の樹種同定結果にも見ることができる。(嶋倉，1988，1990，1992；パリノ・サーヴェイ株式会社，1995a，1995b)。これらの結果を考慮すれば、本遺跡においてもクリ以外に使用された種類があった可能性もある。今後周辺地域において類例を蓄積することで、本地域における平安時代の製鉄燃料材の樹種構成を明らかにできよう。

〈引用文献〉

Arai,F.,Machida,H,Okumura,K.,Miyauchi,T.,and Yamagata,K.(1986) Catalog for Late Quate rnary Marker - Tephras in Japan Ⅱ-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkai do-.Geographical of Tokyo Metropolitan University,21,p.223-250.

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101,p.123-133.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276p.，東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51,p.562-569.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1987）堪忍沢遺跡出土炭化材同定．秋田県文化財調査報告書第152集「西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　－堪忍沢遺跡－」，p.56，秋田県教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988）自然科学分析．秋田県文化財調査報告書第168集・払田柵跡調査事務所年報1987「払田柵跡　－第68～73次調査概要－」，p.59，秋田県埋蔵文化財振興会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）山海窯跡群Ｂ調査区EU1中の土壌分析とＣ調査区SQ1出土木炭の樹種同定．山形県埋蔵文化財調査報告書第170集「山谷新田遺跡・山海窯跡群　発掘調査報告書」，p.25-32，東北農政局・山形県教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）花粉分析および樹種鑑定．秋田県文化財調査報告書第238集・払田柵跡調査事務所年報1992「払田柵跡　－第92・93次調査概要－」，p.85-89，秋田県埋蔵文化財振興会．パリノ・サーヴェイ株式会社（1995a）

第３節　泉沢中台における鉄関連炉の機能

岩手県立博物館　赤　沼　英　男

１　はじめに

秋田県琴丘町泉沢中台遺跡では９世紀後半から10世紀前半に比定される掘立柱建物跡、板塀跡が発見され、それに近接して３基の鉄関連炉と約３トンにものぼる鉄滓、鉄塊が検出された[1)]。炉で鉄が造られ、それが建物内に運ばれ製品へと加工されたとみることができないわけではない。しかし、鉄関連炉周辺おいてまとまった量の砂鉄、もしくは鉄鉱石を容易に入手することは難しい。遺跡の立地状況を考慮すれば、青森県鰺ヶ沢町杢沢遺跡、新潟県豊浦町北沢遺跡同様、少量の砂鉄を用い銑鉄を脱炭する鋼精錬が[2)－4)]行なわれていたと解釈することもできる。

上述の問題、すなわち鉄関連炉の機能を解明することを目的として、秋田県埋蔵文化財センターの依頼により、鉄関連炉内およびその周辺から出土した鉄滓、鉄塊、ならびに遺構面から採取された砂鉄の金属学的解析を行った。その結果、そこでは鋼精錬が実施されていた可能性の高いことが明らかになった。

秋田県下では９世紀後半から10世紀前半に米代川下流域に鉄関連炉が出現し、時代の経過とともに米代川中～上流域にもその広がりを見せるという[5)]。発見された炉跡は形態上いくつかのグループに分類され、その多くは漠然と製練（製鉄）炉として扱われてきたが、泉沢中台遺跡の解析結果はそれらの機能の見直しの必要のあることを示している。

２　炉跡の立地とその形状

検出された炉跡は４基である。遺構の切り合いと層位によって４基の操業時間は異なっていたものと推測されている[1)]。泉沢中台遺跡を発掘調査された秋田県埋蔵文化財センター谷地　薫氏は、鉄関連炉の検出状況を以下のとおり報告されている。すなわち、炉はいずれも平坦面に構築されており、最も残存状態の良好な炉の平面は、長軸120㎝、短軸65㎝の細長い長方形を呈し、炉壁は炉床面に対しほぼ垂直に立ち上がる。平面長軸方向の一端は閉じており、羽口の装着孔と推定される半円形の切り込みがある。一方、反対側はハの字状に大きく開口し、開口部周辺には鉄滓が散在していた。羽口装着孔より下方部にある炉壁の内面は開口部の手前まで青緑色に焼けていたが、杢沢・北沢両遺跡にみられたような青灰色もしくは黄褐色に固く焼きしまった床面は検出されず、木炭と黒褐色の土砂が混入した層とその下に鉄滓を含む赤褐色層が確認されたとのことである[1)]。

上述の発掘調査結果に基づけば、平面長軸方向の一端からフイゴにより炉内に空気を導入し、木炭の燃焼によって形成される高温部分で鉄の形成がなされ、大きく開口した部分から鉄滓の排出を行うという、操作状況が浮かび上がってくる。ただし、ここで気になるのは気密性が悪く炉内に高還元雰囲気を形成しにくい、開放形の炉で操作がなされていた可能性が高いということと、鉄関連炉周辺にはまとまった鉄資源が賦存しない、という点である。以下では、この点を考慮に入れて鉄滓の解析を行うことにしたい。

３　分析資料

分析した資料は鉄関連炉およびその周辺から出土した鉄滓10点、遺構面および遺跡東方古砂丘から採取された砂鉄２点の合計１２点である。No.1、No.5、No.9、No.11、No.12、No.13、No.15、No.17鉄滓は椀状滓、No.8、No.10鉄滓は塊状滓に分類される。なお、No.13鉄滓には半溶解した粘土壁が付着している（第25表）。

４　分析方法

鉄滓はダイヤモンドカッターにより２つに切断し、切断面のそれぞれの中心部分から試料片を摘出し、一

方を組織観察に、他方を化学成分に供した。

組織観察用試料片は樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを用いて研磨した後、金属顕微鏡による組織の観察を行った。さらに、鉄滓の生成経路を推定するうえで重要と判断される鉄滓中の鉱物についてはエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を決定した。

化学成分分析用試料片はエチルアルコール、アセトンで洗浄し、試料十分に乾燥した後、粉砕し必要量を直接テフロン分解容器に秤量し、酸を使って溶解した。このようにして調整した溶液を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES 法）に供し、T.Fe、Ti、P、Si、Al、Ca、Mg、Na、K の９成分を定量した。FeO、M.Fe はクロム酸カリウム適定法により、また、Fe_2O_3はけい酸により求めた。

鉄滓の外観と切断位置は図版26～図版29に示す通りである。なお、No.13鉄滓については鉄滓部分と粘土壁を分別し、それぞれを化学成分分析に供した。

５　分析結果

５－１　鉄滓のマクロ・ミクロ組織

No.8鉄滓は塊状滓であり、表面の相当部分に青錆の析出が認められた（図版26ａ）。矢印の部分から切断し、切断面の中央部分から摘出した試料片を樹脂に埋め込み研磨したもののマクロ組織が図版26b である。灰色をした錆層と鉄滓が混在した組織を示し、全域に空孔も見られる。二重枠で囲んだ内部の EPMA による組成像（COMP）には、灰色を呈した柱状の結晶 XT0 が黒色のガラス質けい酸塩によって取り囲まれている様子が観察され、分析の結果、結晶 XT0 は Ti-V-Mg-Al-O 系のチタン化合物（主として酸化チタンを主成分とする化合物）であり、後者は $CaO-MgO-Al_2O_3-SiO_2-TiO_2$系で、Fe 分をほとんど含まないことがわかった。一方、マクロ組織の枠で囲んだ部分には、暗灰色と黒色をした２相のガラス質けい酸塩の中に、金属顕微鏡下では金色を呈する微小結晶 XT0 が残存する鉄滓が、錆層に入り込んで残存していた。EPMA による定性分析と含有される元素濃度分布のカラーマップによって、結晶 XT0 は Ti (C,N)であり、暗灰色のガラス質けい酸塩（S_1）は $Al_2O_3-SiO_2-TiO_2$系、黒色のガラス質けい酸塩　（S_2）は $CaO-Al_2O_3-MgO-SiO_2-TiO_2$系と判定された（図版26 d、写真１）。

No.12鉄滓から摘出した試料片は、健全なメタル部分と鉄滓からなる（図版27a、b）。鉄滓の枠で囲んだ部分は暗灰色化合物相 XT1 を核とし、その周縁部は灰色の化合物相Ｉによって構成される柱状の結晶が、黒色のガラス質けい酸塩中に残存している。EPMA による分析によって、灰色の化合物相はマグネシウムを固溶するイルメナイト［$2(Fe,Mg)O\cdot SiO_2$］、化合物相 XT １はイルメナイトよりも Ti 含有量が高く、Mg、Al 分を固溶する鉄チタン化合物であり、黒色領域は $FeO-AI_2O_3-SiO_2$系のガラス質けい酸塩であることが分かった（図版27c、第28表）。No.13鉄滓のマクロ組織の枠で囲んだ部分にもほぼ同じ組成の結晶が観察された（図版28c、写真１、第28表）。また、No.12鉄滓の二重枠で囲んだ内部はマグネシウムを固溶したイルメナイトとガラス質けい酸塩によって、No.13鉄滓の二重枠で囲んだ内部はマグネシウムを固溶したイルメナイト、ウルボスピネル［$2(Fe,Mg)O\cdot SiO_2$］、およびマトリックスによって構成されている（図版27d、図版28d）。一方、No.12鉄滓の健全なメタル部分はナイタール（2.5ml 硝酸と97.5ml エチルアルコール混合液）による腐食によって、0.2¯0.3％Ｃの鋼とみなすことができた。

No.1鉄滓から摘出した試料片はイルメナイト、ウルボスピネル、ガラス質けい酸塩からなる部分とウルボスピネル、マグネシウムを固溶した鉄かんらん石、マトリックスからなる部分とによって構成されており、No.5、No.9、No.15鉄滓には、Mg、Al 分を固溶し、ウルボスピネルよりも Ti 含有量が低い鉄チタン化合物が $FeO-MgO-SiO_2$系化合物の中に残存している様子が認められた。また、No.10鉄滓はそのほとんどがウ

ルボスピネル、マグネシウムを固溶した鉄かんらん石、ガラス質けい酸塩によってNo.17鉄滓はウスタイト、マグネシウムを固溶した鉄かんらん石、ガラス質けい酸塩によって構成されていた（図版29、第28表）。
上述の組織観察結果は第26表の最右欄にまとめられる。

５－２　鉄滓の化学組成

第26表に鉄滓の化学組成を示す。鉄滓のT.Feはすべて25％以上にあり、６点は40％を越える。FeO分についても40％を越えるものが６点も見られることを考慮すると、操作時に相当量のFe分を含むスラグ浴が形成されていたものと推測される。Ti分は２％～18％にあり、相当にばらつく。Ti（C,N）やXTOが残存する　No.8鉄滓のTi分は5.14％であり、ウルボスピネルが残存するNo.12鉄滓のTi分は17％代にある。このことは、炉内反応が不均一に進んでいることを示すものといえる。鉄滓中のFe_2O_3は11％以上あり、40％を越えるものも見られる。その多くに鉄滓と鉄塊が混在していたことを見てとれる。

遺構面から採取された砂鉄には６％のTi分が含まれていた。遺跡東方の砂丘から採取される砂鉄からも6.31％のTi分が検出されており、Siを始めとする他の脈石成分もほぼ同レベルにある。P含有量に差が見られる点を除けば、化学組成の近似した砂鉄とみなすことができる。一方、No.13鉄滓に付着する半溶解した粘土壁の化学組成は第27表の通りである。Si、Al分を主成分とする。分析された　％のTi分、2.39％のMgO分はスラグ浴による侵食の影響によるものと思われる。

６　古代・中世の鋼製造法

古代ならびに中世における鋼の製造方法にはいまだに不明な点が多く、いくつかの仮説が出されているが、それらを整理すると以下のごとくになる。

イ）　原料鉱石（砂鉄もしくは鉄鉱石）を還元し鉄を生産する段階

ロ）　イ）で生産された鉄から目的とする鋼を製造する段階

ハ）　ロ）で製造された鋼を素材とし目的とする鍛造鉄器を製作する段階

ここではとりあえずイ）を製錬、ロ）を精錬、ハ）を小鍛治とする。

１）の製錬によって得られる鉄は炭素含有量に応じ、鋼と銑鉄の２つに分類できる。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を摘出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そして、その鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある[7]。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味でこの方法は直接製鋼法と呼ばれている。さらに製錬によって得られた粗鉄を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は精錬鍛治とされている。しかし、ここでいう精錬鍛治がどのような設備を用いどのようにしてなされたかという点に関しての具体的な説明はなされていない[8]。不純物の除去と炭素量の増減という複数の操作工程があったと推測されるが、具体的な操作方法が不明である以上、その操作の過程でどのような鉄滓が排出されたのかを論ずることは困難であるという見解も提出されている[7]。

イ）の製錬では銑鉄も生産される。銑鉄を再び溶解炉で溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が得られる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭を行うことによって鋼を造ることもできる。この場合の脱炭の方法としては、半地下式竪型炉もしくは火窪炉の中にあらかじめ容易された銑鉄を挿入し銑鉄浴を生成させた後、砂鉄、もしくは鉱石粉といった少量の鉄酸化物を使用する方法がとられていた可能性の高いことが遺物の金属学的解析結果に基づき指摘されている[10)－12)]。銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄もしくは鉱石粉を用い鋼を製造するというこの方法は、銑鉄を経由して鋼が得られるという意味で間接製鋼法と呼ばれるが、以下では現代製鋼と区別するため、“鋼精錬”という用語を用いることにする。脱炭材に鉄

鉱石粉が使用された場合、鉄鉱石中のFe分は銑鉄中の炭素、もしくはＣＯガスにより還元されてFeO、さらに還元が進めばFeに変わって溶鉄に付け加わる。一方、砂鉄が用いられた場合には　$FeO-Fe_2O_3-TiO_2$系の鉄チタン酸化物中のFe分は還元により鉄浴に移行し、スラグ浴には還元雰囲気と炉内温度によってウルボスピネル（$2FeO\cdot TiO_2$）、イルメナイト（$FeO\cdot TiO_2$）、Ti-O系化合物（主として酸化チタンを主成分とする化合物）、Ti（C,N）といったチタン化合物が析出することになる。実際の操作では投入された脱炭材と炉壁材などが反応しスラグ浴が形成される。脱炭材に鉱石粉が使用された場合にはウスタイト、$FeO-MgO-SiO_2$系化合物、ガラス質けい酸塩を主成分とする鉄滓が、砂鉄の場合にはそれらにチタン化合物が加わったものが鉄浴から分離され排出される。この脱炭・精製の工程で生ずる鉄滓を鋼精錬滓という。そして、このような方法により製造された鋼を用い、小鍛治によって目的とする鉄器が作り出されることになる。

小鍛治操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄（スケール）が剥離（これは鍛治薄片と呼ばれる）する。一方、加熱のときは酸化鉄が半溶融状態になり、火窪炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半溶融状態の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“椀型状”（供え餅を逆さにした形）をした鉄滓状物質が、鉄関連遺構の発掘調査では小鍛治滓として扱われている。従って、小鍛治滓は金属鉄、錆層、ウスタイト、（FeO）を主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成する$FeO-SiO_2$系化合物が混在した組成をとるものと推測される。なお、この操作はしばしば鍛錬鍛治とも言われる。

上述から明らかなように、ロ）でいう精錬の中には直接製鋼法の精錬鍛治と間接製鋼法の鋼精錬という２つの異なった概念が存在することが分かる。精錬鍛治についてはその操作内容をより明確にする必要があると考えられるが、その問題についてはともかく、ここでは銑鉄を脱炭し鋼を製造するという鋼精錬とは区別して扱うことにしたい。上述を整理すると図版32にまとめられる。

７　鉄滓の解析結果から推定される鉄関連炉の機能

泉沢中台遺跡では、Ti（C,N）または化合物 XTO（主として酸化チタンを主成分とする化合物）とFe分をほとんど含まないガラス質けい酸塩からなる鉄滓が錆の中に混在する遺物（NO.8鉄滓）が発見されている。溶融銑鉄とスラグ浴が接触した状態が炉内において存在していたことは確実である。No.12鉄滓には亜共析鋼からなる鉄粒の残存も見られた。鉄関連炉周辺から３トンにはのぼる鉄滓が出土していることを考慮すると、砂鉄を始発原料とする製錬によって銑鉄や鋼が混在した、炭素含有量の不均一な鉄が生産されていたと解釈することが可能となる。しかし、同時にいくつかの疑問も生じる。

図版33には遺構面から検出された砂鉄中のＰ分とT.Fe、および分析を行った10点の鉄滓に含有されるＰ分とT.Feの関係を示した。砂鉄に比べ鉄滓中のT.Feが減量しているにもかかわらず、一様にＰ分の増量が観察される。北沢、杢沢両遺跡から出土した鉄滓の分析結果に基づけば、泉沢中台遺跡出土10点の鉄滓の溶融開始温度は1,200℃以上にあったと推定される[10]。砂鉄を始発原料として製錬を行った場合、砂鉄中のＰ分はFe分以上に還元され鉄浴へと移行するはずであるが、実際には逆の現象が生じており、製錬を想定したのでは説明が困難である。遺跡周辺からまとまった砂鉄を容易に得ることはできない。遺跡の近くには産出する山砂鉄を用いる場合、精製の必要があったと考えられるが、精製のための設備も未検出である。このような鉄滓の組成と遺跡の立地を考慮すると、砂鉄を始発原料とする製錬の可能性は低いといえる。

それでは銑鉄や鋼が混在し炭素量が不均一で相当量の鉄滓の噛み込んだ鉄塊が供給され、それを素材とする精錬鍛治がなされていたと考えた場合、分析結果を説明することができるであろうか。鋼を溶解できるまでに炉内温度が到達していたとみることは難しく、鉄塊に付着あるいは取り込まれた鉄滓を除去するために

は、加熱、鍛打操作が不可欠であったと考えられる。この場合にも破砕された鉄滓や鍛造薄片が排出されるはずであるが、そのような遺物は鉄関連炉内およびその周辺からは出土していない。銑鉄を素材とし、脱炭材として少量の砂鉄を使用しながら鋼を製造するという、鋼精錬を想定することによって分析結果の説明が可能となる。なお、鋼精錬を想定した場合、吸熱反応である少量の鉄酸化物による脱炭反応に伴う温度低下を抑制し、鋼精錬温度を維持するための設備あるいは操作方法が問題となる。泉沢中台遺跡においては、分析した鉄滓はもとより、図版34にもみられる椀状滓が相当量確認されている。今後、この遺跡の組成とその生成経路を検討することによって、その問題を解き明かすことができるものと思われる。

８　まとめ

秋田県琴丘町泉沢中台遺跡の10世紀に比定される掘立柱建物跡、板塀跡に近接して３基の鉄関連炉は、遺構の立地状況と遺物の組成を考慮すると鋼精錬炉である可能性の高いことが明らかになった。他地域から銑鉄の供給を受けて鋼製造がなされていたものと推定される。交換経済の要素を加え、遺跡の性格を検討する必要が生じていることはもとより、これまで製錬炉として扱われてきた、同時期の米代川流域に分布する遺構についても、それらの機能に関する見直しが不可欠であろう。

註

１）泉沢中台遺跡を発掘調査された秋田県埋蔵文化財センターの谷地　薫氏からのご教授による。
２）岡田康弘「古代末の津軽－杢沢遺跡を例に－」『季刊考古学』第57号、雄山閣、1996年、p.18-25.
３）川上貞雄「中世初頭の越後－新潟県北沢遺跡－」『季刊考古学』第57号、雄山閣、1996年、p.26-29.
４）赤沼英男「遺物の解析結果からみた半地下式竪型炉の性格」『季刊考古学』第57号、雄山閣、1996年、p.41-45.
５）高橋　学「古代末の出羽－米代川流域の鉄関連遺構－」『季刊考古学』第57号、雄山閣、1996年、p.26-.
６）鉄関連炉の詳細については、本報告書ページを参照されたい。
７）大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学第8号』雄山閣出版、1984年、p.36-46.
８）少なくとも精錬鍛治には脱炭、浸炭、鉄滓の絞り出しという工程が含まれていることが大澤正巳氏によって指摘されている。これら３つの操作を同時に行うことは困難であるから、精錬鍛治には最低３つの操作が存在したことになる。当然、それぞれの操作に対応する３種類の鉄滓が排出されることになるが、その点に関する検討が不十分であることが佐々木稔氏によって指摘されている[8]。
９）佐々木稔「遺構を離れて製錬滓と断定できるか－潤崎遺跡出土鉄滓の場合－」『たたら研究34号』たたら研究会、1993年、p.43-47.
10）赤沼英男「いわゆる半地下式竪型炉の性格－杢沢・北沢両遺跡出土遺物の金属学的解析結果から」『たたら研究35号』たたら研究会、1995年、p.11-28.
11）赤沼英男「遺物の解析結果からみた半地下式竪型炉の性格」『季刊考古学』第57号、雄山閣、1996年、p.41-45.
12）赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」『ふぇらむ Vol.2 NO.1』社団法人日本鉄鋼協会、1997年、p.44-51.

試料名		検出遺構	形状
No.１	鉄滓	ＳＸ94ＲＭ107	椀型
No.５	鉄滓	ＳＸ94最下層１層Ｗ（Ｂ）	椀型
No.８	鉄滓	ＳＸ94最下層１層Ｗ（Ｅ）	塊状
No.９	鉄滓	ＳＸ94最下層１層Ｗ（Ｆ）	椀型
No.10	鉄滓	ＳＸ94最下層１層Ｗ（Ｇ）	塊状
No.11	鉄滓	ＳＮ91北ＳＫ３層Ｅ（Ａ）	椀型
No.12	鉄滓	（Ｂ）	椀型
No.13	鉄滓	ＳＮ52　炉壁Ｎ	椀型
No.15	鉄滓	ＳＫ37ＲＭ114	椀型
No.17	鉄滓	ＳＫ37ＲＭ175	椀型
No.18	砂鉄	ＳＸ94埋土中の砂鉄	
No.19	砂鉄	遺跡東方砂丘中の砂鉄	

注１）No.１，No.５，No.８，No.10，No.11，No.13，No.15，No.17は鉄関連炉に伴うもの。
注２）No.13には炉壁が付着している。

第25表　分析資料一覧表

試料名	化学成分（%）												
	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	Ti	P	Si	Al_2O_3	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	
No. 1	28.34	0.78	16.50	21.08	8.48	0.071	14.57	10.43	1.06	2.49	0.58	1.58	(I, U, S) (U, Fa, M)
No. 5	46.34	0.39	48.42	11.18	9.65	0.065	6.55	3.80	0.51	3.69	0.17	0.25	XT_2, F, M
No. 9	52.50	1.84	41.58	26.22	8.41	0.079	3.60	2.68	0.54	2.55	0.13	0.23	XT_2, Fa, S
No. 8	38.60	—	—	—	5.14	0.079	9.60	6.20	0.270	0.990	—	—	Ti (C, N), XT_0, S
No.10	43.27	0.11	8.41	52.29	2.90	0.052	7.12	4.40	0.12	0.85	0.20	0.42	U, Fa, S
No.11	33.50	—	—	—	17.65	0.095	11.82	6.23	0.96	2.90	—	—	U, Fa, S
No.12	52.50	1.98	21.50	48.34	6.54	0.066	1.88	2.19	0.13	1.14	0.15	0.20	(XT_1, I, S) (I, S)
No.13	29.86	0.95	14.21	25.54	14.60	0.056	11.21	7.45	0.76	3.08	0.51	1.10	(XT_1, I, M) (I, U, M)
No.15	54.01	0.38	53.16	17.67	0.60	0.069	8.62	5.27	0.34	0.59	0.17	0.40	W, XT_2, F, M
No.17	59.19	0.33	55.50	22.48	0.34	0.095	6.41	3.93	0.26	0.37	0.10	0.53	(W, Fa, S)
No.18	M51.64	<0.01	22.13	46.24	6.66	0.007	3.09	4.08	0.20	1.38	—	—	S0.055 V0.24 Mn0.52 Cu <0.005
No.19	M57.58	<0.01	27.08	52.23	6.31	0.054	1.09	3.40	0.081	1.36	—	—	0.034 0.28 0.66 <0.005

注1）　FeOはクロム酸カリウム滴定方、Fe_2O_3は計算、他はICP－AES法による。

注2）　Iはイルメナイト（$FeO \cdot TiO_2$）、Uはウルボスピネル（$2\,FeO \cdot TiO_2$）、XT_0は主として酸化チタンを主成分とする化合物、XT_1はイルメナイトよりもTi含有量が高いチタン化合物、XT_2はウルボスピネルよりもTi含有量の低いチタン化合物、FはFeO－MgO－SiO_2(2(Fe, Mg)・SiO_2と同定されたもののみFaと記述)、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス。

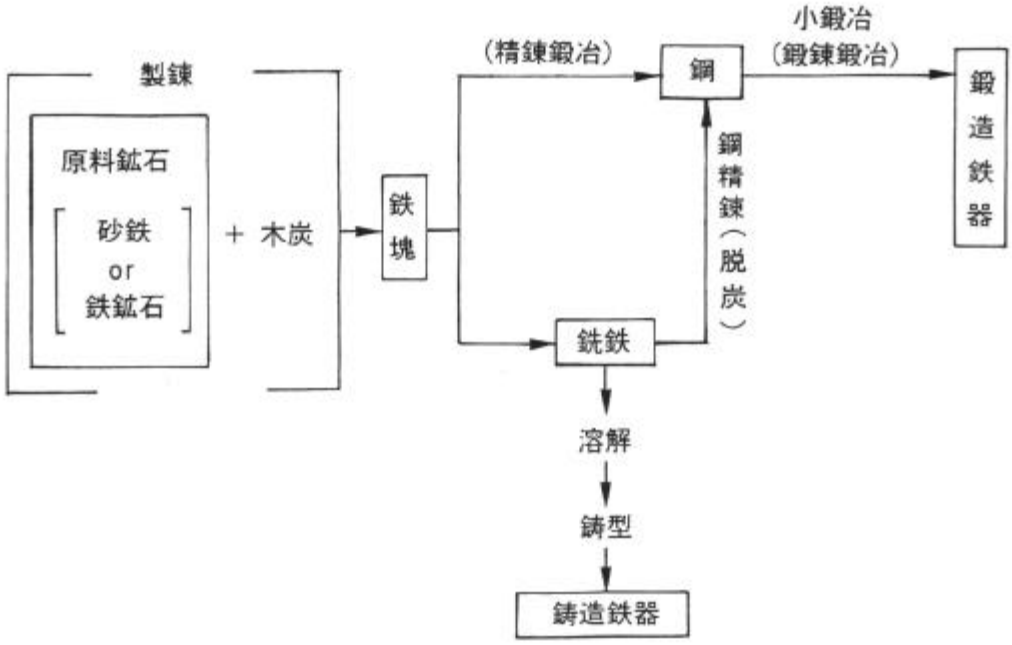
第26表　鉄滓の分析結果一覧表

資料名	測定箇所	Na_2O	K_2O	MgO	CaO	SiO_2	V_2O_5	TiO_2	MnO	P_2O_5	FeO	Al_2O_3	合計
No.1鉄滓	R_1－U	<0.01	0.01	2.17	<0.01	0.034	1.23	33.87	0.95	<0.01	56.68	4.25	99.2
	R_1－U	0.03	0.01	2.07	<0.01	0.04	0.81	54.16	1.04	<0.01	42.32	0.30	100.8
	R_2－U	<0.01	<0.01	1.96	<0.01	0.06	1.32	33.70	1.05	<0.01	57.87	4.20	100.2
	R_2－Fa	<0.01	0.02	9.98	0.18	32.74	<0.01	0.64	1.69	0.10	55.50	0.10	101.0
	R_2－S	1.65	3.91	0.49	6.52	55.05	<0.01	2.25	0.44	0.56	11.93	16.66	99.5
No.5	X_2	0.03	<0.01	3.44	<0.01	0.12	0.99	30.61	0.75	<0.01	61.39	3.52	100.9
No.9	X_2	<0.01	0.01	2.20	<0.01	0.07	0.42	28.46	0.83	<0.01	62.68	3.32	98.0
	Fa	0.06	0.04	4.73	1.19	30.96	0.03	0.68	1.72	0.20	60.64	0.57	100.8
	S	1.89	3.99	0.29	7.95	32.94	0.05	2.94	0.86	1.39	39.01	9.32	100.6
No.10	U	<0.01	<0.01	2.23	<0.01	0.10	1.05	35.05	0.95	<0.01	57.01	3.55	100.0
	Fa	<0.01	0.01	14.08	0.08	32.65	0.04	0.19	1.55	<0.01	52.30	0.03	101.0
	S	0.85	3.85	1.86	3.73	52.05	0.05	2.66	0.66	0.16	20.52	13.49	99.9
No.11	U	0.02	0.02	1.74	<0.01	0.14	0.70	34.05	1.13	<0.01	56.84	3.82	98.5
	Fa	0.02	0.21	9.43	0.25	32.03	0.02	2.08	1.81	0.06	54.01	0.55	91.5
No.12	R_1-I	0.03	0.15	4.29	0.06	1.18	1.48	52.97	1.66	<0.01	35.96	1.06	98.9
	R_2-I	0.02	0.03	3.44	<0.01	0.01	1.43	54.25	1.41	<0.01	39.21	0.43	100.3
No.13	R_1-I	1.13	4.43	1.00	0.68	47.18	0.55	18.66	0.45	0.03	15.09	13.22	102.4
	R_2-I	<0.01	0.05	1.43	0.04	0.21	0.81	51.82	1.38	<0.01	42.16	0.32	98.2
	R_2-U	0.01	0.03	2.13	<0.01	0.09	0.87	33.87	1.09	<0.01	57.29	3.74	99.1
No.17	Fa	0.01	0.02	1.82	0.20	30.89	0.03	0.07	0.10	<0.01	67.30	0.15	100.6

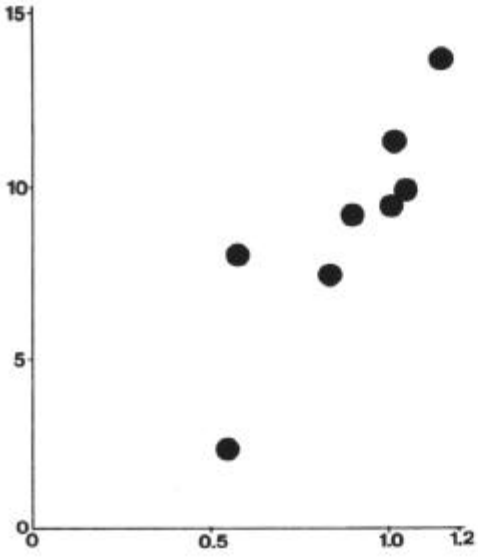
第27表　鉄滓中に見出された鉱物のEPMAによる定量分析結果一覧表

試料名	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Ti	Na_2O	K_2O
No.13	15.70	0.73	6.89	13.74	47.34	14.23	0.53	2.39	7.5	0.81	2.62

第28表　No.13炉壁部分の化学分析結果表



第１００図　推定される古代・中世の鋼製造法



第１０１図　遺構面から採取された砂鉄と鉄滓中のT･Feとpとの関係

第１０２図　椀状滓の外観

第6章　まとめ

本遺跡で検出した85遺構のうち、近世に属すると考えられる溝跡8条を除き、他は出土遺物等から古代の遺構と考えられる。これらのうち主要な遺構については、重複関係、遺構の類似性、長軸方向の類似性、埋土の状況、遺構間の距離等から次の7期の変遷が想定される。

A期

東西両面廂付きのＳＢ78が中心的建物で、廂の付かないＳＢ32、ＳＢ67の各建物が伴う。建物の長軸方向は北から約7度西に振れる。ＳＡ123柱列が建物跡の一部とすればこの時期であろう。

Ｂ１期

ＳＡ125・89・65・54・45板塀によって推定東西約65～72ｍ、南北約50～60ｍの長方形に囲まれた範囲内に、中心的な建物として東面廂付のＳＢ55、それに付属する建物として廂のないＳＢ77とＳＢ105の計3棟が配置される。建物の長軸方向は、ＳＢ77では西辺を区画するＳＡ89と並行に、ＳＢ55・105では東辺を区画するＳＡ45と並行に設定され、北から4～10度東に振れている。

Ｂ２期

Ｂ１期の板塀のうち北辺を同じ場所でＳＡ124に建て替え、西辺は位置を約9ｍ東に移動して新たにＳＡ90を設置する。区画は推定東西約56～63ｍ、南北約51～60ｍの正方形に近い形になり、Ｂ１期と比べて面積は縮小する。区画内の建物群のうち中心的建物であるＳＢ55は変わらないが、他の2棟はＳＢ79とＳＢ106に建て替えられる。ＳＢ79は、西辺の板塀が約9ｍ東に移動したのに伴い、ＳＢ77より約12ｍ南東に建てられる。この2棟は長軸方向がほぼ北を向く。

Ｃ期

板塀の位置と方向がＢ期から大きく変わる。調査区内で検出したのはこの板塀区画の一部で、西辺のＳＡ42と南辺のＳＡ63である。区画の南東隅の推定位置は、Ｂ２期より約21ｍ東に移り、南北方向は約9度西に、東西方向は約9度北にずれる。明らかにこの区画に伴う建物跡は不明である。

Ｄ期

製鉄が行なわれる。ＳＮ91・126・98製鉄遺構を連続して操業し、ＳＸ33鉄滓拾場が形成される。粘土採掘坑としてＳＫ16・101や、廃棄土坑としてＳＫ103・58が製鉄遺構の周辺に構築される。

Ｅ期

北面と東面に廂が付くＳＢ60がＳＡ62柱列を伴って建てられる。長軸方面は北から14度西に振れる。長軸方向や柱穴の類似するＳＢ64・75もこの時期であろう。

Ｆ期

埋土中に火山灰を含む遺構であるＳＮ15・ＳＫ96が構築される。

以上の7期のうち、Ｃ期の板塀区画とＤ期の製鉄関連遺構群は、同時期に存在した可能性もある。その他の遺構では、ＳＢ34・56は柱穴配置がＳＢ55に類似することと長軸方向の共通性から、またＳＢ100の長軸方向はＳＡ45と並行することからいずれもＢ１期またはＢ２期に帰属すると考えられる。ＳＢ114はＡ期またはＢ１期、ＳＢ47はＣ・Ｄ・Ｅ期のいずれかであろう。ＳＥ102井戸跡は、Ｂ１期・Ｂ２期のＳＡ45板塀跡と近接しすぎる位置であることからＡ期またはＣ期である。

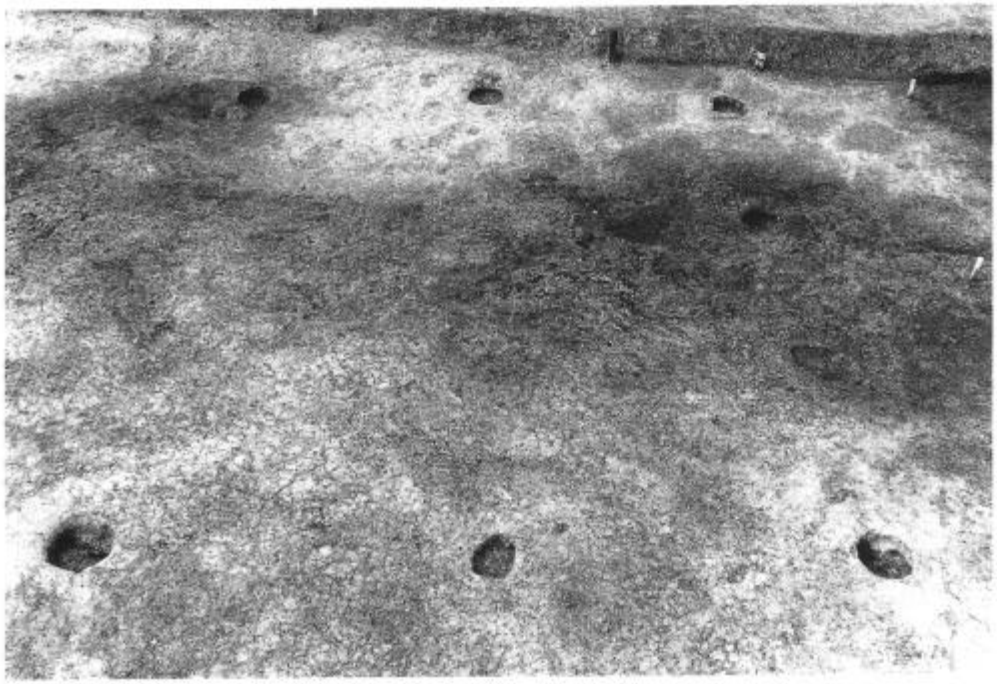
実年代は、Ｆ期の下限年代が埋土中の火山灰から10世紀前葉と推定される。Ａ期～Ｅ期は、およそ9世紀中葉以降10世紀前葉までの時期と考えられる。

1　遺跡周辺の地形
（1967年撮影空中写真）

2　遺跡周辺の地形
（1994年撮影空中写真）

1　遺跡遠景（東から）

2　調査区西部（南東から）

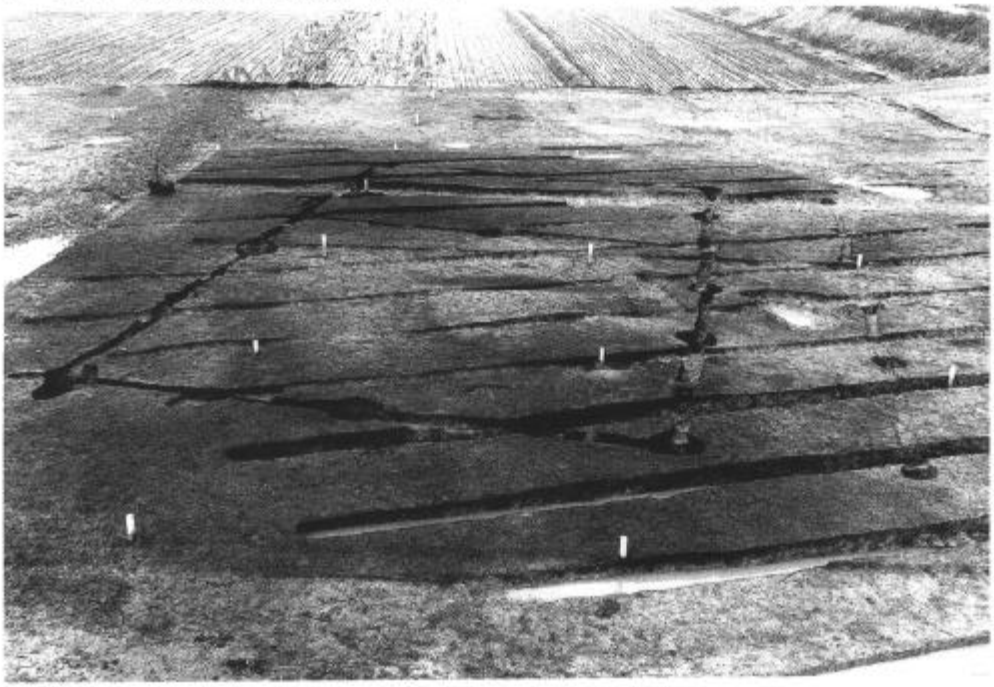


3　SB32掘立柱建物跡（南から）

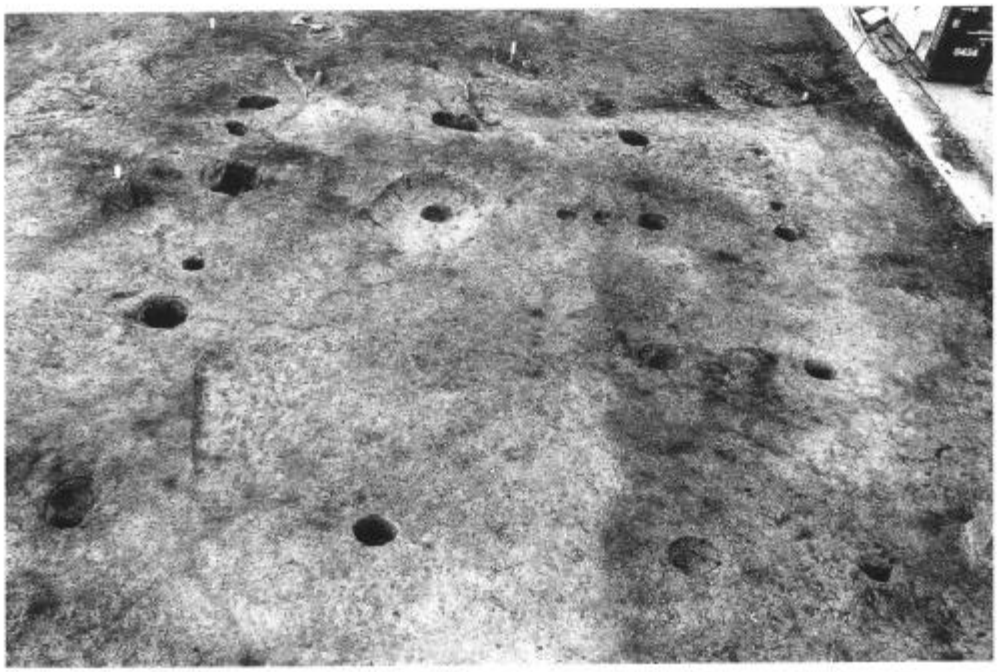
4　SB34掘立柱建物跡（南から）

1　SB47・SB100掘立柱建物跡（南から）

2　SB60掘立柱建物跡・SA62柱列確認状況（南から）

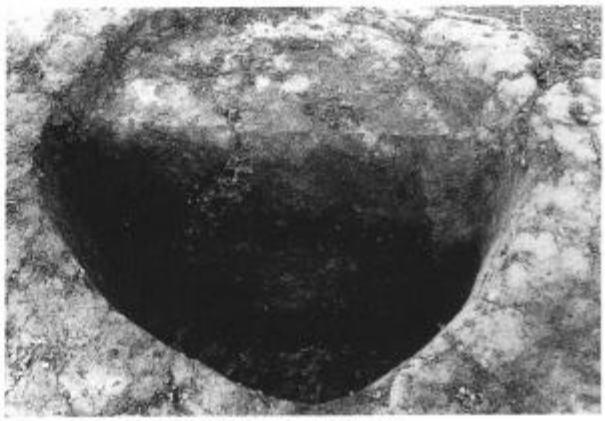


3　SB55掘立柱建物跡（南から）



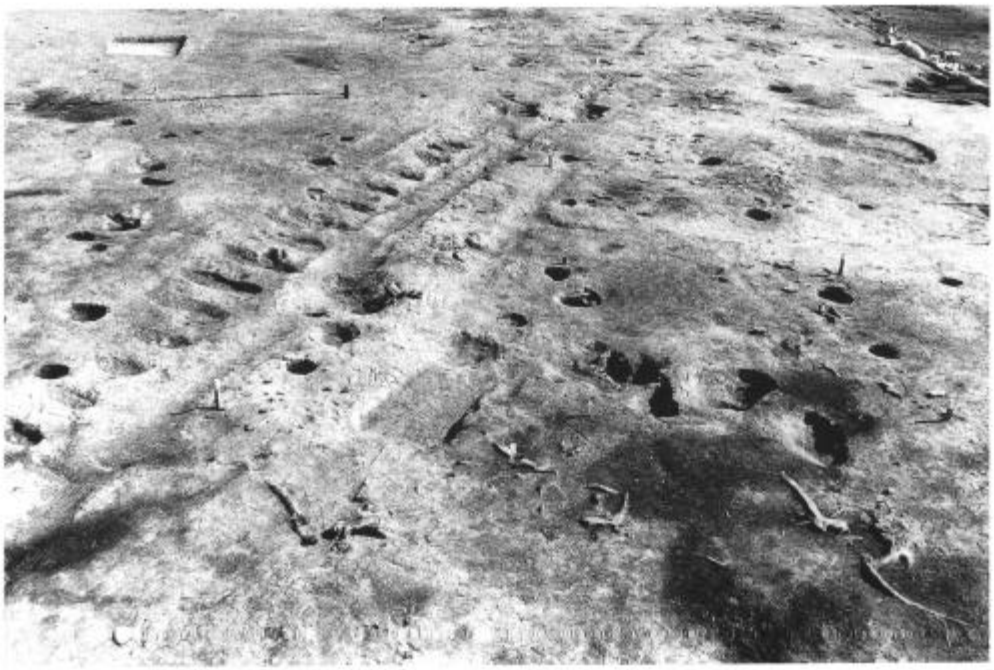
4　SB56掘立柱建物跡（南から）

1　SB77掘立柱建物跡P7（南から）



2　SB78掘立柱建物跡P7（南から）

3　SB77掘立柱建物跡（南から）

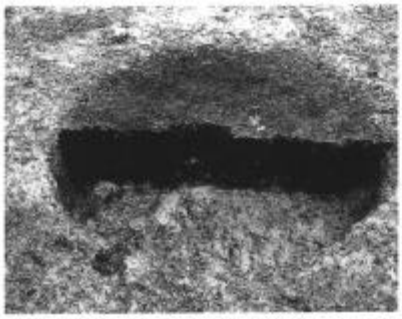


4　SB78掘立柱建物跡・SN71・72・73焼土遺構（西から）

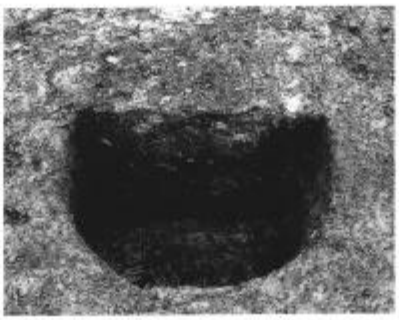
1　SB105・106掘立柱建物跡（東から）

↑3　SB114掘立柱建物跡（南東から）

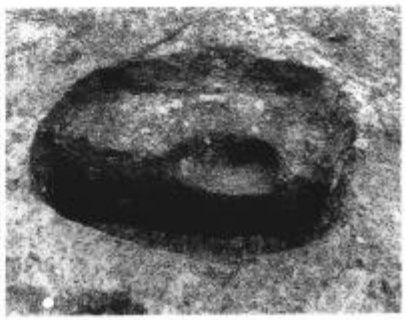
←2　SB105・106掘立柱建物跡（南から）



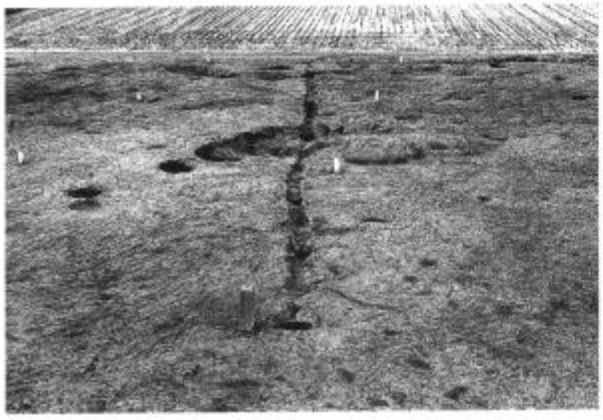
4　SB105 P2（南から）



5　SB106 P9（南から）

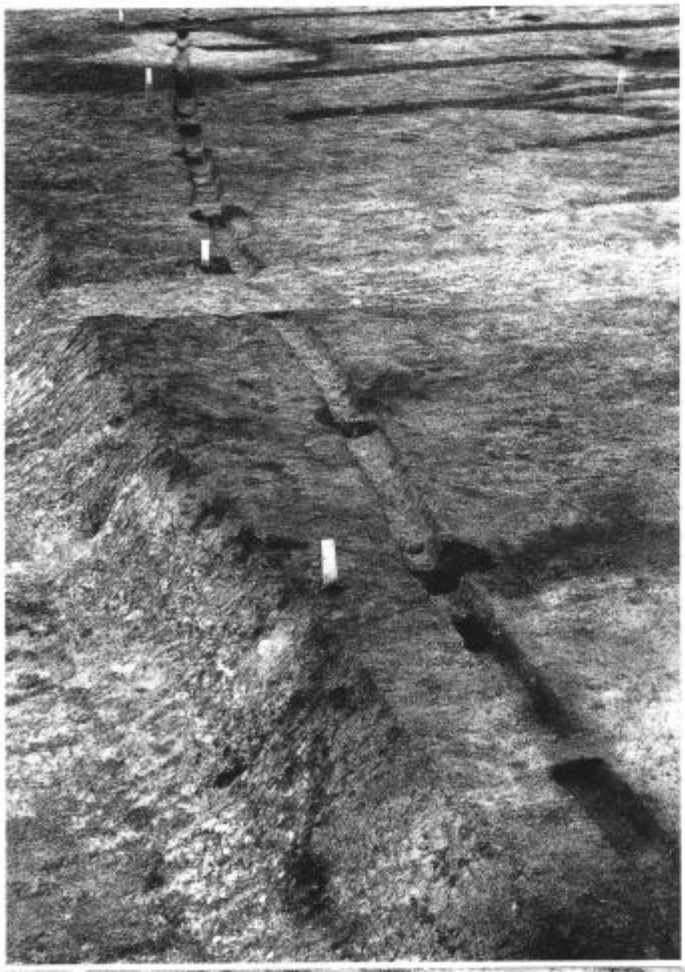


6　SB114 P3（南から）



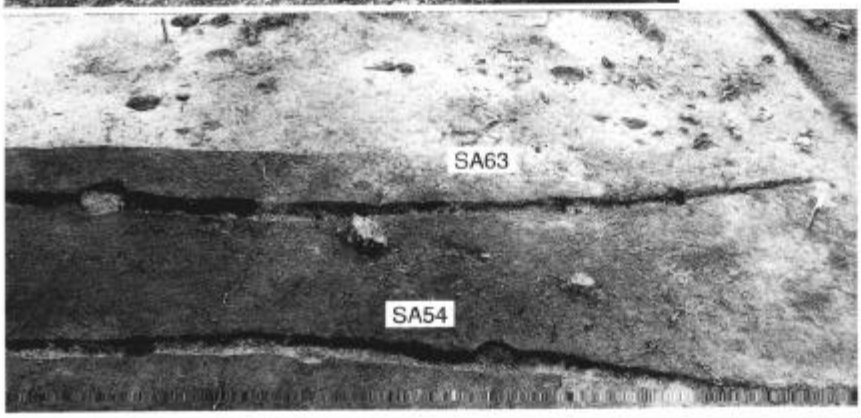
1　SA42板塀跡（南から）

2　SA65板塀跡の板塀痕跡（西から）



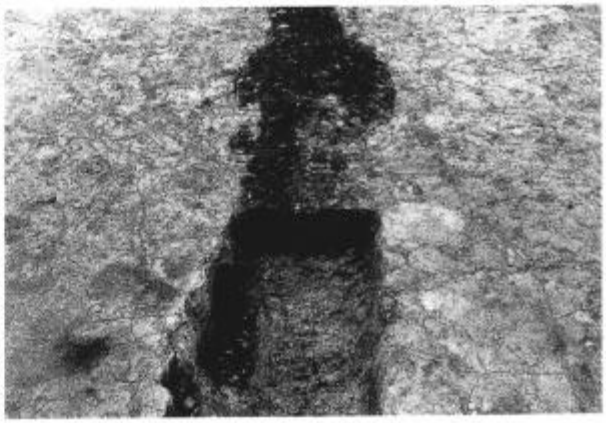
←3　SA45板塀跡（北から）

↑4　SA63・65板塀跡（西から）



5　SA54・63板塀跡
（南から）

1　SA63板塀跡とSB64掘立柱建物跡P2（南から）

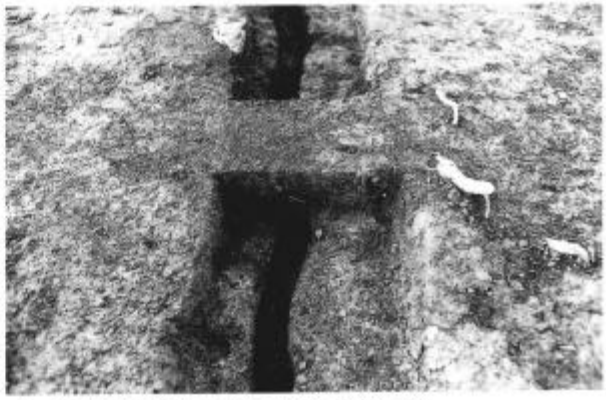


2　SA63板塀跡断面土層（西から）

3　SA65板塀跡の検出状況（東から）

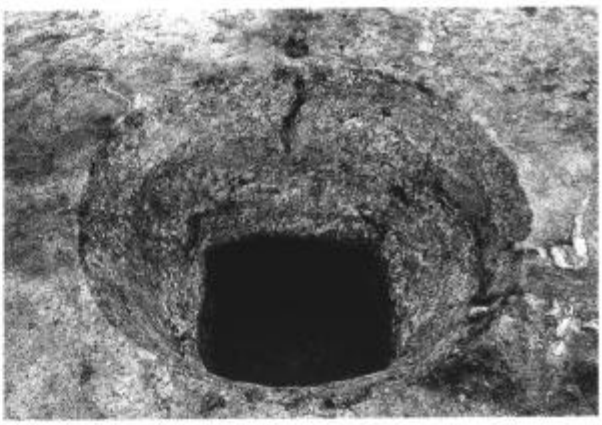
4　SA65板塀跡の板状柱と板塀の痕跡（東から）

5　SA90板塀跡（南から）



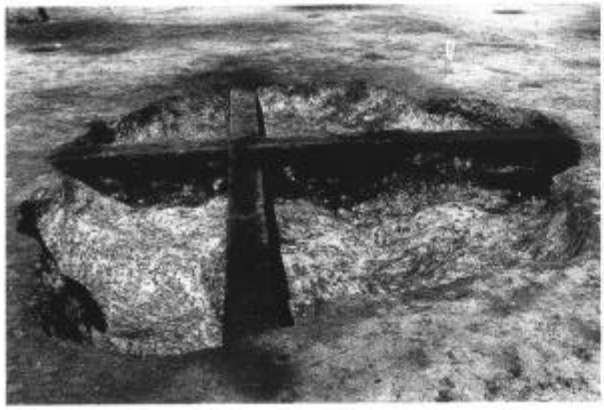
6　SA90板塀跡の板塀痕跡（南から）

1　SA124・125板塀跡（東から）



2　SE102井戸跡（南西から）

3　SK01土坑（南から）



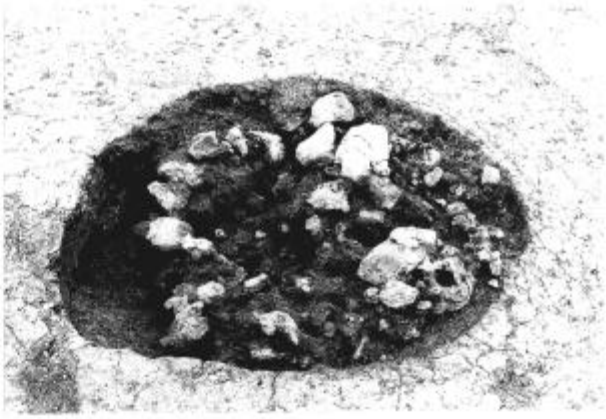
4　SK16土坑断面土層（東から）

5　SK20土坑（西から）

6　SK25土坑（南から）

7　SK31土坑（南東から）

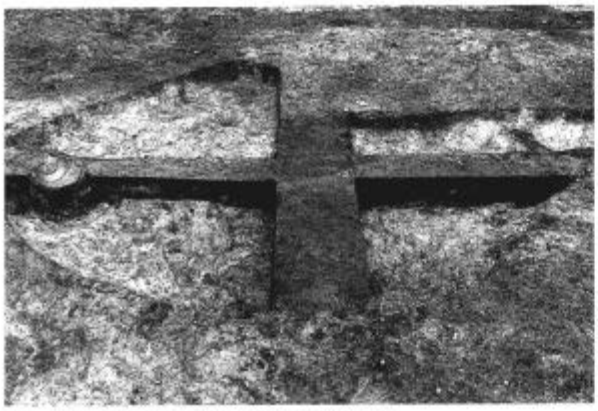
1　SK35土坑（南から）



2　SK37土坑（南から）

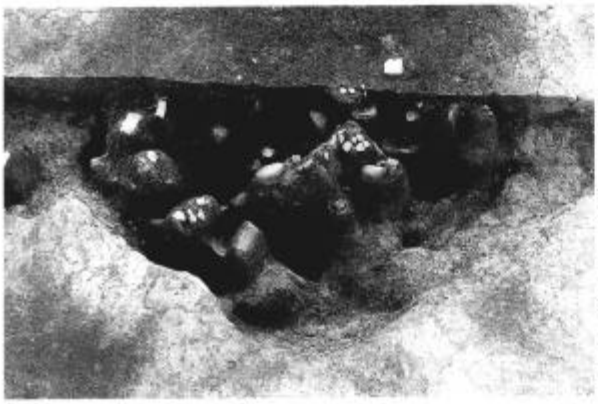
3　SK41・131・132土坑（南から）

4　SK53・118・119・120土坑（南から）



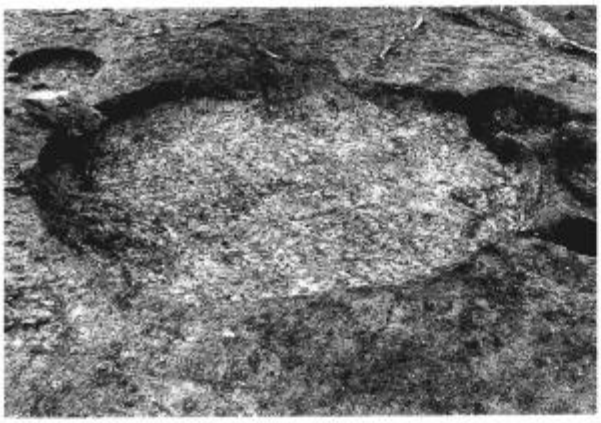
5　SK57土坑断面土層（南東から）

6　SK58土坑（東から）

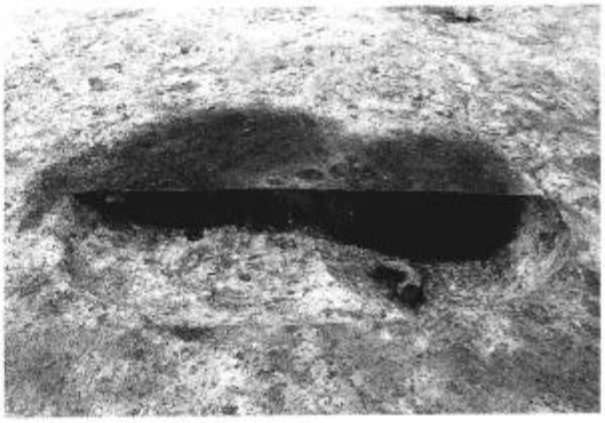


7　SK76土坑遺物出土状況（東から）

8　SK96土坑断面土層（北から）



1　SK103土坑（東から）

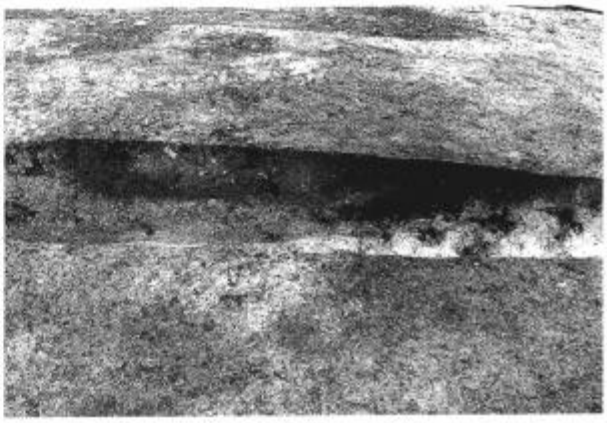


2　SN14焼土遺構（南から）

3　SN15焼土遺構（西から）

4　SN15焼土遺構鉄滓出土状況（南から）

1　SN43焼土遺構（南から）

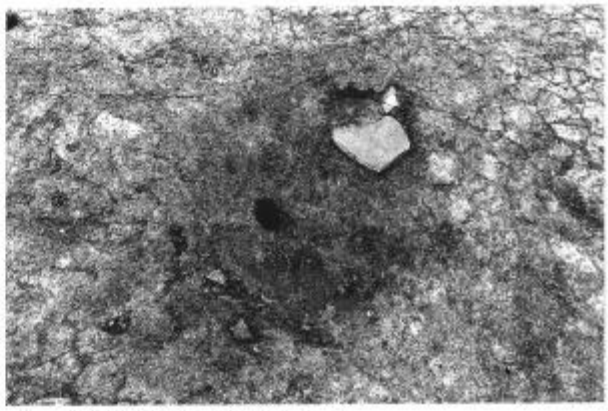


2　SN50焼土遺構（北から）

3　SN71焼土遺構（南から）

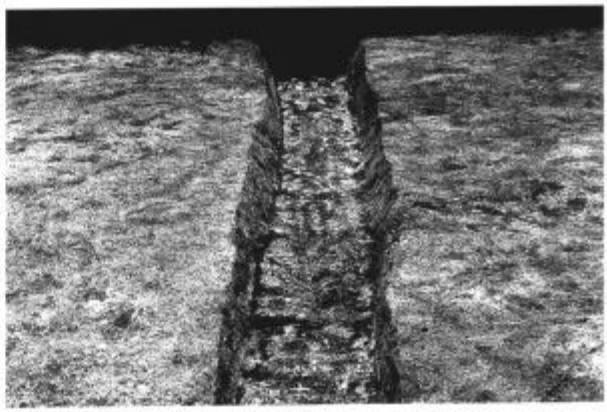
4　SN88焼土遺構（西から）

5　SN108焼土遺構（南から）



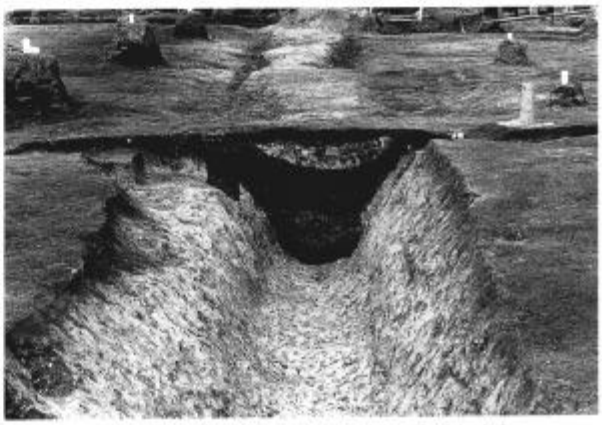
6　SN109焼土遺構（南から）

7　SD02溝跡（東から）

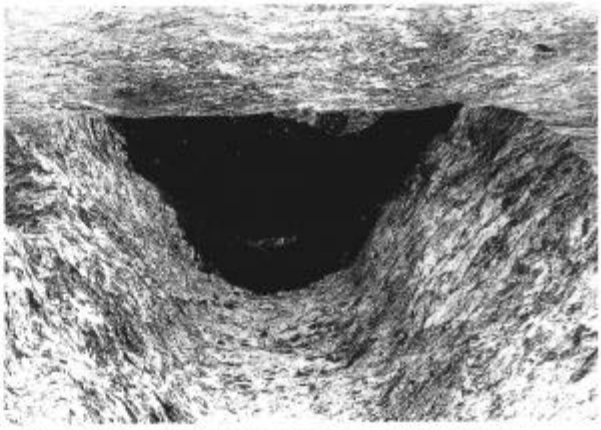


8　SD12溝跡（北から）

1　SD18・133溝跡（西から）



2　SD18・133溝跡断面土層E－F（西から）



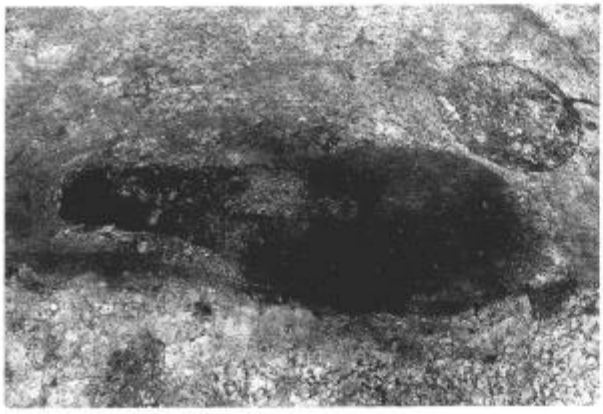
3　SD18・133溝跡断面土層C－D（東から）

4　SD18・133溝跡、SD29溝跡（南西から）

5　SD18・133溝跡、SD29溝跡断面土層（西から）

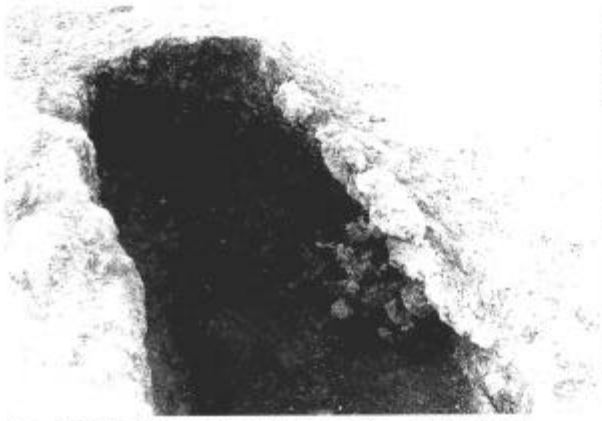
6　SD133溝跡底面の下駄出土状況（南から）

7　SD97溝跡（南から）



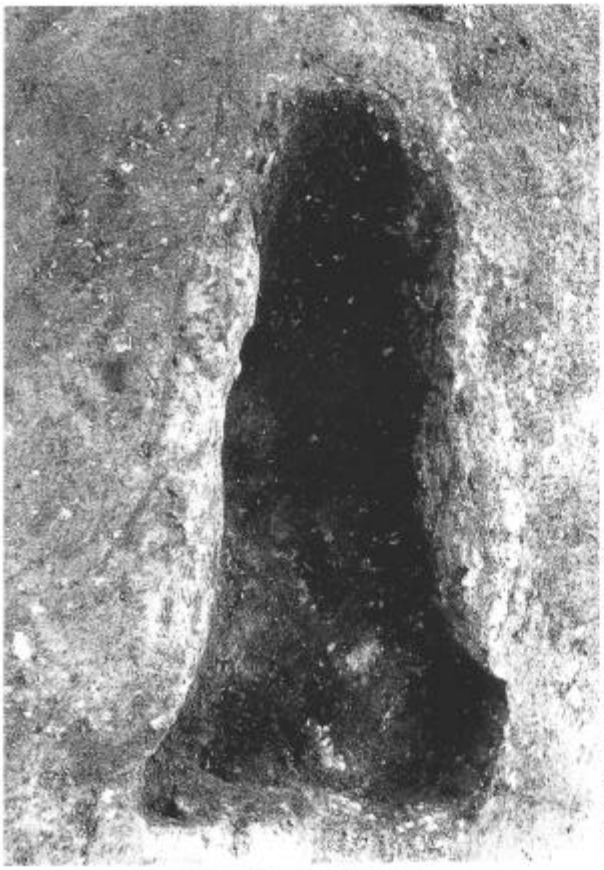
1　SN52製鉄遺構（南から）

2　SN52製鉄遺構炉体部分（東から）



3　SN52製鉄遺構炉壁部分と炉底（南東から）

4　SN52製鉄遺構炉壁に付着した鉄滓（南東から）



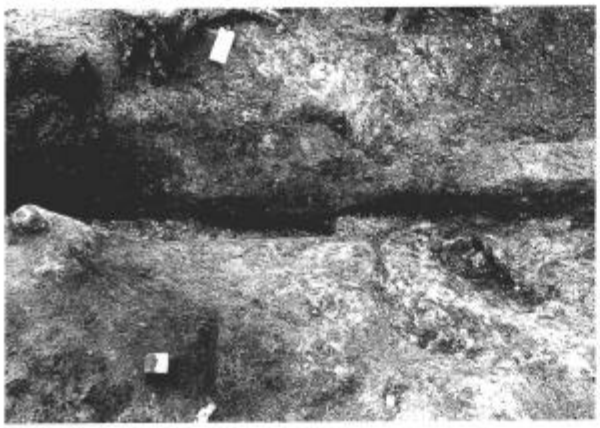
5　SN91製鉄遺構炉体部分（北から）

6　SN91製鉄遺構検出状況（北から）

7　SN91製鉄遺構排滓坑の断面土層（北東から）

1　SN91・SN98製鉄遺構（北から）

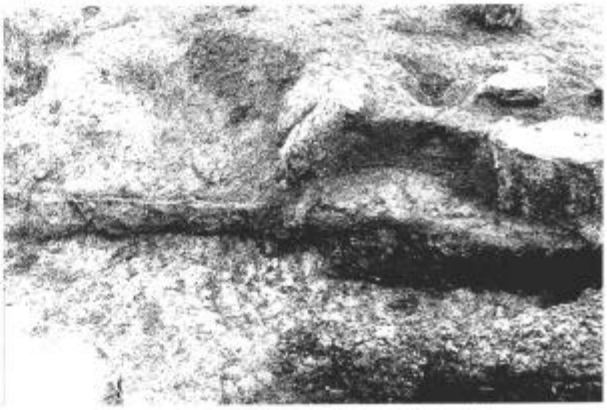
2　SN98製鉄遺構炉底部断面土層（北東から）



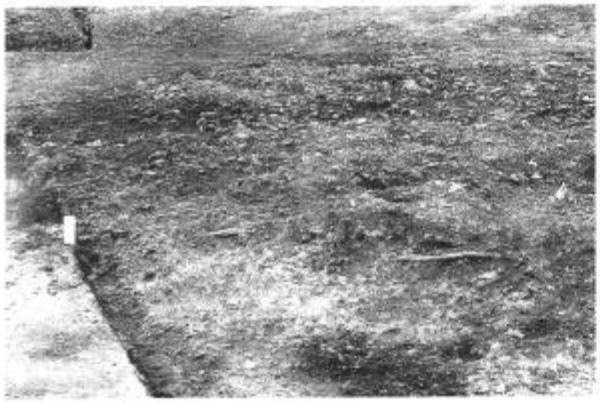
3　SN98・126製鉄遺構断面土層（東から）

4　SN126製鉄遺構排滓坑の断面土層（北東から）

5　SN98・126製鉄遺構完掘状況（北から）



6　SN98・126製鉄遺構炉壁部分（西から）



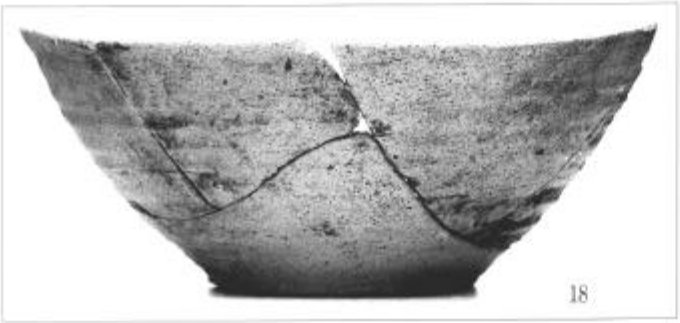
7　SX33鉄滓捨場（南西から）

8　SX33鉄滓捨場断面土層（北西から）

2

9

11


18

16

13

25

24

29

31

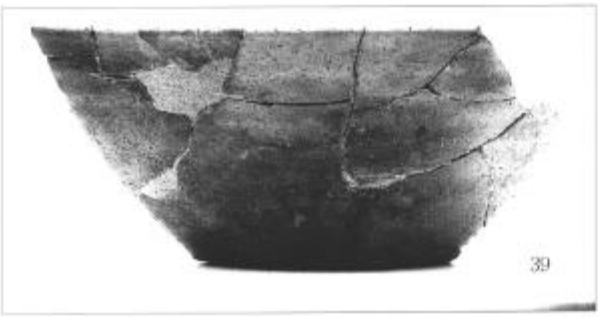
33

45

42

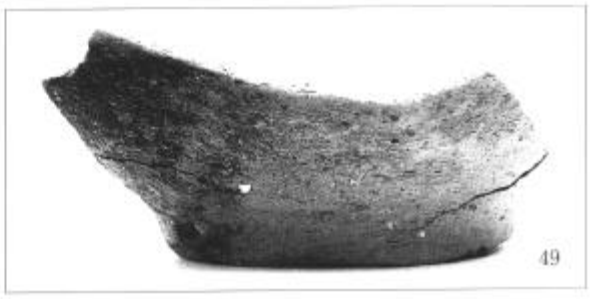
38

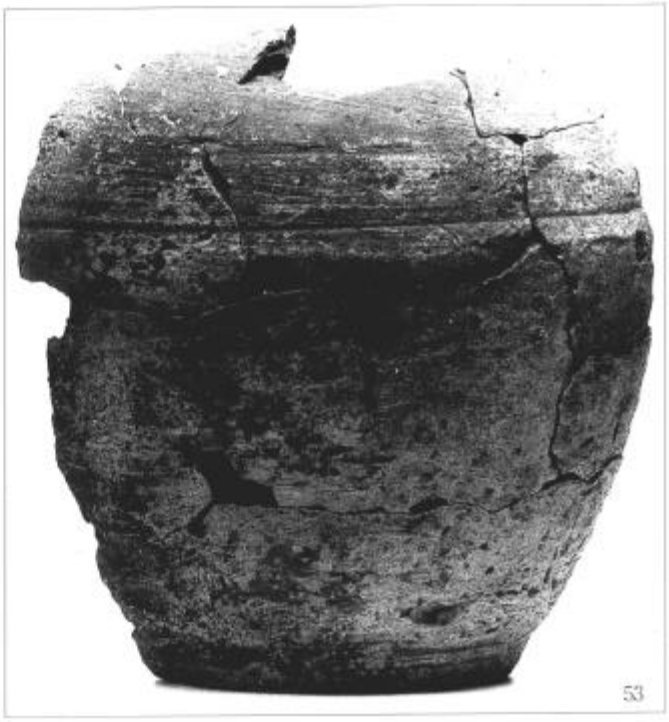
40

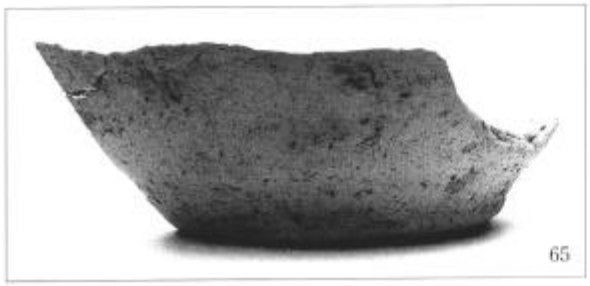

39

40

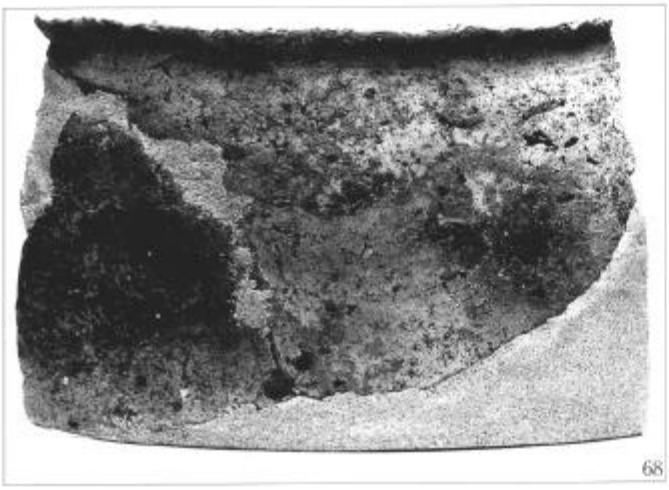
遺構内出土遺物（1）

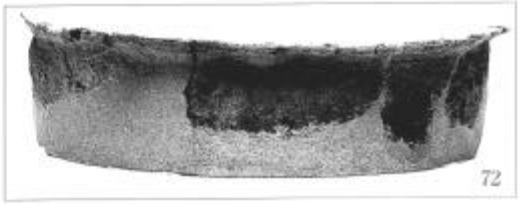






遺構内出土遺物（2）


68

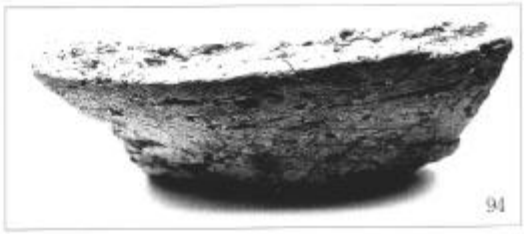

72

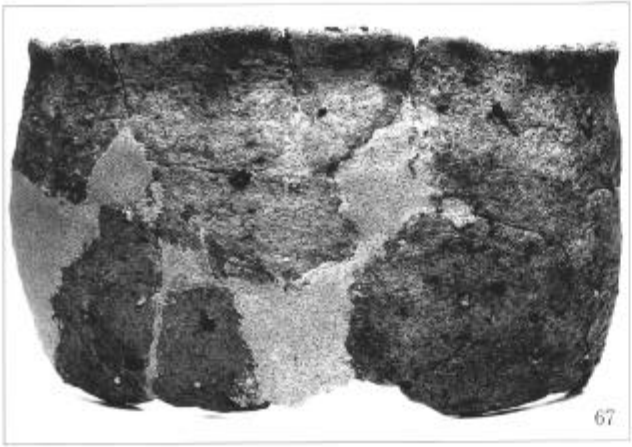
91

89

75

98


94

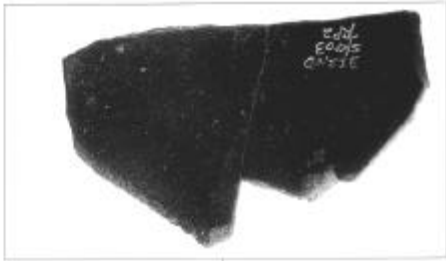

67

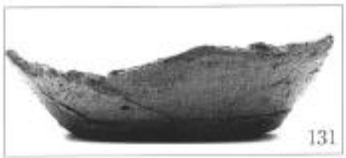
108

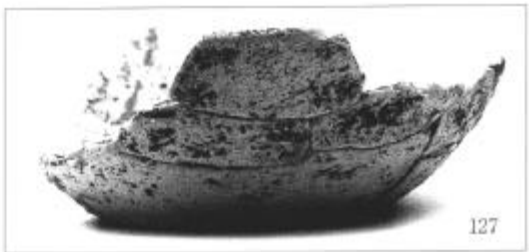
99

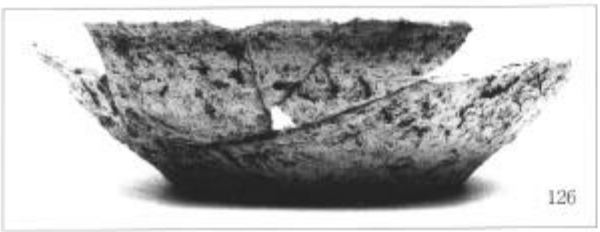
104

遺構内出土遺物（3）



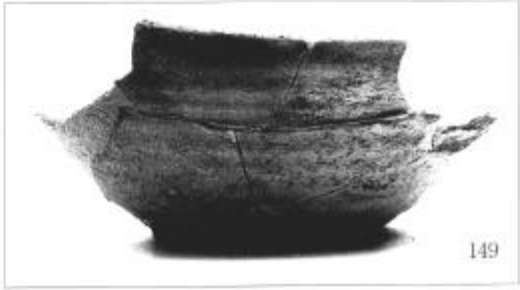


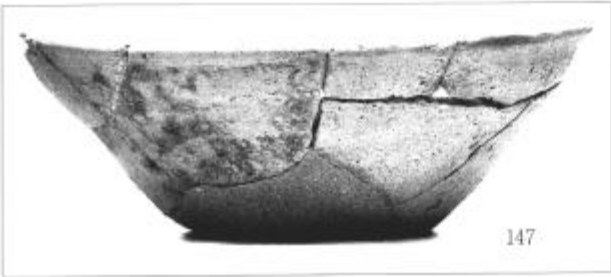




遺構内出土遺物（4）

148


149

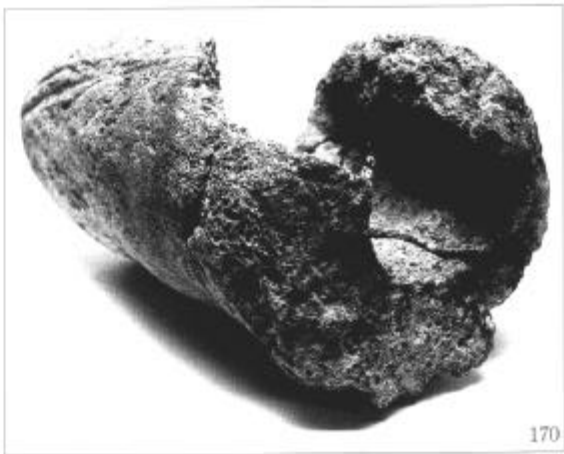

147

150

152

151

154

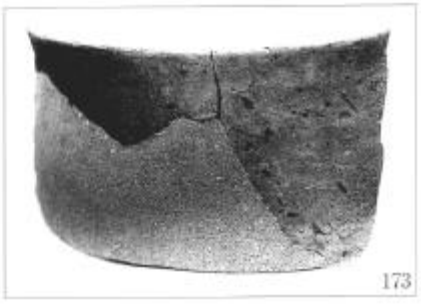

170

175

174

遺構内出土遺物（5）

167


173

176

187

193

191

186

192

190

200

209

197

205

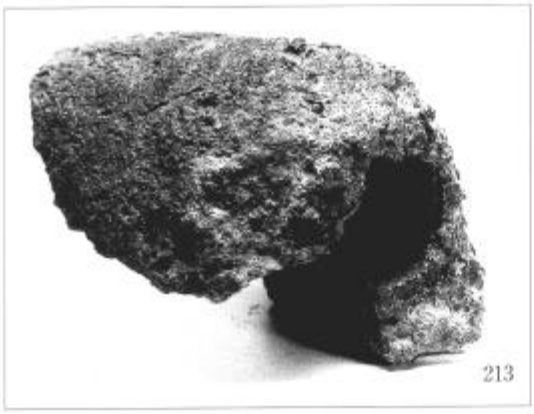
208

遺構内出土遺物（6）

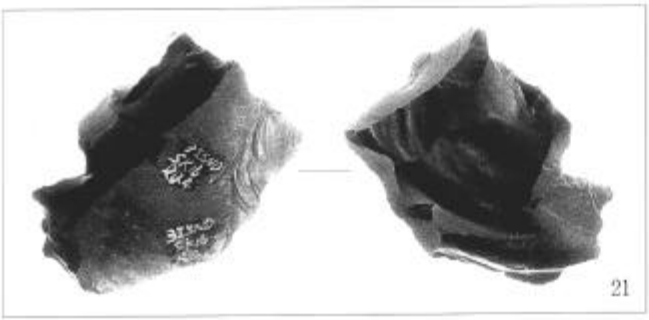
212

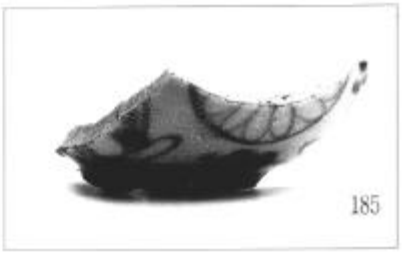
219

215


213

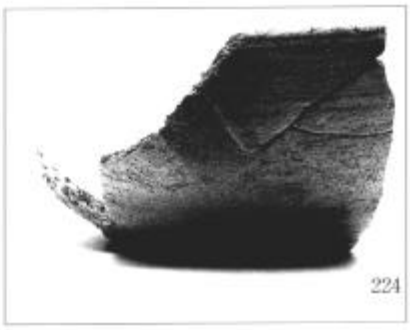
220


21


185

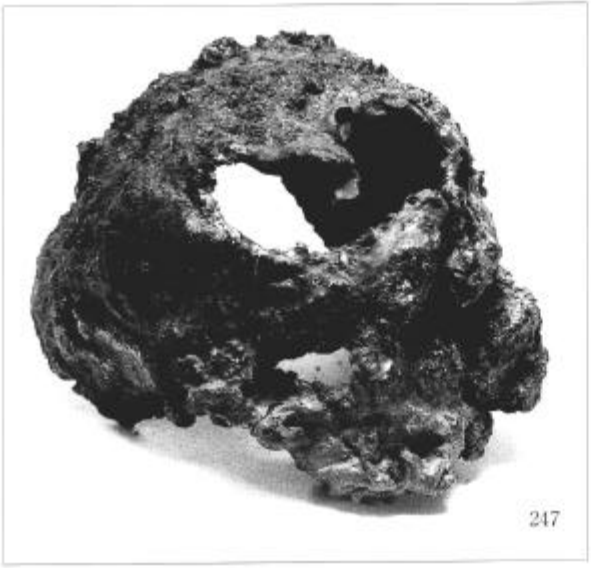
遺構内出土遺物（7）

223


224

241

229

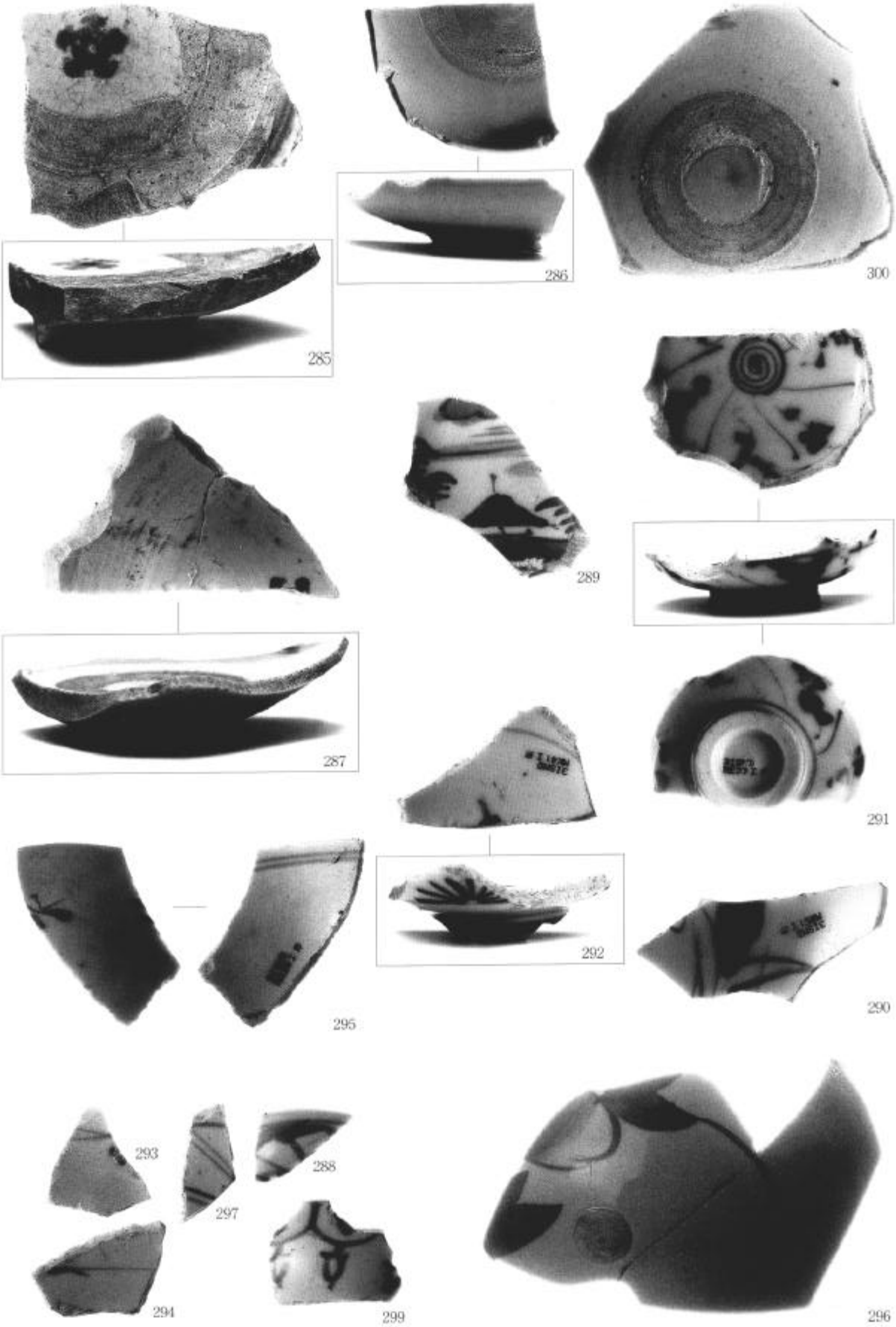

247

228

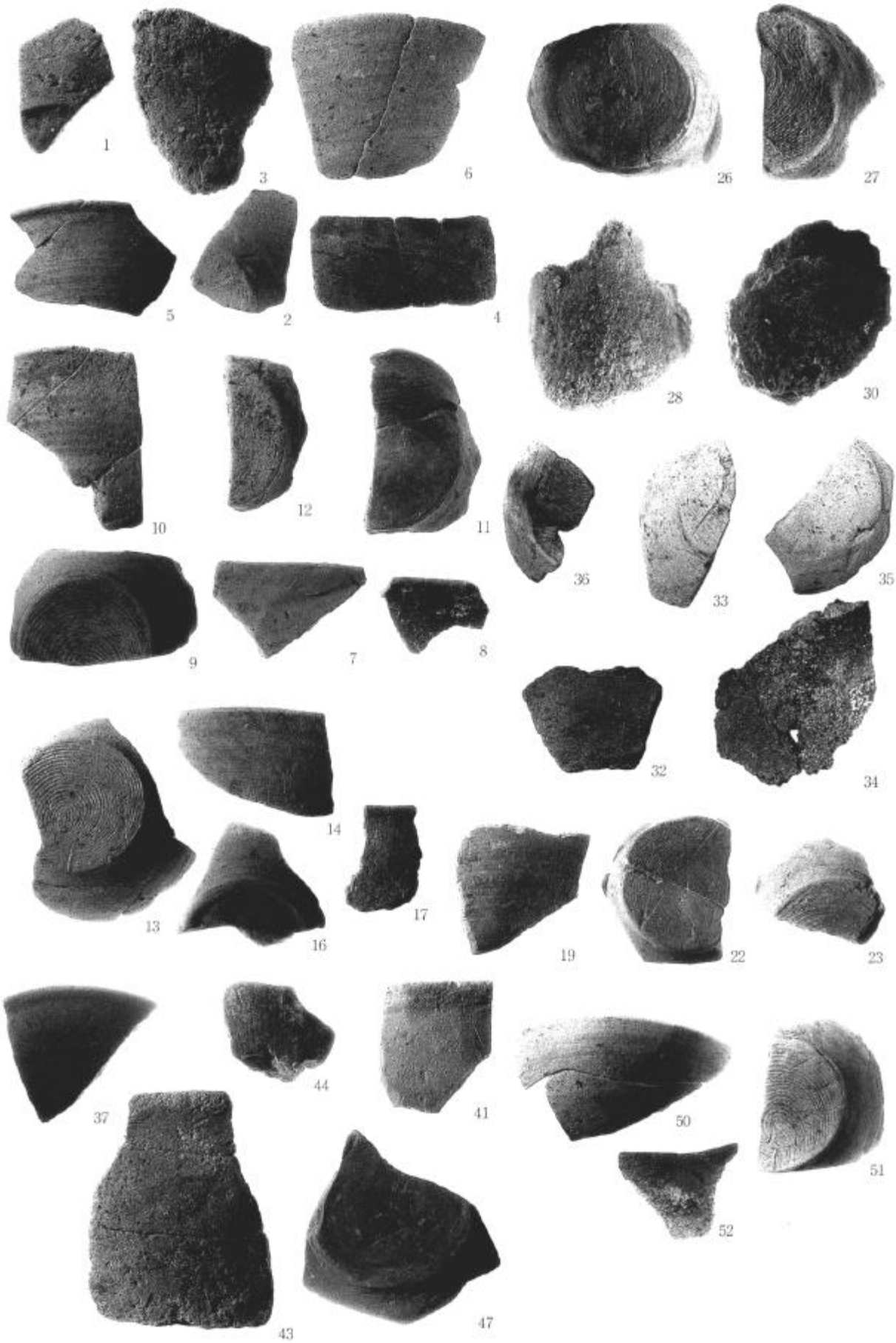
248

298

遺構外出土遺物（1）

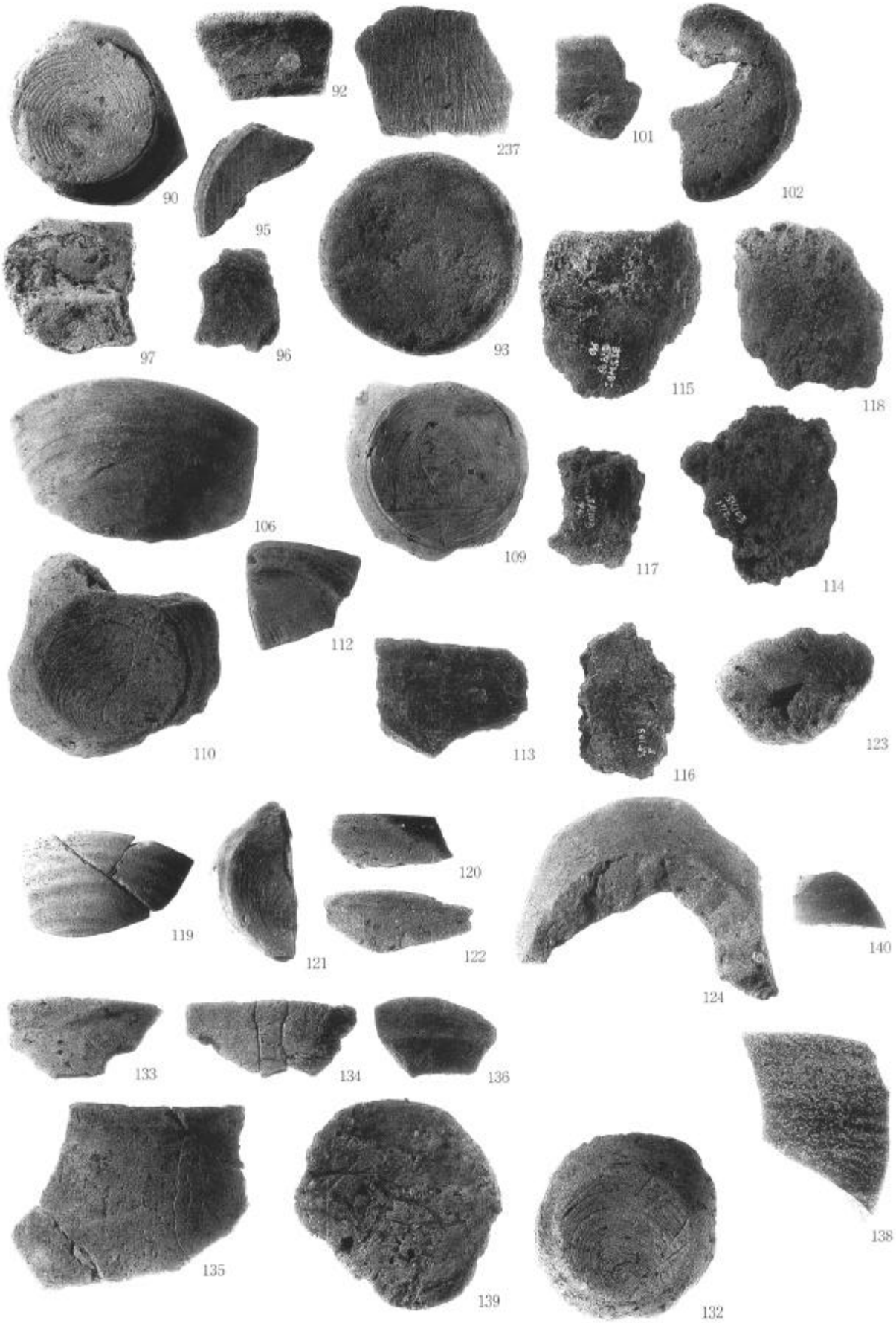


遺構外出土遺物（2）

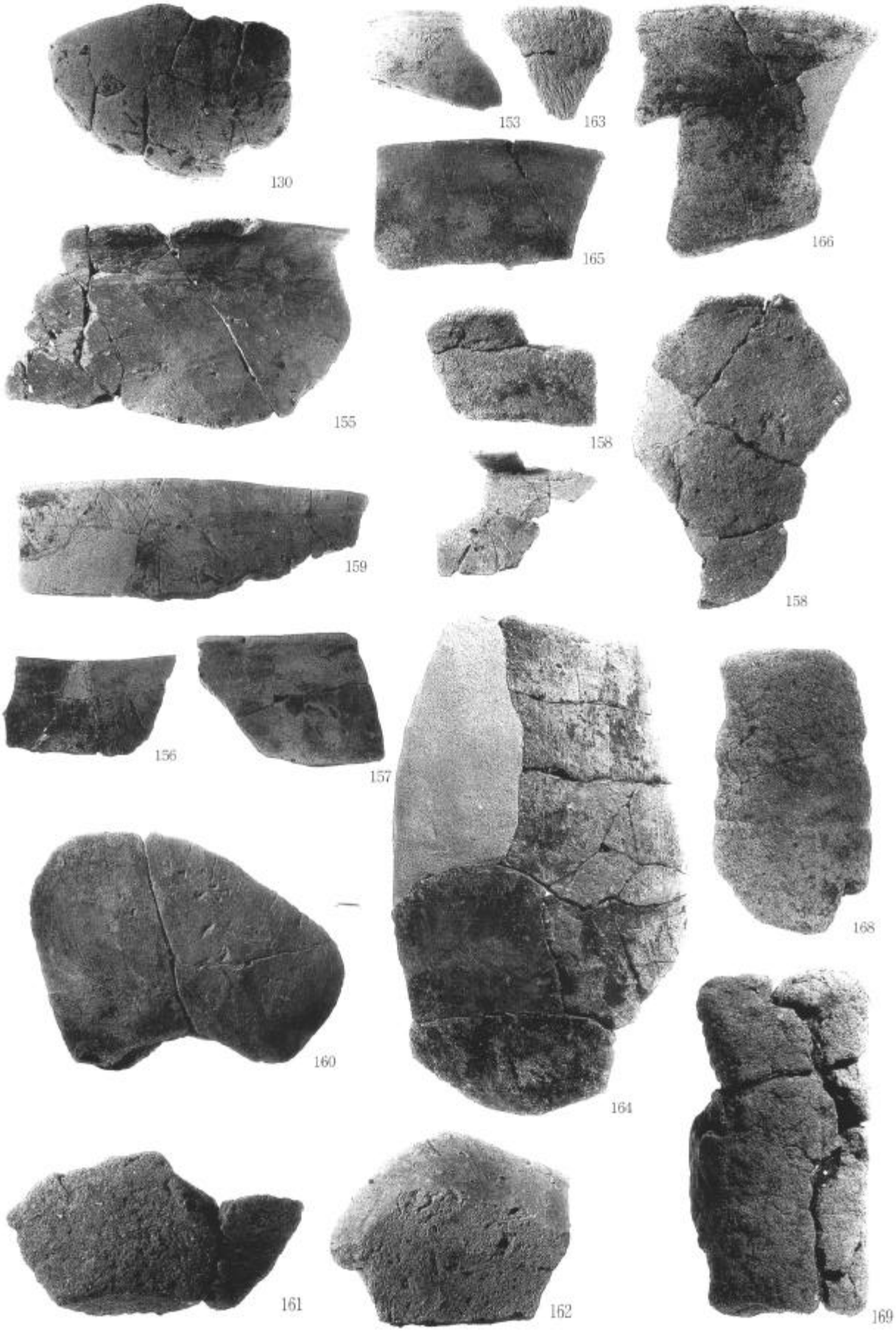

1
3
6
26
27
5
2
4
28
30
10
12
11
36
33
35
9
7
8
32
34
13
14
16
17
19
22
23
37
44
41
50
51
52
43
47

遺構内出土遺物（8）

遺構内出土遺物（9）


90
92
237
101
102
95
97
96
93
115
118
106
109
117
114
112
110
113
116
123
119
121
120
122
124
140
133
134
136
135
139
132
138

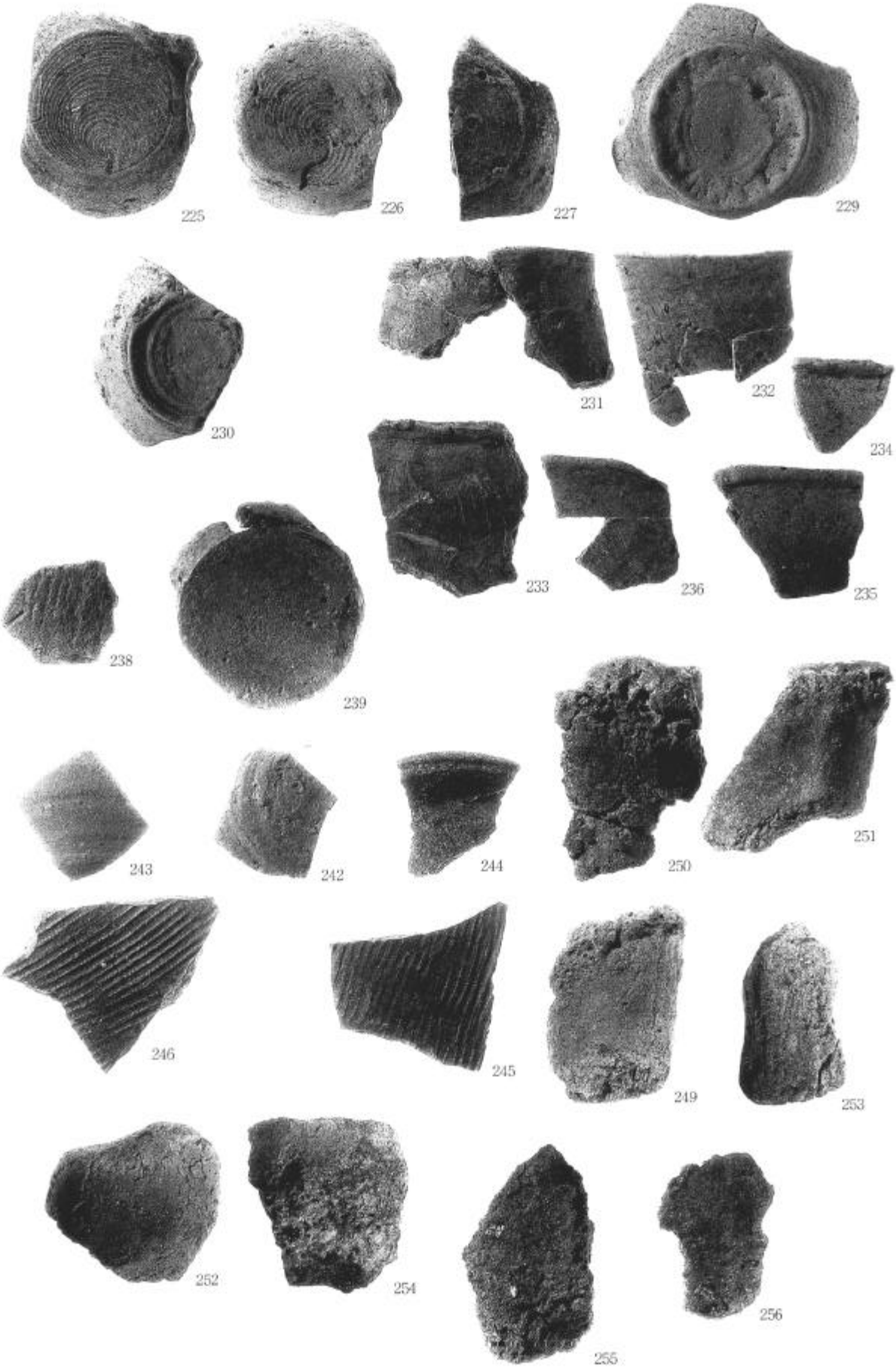
遺構内出土遺物（10）


130
153
163
166
165
155
158
158
159
156
157
168
160
164
161
162
169

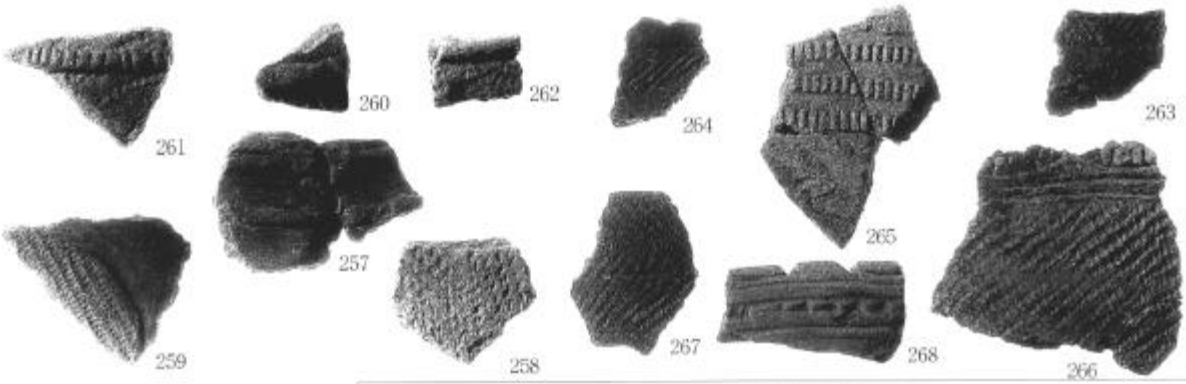
遺構内出土遺物（11）

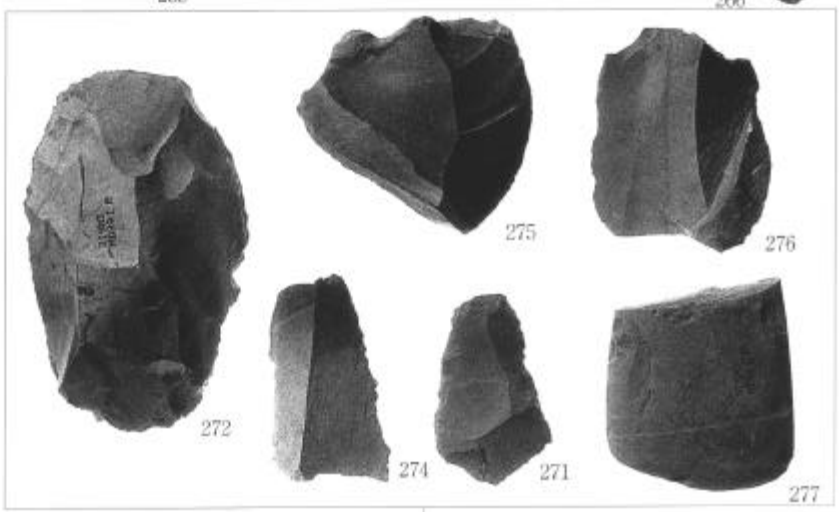
171
172
178
180
182
177
179
199
198
181
202
196
189
188
204
210
207
206
208
203
209
217
218
222
184
216
214

遺構内出土遺物（12）

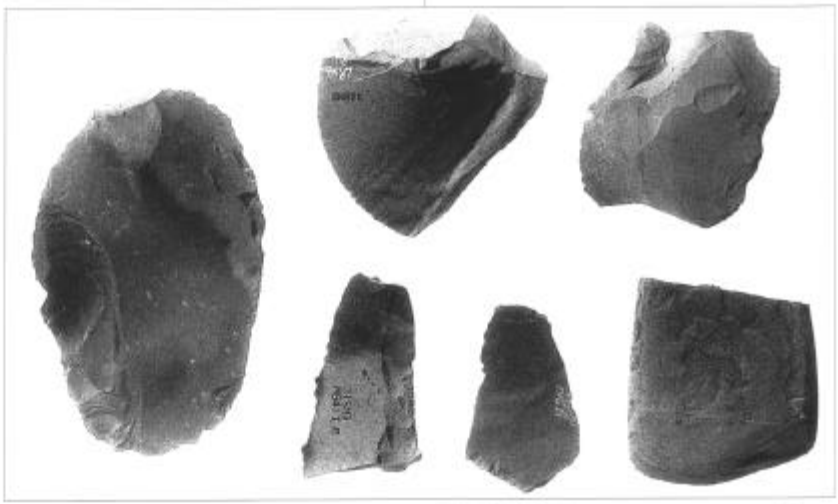

225
226
227
229
230
231
232
234
233
236
235
238
239
243
242
244
250
251
246
245
249
253
252
254
255
256

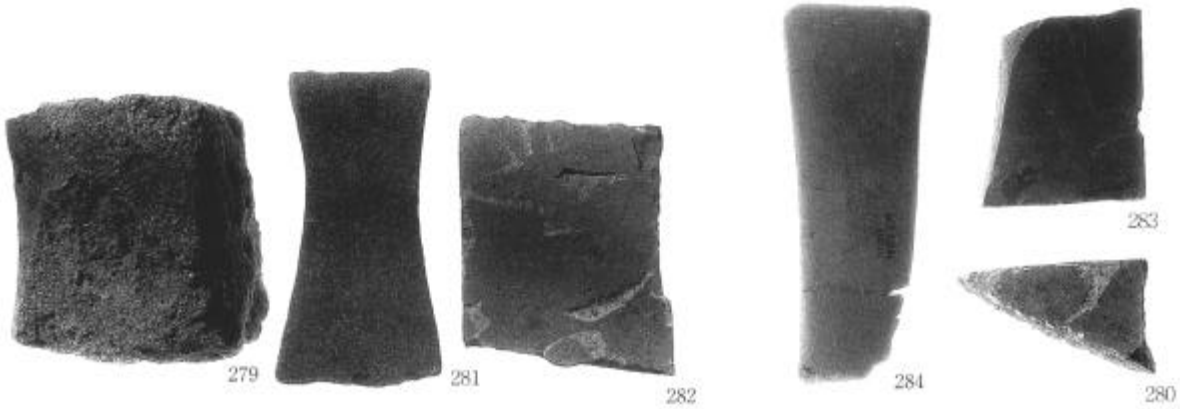
遺構外出土遺物（3）


261
260
262
264
263
257
265
259
258
267
268
266

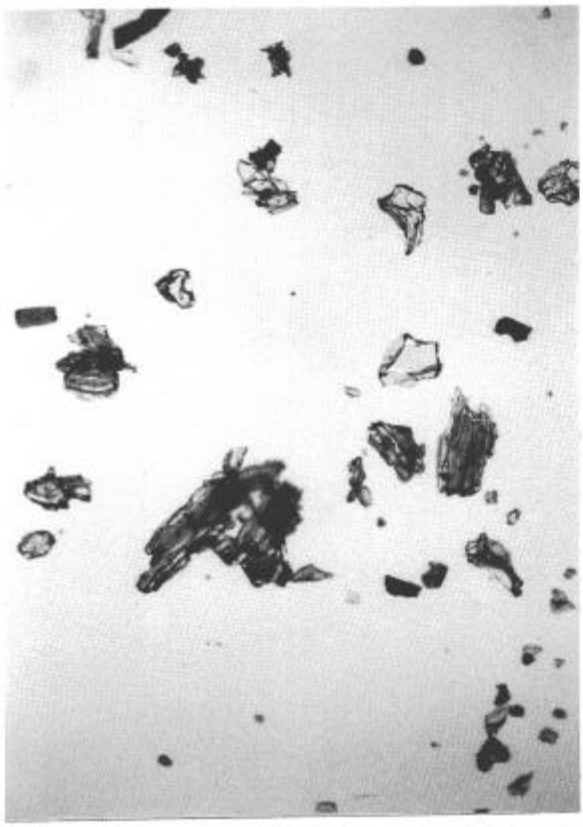

275
276
272
274
271
277

269
270
273



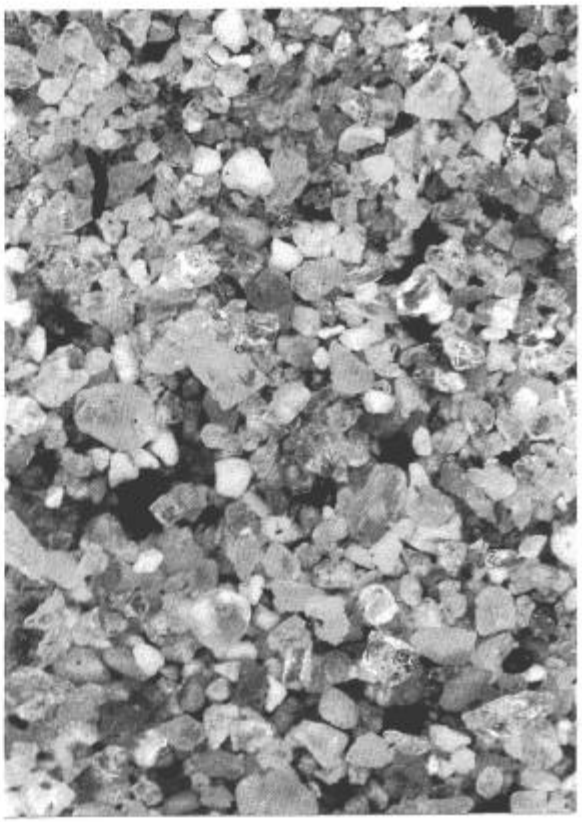

279
281
282
284
283
280

遺構外出土遺物（4）



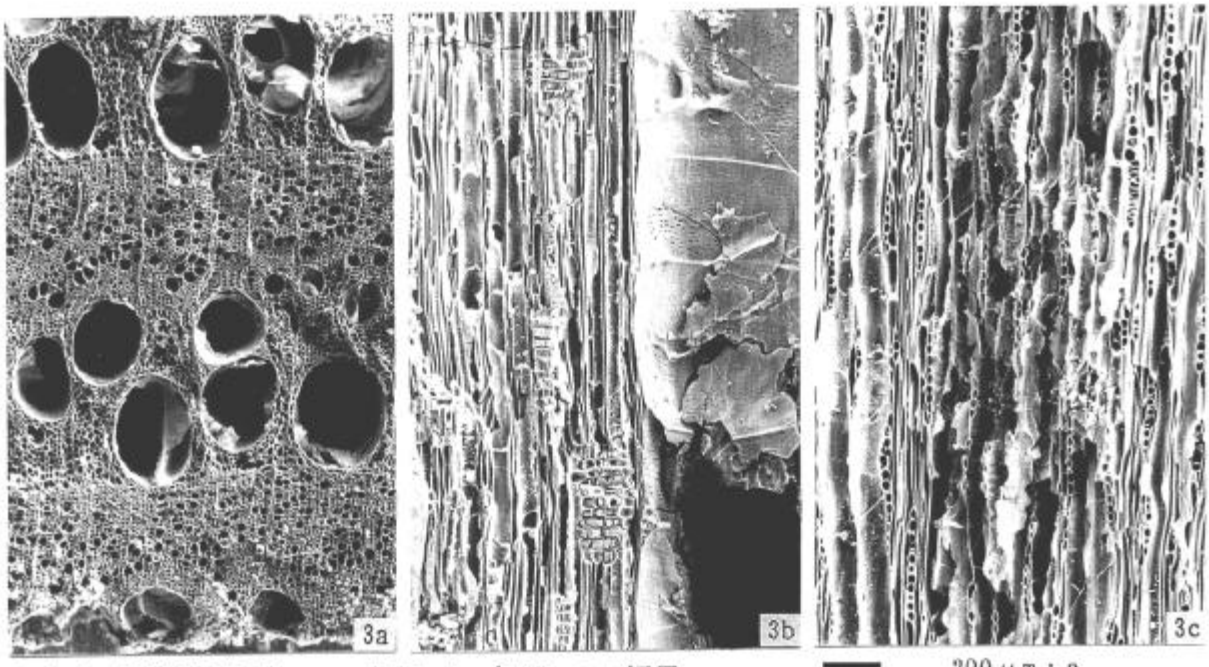
1. Ｔｏ－ａ火山ガラス（SK-96：試料番号3）

0.5mm



2. 砂分の状況（SE-102：試料番号4）

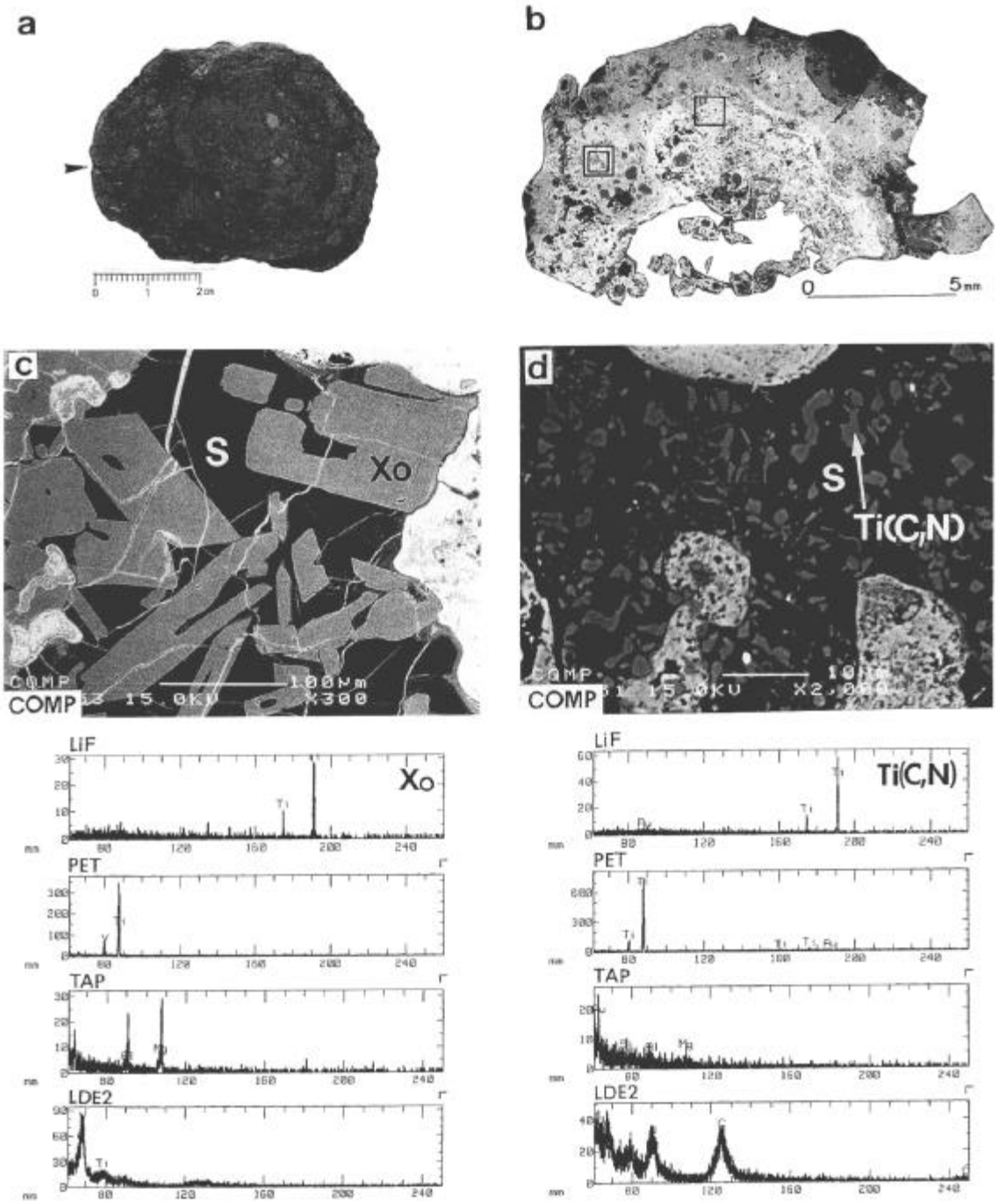
2.0mm



3. クリ（試料番号１） a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

火山ガラス・炭化材の顕微鏡写真



No.8 鉄滓の外観と組織観察結果

a；外観、矢印は資料切断位置

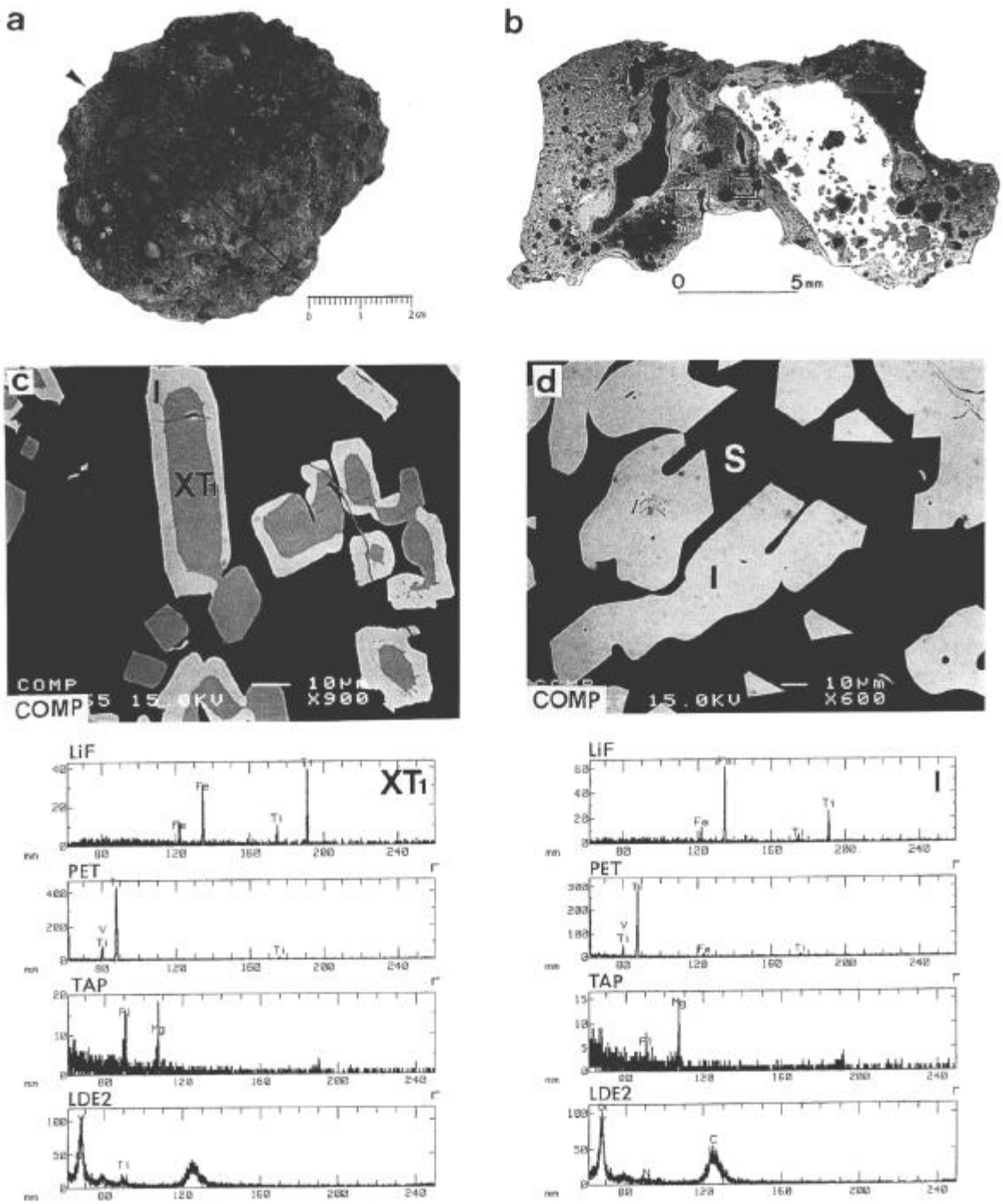
b；マクロ組織

c；bの２重枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像（COMP）

　x_o；主として酸化チタンを主成分とする化合物

　s；ガラス質けい酸塩

d；bの枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像



No.12 鉄滓の外観と組織観察結果（その１）

a；外観、矢印は資料切断位置

b；マクロ組織

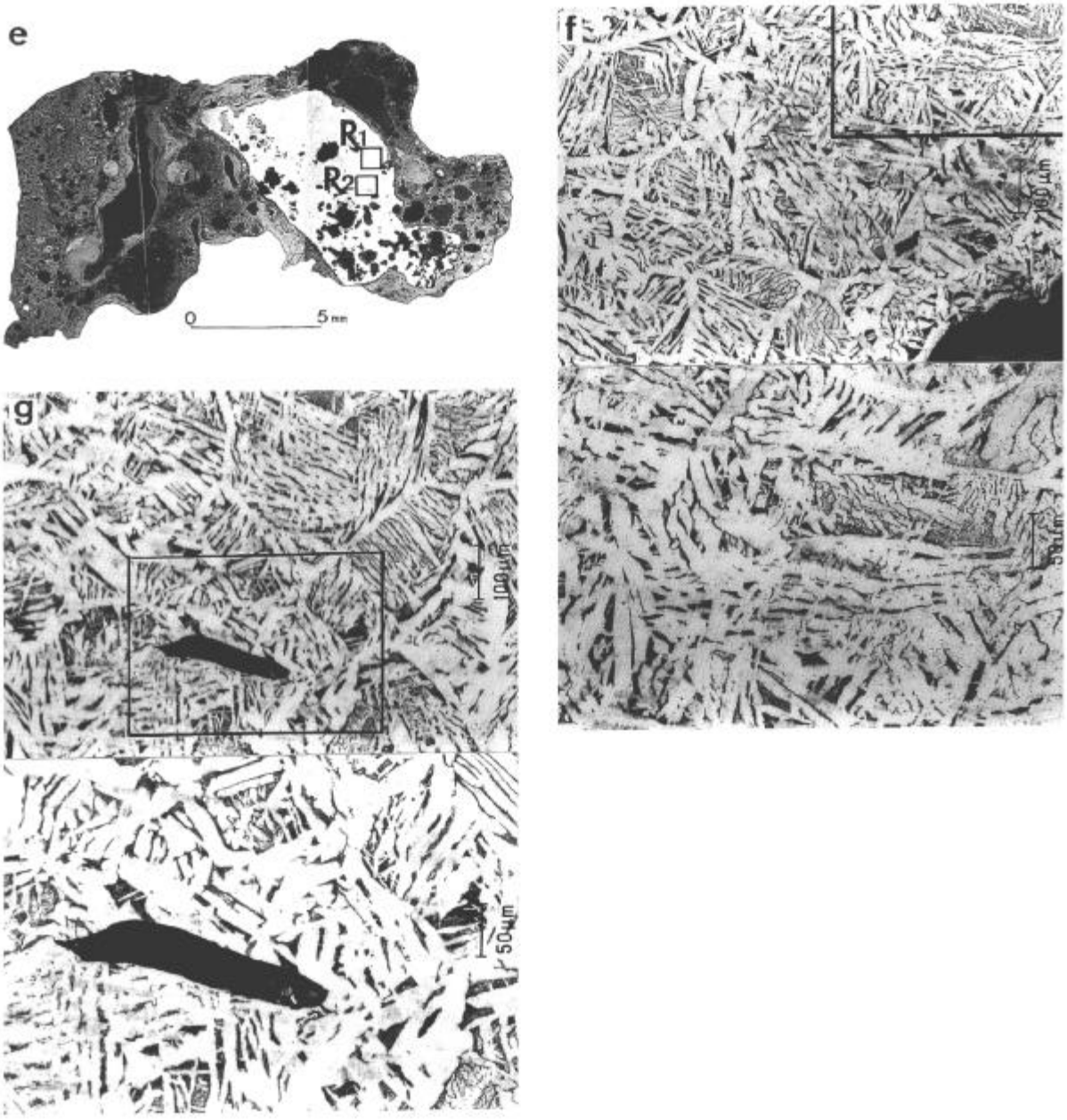
c；bの２重枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像（COMP）

d；bの枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像

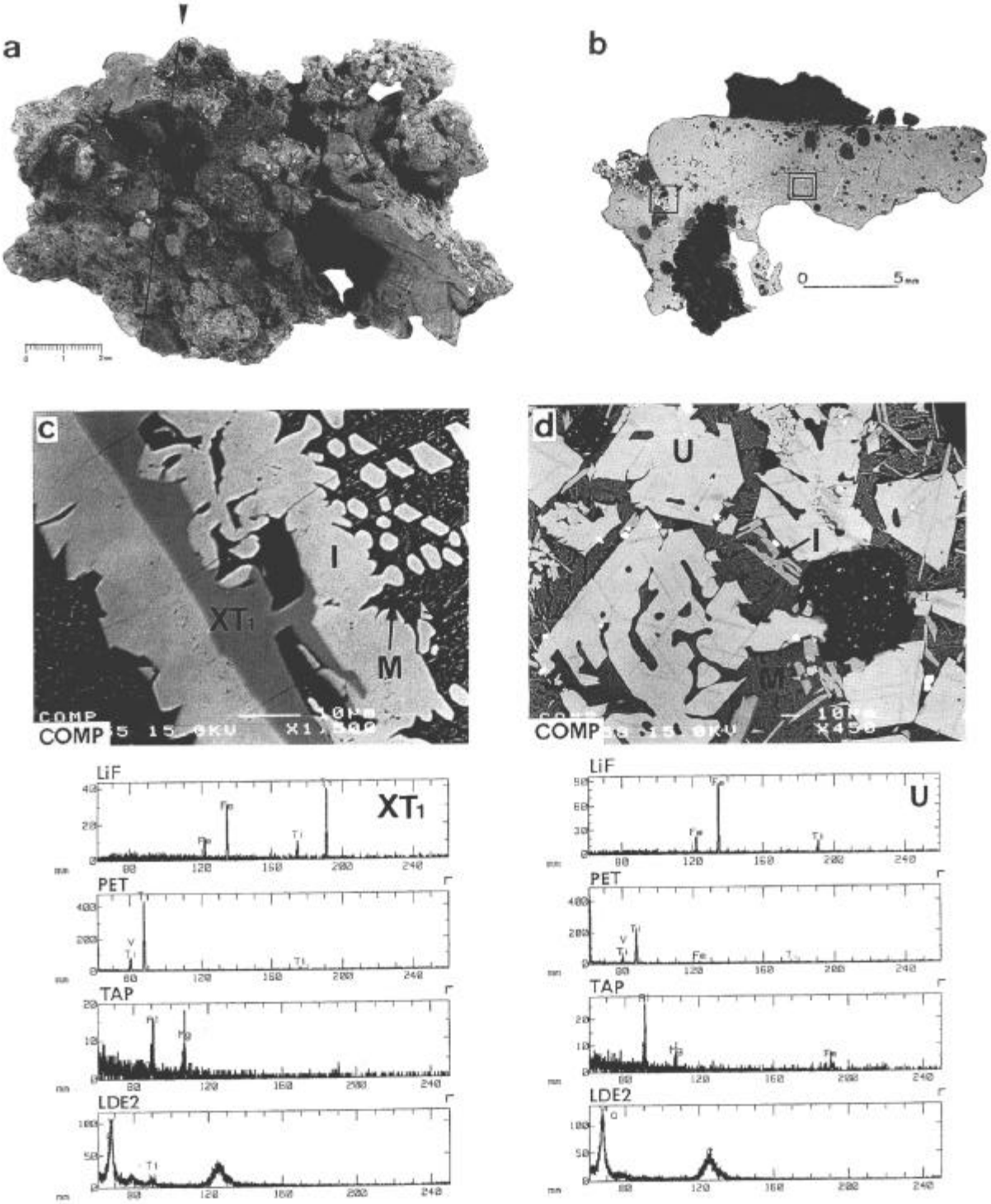
　I；イルメナイト［(Fe,Mg) O・TiO_2］

　XT_i；Mg、Al分を固溶しイルメナイトよりもTi含有量の高い鉄チタン化合物

　S；ガラス質けい酸塩



No.12 鉄滓の外観と組織観察結果（その２）
e：メタル部分のナイタールによるマクロエッチング組織
f：eの領域R_1のミクロエッチング組織
　下の写真は上の枠で囲んだ内部
g：eの領域R_2のミクロエッチング組織
　下の写真は上の枠で囲んだ内部



No.13 鉄滓の外観と組織観察結果（その１）

ａ；外観、矢印は資料切断位置

ｂ；マクロ組織

ｃ；bの２重枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像（COMP）

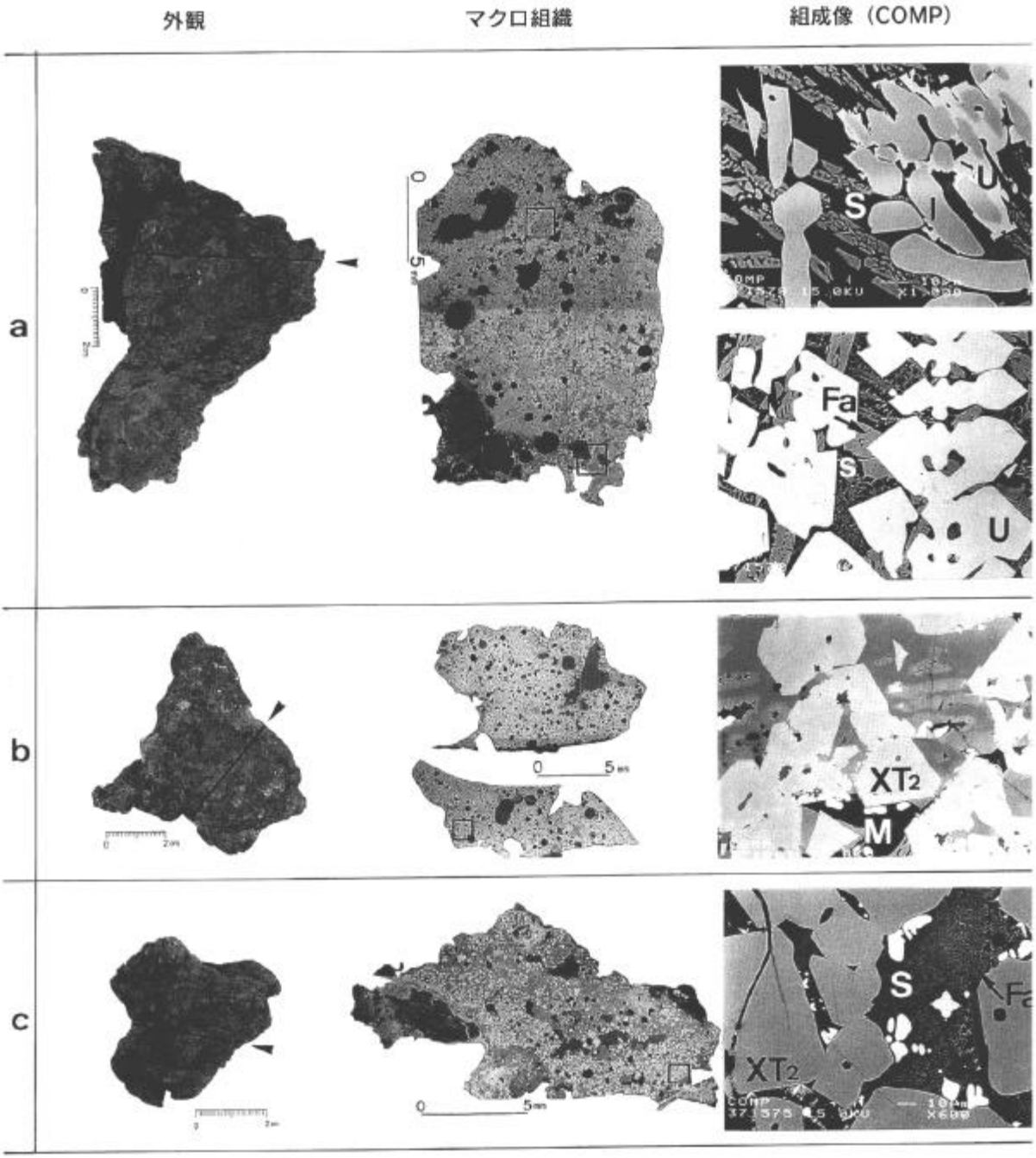
ｄ；bの枠で囲んだ領域内部のEPMAによる組成像

Ｉ；イルメナイト［(Fe,Mg) O・TiO_2］

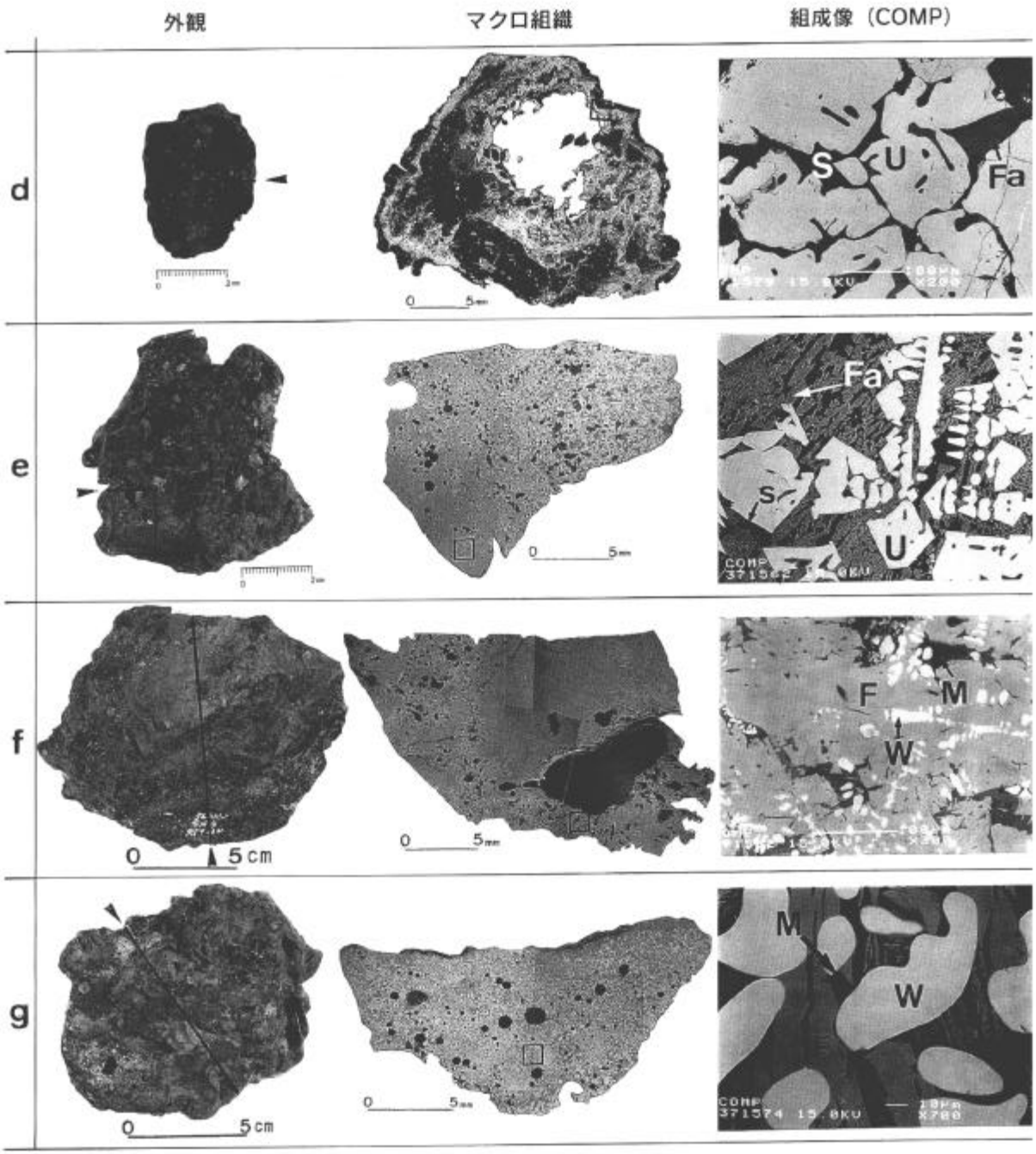
Ｕ；ウルボスピネル［2 (Fe,Mg) O・TiO_2］

XT_1；Mg、Al分を固溶しイルメナイトよりもTi含有量の高い鉄チタン化合物

Ｍ；マトリックス



鉄滓の外観と組織観察結果（その１）
a；No.1鉄滓　b；No.5鉄滓　c；No.9鉄滓
外観の矢印は資料切断位置
マクロ組織の枠で囲んだ領域はEPMAによる分析箇所
W；ウスタイト（化学理論組成FeO）
F；FeO - MgO - SiO_2）［2（Fe,Mg）O・SiO_2と同定できたものをFaと表記］
XT_2；Mg、Al分を固溶しイルメナイトよりもTi含有量が低い鉄チタン化合物



鉄滓の外観と組織観察結果（その２）

d；No.10鉄滓　e；No.11鉄滓　f；No.15鉄滓　g；No.17鉄滓

外観の矢印は資料切断位置

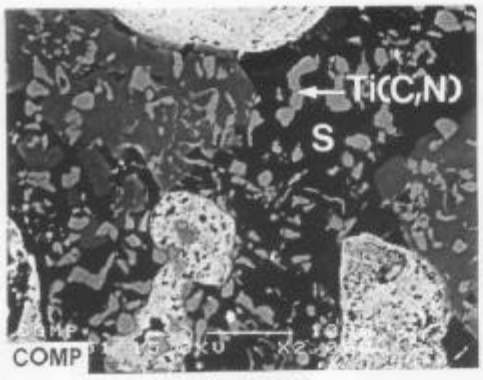
マクロ組織の枠で囲んだ領域はEPMAによる分析箇所

W；ウスタイト（化学理論組成FeO）

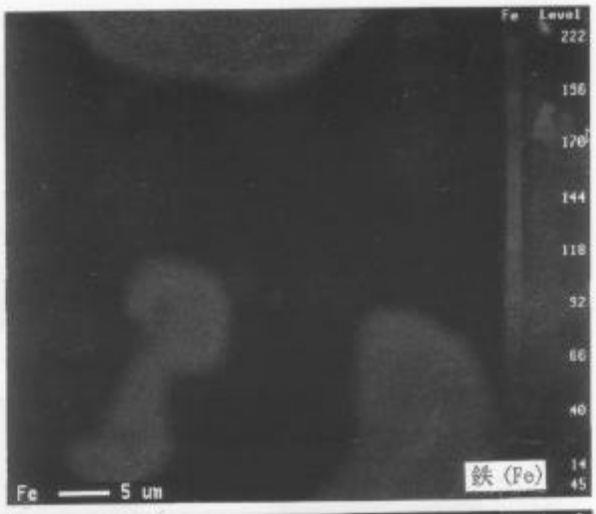
F；FeO - MgO - SiO_2）［2（Fe,Mg）O・SiO_2と同定できたものをFaと表記］

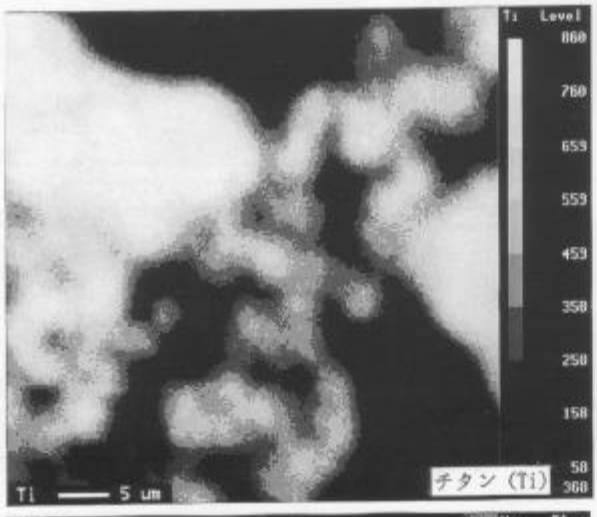
XT_2；Mg、Al分を固溶しイルメナイトよりもTi含有量が低い鉄チタン化合物

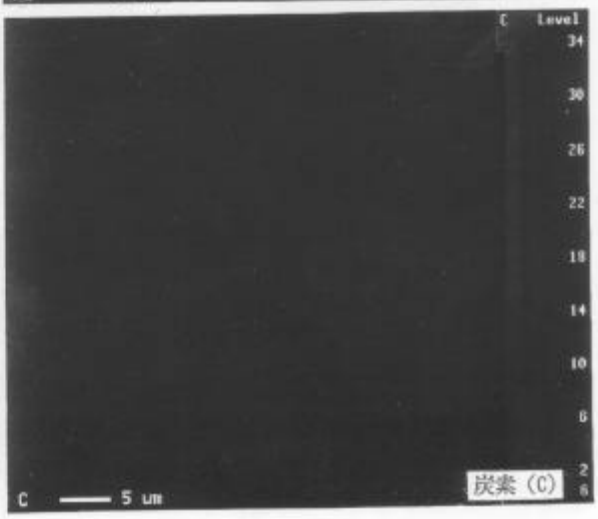
M；マトリックス

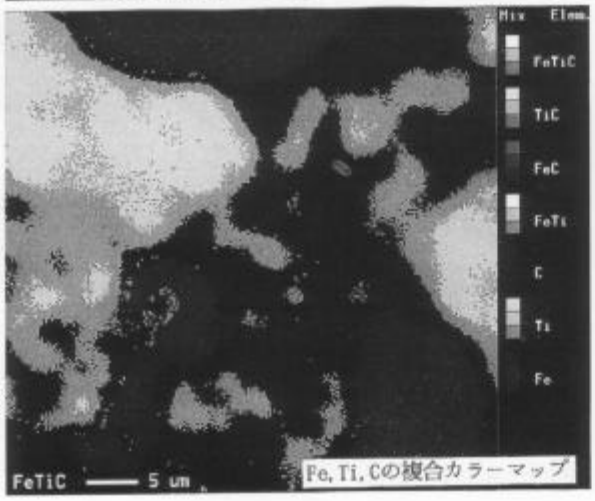


組成像（COMP）

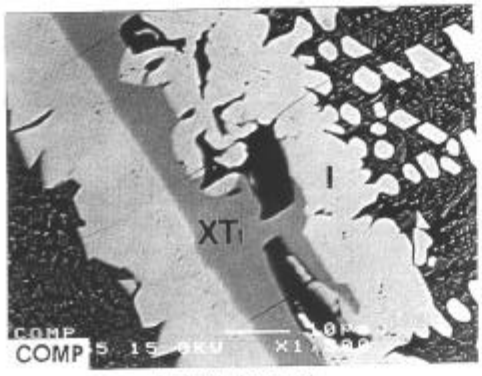




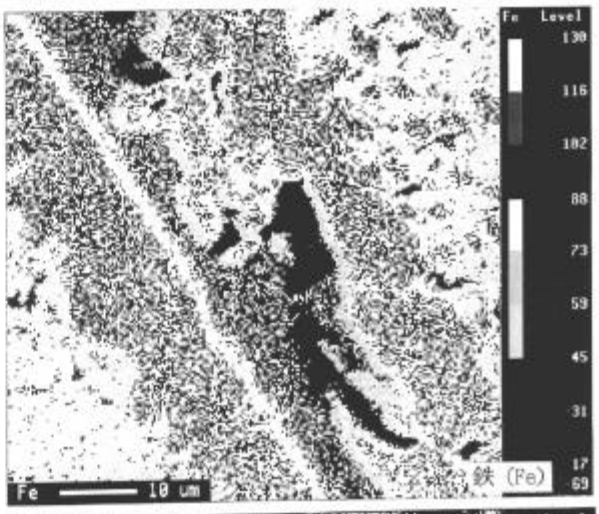


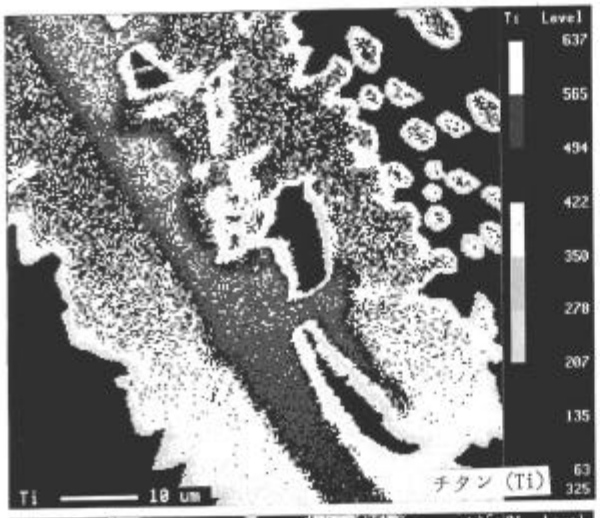


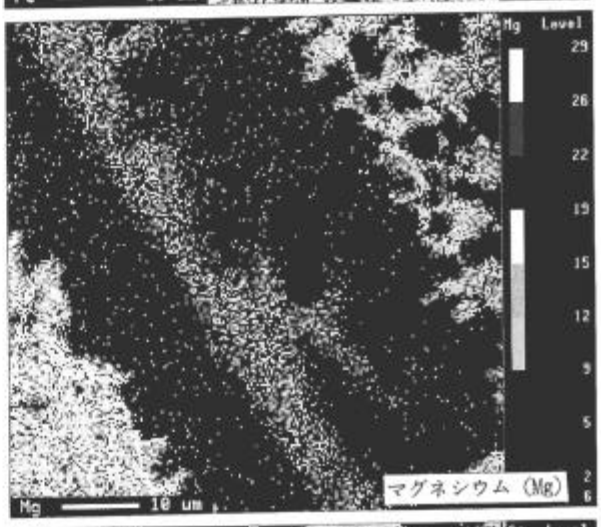
No.8鉄滓（図1ａ）のEPMAによる組成像（COMP）と含有される元素濃度分布のカラーマップ

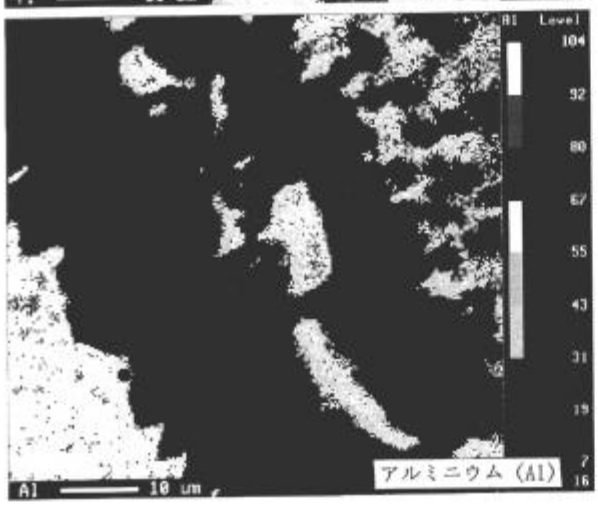


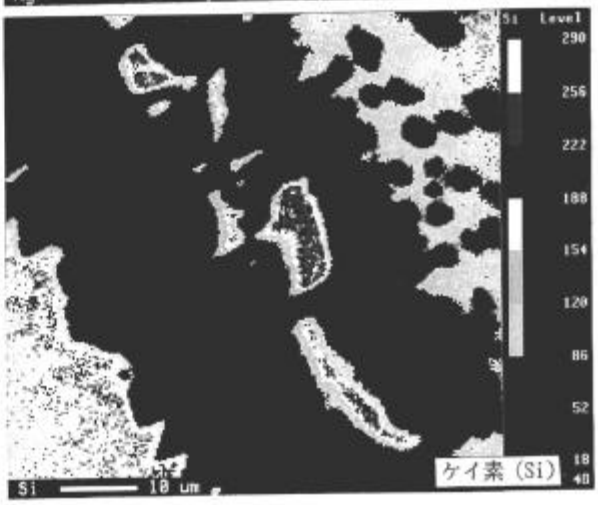
組成像（COMP）











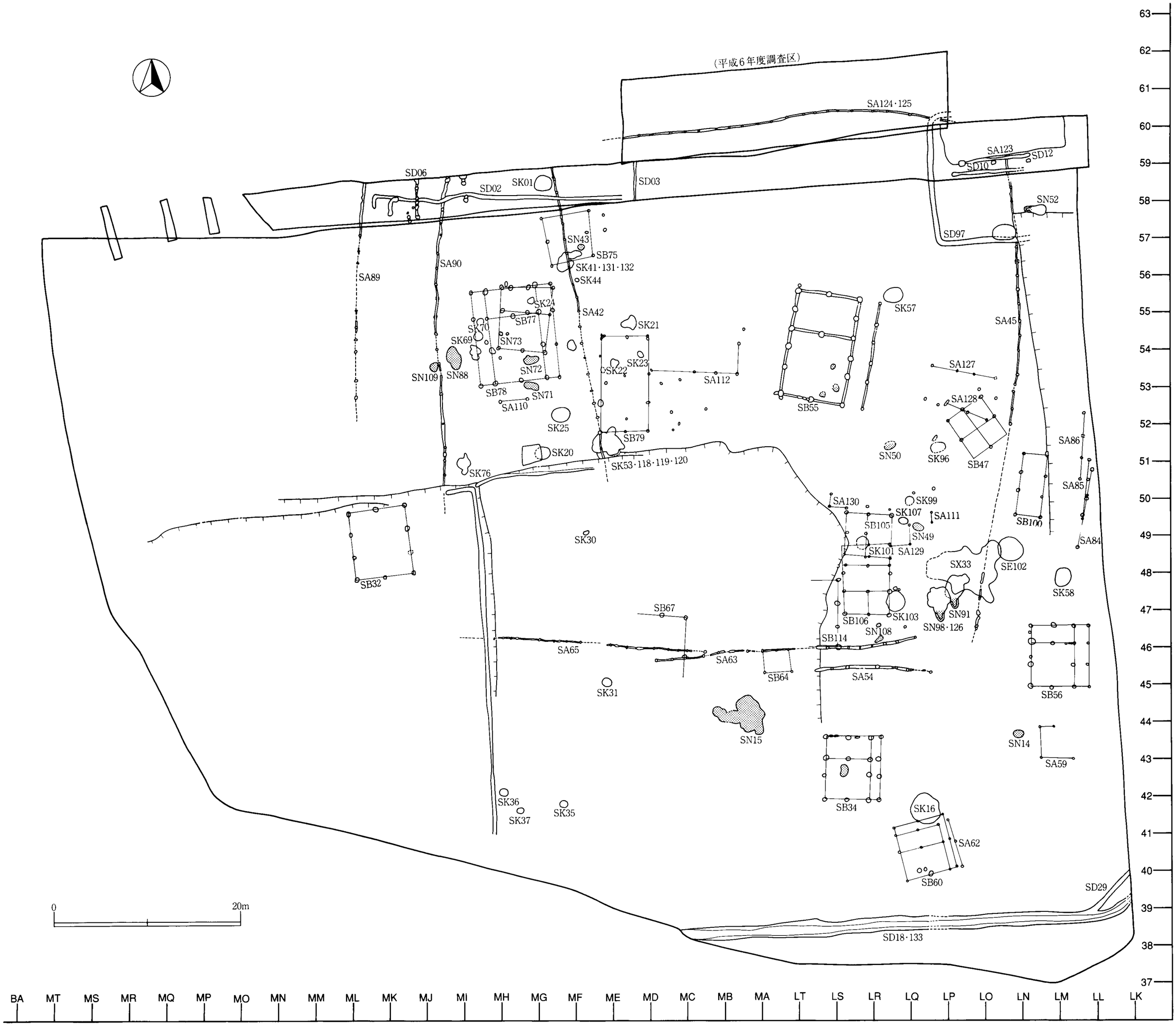
No.13鉄滓（図3ｃ）の組成像（COMP）と含有される元素濃度分布のEPMAによるカラーマップ

報告書抄録

ふりがな	いずみさわなかのだいいせき
書名	泉沢中台遺跡
副書名	県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第276集
編著者名	谷地　薫
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187－69－3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010-8580 秋田市山王四丁目１番２号　TEL 0188－60－3193
発行年月日	西暦　1998年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いずみさわなかのだい 泉沢中台	あきたけんやまもとぐん 秋田県山本郡 ことおかまちかどあざ 琴丘町鹿渡字 いずみさわなかのだい 泉沢中台	53341	——	40度 4分 20秒	140度 5分 8秒	19940801～ 19940812 19950420～ 19951102	400 8,500	ほ場整備（県営ほ場整備事業琴丘地区）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
泉沢中台	集落跡 製鉄遺跡	平安時代	掘立柱建物跡16棟 板塀跡　9条 柱列　15条 井戸跡　1基 土坑　31基 焼土遺構　11基 製鉄遺構　4基 鉄滓捨場　1箇所	土師器（坏、高台付坏、甕、鍋） 須恵器（坏、皿、壺、甕） フイゴの羽口 鉄滓 鉄塊系遺物 （大コンテナで221箱）	平安時代の掘立柱建物で構成される集落跡。間仕切りや廂のある建物跡が計８棟。その中には主殿と考えらる大規模なものも２棟含まれる。 掘立柱建物跡を囲んで東西、南北には、板状柱と板材を立てた板塀跡がめぐる。 製鉄炉のうち３基は重複または隣接し、３基分の鉄滓の重量は約４トン。流動滓が多い。その他に椀状滓が集中する焼土遺構や、鉄滓がつまった土坑もある。
		近世	溝跡８条	磁器	
		縄文時代		縄文土器 石器（石鏃、不定形石器、擦石）	



付図　泉沢中台遺跡　遺構配置図